表　町　遺　跡

――主要地方道（県道）長野荒瀬原線町道表町取付け道路建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

２０１４年３月

長野県上水内郡飯綱町教育委員会

表　町　遺　跡

――主要地方道（県道）長野荒瀬原線町道表町取付け道路建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

２０１４年３月

長野県上水内郡飯綱町教育委員会

1. 遺跡遠景（南から矢筒城館跡を望む）

2. 発掘区全景

口絵 2

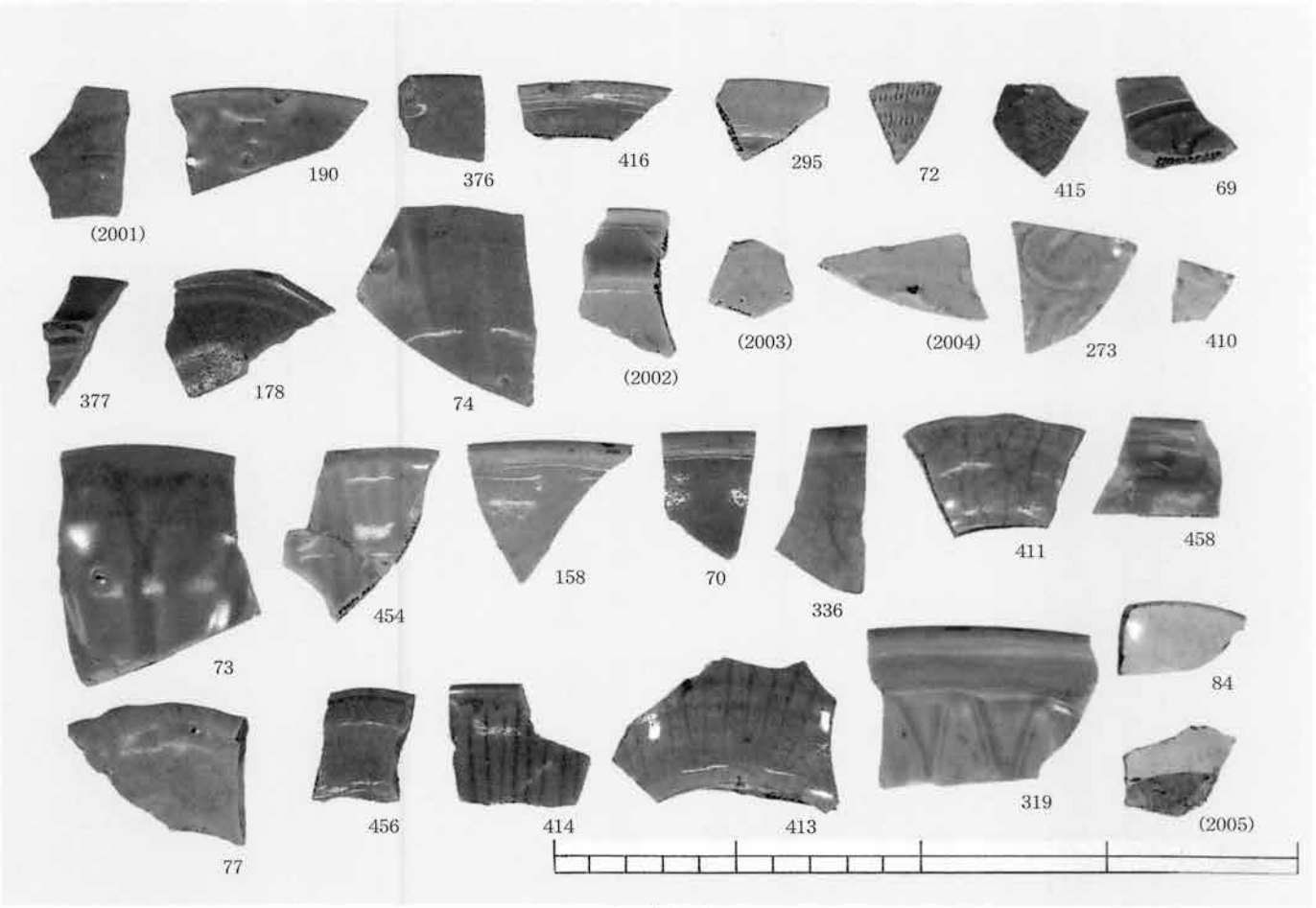
1.SE07・SE08・SG01 全景（東より）

2.SD44　漆器片（3）・藍鉄鉱付着の木製品

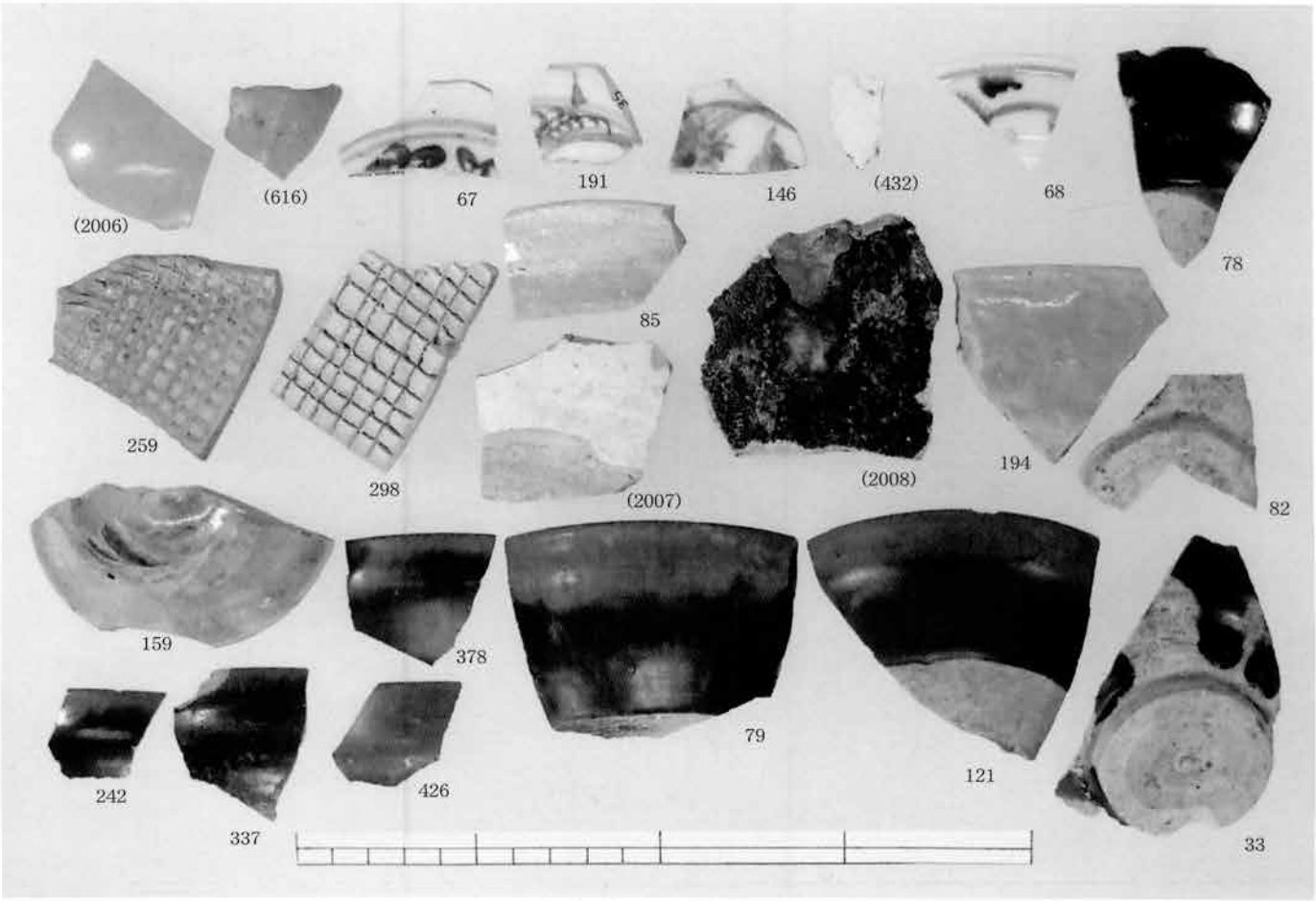
3. 漆器椀（1）・石臼（20）・石鉢（35）

4.SB06 の炉床群（左より SF04・05・09）

5.SF01　完掘状況

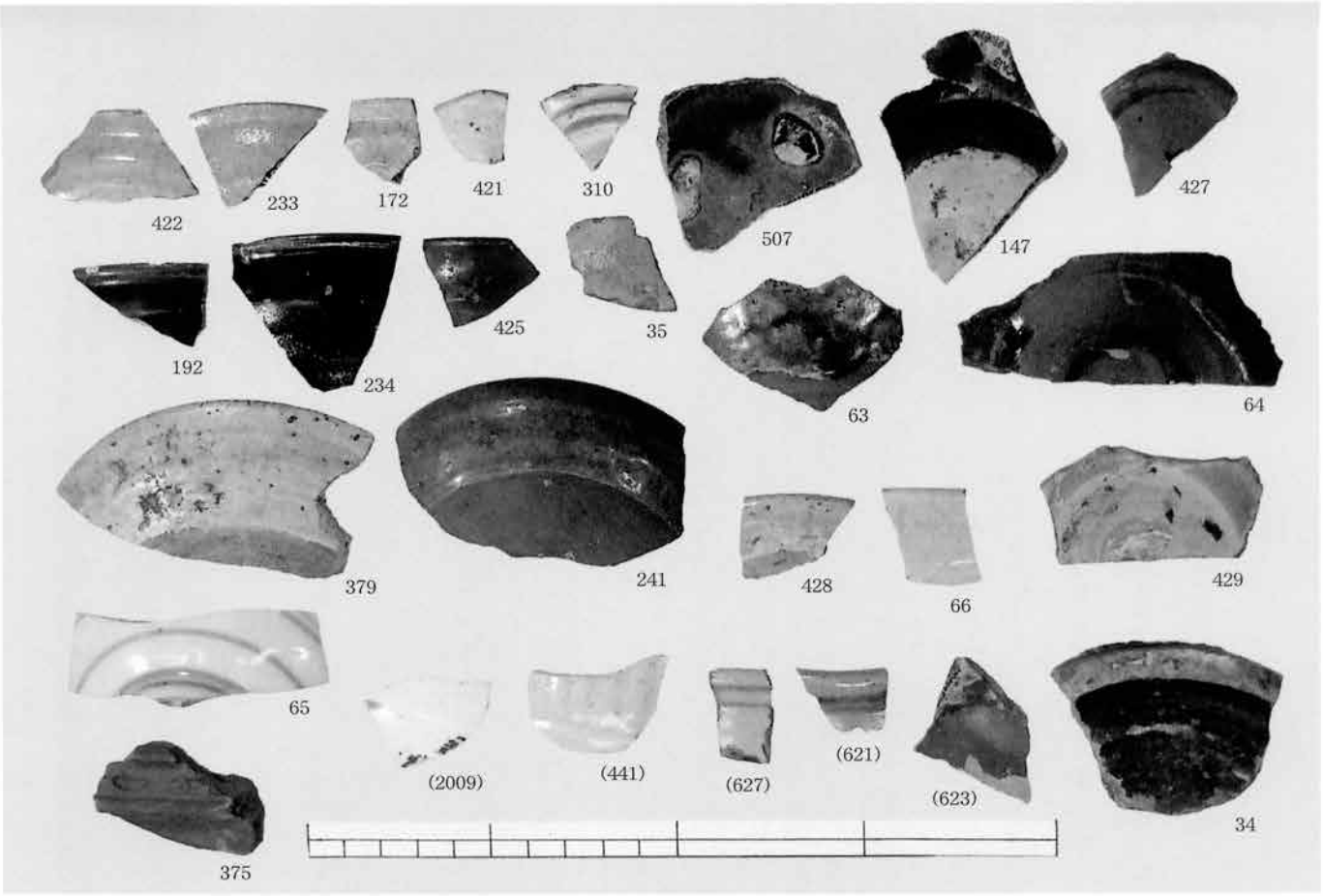


1. 中国産陶磁器

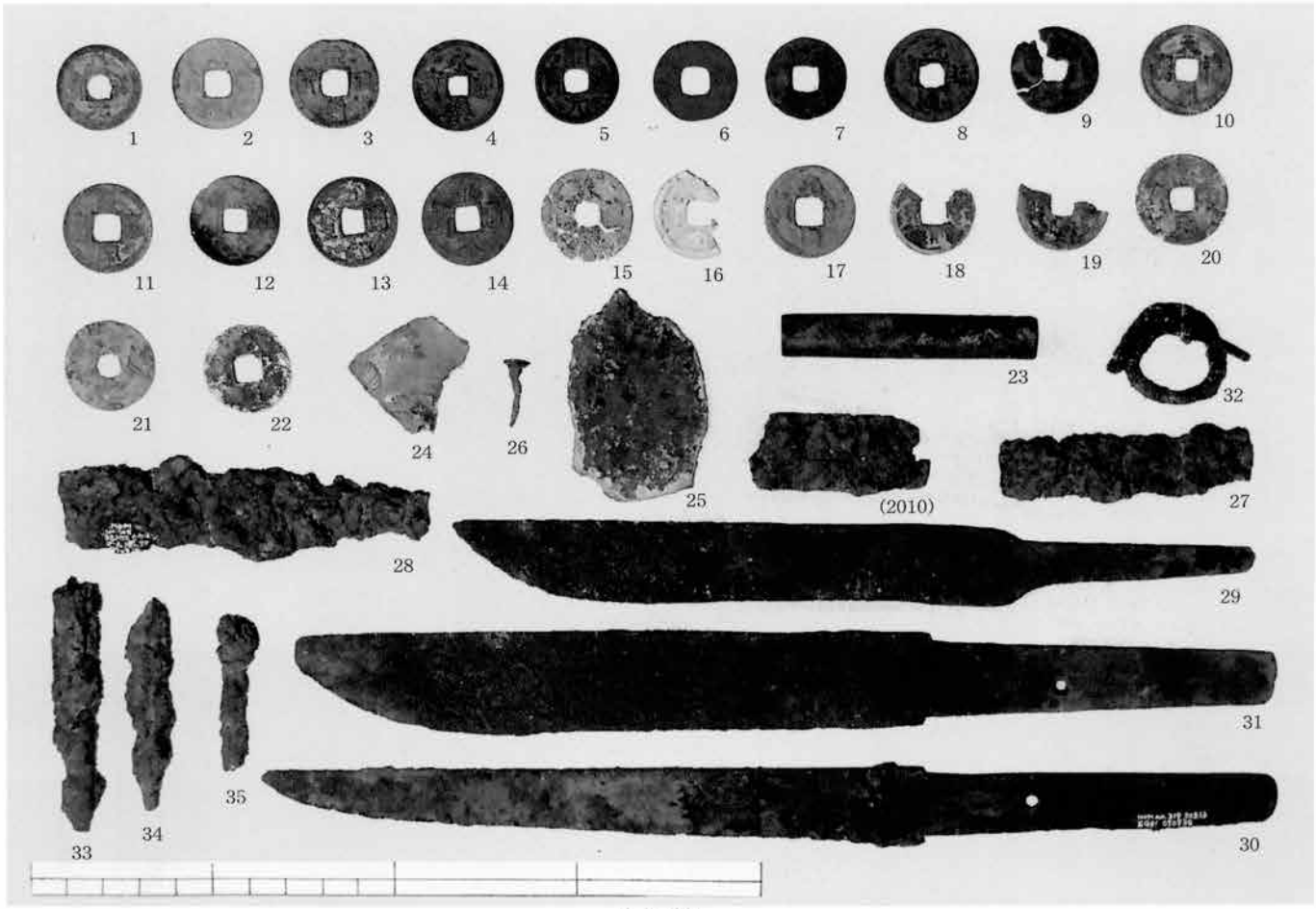


2. 中国産陶磁器・古瀬戸

口絵 4



1. 国産陶磁器



2. 金属器

序

本書は、長野県上水内郡飯綱町牟礼に所在する表町遺跡の緊急発掘調査報告書です。

本調査は、飯綱町教育委員会が平成21年度に行なった発掘調査に基づき、４年以上の整理編集作業を経て成果としてまとめることができました。

この遺跡は、南の三登山から伸びる丘陵上に広がり、北に戦国時代の城址を残す矢筒山があって、城下の「表町」があったと伝えられてきた一帯です。その伝承が幻ではなかったことは、平成16～19年度に一帯を縦断する県道長野荒瀬原線バイパス建設に先立って長野県埋蔵文化財センターにより実施された発掘調査により、全長約350ｍに及ぶ戦国時代の集落跡が発見されたことで実証されました。地域の伝承が真実を伝えていたことに感動を覚えた出来事でした。

本書にまとめられた調査成果は、上記県道バイパスの接続道路として計画された町道建設に先立つ発掘によるものです。着手前の見通しでは、隣接する県道地点の調査成果と照らし合わせるに、さほど遺構や遺物は検出されないだろうと予測していました。しかし、いざ着手してみると県道地点には無かった貯水・用水施設をはじめ建物跡や鍛冶工房跡が多く発見され、多様な遺物も多量に出土し、予想に反して極めて濃密な遺跡であることがわかり驚嘆した次第であります。

この成果は、従来の表町遺跡の概念に一石を投じるものであり、地域の歴史を考える上で、この遺跡のもつ可能性の大きさを教えてくれるものであると考えます。本書が今後の研究発展と文化財保護機運の醸成の一助になることを願ってやみません。

最後になりましたが、酷暑の中で発掘調査に従事していただきました皆様をはじめ、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に御礼申し上げますとともに、とりわけ、心血を注いで調査成果をまとめあげていただいた笹澤浩先生に深甚なる感謝を申し上げ、序といたします。

平成26年３月31日

飯綱町教育委員会

教育長　寺島　政次

例言

1．本書は主要地方道（県道）長野荒瀬原線町道表町取付け道路建設に係る表町遺跡の発掘調査報告書である。
2．使用した地図は国土地理院発行の25,000分の1（使用許可基準範囲内）、飯綱町全図2,500分の1をもととした。
3．発掘調査の測量は簡易遣り方実測法で実施したが、一部業者委託による空中測量（三次元）によった。なお、国家座標は旧測地系である（詳細「発掘調査の方法」）。
4．発掘調査及び報告書作成にあたって以下の諸機関等と諸氏に、業務委託または協力を得た（敬称略）。
・長野県立歴史館、長野県埋蔵文化財センター、長野市埋蔵文化財センター
・測量・空中写真撮影　（株）共栄測量設計社
・写真の現像・焼付　ナカムラフォト（信濃町）
・中・近世陶磁器鑑定　市川隆之（長野県埋蔵文化財センター）　田中暁穂（長野市埋蔵文化財センター）
・石器・石製品の石材鑑定　中村由克（野尻湖ナウマンゾウ博物館）
・自然科学分析・木製品保存処理　（株）吉田生物研究所　パリノ・サーヴェイ（株）
5．報告書作成に係る作業分担は下記のとおりである。
遺物実測　陶磁器－高山いず美・峯山真由美　土器－富岡鹿子　石器・石製品－原田勝美・高山・峯山　木製品－原田・富岡　金属器－高山　拓本－鈴木千秋　遺構図整理－原田・柳澤まち子　レイアウト・トレース－笹澤・柳澤・横山かよ子　観察表作成－笹澤・原田・鈴木・柳澤　写真撮影－笹澤　写真図版－横山
6．本書の編集は笹澤がおこない柳澤・横山・鈴木が補助し、執筆は下記のとおりである。
原田：第１章、第３章第３節２(1)～(5)　小柳義男：第２章　笹澤：第３章第１・２節　第３節１、２(6)・(7)、３、４　第４章　吉田生物研究所：第５章第１節　パリノ・サーヴェイ：第５章第２節
7．遺跡の記録類ならびに出土遺物は飯綱町教育委員会が保管している。

凡例

1．遺跡名は「表町遺跡」とし、記号は長野県埋蔵文化財センターに従い「MOM」（中野2009）とした。
2．遺構記号は以下のとおりであり井戸跡を除く土坑番号のみ県埋文センターに準じた通し番号としたが他は新たに番号を付した。
SA：柵列　SB：建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡と類似遺構　SF：炉床跡と類似遺構
SG：貯水池跡　SH：集石・配石跡　SX：肥溜・木製桝跡ならびに性格不明な遺構
3．遺構・遺物実測図・遺物写真の縮尺は大旨下記のとおりであるが、例外は図中のスケールによられたい。また、遺構図の方位は真北、レベルＨは海抜である。
発掘図1：300、1：100　掘立柱建物・陥し穴1：60　素掘り井戸1：50　木製桝1：20
石組井戸ほか遺構図1：40
遺物実測図　土器1：4　陶磁器・土師器皿1：3　粉挽臼・大型凹石・石鉢・五輪塔・板碑1：6　石器・砥石1：3　石鏃2：3　叩石・凹石1：4　鞍緒通し管・和鏡・銅鋲1：1　銭貨・銅製品2：3　釘など1：2　短刀・刀子・鉄滓1：3　漆器椀・曲物・匙・木札・栓など1：4　四乳ソリ・板材・盆など1：6、1：8、1：10、1：12、1：20　拓影図1：3　遺物写真1：2、1：3、1：4、1：6
4．石材の略称は下記のとおりである。
輝石安山岩 And1　角閃石輝石安山岩 And2　無斑晶質安山岩 And3　ホルンフェルス Hf　砂岩 Sa
緑色凝灰岩 GT　石英閃緑岩 Qt-Dio　チャート Ch
5．土器・陶磁器実測図の断面は珠洲を含む須恵器は黒色、灰釉陶器・陶磁器・瓦質土器はアミ掛けとした。また遺物の表面に煤・炭化物・漆・鉄釉など塗彩・自然付着の場合と遺構図における焼土（炉床）はアミ掛けとした。なお、漆器は２色として赤漆を赤、黒漆は黒色とした。
6．図・表・写真の遺物表示は原則として同一番号で統一し、欠くものは整理番号により（　）を付した。

目　次

口絵
序文
例言
凡例
目次
第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　１．調査の経緯 …… 1
　　２．発掘調査対象地・予定面積・調査期間 …… 1
　　３．発掘作業 …… 1
　　４．整理作業 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 3
　　１．発掘調査の方法 …… 3
　　２．基本土層 …… 4
　　３．整理作業 …… 5
　　４．発掘調査日誌（抄） …… 5
第２章　遺跡の環境 …… 8
　第１節　地理的環境 …… 8
　第２節　歴史的環境 …… 9
第３章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
　　１．陥し穴・土坑 …… 13
　　（１）　陥し穴　（２）　土坑
　　２．縄文土器・石器 …… 13
　第２節　古代の遺構と遺物 …… 16
　第３節　中・近世の遺構と遺物 …… 17
　　１．掘立柱建物と関連遺構 …… 17
　　（１）　居住域の設定　（２）　居住域Ⅰ　（３）　居住域Ⅱ　（４）　居住域Ⅲ
　　（５）　出土遺物　（６）　居住域Ⅰ・Ⅱの掘立柱建物の配置と年代
　　２．貯水池・石組井戸・集石・肥溜 …… 22
　　（１）　検出状況　（２）　肥溜 SX01・SX02　（３）　集石 SH01　（４）　石組井戸 SE07・SE08
　　（５）　貯水池 SG01　（６）　遺物の出土状態　（７）　石組井戸 SE07・SE08の年代と性格
　　３．溝・貯水施設・木製桝 …… 27
　　（１）　溝 SD38　（２）　溝 SD41・42、溝 SD43、溝 SD44　（３）　溝 SD45
　　（４）　溝 SD47、貯水施設 SE11、木製桝 SX03　（５）　溝 SD46

4．素掘り井戸・区画溝 …… 30
（1） 素掘り井戸 SE01・SE02 （2） 素掘り井戸 SE03・SE04・SE05
（3） 素掘り井戸 SE06 （4） 素掘り井戸 SE10・SE09、区画溝 SD48、集石 SH05
第4章 成果と課題 …… 34
第1節 出土遺物の検討 …… 34
1．土師器皿 …… 34
（1） 性格と研究史 （2） 溝 SD41・SD44・SD45出土の土師器皿 （3） SF08出土の土師器皿
（4） SE06出土の土師器皿 （5） 今後の課題
2．内耳鍋 …… 37
（1） 研究小史 （2） 表町遺跡出土の内耳鍋
3．擂鉢・鉢・甕・壺・風呂・香炉 …… 41
4．石製品 …… 41
（1） 粉挽き臼 （2） 茶臼 （3） 石鉢・凹石・叩石 （4） 砥石 （5） 板碑 （6） 五輪塔
5．出土品に見られる表町遺跡の性格 …… 51
（1） 陶磁器類の性格と課題
（2） 表町遺跡の陶磁器
（3） 金属器に見られる表町遺跡の性格
第2節 発掘調査が語る表町遺跡 …… 55
1．文献に見る表町遺跡と矢筒城跡 …… 55
2．用水施設の変遷 …… 56
3．表町遺跡の変遷 …… 57
4．表町の農地化 …… 59
5．表町遺跡の今後への課題 …… 59
第5章 科学分析 …… 65
第1節 植物遺体の同定 …… 65
第2節 花粉分析 …… 70

引用・参考文献
あとがき
表
図版
写真図版
報告書抄録

図目次

第１図　表町遺跡グリッド設定図…… 3
第２図　型式分類…… 7
　１．土師器皿（カワラケ）　２．内耳鍋
第３図　表町遺跡の位置と中世のおもな遺跡分布図… 9
第４図　表町遺跡周辺の地形図と調査地点…… 10
第５図　縄文時代陥し穴の分布…… 14
第６図　縄文時代陥し穴 SK1669・1670 …… 15
第７図　縄文時代の土器・石器…… 15
第８図　居住域Ⅰ　鉄滓・羽口出土状況…… 20
第９図　溝 SD38・41～47断面図と遺物出土状況図 … 29
第10図　板碑（左）・五輪塔（右）の部分名称 …… 47
第11図　表町遺跡変遷図…… 58
第12図　表町遺跡発掘全体図…… 93
第13図　表町遺跡発掘図（１）…… 94
第14図　表町遺跡発掘図（２）…… 95
第15図　表町遺跡発掘図（３）…… 96
第16図　表町遺跡発掘図（４）…… 97
第17図　掘立柱建物（１）SB01・02・03・04 …… 98
第18図　掘立柱建物（２）SB07・08・05・06 …… 99
第19図　土坑 SK1656～1660・1666 …… 100
第20図　炉床 SF01 …… 100
第21図　集石 SH01、肥溜 SX01・02 …… 101
第22図　石組井戸 SE07・08 …… 102
第23図　貯水池 SG01 …… 103
第24図　集石 SH01遺物出土状況図 …… 104
第25図　石組井戸 SE07・08遺物出土状況図 …… 105
第26図　溝 SD38・41・42・43 …… 106
第27図　溝 SD44・45・46 …… 107
第28図　溝 SD47、貯水施設 SE11、木製桝 SX03 … 108
第29図　素掘り井戸 SE01・02、SE02遺物出土状況　109
第30図　素掘り井戸 SE06・03・04・05 …… 110
第31図　素掘り井戸 SE06遺物出土状況 …… 111
第32図　溝 SD48、素掘り井戸 SE10・09、集石 SH05 112
第33図　火焚跡 SF08 …… 113
第34図　溝 SD38石組 …… 113
第35図　木製桝 SX03 …… 113
第36図　空中写真測量図（ⅢＢ・ⅢＣ区）…… 114
第37図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（１）… 115
第38図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（２）… 116
第39図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（３）… 117
第40図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（４）… 118
第41図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（５）… 119
第42図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（６）… 120
第43図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（７）… 121
第44図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（８）… 122
第45図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（９）… 123
第46図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（10）… 124
第47図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（11）… 125
第48図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（12）… 126
第49図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（13）… 127
第50図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（14）… 128
第51図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（15）… 129
第52図　古代・中世・近世の土器・陶磁器（16）… 130
第53図　中世・近世の石製品（１）…… 131
第54図　中世・近世の石製品（２）…… 132
第55図　中世・近世の石製品（３）…… 133
第56図　中世・近世の石製品（４）…… 134
第57図　中世・近世の石製品（５）…… 135
第58図　中世・近世の石製品（６）…… 136
第59図　中世・近世の石製品（７）…… 137
第60図　中世・近世の石製品（８）…… 138
第61図　中世・近世の石製品（９）…… 139
第62図　中世・近世の石製品（10）…… 140
第63図　中世・近世の石製品（11）…… 141
第64図　中世・近世の石製品（12）…… 142
第65図　中世・近世の石製品（13）、竹製品 …… 143
第66図　中世・近世の金属製品（１）…… 144
第67図　中世・近世の金属製品（２）、鍛冶関連遺物 145
第68図　中世・近世の木製品（１）…… 146
第69図　中世・近世の木製品（２）…… 147
第70図　中世・近世の木製品（３）…… 148
第71図　中世・近世の木製品（４）…… 149
第72図　中世・近世の木製品（５）…… 150
第73図　中世・近世の木製品（６）…… 151

表目次

表１　表町遺跡検出の掘立柱建物一覧表…… 20
表２　目幅の広狭差による粉挽き臼の遺構別数…… 44
表３　表町遺跡出土の陶磁器集計表…… 52
表４　表町遺跡出土土器・陶磁器観察表…… 77
表５　表町遺跡出土石製品一覧表…… 86
表６　表町遺跡出土石製品観察表…… 87
表７　表町遺跡出土銭貨観察表…… 90
表８　表町遺跡出土木・竹製品観察表…… 91

（ただし第５章の図・表番号は一連番号から除外した）

写真図版目次

PL1　１・２．SH01、SX01・02、SD38、SG01
PL2　１・２．居住域Ⅲ・上水施設
PL3　１．居住域Ⅱ　２．居住域Ⅰ
PL4　１・２．SX01・02　３～６．SH01、SG01
　　７．SH01、SD43・44　８．SH04、SD41・42
PL5　１～７．SE07・08
　　２．SD47、SX03、SE11　８．SG01
PL6　１．SG01　２・３．SE11
　　４・５．SB01・02・03
PL7　１・２．SD38　３．SD41　４．SD45
　　５．SF08　６．SD47、SX03、SE11
PL8　１・２．居住域Ⅲ　SE01・02、SB09、土坑群
　　３～７．SE02　８．SE06・柱穴群
PL9　１・２．SE06　３．SE03・04・05・09
　　４～７．SD48、SE10、SH05　８．SB05・06
PL10　１．土師器皿　２．土師器皿・古瀬戸平碗
PL11　１．珠洲　壺・甕・擂鉢
　　２．珠洲・瓦質土器・土師器　擂鉢・鉢
PL12　１．内耳鍋　２．中国産青磁
PL13　五輪塔・板碑
PL14　茶臼・粉挽臼・四石・五輪塔
PL15　１．砥石・叩石・羽口・鉄滓
　　２．曲物・竹製品・匙・甑板

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１．調査の経緯

主要地方道（県道）長野荒瀬原線町道表町取付け道路建設によって表町遺跡が破壊されることになり、事前に飯綱町教育委員会が主体となって組織する調査団が発掘調査を実施し記録保存をすることとした。県道荒瀬原線予定地区の表町遺跡などの埋蔵文化財発掘調査は長野県埋蔵文化財センターにおいて平成16年から19年の４ヶ年にかけて既に実施済みであり、その結果に基づいても表町取付け道路建設予定地区に埋蔵文化財が存在することは確実視されていたことによる。

２．発掘調査対象地・予定面積・調査期間

対象地　長野県上水内郡飯綱町大字牟礼字表町

調査対象面積　900㎡

発掘調査期間　平成21年（2009）７月13日～11月16日

３．発掘作業

（１）調査体制

表町遺跡発掘調査団

団長　　笹澤浩

調査主任　　原田勝美

調査補助員　富岡鹿子　柳澤まち子　鈴木千秋　高山いず美

調査作業員　諏訪栄一　常田範夫　深津豊晴　松木幸三　峯山真由美　瀧澤誠　中島満　岡村文雄　鈴木三喜男　野村善和

４．整理作業

（１）期間

平成21年11月17日～平成26年３月31日

（２）体制

埋蔵文化財調査整理特別指導員　笹澤浩

埋蔵文化財調査指導員　原田勝美（～23年３月31日）・横山かよ子（23年４月～）

埋蔵文化財整理作業員　富岡鹿子　柳澤まち子　鈴木千秋　峯山真由美（～24年９月30日）　高山いず美（～25年３月31日）

（３）経過

小野遺跡（2012年３月刊行）ならびに芋川氏館跡、願生寺跡（推定）遺跡（2014年３月刊行）と併行して実施

（４）事務局（平成21年４月～平成26年３月）飯綱町教育委員会

教育長　　相澤壽（～22年11月９日）　寺島政次（22年11月10日～）

教育次長　　長澤照和（～22年３月）　寺島政次（～22年11月９日）　早川ひさ子（23年４月～）

生涯学習係（21年４月～23年３月まで担当制、23年４月以降は係制）

参事　　早川ひさ子（～23年３月）

係長　　平井喜一朗（23年４月～12月）　藤澤哲彦（23年12月～25年３月）

宮本裕満（25年４月～26年３月）

主幹　　小山丈夫（23年４月～）　小林貢（24年４月～25年３月）

企画員　　梨本克裕（21年４月～22年３月）　小山丈夫（22年４月～23年３月）

主査　　小林貢（21年４月～24年３月）　小山丈夫（～22年３月）

米澤忍（22年４月～26年３月）　大川明美（24年４月～）　黒岩潤也（25年４月～）

産業建設課　主査　久保田和祐（21年４月～22年３月）

いいづな歴史ふれあい館　館長　小柳義男（24年４月～）

調査協力者（順不同）

市川隆之　青木和明　中村由克　矢野恒雄　龍野正道　大竹憲昭　上田典男　岡村秀雄　笹澤正史　原明芳　飯島哲也　田中暁穂　河西克造　宮坂清　中野亮一　白沢勝彦　水澤教子　中島庄一　福島永　鋤柄俊夫　平林彰　遠藤公洋　贄田明

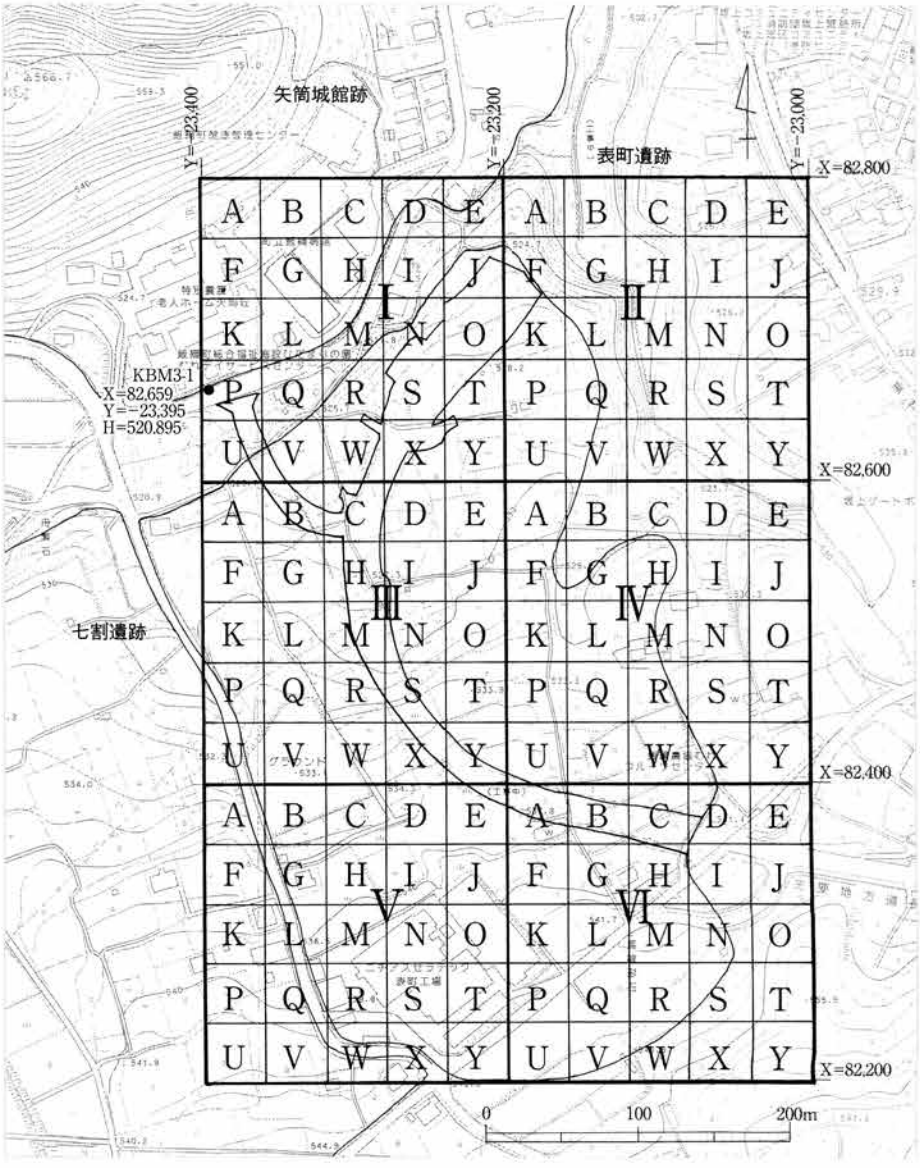
第２節　調査の方法

１．発掘調査の方法

発掘調査にあたって飯綱町独自の調査手順等は特に定められていないために、『埋蔵文化財発掘調査の手びき』（文化財保護委員会1966）を基本に長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）や長野市教育委員会の調査方法も参考としながら実施した。とくに、2004年８月から2007年６月までの４年間にわたり表町遺跡など県道長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に先立つ発掘調査を実施した県埋文センターの経験を参考にした。

しかしながら、今回の発掘予定地の約半分は小河川の谷地部にあたるため、県埋文センターと異なることも予想されたのでⅢＣ地区に本調査前の試掘調査を重機を用いて実施した。試掘箇所は県埋文センターでも谷地部分にあたるため遺構がないと判断した未調査地区（いわゆる３区）に接していたが予想に反し、多くの中世遺物と集石（SH01）のあることが判明し、予定地内全域を調査対象とし、低湿地遺跡を含む調査方法も視野に入れることとしたのである。

表土剥ぎは耕作土を中心に重機を入れて実施した。廃土置き場を用地内に収めざるを得ないため当初は調査予定地をほぼ２分し南側から実施し、生じた廃土を北側に運搬することにしたが、予定地内の中央を部分的に入れた試掘坑によって遺跡が全面に渡ることが判明したことにより、廃土置き場を県道設置場所に急遽求めることとした。また、調査予定地の農道より北側の矢筒城外堀とされる東西谷（三島2000）の斜面部分は削平されて駐車場として使用されていたため、この部分を北側の仮置き場とした。なお、念のため事前に重機による小トレンチを入



第１図　表町遺跡グリッド設定図（１：5,000）

れ、包含層がないことを確認した。

調査予定地内には最近まで使用されていた水路が何本かあった。それらも調査対象の一部とするため、それぞれ溝名をつけたのち、地元の農業従事者と確認・了解のうえ、廃棄または取り付けを行った。ⅢＣ地区のSD22と調査地のほぼ中央を南北にはしるSD29であり、後者はすでに10年ほど前に現行水路に付け替えられ未使用であった。また、ⅢBL7からⅢBO15にかかる排水路は、調査の進展状況によっては調査対象とする予定であったが居住域ⅡとⅢの境界にあたり遺構が周辺部にないことによりこの部分の約10㎡を予定地から除外した。

調査区の設定（第１図）は県埋文センターによった（中野2009）。表町遺跡をⅠ～Ⅵ地区の大々地区（200×200m）に区分し、さらに大々地区を25区画（40×40m）とした。さらに２×２ｍの小地区（グリッド）で区分し南北に算用数字１～20を東西にアルファベットＡ～Ｔを付与した。起点はいずれも北西隅である。ただし、県埋文センターでは中区画（８×８ｍ）を設置し、これを区画の基本単位としているが本調査では中区画は採用していない。これはグリッドで取り上げた遺物の記録化のためにも、より小区画が適正と判断したことによる。なお、地区割りは国土地理院の旧測地系（日本測地系）第８系によっている。これは使用した飯綱町の旧都市計画図及び県道四ツ屋バイパスの測量図がこれに従っていることによる。また、表町遺跡KBM3-1はＸ＝82,659　Ｙ＝－23,395（日本測地系）、Ｘ＝83,011　Ｙ＝－23,676（世界測地系）、Ｈ＝520.895ｍであり飯綱病院前町道沿いにある。

なお、県埋文センターの報告書（中野2009）では「世界測地系」とあるが「日本測地系」の誤りである。

測量は業者委託（株式会社共栄測量設計社）による基準杭をもとに簡易遣り方で実測した。また、石組井戸SE07・SE08・SG01などのⅢＢ～ⅢＣ地区は微地形などを表現する方法として空中測量（三次元測量）を併用した。また、実測にあたっては遺構の上端と下端をより的確に表現するために省略法は採用せず「ケバ」等で表現した。地図などの表現に準じた実測の基本に従ったものである。

２．基本土層

表町遺跡のある台地の地層は考古学的調査の対象としては、今から２～４万年前に堆積した湖沼堆積物で下部の泥炭層とその上部の堆積物である牟礼層である（中野2009）。牟礼層の上部は火山灰土が水成作用を受けて堆積した黄褐色粘質土層（シルト土層）であり場所によって砂粒の含有量などで異なる。その上部に黒褐色土が載る腐植土である。この層は場所によって異なるが丘陵上では浅く、大部分が現行の耕作土であり下部の基盤層である黄褐色粘質土（ローム）にまで耕作が及ぶ。谷地部では黒（褐）色土の堆積は厚く、色調及び含まれる黄褐色土（ローム）粒の違いによって分層される。発掘調査における遺構検出は尾根裾部では主として黄褐色粘質土（ローム）でおこなったが、谷地部では黒褐色土となる。幸いにも中世遺構の多くは基盤層を掘り込むため、埋土内にこの黄褐色粘質土をブロック状に含み遺構検出の目安となる。この基盤層下部は素掘り井戸SE02の土層観察がある（第29図）。ここでの基本土層は大部分の遺構がのる基盤層Ⅳ層（黄褐色シルト層）、下部はⅤ層の明黄色粘質土、Ⅵ層灰白色粘質土を経てⅦ層の泥炭層となる。SE02の下位にある素掘り井戸SE06も基本は共通する（第30図）。ただし、谷地部では泥炭層上部はグライ化した青灰色粘質土である。

このように表町遺跡の発掘調査に直接係わる土層は湖沼堆積物であるため、地点によって土層が異なり、報告書の中でも層名が異なる場合は当然起こり得る。なお、泥炭（ピート）層下部は飯縄火山の噴火に起因する牟礼岩屑なだれ堆積物である（長森他2003、中野2009）。

３．整理作業

遺構図・写真などの記録類の整理と遺物の洗浄・注記と実測などの記録類も町独自のものはない。今後の課題として、とりあえず遺構図はシート別に、断面図もそれぞれどの部分のものか平面図と対応できるように一体化をしてある。遺物の実測はすべて手作業で実施したが、とくに木製品は保存を前提に実測・整理を試みた。本町には対応施設がないために「いいづな歴史ふれあい館」内に一時的な仮設備を設置し計画的に外部委託で保存処理をおこなってゆくこととしている。

遺構や遺物の実測図などの記録類と遺物の保管などは活用をはかるべく整理作業を実施してきたが一体的な保管と言う点ではさまざまな面で今後の課題として残されている。特に収納については早めの対応が強く望まれる。

４．発掘調査日誌（抄）

平成21年（2009）

７月３日　表町調査事前打ち合わせ（町水道建設課・町教委・調査団）

７月６日　調査地内の草刈り

７月７日　県道長野荒瀬原線町道表町取付け道路のBCポイント～ECポイントまでの調査地内ほぼ中央に幅70cm深さ50cmを試掘。トレンチを設定。

７月８日～９日　廃土場所を調査地内Ｕ区・Ｖ区に一次ストックし、調査地区を２分割した。Ｂ・Ｃ区の表土30～50cm剥ぎ取りをバックホーにより行う。併せて調査地内の現状水路SDの切りまわし。

７月13日　調査開始式、発掘機材及びテントの設営。県埋文センター実施の地区割に基づいて調査区設定（第１図）。ⅢＣ地区の道路取り付け部より遺構検出作業始める。

７月17日　ⅢCC13グリッドとその周辺に集石SH01とそれを囲むようにほぼ円形状の落ち込みを検出、集石の全体構造を把握することにし、又大規模な円形落ち込み（SG01）の調査方法の検討。ⅢCB13グリッドより２基目の桶（SX02）検出。

７月21日　素掘り井戸SE01・02検出。ⅢCB16・C15グリッド検出の土坑SK1660は掘込み深く壁面に小さな掘削痕があり調査に慎重を期す。

７月29日　Ｃ地区の遺構検出終了、Ｂ地区Ｐ～Ｔラングリッドの調査開始、但しSX01、SG01、SE01・02及びⅢＢ・Ｃ地区の土坑を引き続き調査を進める。ⅢBR14グリッドに径2m前後の炉床SF01検出。

７月30日　ⅢＢ・Ｃ地区東南地域は小高い丘陵地形で低い谷地に向う、上部斜面からの集水による自然流路の溝と、未検出を含め10数条の流路溝跡を確認した。また、ⅢＢ地区は黒褐色土、黄色ブロック混じり黒褐色土の整地面で遺構検出は難しい。

８月３日　SH01の集石検出終了、平面実測始める。貯水池（SG01）平面把握ほぼでき東西方向に観察用土手を残して東南壁面より埋土掘下げ始める。

８月12日　SG01南壁は黄色粘質土の掘下げを確認。SG01東西土層断面実測の後西側の黒色土掘下げ始める。

８月19日　SX01・02の平面・立面見透視図実測し桶取上げ。

８月24日　SE02の埋土中層に石臼（81）、曲げ物（26）、木片検出、実測し取り上げる。

８月28日　SF01焼土範囲再検証、埋土層追加実測。

９月１日　本日から作業従事者３名新たに参加、作業班を２班に分け１班は引き続きⅢＢ・Ｃ地区の遺構検出、２班はＢ地区Ｃ～Ｋグリッドラインの調査を開始する。

９月３日　BC地区全体写真撮影。UV地区の仮置きした廃土を県道建設予定地へ運び出しする。

９月４日　飯綱町文化財調査委員会委員来跡。

９月10日　BC 地区遺構平面、溝 SD43・44断面実測。Ｂ地区 H3、H4、I4、I5グリッド全域に土師器皿細片、焼土、炭化物が混入する褐粒多量混じり黒色土層が確認された。土器焼成を含めた工房跡を視野に調査を進める。

９月17日　SH01下部に貯水施設 SE11を検出。ＩＵ・Ｖ区の表土をバックホーにより廃土始める。Ｂ地区素掘り井戸 SE06の掘下げ始める。県埋文センター上田典男調査課長来跡。

９月24日　石組井戸 SE07検出。県埋文センター市川隆之氏来跡。

９月29日　ＩＵ・Ｖ地区掘立柱建物など遺構検出始める。

10月２日　ＩＶ地区 A16、A17、B17、B18グリッドに小型の素掘り井戸 SE03～05の３基検出。

10月６日　SG01内に検出した石組井戸 SE07・08の全容検出。石組最下端は SG01底部のピート層上部の青灰色土層上５～10cm上に構築。SE07北井壁に沿い南にずれて SE08北井壁を確認。SE08西井壁が間仕切り構造物でなく、SE08は SE07の再構築であることが判明。

10月９日　前日の台風の降雨で完全に遺跡全体が冠水。午前中排水作業に終わる。もともと低地で湧水がある上に降雨のたび排水には毎回徒労作業を強いられる。安全法面を確保してきたがＢ地区北側法面崩落。バックホーで土砂除去する。

10月20日　SE06の埋土掘り上げ完了。

10月23日　空中写真撮影　ⅢＢ・Ｃ区の空中写真測量の実施。

10月24日　現地説明会実施　55名来跡。

10月30日　SE07・08の石組取り外し、SG01の底部検出、併せて石組の据え付け痕跡を検証。SE10の北井壁面石積の見通し図、SD48の実測。調査区全域の南北土層実測を始める。

11月３日　SD47検証の為北側法面拡幅、石組の一部を検出し実測する。貯水施設（SE11）とした。

11月４日　長野市長沼歴史知りたい会　20名来跡。

11月５日　SG01遺構断面実測。BUV 地区のピット群・レベル未実測遺構の検証及び実測をはじめる。

11月12日　土層実測。確認の再検証でＢ地区 G7～H8、D2～E3グリッドに２基の縄文時代の陥し穴確認。

11月16日　各遺構の再検証および実測。全体調査作業終了。

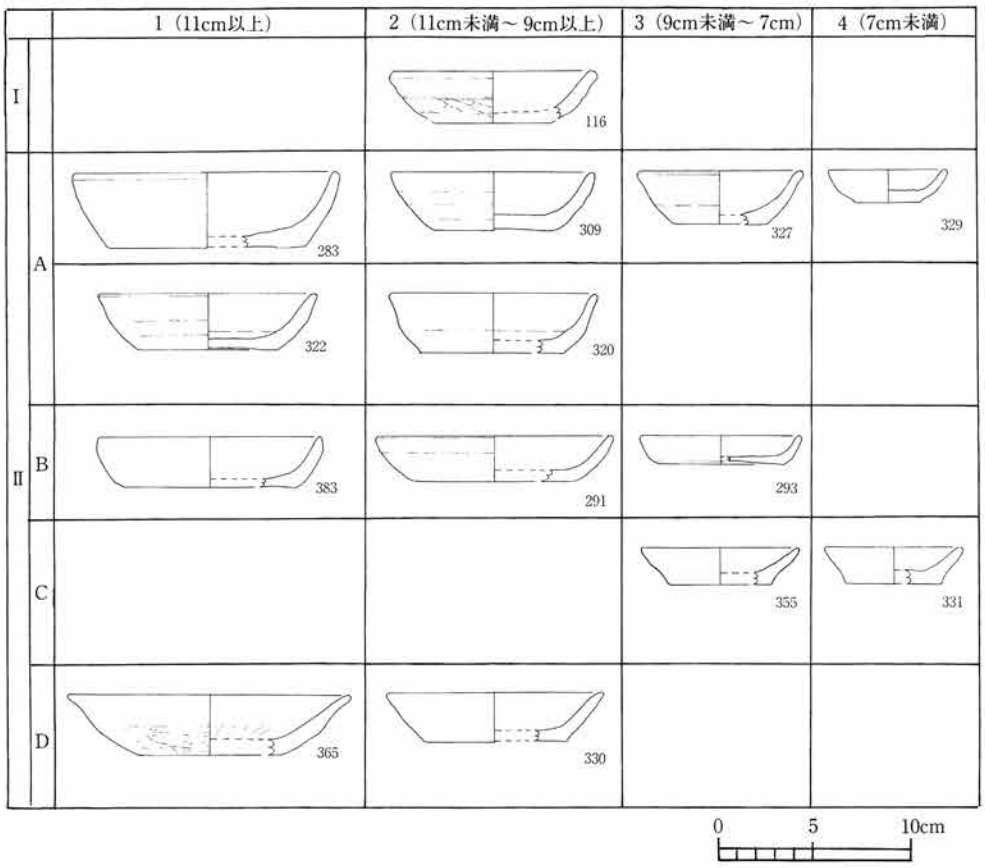
現地説明会

作業風景

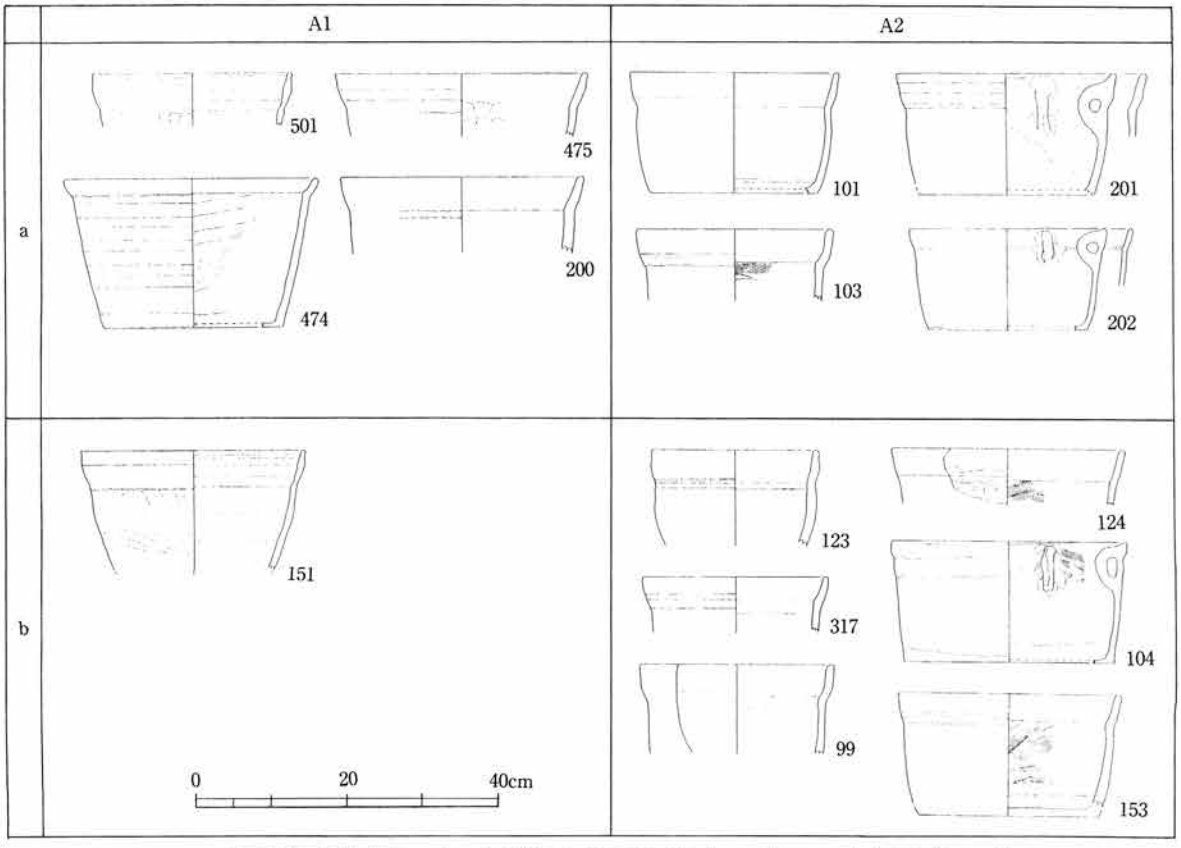
作業風景

発掘参加者

１．土師器皿（カワラケ）　Ⅰ手づくね　Ⅱロクロ成形



２．内耳鍋



第２図　型式分類　１．土師器皿（カワラケ）（１：４）　２．内耳鍋（１：10）

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

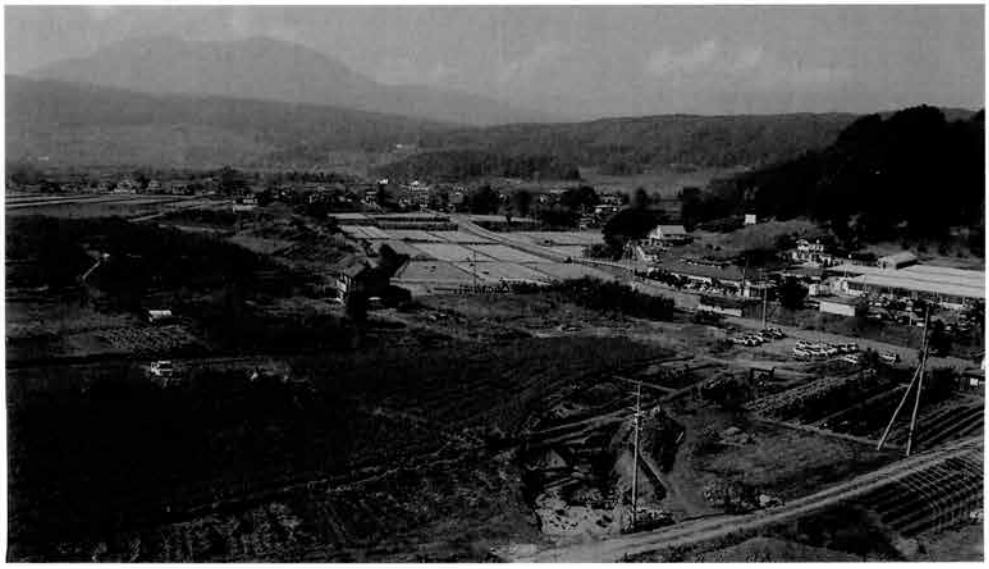
１．遺跡の立地と地形（第３図）

飯綱町は、日本海に面する新潟県の高田平野と長野盆地を結ぶ途上にあり、日本海（新潟県上越市）までは約50kmの距離である。古くから信濃と越後を結ぶ交通の要衝に位置しており、古代の官道である東山道から分かれ、越後国府（上越付近）に至る東山道の支道や、江戸時代初期に整備された北国街道が通っていた。

飯綱町からは、北信濃において北信五岳の名で親しまれている飯縄山、戸隠山、黒姫山、妙高山、斑尾山を一望できる。町域の西部には飯縄山、北部には斑尾山の山麓が広がる。五岳の西端に位置する飯縄山は起伏を繰り返しながら東へと裾野を広げ、その末端部分の盆地状の地形に牟礼地区が立地している。

遺跡は、これらに囲まれた牟礼盆地のほぼ中央、JR 信越本線牟礼駅から南西約1.2kmにある矢筒山（標高567m）の南に位置する。地形的には、飯綱町と長野市との境界に位置する三登山北麓斜面の先端部に立地する。この斜面は、遺跡北方約１kmを東流する鳥居川まで続くが、鳥居川の支流である八蛇川やそれに注ぐ滝沢川等の河川などによって浸食され、尾根と谷とが入り組んだ地形となっている。

地質的には、飯縄山の火山活動に伴う牟礼岩屑なだれ堆積物と、それを覆う形で堆積した牟礼層とよばれる湖沼堆積物上に立地する。飯縄山の火山活動は約34万年前に始まり、途中休止期をはさんで約19万年前頃再び活動が活発化した。最後の噴火は約６万年前とされている。牟礼岩屑なだれ堆積物は、この間の火山活動に伴って堆積したものである。その上に堆積した牟礼層は、火山噴出物によって鳥居川の峡谷が堰き止められ、一帯が湖と化した時期に形成されたものである。牟礼層の堆積時期については、同時期形成とされる野尻湖層の^{14}Ｃ年代値や長野県埋蔵文化財センターが調査した表町遺跡の牟礼層の^{14}Ｃ年代値から、約２～４万年前頃と考えられている（中野2009）。遺跡周辺では、耕作土直下に牟礼層が確認されるところが多いようであるが、谷状地形の部分では牟礼層上部に腐植土層が堆積する。



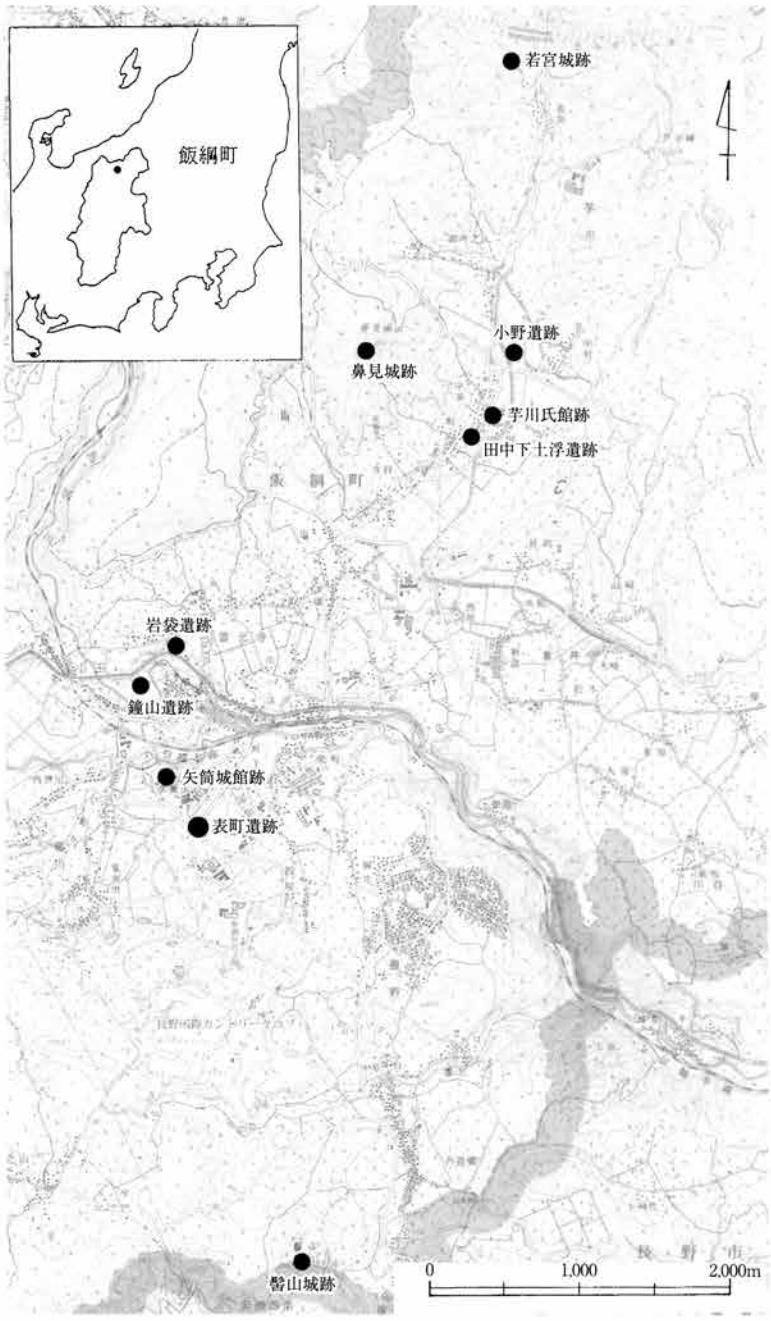
遺跡から飯綱山を望む

第２節　歴史的環境

飯綱町では、牟礼地区（39.55㎢）で113遺跡、三水地区（35.66㎢）で32遺跡が確認されている（註１）。

中世の遺跡では、三水地区に若宮城跡、鼻見城跡等の山城や芋川氏館跡、小野遺跡、鐘山遺跡、岩袋遺跡等が、牟礼地区には髻山城跡、矢筒城館跡等が知られている。

若宮城跡、髻山城跡、矢筒城跡については縄張図等の検討が進み、新たな知見も知られるようになってきた（矢野1993、三島1999、牟礼村教育委員会2000、遠藤2009、遠藤2013、小山2013）。しかし、発掘調査は矢筒城館跡の一部で実施されただけで、実態が十分解明されていない。



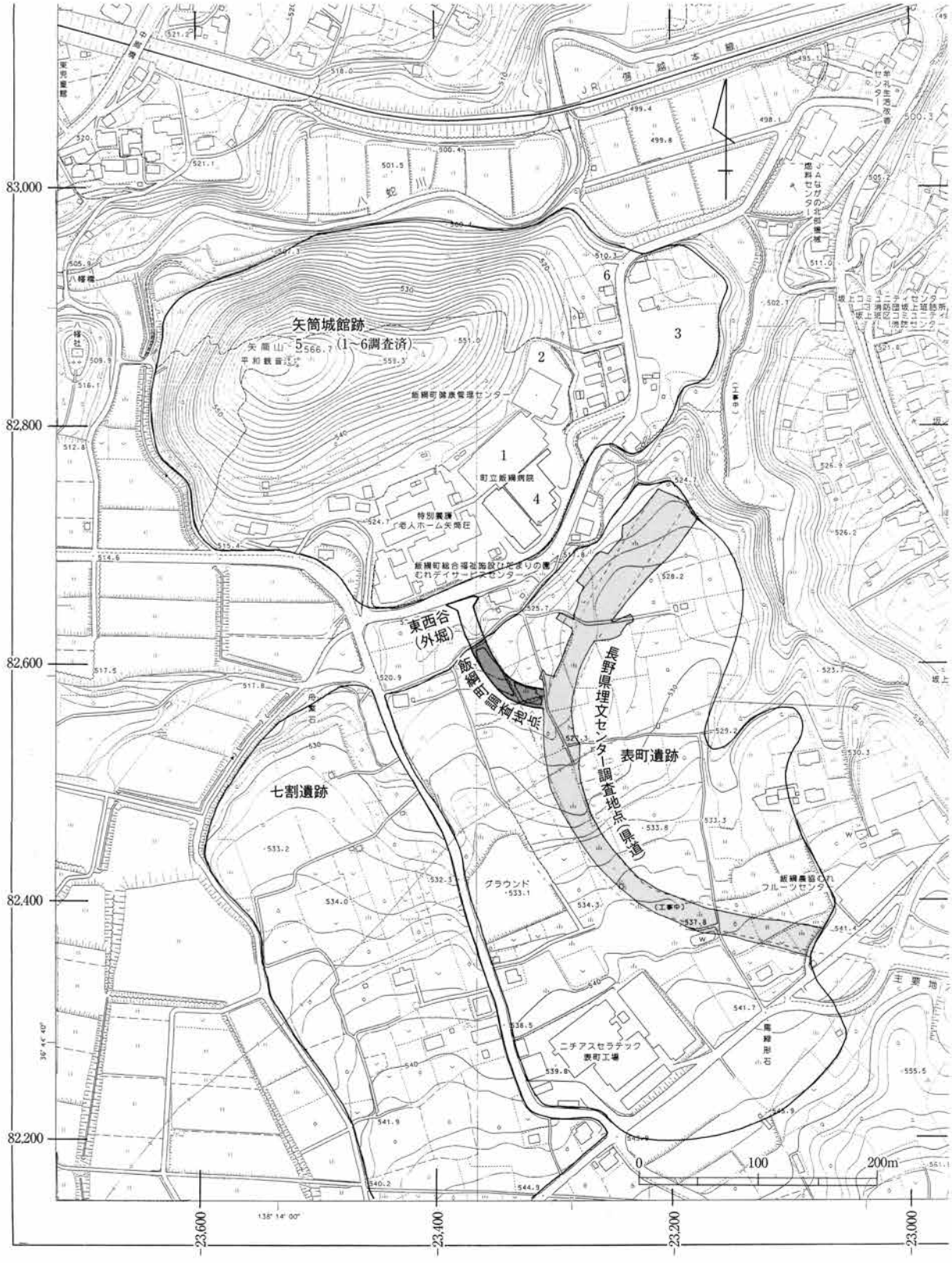
第３図　表町遺跡の位置と中世のおもな遺跡分布図（1：50,000）

１．三水地区

芋川氏館跡では４次にわたる発掘調査が実施されており、３冊の報告書が刊行されている。１・２次調査では、館の西堀のほぼ全域と南堀の一部を検出した。西堀は内法62㍍におよぶ。中央南寄りに幅２㍍の土橋を持ち、断面は箱形をしている。堀は底に障壁を持つ長方形の土坑等がある障子堀であることが明らかになった。障子堀は、県内初の確認例となった（笹澤2003）。遺物には茶臼、風炉の威信財や「松と波文」を刻んだ石硯、漆器類、輸入陶磁器等が出土している。ほかに、多量の手斧による削り屑と薄板ならびに桜皮が確認されており、館内での建築用材の加工や曲物の製作があったことを指摘している。

３次調査では、堀の内側の土塁の存在と芋川氏館の規模、あわせて館の東南地区の芋川氏に従属したと推測される人々の居住区が明らかになった。隣地の田中下土浮遺跡では、中世の掘立柱建物２棟以上が検出され、豪族館（芋川氏館）とそれに付随した集落跡を一体で明らかにした貴重な調査例となった（笹澤2004）。

小野遺跡においては12世紀後半から13世紀前半、13世紀中葉の前後、13世紀後半の３期に渡って計画的に営ま



第４図　表町遺跡周辺の地形図と調査地点（1：5,000）
今次調査地点（飯綱町調査地点）、県埋文センター、矢筒城館跡第１次～６次

れた母屋と倉庫群からなる建物群が検出されている。報告者は芋川庄の現地管理者である在地領主層の館の可能性が高いことを指摘している（笹澤・小柳・市村・中村2012)。これらの調査によって、芋川館跡や芋川荘についての具体像がしだいに明らかになってきた。

石造物には、町地区の健翁寺裏に虎御前の墓と伝承される多宝塔がある。栗岩英治氏は「芋川雑記」の中で「鎌倉末期から足利初期のもの」で「頭部を除き一枚石の製作だから驚く、恐らく、石造多寶塔の模型とすべきものだろう」と述べ、その重要性を指摘している（栗岩1933)。御所之入の旧世尊庵跡には、永享２年（1430）銘の「南無阿弥陀仏」の名号が刻まれた板碑がある（現在健翁寺境内に移転)。両側面には20数名の交名が刻まれ二字法名・阿号・大法印号の他、中には犬御前・馬四郎といった姓のない俗名もふくまれ、何らかの宗教行事を広範な結衆によって執行した記念の供養塔とみられている。姓を持たない身分の者を含めた結衆による石造物としては県内最古のものという（小山1992)。

また、長野県立歴史館に移築された滝沢家住宅の移築前調査のおり、下層から水田跡と柱穴が検出されている(檀原1997)。滝沢家は享保15年（1730）に近いころに建てられ、下層の建物跡は近世前期とそれを遡る時期のものと推定されている。滝沢家の所在した町地区は鼻見城跡のふもとにあり、芋川氏が開基したと伝える苔翁寺や健翁寺ともほど近い地で、調査者は「町家的な集落の存在を推測」している。

芋川氏館跡から町地区にかけて（さらには御所之入地区にかけても）「町家的な集落」が広がっていた可能性を示すものとも考えられる。

牟礼地区との境を流れる鳥居川沿いの低地には、鐘山遺跡、岩袋遺跡がある。鐘山遺跡からは柱穴と思われるピット群が検出されている。岩袋遺跡からは珠洲焼の大甕・壺・擂鉢、天目茶碗や土師器皿（カワラケ)、曲物の破片などが出土している。

２．牟礼地区

矢筒城館跡では、これまで試掘を含め６次の発掘調査が実施されている。１次調査では館跡と推測される地域を調査した。トレンチによる調査で全体像はつかめなかったが、平安時代に遡る掘立柱建物跡やピット群、石列等が検出されている。遺物は平安時代の須恵器、土師器から14世紀から15世紀を中心とする珠洲焼（大甕)、土師器皿（カワラケ)、陶器、茶臼、石臼等が出土している。ことに、茶臼の破片の多いことに注意が向けられている（牟礼村教育委員会1981)。

２次調査では内堀の一部が調査された。幅９～12㍍におよぶ堀で、深さは堀の外側に盛られた土塁状の上部から3.5㍍になる大規模なものであった（牟礼村教育委員会1988)。

４次調査では、１次調査で発掘できなかった範囲の一部を調査している。数多くの柱穴と少なくとも４棟の掘立柱建物が検出されている。遺物は中世の内耳鍋、カワラケ、陶器などが出土している。報告書未刊（横山2011)。

６次調査は、個人住宅の建設に伴う小規模なものであったが、城の東側にも中世の土坑及びピット群を確認しており、城館跡や町屋の広がりを知る新たな手がかりを得ている（横山2011)。

付近には、永正四年（1507）の銘を持つ石造地蔵尊があり、「全国的にも類例の少ない、造立年代の明らかな石龕に入っており、中世における石造地蔵尊の基準作として貴重である。銘文から「本阿弥陀仏」なる者が両親の供養のために造立したことが明らかで、「本阿弥陀仏」という時宗（浄土宗の一派）に関わる造立者名があることは、時宗系統の浄土信仰が中世にこの地域にまで及んでいたことを示し、信濃における民衆の信仰を考える歴史資料としても大事である」として長野県宝に指定されている（飯綱町教育委員会2004)。

３、表町遺跡

表町遺跡の字「表町」は矢筒城下の表に広がる町屋に由来すると伝承されている。明治８年諏訪神社（現牟礼神社）が長野県庁へ提出した由緒届書には、矢筒城を島津氏が治めていたころは「市中人民…字表町に居住」していたと記されている（飯綱町役場文書）（註２）。

表町の耕地からは、打製石斧や須恵器が採集されていたり、昭和60年には20点余の石臼が出土したり（矢野1998）していたが、埋蔵文化財の包蔵地として周知されるのには、平成９年に始まった牟礼村遺跡詳細分布調査を待たなければならなかった（牟礼村教育委員会2000）。

この分布調査をうけて、県道長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う発掘調査が、平成17年から19年までの３か年実施され、南北約350㍍にわたる15世紀後半から16世紀前半の大集落が確認された。集落は掘立柱建物や井戸跡など居住域を示すものばかりで、墓と思われる遺構は確認されていない。墓域は調査域外に想定される。

最も戦国期の遺構が集中していたのは矢筒城館跡に近い北部で、大型掘立柱建物群や東西に走る溝跡、超大型の竪穴状遺構が軸を東西あるいは南北方向にそろえてならんでいた。配置された大型建物群などの状況から矢筒城館跡に関係する施設や建物が集まっていた可能性を指摘している。中央部付近は小規模な建物が多く、臼や曲物などの出土遺物とあわせ生活・居住の場と考えられている。南部からはそり・曲物・漆椀などが出土した井戸跡や小規模の建物跡の他、鍛冶滓や羽口などの鍛冶関連遺物がみつかった溝跡が確認されている。付近に鍛冶工房などの作業場の存在を想定している。大規模な調査によって、場所によって異なる土地利用がされていた状況を明らかとしたことは貴重な成果であった。

註１　鳥居川を挟んで並ぶ両地区でこれほどに遺跡数が異なるのは、牟礼地区で詳細分布調査が実施済なのに対し三水地区では未実施であることも一因と思われる。三水地区でも平成25年度より平成27年度にかけての３か年計画で詳細分布調査が開始され、新たな遺跡の発見が続いている。

註２　註３史料参照

第３章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１．陥し穴・土坑

（１）陥し穴（第５・６図）

溝状の陥し穴SK1670とSK1669の２基がある。ともに中世遺構検出面下部において検出された。中野亮一氏分類のⅠ群である（中野2009）。SK1670はⅢBD3に検出された。長辺260、幅12cmで長軸方向N55°Wである。深さはSF03炉底から35cmまで確認。掘り下げは垂直である。SK1669はⅢBG7に検出し、長辺330、幅25cmである。掘り下げは西側に偏る。長軸方向はN42°Wである。

陥し穴は中世遺構検出面下部の基盤層において検出され、とくにそれを目的として調査は実施しなかった。しかし、多数の中世柱穴群の調査で確認しており、見落としはなかったものと思われる。谷地部には認められなかった。県埋文センターでの分析に従うならば（中野2009）、SK1670、SK1669を北端とする南西方向に伸びる新たな２系列の陥し穴群となり、それぞれをＪ列とＫ列とするが谷地部では陥し穴列は跡切れる。狩猟対象の動物の水飲み場である谷地部とからめて、どう陥し穴を設置したか興味ある課題である。時期については明らかになし得なかったが、県埋文センターの調査成果では縄文時代後期を想定している。広い丘陵上での狩場のあり方を考えるうえで今次調査でも新たな資料を加えることになった。

（２）土坑（第19図）

土坑SK1656　ⅢCD15に検出された平面不定形の土坑で、中世の土坑SK1657によって切られている。長辺150、深さ30cmで埋土は黒色砂質土であり、壁面に小さな凹凸のある掘削痕がある。埋土内から磨滅した中期末の縄文土器片（２）が出土した。文様は不鮮明であるが「ｕ」字状の沈線区画内に斜縄文を充填したもので、ⅢBD4出土の中期末の土器片（３）と同一時期のものであろう。ただし、この地域の土坑群は大半が中世のものであるので、SK1656もまたその一群の可能性はある。

２．縄文土器・石器（第７図）

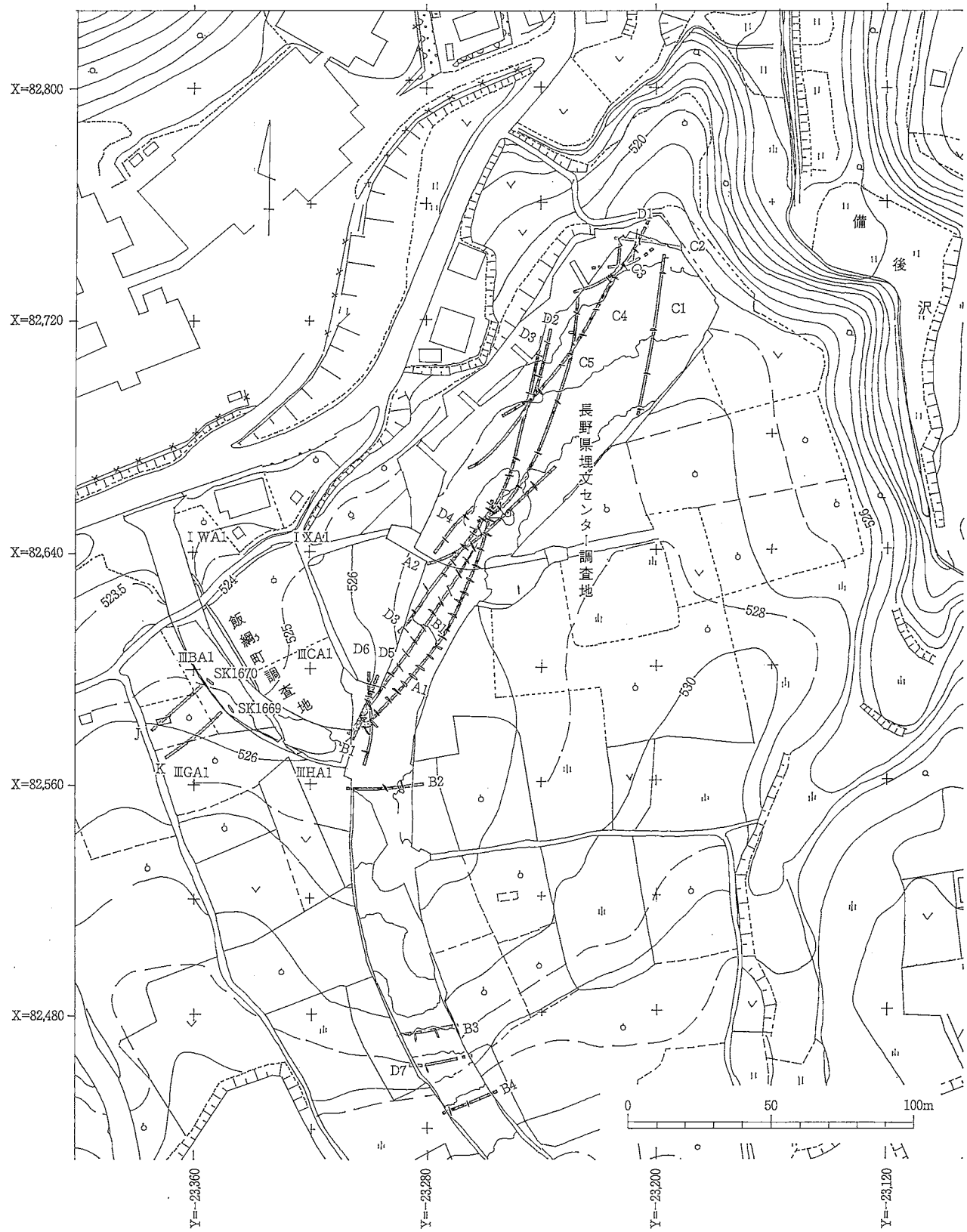
包含層出土の縄文土器は２点あり、いずれも中期後半である。１は加曽利Ｅ式系土器の深鉢でありⅢBS12出土。３も逆「ｕ」字状沈線の区画内に縄文充填の深鉢でⅢBD4出土である。

石器は石鏃が４、打製石斧２、磨製石斧１、使用痕のある剥片２がすべてである。このほか、中世遺物とした凹石の中に縄文時代のものもあり得るが識別はできないためここでは扱わない。

石鏃（７～10）　黒曜石（７・８）、頁岩（９）とチャート（10）製であり、重量は1.0（７）、1.2（８）、4.3（９）、1.1g（10）である。出土地別ではⅠVB20（７）、ⅢBB1（８）、SD44（９）、ⅢBD3ピット（10）である。

打製石斧（４・５）　４は縦12.8cmの黒色粘板岩製で正面右辺に自然面が残る。ⅢBR11出土で全体に磨耗が目立ち98gである。５は黒色粘板岩製で使用による磨耗が全面に著しい。とくに裏面は著しくミガキが加えられ正面先端部近くに、線刻状の沈線が山形状にあるなど、ミガキも含め中世に石製品として再使用されたかも知れない。上端は折れている。100gでⅢBT12出土。

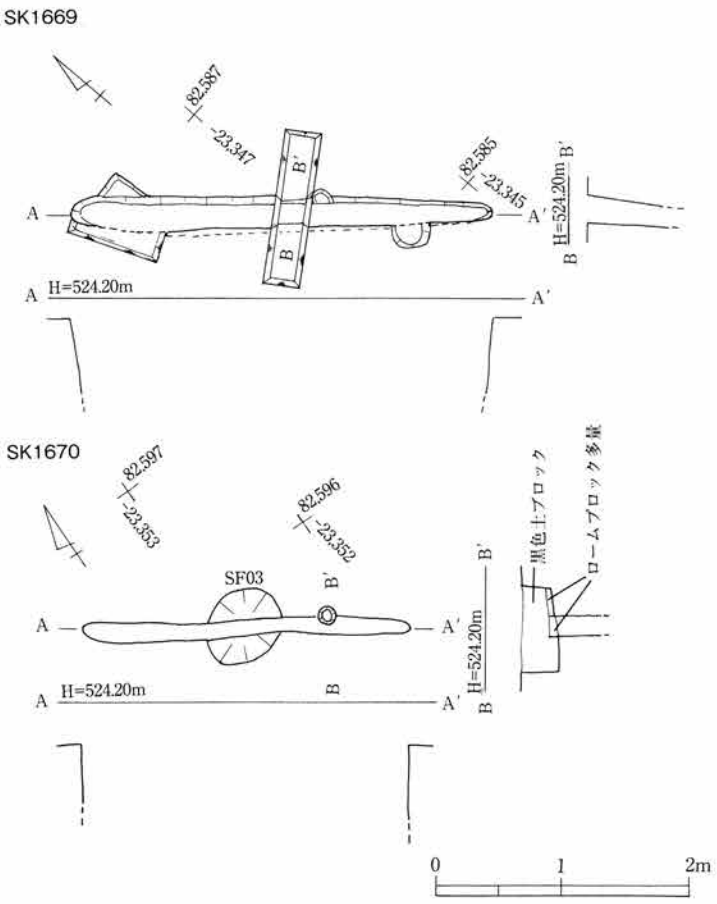
磨製石斧（６）　いわゆる蛇紋岩製でⅢBQ11。定角式の小型品で先端は使用による磨耗が著しい。53g。



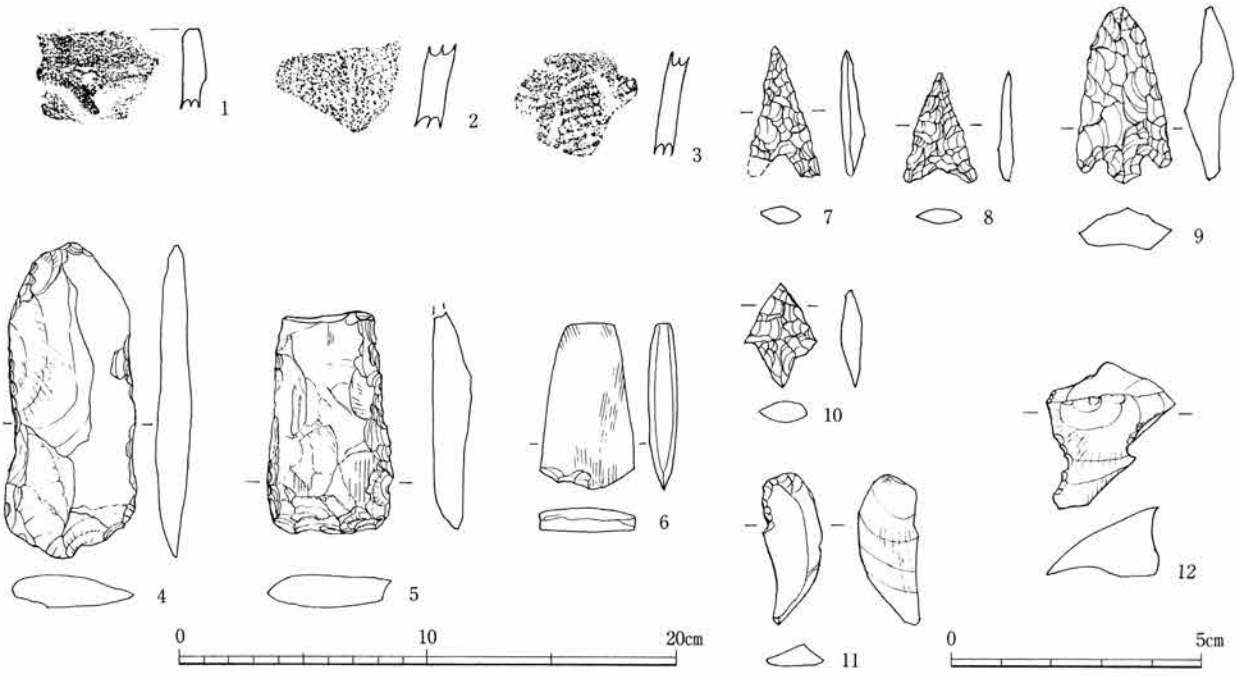
第５図　縄文時代陥し穴の分布（1：2,000）
（中野2009により作成）

使用痕のある剥片（11・12）　いずれも黒曜石製である。（11）は縦長の剥片基部に使用痕が認められる。1.5gでSE03埋土出土。12は不定形の剥片の両面にノッチがある。6.3gでⅢBD2出土。他に黒曜石製の剥片１点（ⅢCA12）がある。

縄文時代の遺物は以上で全てである。土器が中期末で、かつ、剥片類が殆んどなく、それに反して石器類が多い点で通常の縄文時代の集落遺跡とは大きな違いである。陥し穴猟に関係した遺物であろうか。だとするならば陥し穴の年代も県埋文センターの想定よりも古く、中期末まで遡ることになる。



第６図　縄文時代陥し穴 SK1669・1670（1：60）



第７図　縄文時代の土器・石器（1：3、2：3）

第２節　古代の遺構と遺物

平安時代の須恵器・土師器と灰釉陶器がⅢＢ・Ｃ地区の谷地部分とこの地区にあるSH01、SE07、SE08、SE11、SG01やSD47などの埋土から比較的まとまって見られた。このほか、ＩＶ・Ｕ地区にもごく少量が出土している。遺構では溝SD46が唯一平安時代の遺構（第27図）であり後述する。黒色土器坏（265）がある。９世紀後半か10世紀前半であろう。

SD46以外は包含層出土とし一括して以下に述べる（第37・39・42・45・46・50・52図）。須恵器はロクロ成形で糸切り痕を残す坏Ｃ（１～４・268・276～278）、付け高台の坏Ｂ（５）、蓋（279・280）、甕（26～28・92・163・165・166・261・264・281・489・494・503）がある。坏Ｃの４は底部の周辺を打ち欠き内面は磨滅痕が著しい。塗料を溶いたパレットであろう。26の甕底部は30とともに在地産の中世陶器（須恵器）の可能性がある。長野市豊野町中ノ丁遺跡（笹澤・佐藤・市村ほか2001）に類例がある。165内面のタタキは２種類の青海波文がある。上段は格子目に刻んでいる。車輪文・菊花文（坂井1984）の仲間で越後地方と関係の深いもので、飯綱町前高山古窯址（笹澤・原田・佐藤・小林1986）に類例がある。須恵器類は大略９世紀代のもので、前高山古窯址群・家岸窯址（横山・矢野・小柳1998）や上ノ山１号窯址（小柳・矢野1992）の製品であろう。

土師器は坏（７）埦Ｂ（10・167・274・275）、甕（21・22・266）、小型甕（23・156）黒色土器は坏（６・８・９・269）、埦Ｂ（11～14）、と皿の小片がある。灰釉陶器は埦Ｂ（15・16）、皿Ｂ（17～19）、手付瓶（20・256）などがある。手付瓶20を除き東濃の光ヶ丘１号窯・大原窯でありこれより新しい古代灰釉陶器は認められない。

今次調査ではSD46以外に遺構は認められなかった。しかし、数量は少なく包含層出土とは云え平安時代前半代の土器類はほぼ出揃っている。灰釉陶器も９世紀代後半のものが中心で平安時代後半代のものはないが、これも鳥居川水系の灰釉陶器の基本的あり方である。よって、調査区周辺に平安時代前半の集落があることはまず間違いない。

県埋文センターの調査では谷地部の東方の台地（大地区Ｉ）に平安時代前半期の集落跡が明らかとされている。今次調査区に接して竪穴住居SB05、掘立柱建物ST30・31を南限として、北へ90mの範囲にわたり弧状に竪穴住居跡７棟と掘立柱建物15棟である。遺構に一部切り合いが認められるが出土遺物から９世紀代後半の集落跡である。中野亮一氏は集落跡が小規模であることから桐原健氏の論考（1968）を引いて長期間で移住を繰り返す「山中で炭焼きなどを生業とする人々」の跡としている（中野2009）が、はたしてそうであろうか。前高山古窯という善光寺平でも古代須恵器生産の一大生産地を目前に置く地にあって中野氏の描く表町遺跡の実相は余りにも淋しい。確かに善光寺平の大規模な古代集落遺跡と比較すれば、そうした結論もあり得ようし、一大窯業地帯の隣接地にあるにしては須恵器の出土量も余りにも貧弱である。しかし、芋川の田中下土浮遺跡でも住居数は調査範囲内だけを見れば表町遺跡と大きな違いは見出し難い。むしろ表町遺跡の100mにも及ぶ範囲に居住域が展開していることにこそ重視すべきものと思われる。恐らく今後の調査の展開によって、善光寺平中枢域と異なり、決してそれらより大規模ではありえないが、鳥居川水系の古代集落の性格として認識されるべき、備後沢川などを利用した水田農耕を基本とした太田荘内の一農村の存在をイメージできる古代集落が明らかとされるものと思われるのである。

第３節　中・近世の遺構と遺物

１．掘立柱建物と関連遺構

（１）居住域の設定（第12図）

掘立柱建物からなる居住域は北西から南東にある低い丘陵尾根（南北尾根）とそれに併行する小沢川とその周囲の谷地に挟まれた尾根東斜面上にある。尾根の長軸は西に45度ずれる。居住域は低地である谷地を避けた斜面に展開するが、尾根の大半は調査外となるため丘陵頂部への居住域の広がりは不明である。しかし、本調査地に接し、いわゆる表町遺跡のある台地（仮に表町台地と仮称）を横断する形で調査した県埋文センターによると丘陵上には井戸を中心とする数棟の掘立柱建物群が検出され、谷地部は居住域としていなかった（中野2009）。つまり、丘陵斜面上こそ居住地として占地されていたことになる。また谷地部では掘立柱建物は見当たらず、これも県埋文センターの調査地点と同様であろうが、大きな違いは本調査地点では上水道関係の施設が調査地上部に集中して検出されたことである。掘立柱建物及びそれの柱穴と思われる掘方及び柱穴群は、調査地の３ヶ所にほぼ等間隔で分布し掘立柱建物とそれと関係した柱穴群などはこれら井戸をとりこんで分布する。つまり、井戸を中心として居住域が成立しているのであり、県埋文センターの調査区と共通する。もともと表町遺跡とその周辺の丘陵地帯は水に恵まれず今日でも水田は見られない。果樹または畑作地帯でありリンゴの消毒用水確保のために井戸を多用しており、ここを居住地とする限り井戸など生活用水確保は絶対的条件であり中野亮一氏によって指摘されている（中野2009）。さらに幸運とも云うべきはピート層の存在がこの地域一帯にあり、量は決して多くはないものの、その上部は湧水層となり井戸の多くは現在でもこの層まで掘り下げて水を確保しており、ピート層の存在が表町遺跡成立を決定づけたとすべきであろう。よって、井戸を中心とした集落（町）構成を考えることは、ごくあたり前のことでもあるし、調査の結果でもある。

表町遺跡のある丘陵は前高山の北斜面上にあるが比較的大形の備後沢川を除いて大形の河川はなく、ほとんどが斜面上部の湧水から来る小河川であり、谷地の発達も小さく谷地間の尾根状丘陵との比高差も小さい。谷地と西側尾根との比高差は４m、東側尾根とは２m、調査地の北と南の比高差は４m前後であって、いずれも傾斜角は小さい。

整地は斜面上の地山である黄褐色粘質土を削平し埋め立てていた。多くは黒色土を混じえた黄褐色粘質土であるが黄色粘質土単層もあり、黒色土上に埋め立てていた。しかし、雨水による流出と表土が20cm前後と浅いために耕作による削平も加わって、整地層は安定せず面的広がりはなく局部的であった。よって遺構の検出は残った整地面を手がかりに面的調査に小トレンチ調査も併せ実施した。とくに掘方の場合には整地層と同様に黄褐色粘質土を混じえていることが多く両者の識別が必要であって、黒色土で充填された柱痕跡と掘方の深さを持っておこない、柱配列を確認した。また、柱穴や掘方と整地土との関係も見極める必要があった。柱穴等の新旧決定の根拠となるからである。

このような基本的操作を経て実施したが結果的には未調査地を西側に多く残すために掘立柱建物は居住域ⅠでSB05・06・07・08の４棟、居住域ⅡでSB01・02・03・04の４棟、居住域ⅢでSB09の１棟の計９棟分を確認したにとどまる。建物間の切り合いも多く、また居住域Ⅰでは10基の炉床も加わり複雑であった。掘立柱建物は規模や構造は異なるが、井戸を伴う建物の配置が谷地に面した丘陵裾にそってあり、建物に新旧はあっても配置は基本的に変わらない。また県道地点でも指摘されているとおり（中野2009）建物内に方形土坑などの構造物は認

められない。

（２）居住域Ⅰ（第13・14図、PL3）

調査地の最北端にある溝SD48より南東寄りでⅢBD5からⅢBG1にかけたライン寄りの西北一帯でありSD48より北は東西谷の北斜面となる。SD48の東寄りにSE03～05・09・10の５基からなる小規模な井戸群で少数の土坑と炉床を含む柱穴（ピット）群からなる。この居住域では他と異なり比較的規模の小さい炉床が掘立柱建物群跡とともに多く認められた。炉床は２形態がある。いずれも平面形は楕円形で粘土を張った船底形底部となる点は共通する。単体である炉床Ａと、直列状に群となる炉床Ｂがあり、前者は径70～80cmと比較的大型のSF02・03・06と、径30～40cmで小型のSF07・11・12がある。炉床Ｂは掘立柱建物の東側側柱にそって径20～30cmの規模の小さなSF04・05・09・10がある。SF04は掘立柱建物SB06の柱穴によって切られているので古い。SF10も整地土下部に検出しているので古く、同様にSF11・12も整地土下にあり炉床にも掘立柱建物と同様に新旧があり、炉床が単体であるのではなく掘立柱建物と一体であることを示している。

掘立柱建物SB06（第18図８、第44図、PL9-8）　居住域Ⅰの南端にあり柵列SA01を介して南２ｍに居住域ⅡのSB01がある。これら２棟の梁行とSA01との方向は一致する。桁行４間、梁行２間またはそれ以上の南北棟と思われ南側に廂がつく。桁行5.4m、梁行３ｍ以上である。側柱建物で等間ではない。掘方も比較的小さい。東側柱の柱筋にそって柱穴１と３の間に炉床SF04・05・09・10がある。うちSF04は掘方２で切られSF10は整地土下で検出されているのでSB06よりは古い。炉床は建物内に大型のSF02・03・06がある。SF06が側柱ぞいとすれば、それも西側柱ぞいにあることになる。ただし、SB06が梁行２間と仮定してのことである。建物内には炉床SF11もあるが整地土下部に検出されSB06より古いので除外すると内部にあるSF02・03とSF06の扱いが問題となる。県道地点の調査では掘立柱建物ST01の側柱列にそって小規模な炉床が認められている（中野2009）ので、少なくとも表町遺跡の中世後半の掘立柱建物の中には側柱にそって炉床が付属していたと考えることができる。だとするならば、SF06は保留とし少なくとも側柱ぞいのSF05・09は付属施設とすることができようし、古いとしたSF04・10も改築前の炉とすることも可能である。ただし、調査中の所見ではこれらの点については未確認である。掘立柱建物内の炉跡は予想されてはいるものの、確認例は少なく今後の類例を待たなければならないが、掘立柱建物内の付属施設に複数の炉床を持つとするならば、掘立柱建物の規模と構造から一般住宅とするよりは炊事場か工房跡とも考えられるが、それを証明する出土遺物は建物内には認められなかった。しかし、SB06など炉床から排出されたと思われる焼土粒を含んだ炭層が部分的ではあるが柱穴間をはじめSB06の周辺部に広く認められる。また、後述のとおり周辺部における鉄滓・羽口の出土（第８図）は、新旧の炉跡の存在とともに相当期間炉床を中心とした行為－鍛冶が継続的に行われていたことを示すものと思われる。

SF02・04の埋土からは土師器皿（224・227）が出土しているが、これらからの時期決定は困難である。

掘立柱建物SB05（第18図７）　SB06の西側に重複し主軸を同じくする、南北棟の掘立柱建物である。東側桁行５間分と梁行１間分が検出された。桁行6.9mである。掘方は小さく柱痕跡とほぼ同規模である。掘方５は切り合いがありその中ではもっとも新しく、SB05はSB06にそって西側に再建されたことを示している。建物内にはSF02・06とSF07がある。側柱にそって炉床があるとすればSF02・07はSB05に付属することになり、炉床を持つ建物としてSB06に継ぐ建物とする根拠ともなる。

掘立柱建物SB07（第18図５）　SB06の北側にある桁行３間以上梁行２間の東西棟の側柱建物で柱間は異なる。建物西側は未調査地である。掘方は小さくほぼ柱痕跡と一致するが各柱穴の深さにはバラツキがある。SB05・08と重複するが、直接新旧関係は明らかになし得なかった。居住域Ⅰでは唯一の東西棟であり柱筋も僅かにずれる。

掘立柱建物 SB08（第18図６）　SB05・07と重複しSB06の北側にある桁行２間2.5m、梁行２間1.6m の小規模な南北棟である。掘方と柱穴がほぼ一致する。

（３）居住域Ⅱ（第14図、PL3）

居住域Ⅰの南側にある掘立柱建物群で、中央に素掘り井戸 SE06がある。居住域Ⅰとの境は柵列 SA01で区画される。掘立柱建物は SB01・02・03・04の４棟が確認でき、SB02と03が東西棟、他は南北棟である。建物の立地と主軸方向は基本的には居住域Ⅰと一致し、居住域Ⅱは居住域Ⅰと同様に井戸 SE06を中心に一体的な町造りがなされているものと思われる。また居住域Ⅱは居住域Ⅰと比較して柱穴数と掘立柱建物の棟数が少なく、かつ大型建物がある。加えて炉床は全く認められず、居住域Ⅰとは性格が異なる。

掘立柱建物 SB01（第17図１）　居住域Ⅱの北端にあり柵列 SA01と方向を一にする。一辺40ないし50cmの方形掘方。桁行４間以上、梁行２間以上の南北棟の掘立柱建物で桁行８m、梁行４m 以上となる。桁行は等間で柱間隔は2.1m（７尺）、梁行も等間と思われ柱間隔は2.4m（８尺）である。表町遺跡では唯一の計画性のある大型の掘立柱建物である。SA01で区画されSE06に近接しており、住宅跡と思われる。

掘立柱建物 SB02（第17図２）　未調査地を多く残すため不明部分が多いが、恐らく桁行２間以上、梁行２間の東西棟の掘立柱建物と思われる。SB01内にあり梁行方向は東側にある東西棟 SB03とやや相違する。掘方は方形で20～30cmで小型である。

掘立柱建物 SB03（第17図３）　桁行３間以上、梁行２間の東西棟建物である。井戸 SE06によって切られており、SE06より古い。柱間は桁行1.5m、1.8m、梁行は1.25m である。掘方は小さく柱穴とほぼ等しいが計画性の強い建物と云える。SB03の建立は SE06の構築に先立つ所から15世紀代に遡るものと思われ、表町遺跡で年代の推定しうる中世の建物ではもっとも古いものとなろう。

掘立柱建物 SB04（第17図４）　居住域Ⅱの最東端でもっとも谷地寄りにある２×２間の小型の側柱建物である。桁行3.2m、梁行は等間で3.0m である。掘方は認められず柱穴のみである。南北棟である。

火焚跡 SF08（第33・44・66図、PL7）　ⅢBH3を中心に谷地にある大規模な火焚跡で多量の焼土粒と炭・灰を含む。南北８、東西２m に及ぶ。西側には火焚によって生じた厚さ２cmの焼土壁が弧状に南北３m 以上にわたり見られるが、高さも５cm程度で下部に炉床は認められない。焼土壁は火熱を受けて壁となっていたが粘土を用いて壁としたものではなく、火焚の結果生じたものである。それは厚さ10cm前後の焼土・炭層の底部も同様に、粘土で炉床が作られた痕跡は認められなかった。つまり、SF08は大規模な火焚跡と考えられるもので、そこで生じた多量の炭・焼土が広範囲に拡散したものである。

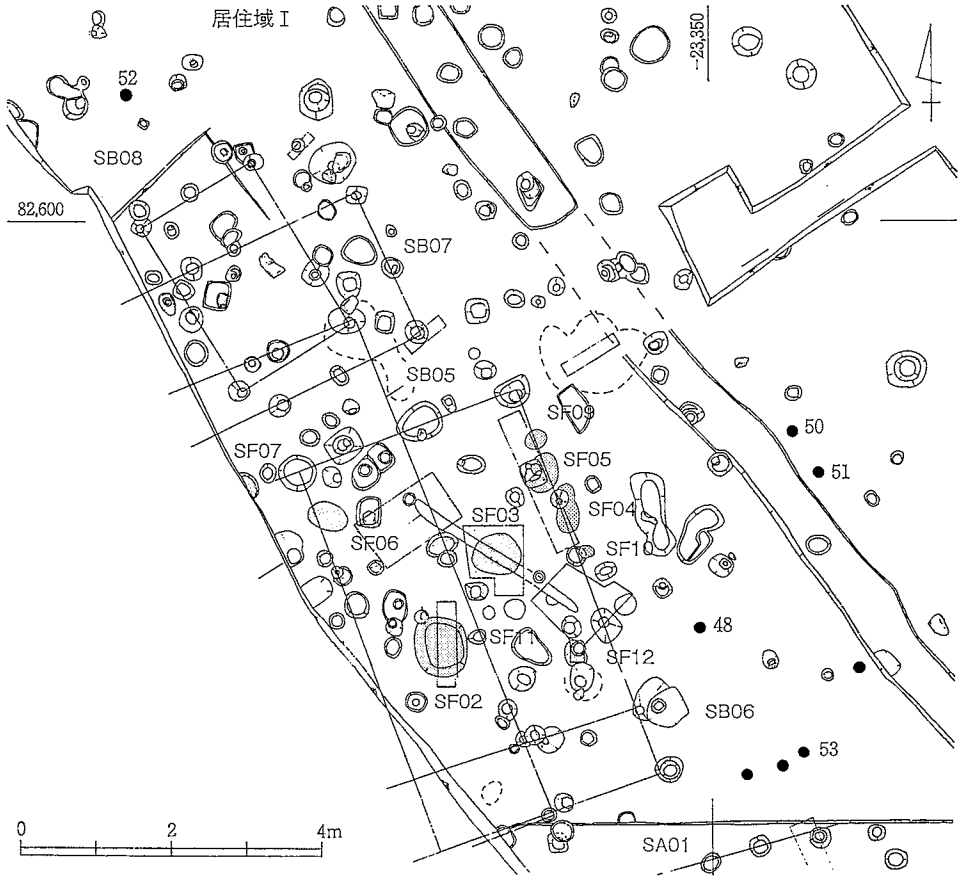
この焼土・炭層からは土師器ⅢⅡＡ・ⅡＤ型（228～232）と大窯Ⅰ期の端反Ⅲ・天目（233・234）や青銅製品（25）が出土した。しかし、これらには火熱を受けた痕跡はとくに認められないので焼土・炭層堆積直後に混入したものであり、大規模な火焚が16世紀前後におこなわれたことを示している。この付近には掘立柱建物は認められないところから、谷地の空間部を利用して建物の建て直しなどで生じた廃材等を処理した跡であり、土地利用の面から云えば、少なくとも道路などの施設はこの所にはなかった事になる。

（４）居住域Ⅲ（第16図、PL2）

居住域Ⅱの東側、旧水路から東一帯を云う。炉床 SF01とその北側の SG01・SE07・08とそれらとの関連する SE11や SD47をはじめとする７本の水路（溝）及び最東端の素掘り井戸 SE01・02、掘立柱建物 SB09からなる。ただし、柱穴群は SF01の周辺に少数が認められるのみで、大多数は SG01の南東方向の高台にある。SF01と高台の柱穴群との間には SG01及び溝（水路）に流れ込む６条の自然流水路がある。よって居住域とはしたが調査範囲ではその名にふさわしい地域は SG01の南東高台であり、ここには SB09の掘立柱建物と少数の柱穴群および

遺構名	位置			構造・規模					柱間間隔		掘方・柱穴		備考
	居住域	グリッド		棟方向	方位	柱間数	桁行(cm)	梁行(cm)	桁行(cm)	梁行(cm)	平面形	規模	
SB01	Ⅱ	ⅢB	E05 ほか	南北棟	N17°W	4(以上)×2(以上) (等間)	840(以上)	480(以上)	210	240	方形	40～60	中心施設 部分検出
SB02	〃	ⅢB	F05 ほか	東西棟	N81°E	2(以上)×2 (等間)	360(以上)	300	180	150	方・円	40～50	部分検出
SB03	〃	ⅢB	H07 ほか	〃	N48°E	3(以上)×2 (等間)	480(以上)	250	150・180	125	円	20～30	〃
SB04	〃	ⅢB	K09 ほか	南北棟	N23°W	2×2	320	300	180・140	120・180	円	20	側柱建物
SB05	Ⅰ	ⅢB	C01 ほか	〃	N21°W	5×2(以上)	690	300(以上)	150・90	150	円	20	側柱一部検出 鍛冶工房か 炉床　SF02・06・07
SB06	〃	ⅢB	C02 ほか	〃	N19°W	4×2(以上)	540	300(以上)	160・140・100	160・140	方・円	50～20	鍛冶工房か 炉床　SF04・05・09・10
SB07	〃	ⅢB	B01 ほか	東西棟	N84°E	3(以上)×2	240(以上)	200	90・120・60・130	100	円	20～30	側柱一部検出
SB08	〃	ⅠV	B20 ほか	南北棟	N31°W	2×2	250	160	100・160・170・80	80	円	20～30	側柱建物
SB09	Ⅲ	ⅢC	D15 ほか	〃	N23°W	2×2	280	260	120・160 130・150	120・140	円	20～40	〃

表１　表町遺跡検出の掘立柱建物一覧表



第８図　居住域Ⅰ　鉄滓・羽口出土状況（１：100）

土坑群がある。しかしながら県埋文センターの調査（４区）（第12図）を参考とすれば、居住域Ⅲとした地区より東側の南北尾根にも建物群の存在が予想されるので、上水道施設を含めた一帯を居住域Ⅲとした。

また、調査地北側の小沢川を含む谷地はSG01の高台東側で大きく南西方向に折れる。東西尾根もその谷地にそって続く。県埋文センターの調査でも谷地には柱穴群は認められず中世末期の井戸SK1478・1480と東西棟の掘立柱建物ST39とST40が調査されている（中野2009）。谷地部の掘り下げは未実施のため詳細は不明であるが現状で見る限りST39の軸方向は谷地の方向と一致している。県埋文センター調査地と今回調査地点との間は未調査のため不明であるが、恐らくSE01・02あるいはSK1478・1480にともない掘立柱建物があるものと思われる。

掘立柱建物SB09（第16・44図）　2×２間の側柱建物で桁行2.8梁行2.6mの小規模な南北棟建物である。西北隅は土坑SK1657によって切られている。SK1657は平面楕円形の長径150cm、深さ70cmの土坑である。不定形の土坑SK1656を切る。後者から縄文中期後半の土器細片が、前者からは鉄釉を施した陶器擂鉢（216）と珠洲Ⅴ期と思われる擂鉢が出土している。いずれも土坑埋土内出土であるがそれぞれの土坑の年代を推定し得る。ただし、陶器擂鉢（216）は越中瀬戸の胎土に似るが越中瀬戸の擂鉢には見られない器形で産地・年代とも不明であるが、中世までは遡り得ないものと思われる。以上から掘立柱建物SB09は中世末期の建物と云える。

土坑群SK1656～1660・1666（第19・44・50図）

SK1666は1658・1659と複雑に切りあったうえにSK1660によって切られる。SK1660埋土からは古代の須恵器甕の口縁部を再加工した、砥石片（219）が出土している。恐らく再加工した時期は古代ではなく珠洲片利用の砥石と同様に中世後半であり15世紀以降であろう。また、これらSK1658・1659・1660・1666などの土坑は平面形が複雑な上に地山である黄色粘質土の掘り込みも深くかつ、不規則で統一を欠く所から、カワラケ用の粘土採掘坑とも推定したが、とくにその根拠は得られず不明である。SK1656・1657についても同様である。

炉床SF01（第20図、口絵２）　居住域Ⅲの西寄り、居住域Ⅱとの境のⅢBR14にある。黄褐色粘質土層中に検出され、周辺部に少数の柱穴が認められた。東寄りに上水施設に流入する溝群があるのでこれを以って居住域を区画とするならば、SF01を居住域Ⅱの中に含めることもできるが居住域ⅡとⅢの間に柱穴群が認められないので、幅10m前後の空白帯を境としてSF01を居住域Ⅲに含めた。背後の尾根の実態が不明である現段階では便宜的に捉えたことと、SF01をどう理解するかにも係わってくる。

炉床SF01は居住域Ⅰで認められた小型の炉床群とは異なり、平面楕円形で長軸方向がN39°E、長径1.8m、短径1.3mの大型炉床である。床は中央が僅かに窪み、白色粘土で固め火熱で硬化していた。焼土は４層にわたり認められ最下層は厚さ６cmである。周辺の柱穴は炉床の覆屋と関係しようが、建物として確定するには至らなかった。炉床内から年代を知る資料は得られなかった。

（５）出土遺物（第44・67図、PL15）

居住域Ⅰ・Ⅱで掘立柱建物に直接係わる遺物についてふれる。

鍛冶工房関係では鞴羽口と鉄滓がある。今次調査では羽口２点（47・48）と鉄滓20点があり、うち羽口１点（48）と鉄滓11点（49～54）が居住域Ⅰの掘立柱建物群を半円状に取り囲むように出土し（第８図）、残りは調査地全域に散在していた。全体量が少ないことと、掘立柱建物内の小型炉床を、鍛冶遺構とするには、ややためらいもあるが鍛冶関連遺物をひとつのまとまりと捉えれば、炉床を置く掘立柱建物群を鍛冶工房跡とすることができよう。なお、鉄滓は椀型であるが、多くは細片である。

掘立柱建物の掘方や柱穴（ピット）、炉床からもごく僅かではあるが、土師器皿などが出土した。少片が多いうえに、土師器皿の編年研究が不十分な現状では、年代決定の資料に用いられないが、将来の検討に備えておく。

炉床ではSF02（224）、SF04（227）、掘立柱建物SB01掘方５（218）があり、組合せ不明の掘方、柱穴（ピット）にはⅢBE4 P.58（222・223・235）、ⅢBC1 P.151（225）、ⅢBB1 P.198（238）、ⅢBJ9 P.71（242）などがある。また、居住域Ⅰ内のP.311には肥前陶磁器Ⅱ期の丸皿（241）がある。P.311の位置が不明であるが居住域Ⅰ内の掘立柱建物が17世紀前半まで存続していたことを知る資料である。

（６）居住域Ⅰ・Ⅱの掘立柱建物の配置と年代

居住域Ⅰと居住域Ⅱではそれぞれ谷地に面した尾根東斜面に最少４棟ずつからなる掘立柱建物群がある。これらは居住域Ⅰでは柱間が異なる側柱建物が主体で複数の炉床を持つ建物とそれに付属する小型建物からなり、鉄滓・鞴羽口の出土から鍛冶工房の存在を推定した。ここではほぼ主軸が一致し、炉床を持ち規模も似る南北棟の新旧２棟がこれらに付属する小規模な側柱建物からなる。

居住域Ⅰは「まち」のもっとも北寄りの「まちはずれ」にあり、複数の小型井戸を伴なう。井戸群の北側は東西方向の谷となり、東西の溝SD48で「町域」（城下）と「山城」（城館）が区画される。

居住域Ⅱは柵列SA01によって居住域Ⅰと区切られ、東はSE06の東側までであり、炉床SF01とSG01・SE07・SE08などの上水道施設の区間を経て居住域Ⅲとなる。よって居住域ⅠとⅡは遺跡全体の中では一体と考えるべきものであり、ⅠとⅡの区別は便宜的なものにすぎない。

居住域ⅡはSE06構築以前と以後のSB01とSB02の切り合いから少なくとも３時期にわたる建物群からなり、後半は素掘井戸SE06を持つ住宅地でSA01の北の工房群と一体である。SE06の構築が別項で検討したとおり15世紀後半とされるので、「まち」のはずれの一角に鍛冶工房を備えた職人の居住域（居住域Ⅱ）の成立が15世紀代後半とすることが許されよう。つまり、城館と一体の「まち」の成立は戦国期を迎える16世紀代よりも早かったと云えるが、この点は別に再述する。

２．貯水池・石組井戸・集石・肥溜

（１）検出状況

調査地の南寄りでゆるい谷地地形の谷部にあり、石組井戸SE07・08、貯水池SG01、集石SH01、肥溜SX01・02など、性格と時期の異なる４種類６遺構が検出された。これらを検出手順で見るならば、調査区最南端の現代の農業用水路SD22より南側は別項で説明する井戸SE01・02がある。多数の土坑や溝などがある東西丘陵のゆるい斜面上にあり、SD22より北側は急に落ちこむ。つまり、基盤となる黄褐色粘質土（ローム）を深く掘り込んだ円形の貯水池SG01、そして長径80cm前後の板状の大石を含む大小の礫と五輪塔や粉挽き臼などの石製品や陶磁器類などの破片を相当数含む集石SH01の存在が分かるにつれ、類例のないこの落ち込み（SG01）とSH01との関係や性格付けなどが調査上の大きな課題となった。よってトレンチによる集石下部の状態を探る一方、SG01周辺部の調査を併行して進めた。その結果、幅60cm、深さ20cm前後の溝が６条（SD31～36）あり、うち３条（SD31・32・36）は直接SG01に向かっており、溝SD34・35はSG01の西寄りにそってめぐり北側で谷地に落ち込む。自然流路であろう。SG01・SH01のトレンチ調査ではSH01とした集石群が褐色粒混黒色土（２層）にあるのに対してさらに下部の有機質土層（６層）中にも人頭大前後の多数の玉石などが集中することと、多量の湧水もあって調査は難航した。特に落ち込みや集石内の多種多様な遺物の出土のため、主要と思われる遺物の出土状態の記録とともに花粉分析用に層位ごとの土壌採集などを実施した。また、SG01南壁斜面上に斜位に打ち込まれた杭列は護岸に伴う保護施設に係わるものと判断され（PL5-8、第23図セクションC-C′）SG01が貯水池とする根拠が得られた。

一方、SG01、SH01の西側谷地部では溝SD38など溝が検出されるに及んで、溝とSG01との関係に新たな課題

が生じた。

集石 SH01からは五輪塔や板碑など墓地に係わる石製品が多数認められる（第24図、PL4）所から、調査当初集石は中世墓地や経塚の可能性も視野に入れて調査を進めた。加えて底径90cmの円形の桶２基（SX01・SX02）が集石内に併置されていたため墓地の可能性が強まった。しかし、１基（SX01）は底板だけであったが、いま１基（SX02）は竹のタガで固定された側板が残っており、さらに側板外周は10cm幅を白粘土で貼付していた(PL4-1)。明らかに液体のもれを防止するためのものであり、当初予想した座棺ではなく肥溜用の桶であることが判明するに及んで、少なくとも SX01・02は墓地である可能性が薄くなった。また、集石が墓地であるという想定は集石群下部に検出された石組井戸 SE07・08に五輪塔を石組の素材に使用されていると層位的にも識別される（第22図、PL4・5）ことから、集石墓地説は大きく遠のいた。とくに人骨など墓地を示す遺物が見られない点は決定的であった。桶内にはこぶし大の円礫が充填されていたが集石 SH01の構成石とは大きさも異なり、肥溜廃絶後埋め立てられた状況であり、集石 SH01を切って SX01・02は作られた。ここの遺構群ではもっとも新しいものである。

石組井戸 SE07と SE08は SH01の下部で間層を挟んで検出された。SH01が黒色土を主とした２層にあり、間層（３層）を挟んで SE07・08が検出された。泥炭層を基底部に石積（石組）されており、埋土は有機層主体の互層であり、有機物の一部には多量に青色の藍鉄鉱が付着していた。明らかに水没下または、低湿地状態の堆積状況であり、SH01構築時の乾燥状態とは異なる。また、石組の上部は井壁の崩落が著しく井壁上部での SE07と SE08の新旧の判断はできず、また、北側が直線的・一体的でなく SE08の北井壁が内側に寄っていることから、南井壁を共用しながらも SE08の西井壁と北井壁を内側に縮小して新たな井壁を再構築したことが判明したが、東井壁は崩落が激しくはっきりさせることはできなかった。北井壁の確定により SE07が古く SE08で新しいことが判明し、両者ともに五輪塔と板碑が使用されていることにより、墓地が別の地点にあり、その一部を破壊して井戸の建築材として利用したことにより、石組井戸も五輪塔や板碑の年代を越えるものではないことが判明した。よって、SG01-SE07-SE08-SH01-SX01・SX02という構築順が明らかとなった。あとは出土遺物と遺構群全体の中での年代の比定である。

（２）肥溜 SX01・SX02（第21図、PL4）

肥溜と思われる遺構で、集石 SH01を切って20cm間隔で併置されていた。マツ属を用材とし加工痕は不明である。底径85cmで底板は６枚使用し、竹のヒゴで側板を結い止める。幅10cmの白粘土で固定し液体の流出を防いでいた。屋外の肥溜例は６基併置された長野市水内坐一元神社遺跡に調査例がある（青木・遠藤2010)。年代は不明であるが集石 SH01の構築が後述のごとく17世紀後半から18世紀と考えられるので、それ以降のもので表町遺跡が完全に農地化されていたことを示すものである。

（３）集石 SH01（第21図、PL1・4）

貯水池 SG01埋土上層（２層　褐色粒混黒色土）に検出された集石であり、その広がりは円形で径9m に及び貯水池 SG01のほぼ全域にあたるが、径80cmの不定形な大型平石はＸ＝82,576ラインより北側に集中し径2m の範囲に集められ、五輪塔や板碑・粉挽き臼などもその中に見られる。この大型平石群の南側には拳大から人頭大の自然礫が集められその中に肥溜 SX01・02が構築されている。ただし、南側の集石は疎らであり、レベルが下位にあるものも含むなど SH01とした礫の中には下位の石組井戸 SE07・08の上部のものと層位的に識別が困難なものもある。集石そのものは特別の意図があって作られたものとは思われず、後述のとおり、SH01は SE08が廃絶し集落から農地へ転換した際に不用となった大小の石を集めたものと思われる。

SH01の大型の平石は13石で2m 四方の範囲に１ないし２段、平坦面を上下にして、石を敷きつめた状態であっ

たが不規則でその目的は不明である。第２層（褐色粒混黒色土）中にあったが２層は石組井戸SE07・08埋没後生じた窪地に深さ60cm前後と厚く堆積していた。SH01出土の遺物も集石及びその下位にあり、一部は３層（褐色粒少量混黒色砂質土）に及び、SH01構築時の前後も含むものであり、礫の一部と同様に不用物として窪地へ投げ込まれたものと思われる。陶磁器や土器類、石製品、金属器、木製品などは12世紀代に遡るものもあるが、大半は16世紀代前後が最も多く、そのことを示している（第21図）。よって、SH01の構築時期は出土した陶磁器のうちもっとも新しい肥前陶磁器Ⅲ～Ⅳ期（66）の年代である1650～1780年（大橋2000）頃をもって終了したということになる。つまり、SH01は表町遺跡の集落が牟礼宿へ移住などにともない、農地化される中で、不要となった平石などがSE08埋没後の窪地へ投棄されたものと考えられるのであり、18世紀前後には表町遺跡の農地化が始まっていたのである。

（４）石組井戸SE07・SE08（第22・59～61・73図、口絵２、PL5・13）

貯水池SG01の北西寄りに構築された石組井戸でSE07が初めに、ついでSE08を1m東へ、西井壁と北井壁をほぼ直に構築し南井壁はSE07のそれを再利用して構築されたと考えられるものである。北井壁はSE07よりも20cm内側にある。東井壁は崩壊しており不明であるが、崩壊した礫群から石組井戸の規模は方形で一辺がSE07は約2m、SE08はやや小さく1.8mになるものと思われる。

SE07　北井壁は上部の崩落があるが高さ1.2mまで認められた。SE07の西井壁はSG01の西岸ぎりぎりに一辺50ないし60cm前後の玉石と平石を４段以上に布積みし、一部を径12cmの丸太杭２本を打ち込んで石組を補強している。他の石組の井壁と同様に固い泥炭層を基礎としている。控積は五輪塔など多量の石を用いているがSE07の西井壁にはSG01の西岸が掘方として利用されており、控積は認められない。これは、SE07の西井壁がSD45など排水溝とSG01との位置関係からSG01の西岸として考えられるもので、SE07西井壁構築に際しては垂直に掘方とするなど、SG01を大きく変更することなくごく小さな造作であったことを意味する。

井壁西北隅には水輪（58）、北井壁には火輪（55）が石組の部材として使用されていた。五輪塔はSE08西井壁（67）や南井壁（73）にも認められる。控積にも五輪塔や板碑が用いられており、井戸の構築に際し墓地を破壊して用材として運搬され用いられている。中世の城壁構築などに同時代の墳墓や古墳を破壊して用材を確保した例は全国的に多い（田淵1975）。井戸の用材確保に五輪塔を利用した例は小布施町玄照寺跡（鶴田・中島・土屋1997）にある。これらは一般的には戦国時代における旧秩序否定の動きとして説かれている（田淵1975）が宗教的行為とする見解（小和田1995）もある。

SE08　東井壁を除いてかなりの部分が現存していた。西井壁はSE07の東側1mに、SE07西井壁に併行して新たに築かれたもので、東側に面をそろえた布積みである。長さは内法で1.8m、高さは1.2mまで確認できる。中央部分に長さ159、幅17、厚さ９cmのカツラの半割り材を石組部材（枕木）（71）として入れ、下部は人頭大の玉石を４段に乱積みし、部材上には60cm前後の大石を２段に積み上げ、間に小石を充填している。また、基盤はSG01底部の固い泥炭層であるが、SE07の基底より約10cm前後下げている。南井壁はSE07のものを再利用し、最下段に地輪（73）を含む玉石を１段配置しその上に長さ180、幅23、厚さ10cmのカツラの半割り材（72）を置いて石組部材（枕木）とし、上に60～70cmの大石を１段に置いている。高さは70cmまで確認できる。

（５）貯水池SG01（第23図、PL6）

谷地の中軸線を南側に少々ずらした地点で東西丘陵南斜面の裾部を大きく掘削して構築された飲料水用貯水池（小型のダム）である。谷地の中軸線をずらしたことは、谷地の水よりもより良質な湧水が得られることと、降雨時の異状出水による池の埋没をさけたからと思われる。しかしながら、谷地部分は調査外となるため両者の関係は推定の域を出ない。

SG01の上方肩部にはSE01・02とSG01に向かう数本の流路跡と土坑などが認められた。なお、SE01・02は別項で検討のとおりSG01よりは新しい。

SG01は南北6.6、東西5.7mで、平面形は円形状であるが西側の出口部分は直線となる。SE07西井壁構築によるものと思われるが、むしろ出口部との関係もあろう。また、南辺部は丘陵南斜面上部からの雨水などの流水（SD31-1、31-２）により大きくえぐられていた。基盤となる黄褐色粘質土と下部の泥炭層（新）を掘り抜き泥炭層（旧）の上部を底部としている（第23図土層図A-A′、B-B′）。固い泥炭層（旧）が不透水層で砂質の泥炭層（新）が湧水層であり、井戸SE02、SE06と共通する。検出面からの深さは東岸で2.1、西岸で0.8mであり、恐らく西岸上は堤があっていま少し高かったものと思われるが、SE07などの構築でかなり削平されたものと思われるが調査では未確認である。底面は深さ10cm前後の円形の凹凸が無数認められたが固い泥炭層の掘削痕であろう。南岸の壁斜面には斜位に打ち込まれた杭が６点認められ中央の３点は杭列で間隔は各20cmであった（第23図、PL5-8）。横架構材も一部が認められ、南側高所からの流水に対応した護岸施設の一部であり、SG01が石組井戸構築の掘方ではないかという調査当初の予想を打ち消すこととなった。このほか、東井壁の立ち上がり部分にも杭が１本認められたので護岸設備は他にもあったものと思われるが調査では確認できなかった。壁面は粘質土で砂礫を含まず粘性が強く安定していたために護岸設備は小規模であった。出口部には止水用の設備があったものと思われるが調査では未検出で、流路跡のみ確認できた。なお、出口部の状態については溝の項で詳述する。

（６）遺物の出土状態と遺物（第24・25・38～42・53～70図、口絵２・３・４、PL4・5・10～15）

貯水池、石組井戸、集石、肥溜という年代と性格の異なる遺構が400年ほどの期間内に順次構築された。しかも冠水状態の堆積土と少なくとも上・下２層にわたる多量の集石は出土遺物の取り扱いも難しく、主要遺物と思われるものは位置、層位とレベルを記入しながら取り上げた。しかし、出土層位の確認が特にSG01では難解で、必ずしも十分とは云えなかった。すでに述べたとおり埋土の形成が井戸壁の崩落によるとともに、それはSG01内の埋土形成にも係わったと思われるものであり、土器片や木製品などはかなりの移動が予想されたし、石製品についても軟弱土層では沈下することもありうるからである。よって、遺物の取り上げに伴う記録化は一部に限定したが土器片と木片を除く遺物については９割方実施した。

SH01出土の遺物は上層（２～４層）出土のものであり、厳密にはSH01形成時のものとSE08埋没後の層も含まれる。

主要な出土遺物には中世の土器や陶磁器では土師器皿（カワラケ・燈明皿・底部穿孔土器）（37～61）、香炉（62）、内耳鍋（99～115）、肥前陶磁（63～66）、中国産青花（67・68）・青磁（69～77・80・81）・白磁（84）・天目茶碗（78）、古瀬戸（79・82・85）、珠洲（87～89・91・93・95～97・164）、在地の瓦質土器など（83・86・90・94・98）がある。これら図化した資料以外に細片も相当数あるがほぼ傾向は知りうる。中国産輸入陶磁器では15世紀から16世紀前半が多い。また、同安窯の碗（72）は12世紀代である。このほか中国産天目茶碗は15世紀末16世紀代で、茶臼とともに茶の湯の風習を考える上で貴重であるし、肥前陶磁（66）はSH01の下限を示すものである。

石製品では粉挽き臼（１～11・14・124）、茶臼（12・13・15・126・127）、石鉢（33・34・128・129・131）、凹石（28～32・41～47）、砥石（36・72・98～100）、円礫（115）、五輪塔（48～54）、板碑（75～77）、金属器は銭貨に嘉祐元宝（１）、元豊通宝（２）、元祐通宝（３）、永楽通宝（４）があり、そのほか和鏡（24）、不明鉄器（39～41）、木製品は曲物片（16・25）、柄杓底板（21）、棒状加工品（39）などがある。なお41は丸釘で新しく混入品である。

五輪塔、板碑はSE07・08構築に部材として墓地から搬入されたものが再度集石内に集められたもので、粉挽

五輪塔、板碑はSE07・08構築に部材として墓地から搬入されたものが再度集石内に集められたもので、粉挽き臼などの中にも建築材として再利用されたものが多数あろう。

SE07・SE08からも中層以下に多量の出土遺物が認められた。多くは中層から下層にかけての有機土層からの出土であるが、五輪塔・板碑や粉挽き臼など大型石製品は出土状態から、ひとつは石組の部材、いまひとつは控積用である。前者はSE07の西井壁（56）、SE08の西井壁（67）、南井壁にある五輪塔（73）である。井壁下に転石として出土した五輪塔（59・63・69）も石組の一部であったものが崩落したものであろう。いっぽう、SE08北井壁北側から出土した五輪塔６点（57・61・62・68・70・71）は石組の控積として多くは利用されたものである。同様に東北隅の五輪塔（64～66）、板碑（74・78・79）、粉挽き臼（25）がまとまって出土しており、井壁隅の部材か控積であろう。このほか、粉挽き臼（18・20・23）、石鉢（35）も南井壁と想定される位置からの出土で部材の一部であったものと考えられる。なお、下臼23は半壊し一部はSE02埋土上部出土のものと接合したもので、SE02が埋没した後にSE08が構築されたことを示している。

SE08床面からは短刀３振（29～31）と肥前陶磁Ⅱ期の染付け碗（整理番号2009）と瀬戸・美濃大窯Ⅲ期の内禿皿（147）が出土した。短刀は別項でふれる。後者はSE08の下限を考える資料である。この他SE07埋土内からは中国産青磁（158）、古瀬戸（159）、珠洲（157・160～162）があり、SE08では土師器皿（131～144）、中国産青花（146）と青磁（148・149）、土師器鉢（145）と内耳鍋（150～155）がある。金属器では鞍の緒通し管の一部がSE07埋土から出土している（23）。

（７）石組井戸SE07・SE08の年代と性格

井戸に関するすぐれた考古学的研究はいくつかあるが弥生時代以降中・近世の発掘資料を集大成し分析した宇野隆夫氏の型式分類は井戸研究の到達点にあるものである（宇野1984）。その宇野氏の分類によればSE07・08はC1類石組方形井戸となり稀であると云う。つまり、類例が少ない上にSG01からSE07そしてSE08と至る過程は例がない。以下この点を検証する。

宇野氏によれば井戸は井桁（地上施設）、井戸側（地下壁面の施設）、水溜（底の施設）からなり、水溜は井戸の底部を兼ねるか別に設ける場合があるとする。SE06などは前者でありSE02は後者である。さて、宇野氏の指摘にもあるように石組は井壁の保護施設であり、当然のことながら井壁を組むための掘方と石組を固定する控積もSE07・08の土層も含めて検討されなければならない。

SE07とSE08はともに埋土は有機層を主体とした土層の互層からなる。SH01を含む上層（２～４層）は有機物主体の６層（ａ～ｄ層）上部の6b層の窪地に堆積し、SE08の石組上端と石組の部材がSE08の内側に崩落した状態であることが読み取れる。６層下部（ｅ～ｈ層）は西井壁からの流れ込みを含む堆積土であり、６層上部は西井壁の多くの部材が東側へ崩れ落ちた状態であることが分かる（第21図セクションA-A′）。石組の部材はそれぞれ井壁にそった６層下部にも多数認められたので、石組の崩落は数回にわたったものと思われる。６層は有機土層であり、基本的には冠水状態の中で堆積していったものであるが、その堆積が石組上部の崩落から始まったと見てとれる。一方、SE07の６層上部（５・６層）は水平堆積も認められるが、別の土層ではSE08側へ傾斜堆積が認められる。SE07の６層下部は記録化していないが、発掘時の所見では有機物を含む黒色粘質土からなり、SE08とは異なる。つまりSE07、SE08の土層は廃絶後、石組井壁上部の崩落によって同時堆積したものと考えられ、SE07の６層下部はSE08構築時の控積と見られる。

以上からSE08の構築はSE07の廃棄に伴うものと考えたのである。そしてSE07の構築は使用されている五輪塔と板碑から15世紀末は遡り得ない。別項で検討したとおり板碑や五輪塔が一旦墓地に設置されたのちに石組の部材として持ち込まれたものであることから、SE07の構築は16世紀前半代となり、SE08の廃止は底部から出土

した肥前陶磁器Ⅱ期の染付碗（整理番号2009・口絵４－１）から下限は17世紀前半代かそれに近い時期となろう。

次にSE07とSE08がひとつの遺構とした場合、つまり、SE08が主、SE07が従となる「副式井戸」として機能と構造面から検討してみる。まず機能面で見た場合井戸は湧水を確保し、より良質の飲料水を確保することにあるが、両者は構造上ではそれぞれ独立しており、水の交流は上部の越水においてのみ可能であるが、各井戸の上部構造が不明な所からこの点の確認もできないし、２基併設とする合理的説明ができない。前例がない点もこの点にあろう。

構造面では２基併設の場合にはSE08西井壁が両者を左右に区切る障壁となるが、竪杭２本と石組中段に架構した割り材では控積がなければ安定した構造物とはなり得ない。よってSE08の西井壁は井壁面が東側を片面として整備され、両面を持つ障壁とはならないという発掘時の所見によって「副式井戸」としなかったのである。

石組の下に割り材を置く方法は長野市松代城の石垣構築に際し材（胴木）を土台に用いる（矢口・前島1995）手法にも通ずるものがあり、年代的にも近似するとともにそれが石組の簡略化と見るかはむずかしい。SE07とSE08に共通した石組技法と呼べるものであり、時間差はあまりなく、構築が同一技術によっていると考えてもさしつかえないものと思われる。恐らく同一または同じ職人集団が井戸構築に関与していたものと思われる。木材架構の石組は湧水点が高く、SG01を再利用することと低い井壁ゆえのものであったからであろう。SE07・08は井戸としては規模が大きいがこれも井壁が低いことと関係して、深い井戸掘削よりは技術的に容易であったことと関係があろう。

黒崎直氏によれば奈良県平城京では井戸にも格式があって身分などによって使用が違っていたと云う（黒崎1976）。同様の見解は宇野隆夫（宇野1989）・水澤幸一（水澤2002）両氏にもある。SE08底部に置かれていた３本の短刀は構築に際して井戸の安全を祈願して井戸底に埋納したものと思われ、そこに表町遺跡の支配層の関与が認められる。３本という数も井戸祭祀と無関係とは思われないが、素掘り井戸との構築の違いや設置場所から、遺跡全体の大切な水甕として表町遺跡の支配層、恐らく矢筒城主が係わった共用井戸であると思われるのである。

３．溝・貯水施設・木製桝

溝跡は調査地全域で19条である。溝SD22・29は現行のものでSD22は居住域Ⅲで、SD29は調査地のほぼ中央で居住域Ⅰ・Ⅱにわたる南北溝である。SD48は居住域Ⅰの西限にあり居住域と城館を区画する区画溝の可能性があり別項でふれる。SD30は居住域Ⅱにある。その他の大多数の溝は居住域Ⅲにある。SE07・SE08・SG01の西側の谷地内で傾斜にそって東から西に向かう１群と、これら溝に向かう丘陵南斜面にある。前者はSE07・SE08・SG01と深く係わる１群と、これらの溝に流れ込む南斜面上の溝群からなる。前者は層位ごとに検出された自然流路を含む水路で東西溝でありSD38・41～47があり層位的に検出され、後者は自然流路でSD31～36がある。以下前者の東西溝は上・中・下層に分け述べるとともに関連する貯水施設・木製桝についてふれる。

（１）溝SD38（第26図、PL7）

層位別ではSD38がもっとも新しく上層に、SD41・42・43とSD44がSD38の下位の中層にある。SD38は水平堆積された第３層（黄褐粒少量混黒色土）中にある。幅70、深さ30cmで埋土内に多量の黄褐色粘土粒を含む黒色砂質土で底部は船底形で薄い黒色砂層がある。谷地にそって小さく弯曲する。東が僅かに高く調査範囲7m間の高低差は16cmである。なお、中層溝の方向はSD38にそっている。

SD38は井戸SE08と結び付くと考えられる。直接結び付く遺構は未検出であったが井戸に接したSD38の末端は人頭大から拳大の円礫が2m範囲内にあり（集石SH02）、その一角に玉石で１段に組んだ左右両側壁からなっていた（第34図、PL7-2）。側壁部は東西2mにわたる。SH02は石を敷きつめるなど企画性は認められず、両側

壁と係わるものと思われるが、本来の構造は明らかにできなかった。恐らく井戸SE07・08とSD38間の簡易な踊場があってその残骸が集石SH02と思われる（第26図）。

出土遺物にはSD38から中国産青白磁梅瓶体部小片など中国産青磁細片があるが混入である。

（２）溝SD41～SD44（第26・27図、PL4・7）

中層は４層以下で南斜面を侵蝕して作られた谷地に水平堆積した層で４～７層からなる。SD38の下層となる６層（暗黒色土）７層（有機少量混黒色土）を切り、間層４層（黄褐粒を多量に混じえた黒色土）に覆われSD41・42・43・44がある。SD41はSD42が切る。SD41の幅は50cm深さ20cmである。SD41・42の埋土は黄褐粒を多量に混じえた黒色土でSD41は黒色がより濃い。SD38の北側に沿い、南ではSD38の下部に伸び、集石SH02（第26図）で終っている。出土遺物及び遺構の検出状況からSG01あるいはSE07の排水路であろう。後述の遺物が出土しており、遺構の検出状況から15世紀後半から16世紀代のものと思われる。

（３）溝SD45（第27・46・57・66・68・70図、PL7）

幅90cm、深さ40cm前後の断面Ｕ字形の東西溝で斜面に沿ってほぼ直線的に構築されている。その方向はSD47と一致するところから、SD47廃棄後の堆積土（10～13層）が完全に埋没する前に、SD47にそって規模を縮小してその上部に復元されたものであるが、貯水施設・木製桝は再構築されなかった。貯水池SG01と接する部分には構造物は認められなかったがSD45の東端―SG01寄りには、配石を伴う簡易な木組で側壁の一部としていたことにより、SG01から直接溝SD45に水を落としていたものと思われる。木組は有機質土を切って構築されSD45の埋土内にも一部にそれが認められる所から、常時SD45とSG01の間は冠水状態にあり、必要に応じて溝の入口部は簡易な修理を実施していたものと考えられる。

出土遺物は平安時代の土師器類（274～282）と中世の遺物に大別される。後者には在地の土師器皿（カワラケ）（283～294）、瓦質土器擂鉢（304・307・308）、能登産珠洲の甕・壺（297・299～301）擂鉢（302・303・305・306）、古瀬戸卸皿（298）と中国産青磁の皿（295）・碗（296）がある。青磁は古代末期の12世紀後半で画花文をもつ。卸皿と珠洲は13世紀代で中世前期の所産である。土師器皿や在地産擂鉢を含めた編年的検討は後述されるが、その検討からSD45の構築年代は14世紀後半代となる。このほか凹石（38・40）、砥石（39）、漆器（４・５）、小型の木製器類（33～35）と銭貨５点（10～14）がある。銭貨は溝底部出土でⅢBS11・12に比較的まとまって出土しており、溝祭祀に係わるものであろうし、一括投棄されたとすれば、そこに嘉泰通宝以降の新しい銭貨や明銭を含まない所からも、SD45の下限は下がっても15世紀前半となる。

（４）溝SD47、貯水施設SE11、木製桝SX03（第28・42・44・45・50・51・71～73図、PL6・7）

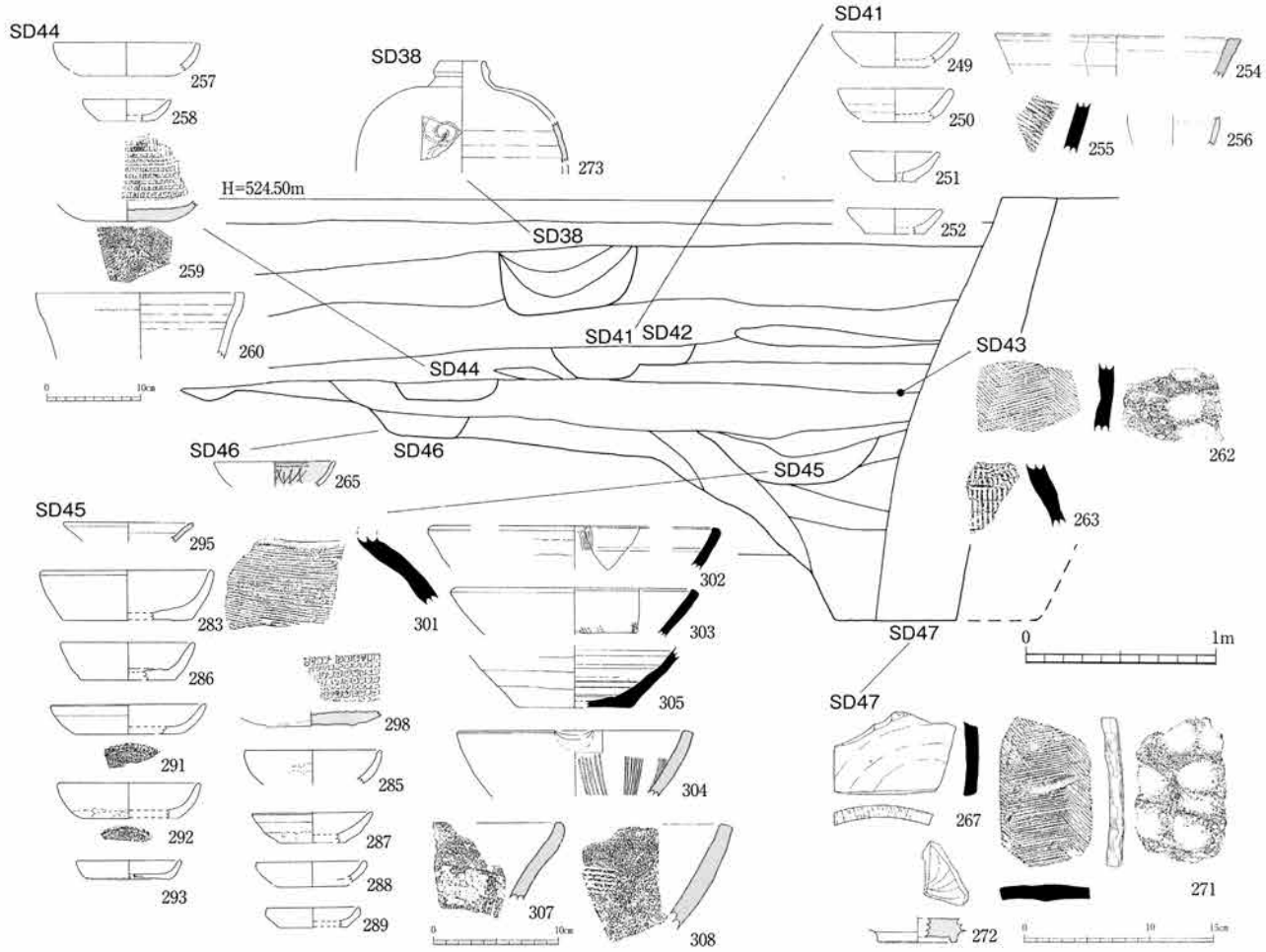
最下層に検出された溝（水路）を中心とした、上水道に関係した諸施設と思われる遺構である。地表から溝底までは2.5m前後である。調査区の境界にありトレンチ北側斜面は安全法面の確保もあって全掘できず不明部分を残すことになったが、ほぼ全体像は把握できたものと思われる。

溝SD47　幅は推定3m、深さは1m前後で断面は逆台形である。底部は泥炭層を掘り込んでいる。SE11、SX03を中に取り込んだ東西溝で直線的に構築されている。

SD47の底部にその主軸方向より北側にややそれた方向に主軸を持つ、板で組んだ木製桝SX03がある。平面を板４～５枚で組んでいる。長軸110、短辺35cmである。板（70）を一重または二重に立て、短辺に部材を入れ子状に入れて作った箱形の桝である。

出土遺物は平安時代の土師器甕（266）、珠洲擂鉢を利用した砥石（267）、桝の部材（70）、不明木製品（68）などがある。

貯水施設SE11　東西2.8m南北２mの平面長方形の貯水施設と考えられる遺構である。北壁は玉石を３段に



第９図　溝 SD38・41～47断面図と遺物出土状況図（1：40）
（土器・陶磁器1：8、1：6）

わたり乱石積みし、他壁は地山を掘り下げ壁としている。底部は湧水層である泥炭層上部まで掘り下げており、素掘り井戸 SE02・SE06、貯水池 SG01と共通する。壁高は南壁と北壁では60cm、東・西壁は低く40cmである。東壁沿いに多量の玉石が認められたが、それ自体では構造物とは認められず、東壁と貯水池 SG01間にある堤の構築材の一部をなすものと思われる。石組壁以外の壁（土手）の立ち上がりは垂直とはならず、とくに南壁はゆるやかに立ち上がる。明らかに井戸の壁とは異なる。壁高は残存高よりは高かったものと思われるが、壁構造が井戸と異なる点を考えると、それほど高くはない。また南壁は SD47の南壁と一致するところから、SD47と結び付いた貯水施設と思われる。底部は固い泥炭層を掘り下げてはいるものの水平ではない。底部は湧水層にあることから井戸の機能も兼ねていたものである。また、SG01との間は幅40cmほどの蛇行した深さ10cmの流水路跡があり、SG01から溝で SE11に導水されていたことを示すものである。

出土遺物は平安時代の土器類（268・269）以外に珠洲Ⅱ期の擂鉢（270）、龍泉窯青磁碗（272）、羽子板形木製品（61）、杭（59・60）と加工木製品（63・64・68・69）がある。よって SE11は珠洲Ⅱ期以降の年代を示している。また、SG01との接合部分、自然水路上部から珠洲Ⅱ期の壺片利用の砥石（271）がある。古代の須恵器甕片（163・219・503）や珠洲擂鉢片（267・459・504・505）を利用した砥石は珠洲としては硬質であり古代のものが多く、271も同様であり、自然流路の埋土の年代は珠洲Ⅱ期よりは新しいが、その年代を大きく下がるものでは

ないと考えることが自然である。よって、SG01とSE11との関係からSE11の年代は14世紀代中葉を下るものでないと思われる。

（５）溝SD46（第27・45図）

SG01西側の溝群のうちでも、もっとも南寄りで東西尾根北斜面裾部に蛇行しながら西流する溝で小河川跡と思われる。SD47によって切られた16層（茶褐色粘質土）を切り底部は地山層（黄色粘質土）を一部切る。幅70cm、深さ20cm前後である。埋土内から平安時代の黒色土器１点（265）が出土しSD46が今次調査で確認された唯一の古代遺構である。

４．素掘り井戸・区画溝

（１）素掘り井戸SE01・SE02（第29図、PL8）

調査区東南隅寄りの居住域Ⅲの一角に検出された。今次調査区では最高所にあり、SG01の南側掘り込みの肩の部分にあたるが直接の切り合い関係にはない。両井戸跡に近接して最近まで使用されていた溝SD22と、近接して農業用コンクリート製井戸があり、溝SD22によってSE01の西側肩部分をわずかに切り取っている。検出面は耕作土下の褐色粒をまじえた黒色土（Ⅲ層）である。SE01とSE02は切り合い関係にあり、SE02がSE01の東側肩部を切っており、SE02が新しい。

SE01　検出面の平面形は不整楕円形で長径135cmであるが、東井壁上部は崩落が著しい。埋土は８層で自然堆積である。井戸下部の井壁面は径70cmで安定しており、急角度で立ち上がり、底は９層（泥炭層）上部にある。以上からSE01上部は崩落もありはっきりしないが、径70cm、深さ150cmの隅丸方形で、上部は円錐状の素掘り井戸である。出土遺物はない。

SE02　井戸SE01東側を切って構築された。検出面で径170cmの平面円形の素掘り井戸である。井壁面は安定しており、崩落はみとめられない。深さ209cmであり検出面から150cmで泥炭層に達し、さらに約40cm下で径75cm深さ20cmに穿って方形の桝を作っている。

埋土は19層にわたるが堆積は大きく５段階である。底部から第１段階の最下層（16～19層）、第２段階の下層（８～15層）、第３段階の中－１層（６・７層）、第４段階の中－２層（５層）、第５段階の上層（１～４層）である。最下層は冠水状態での堆積であり、第２～第４段階は砂質土と粘質土の互層であるがグライ土層（11・13層）を含むなど常時冠水状態に近い堆積状態を示している。ここからは曲物（26～29）やオオムギ・イネ・ソバ・キビ・アサ・アブラナなどの栽培種やモモなどの有用植物などとともに、囲蛹やゴミムシ類の可能性のある昆虫類が出土し、生ゴミや木製品、さらに石臼（81）などの短期間の廃棄場所であった（第５章第１節）ものと思われる。

第５段階は凹地に多数の粉挽き臼（23・80・82～87）を投げ込んだもので堆積状況から人為的に数回にわたり埋め立てた可能性がある。なお、粉挽き臼下臼（23）は半壊したもので、SE08出土と接合しており、SE02が第５段階を迎えた時期にSE08が構築されたものと思われ、SE02とSE08の時間的前後関係を知る資料である。

出土遺物（第44・62・69図）　古代の灰釉陶器埦（207）、土師器皿ⅡA2（204・205）、中国産青磁輪花皿（206）、内耳土器A2（208）粉挽き臼（80・82～87）が第５段階の土層から、粉挽き臼（81）・曲物類（26～32）と自然木類が第２段階の土層から出土した。曲物（26、PL8-6）はつぶれた状態であったが底板から復元図が得られた。なお、出土した中国青磁が15世紀後半であり、埋没時期の上限が知りうる。

（２）素掘り井戸SE03・SE04・SE05（第30・44図、PL9）

調査区の最北端でもっとも低地にある井戸群である。居住域Ⅰとした掘立柱建物群の北限にあたり居住域Ⅰの

専用井戸であろう。南からの緩傾斜が井戸群の北側で傾斜が急に落ち込んで矢筒城跡南側の東西にはしる谷となるがその傾斜変更線にそって恐らく区画溝と思われる溝SD48があり、その延長線上に井戸SE10がある。SE03～SE05の３基はまとまり、やや北に離れてSE09とSE10がある。

３基の井戸は１～1.5m間隔でまとまり規模・構造・埋土の状態も共通性が強い。居住域Ⅰの鍛冶工房と係わりがあろう。平面形は検出面で円形、底部付近で壁も垂直となり平面形も長方形（SE03）、または、楕円形である。規模はSE03が145×125、SE04が100×85、SE05が100×95cm、底部はそれぞれ85×65、60×45、55×45cm、深さも115、108、92cmと浅く、泥炭層まではともに掘り下げない小型の素掘り井戸である。これは、南北方向の自然流路に近く、この程度の掘削でも必要な湧水が得られたからであろう。埋土はいずれも自然堆積の状況で、SE04の埋土土層からは土師器ⅢⅡC3（209）が出土しており埋没時期が中世末頃である。位置・規模・構造上の類似性から、確証はないが３基が順次掘られたものであろう。

（３）素掘り井戸SE06

遺構（第30・31図、PL8・9）　居住域Ⅱ中央南東寄りに検出された長径120、短径90、深さ340cmの素掘りの井戸跡である。検出当初は径300、深さ20cmの土坑SK1662としたが、下部に井戸跡の存在が明らかとなり、土坑とした埋土と井戸上部の埋土の堆積状況、とくに炭層の在り方から、独立した土坑ではなく、井戸の継続した堆積過程にあるものと判断した。したがって、井戸上部は崩落が激しいが検出面から70cm以下は井壁面が安定し、この部分の長径が125cmで以下粘質土を平面不正円形に急角度で、さらに固い泥炭層以下を平面長方形にほぼ直に150cm掘り下げ床面とし、その規模は長径110×80cmである。泥炭層は保水層のため県道地点をはじめ多くの井戸跡で泥炭層を掘り下げているが、本遺跡の下方のSE03などの井戸跡は浅くそこまで掘り下げておらず、本井戸までである。

土層の堆積と出土遺物（第31・43・63・65・68・71図）　井戸内の土層は18層確認されたが堆積状態からは大きく６層となる。堆積状況を復元的に見るならば、底部に黒色土を微量まじえたグライ化した砂質土（10層）が、ついで有機質土（９層）、黒色土をまじえた青灰色粘質土（８層）が順次水平に堆積している。９層から曲物底板（８）、８層からは平坦な玉石が、その上部から曲物（７・12）が出土している。また、８～10層のサンプリングによる種子鑑定ではタンポポやハコベなどの雑草類とともにアブラナ、ソバ、コムギ、ウリ、イネなどの栽培植物やトチノキ、オニグルミ、モモ、スモモ、キイチゴ、ノブドウなどの食用植物が出土している（第５章第１節）。表町遺跡の食生活の一端が分かるとともに、伴出しているハエ類の囲蛹やゴミムシ類の外骨格から植物残滓などの生ゴミが投棄されていた（第５章）もので、一定期間いわゆるゴミ捨て場の状態であったことが知られる。しかもこれらの粘質土はグライ化が激しく冠水状態の中で安定的に堆積したことを示すものであり、井壁の崩落も認められず井戸廃絶後それほど時間は経過しなかったものと思われる。しかし、７層より上位は粘質化が見られるもののグライ化はみとめられない。これは、井壁の構成土が泥炭層でないこととも関係があろう。３層は黒色を基調とした粘質土が５層（ａ～ｅ）にわたり水平堆積し、そこへ黄色粘土をまじえた土層（４・５・７層）が落ち込んだ状態で見られる。井壁の崩壊により堆積したもので、ここからは遺物は認められない。３層そのものは外部からの流れ込みによる堆積も認められるが、基本は水平堆積で順次堆積したと思われる。ここからは各種の遺物がある。下部６層から石臼片（89）と土師器皿の一部、３層からは茶臼（90）木製品（49・50）内耳土器（195～197・200～203）土師器皿（181～189）、中国産青磁皿（190）大窯Ⅰ期の天目（192）古瀬戸後期Ⅳ期の平碗（194）などがある。恐らく３層出土土器はさして時間差を置かずに投棄されたものであり、一括性が強い。

埋土上層は１・２層で、井戸の大半が埋没し深さ70cm程度の窪地となって、炭を含む第１層が堆積する。この

層はａ～ｄの４層に分層され遺物はどの層からも出土したが、特に1a層に集中していた。1c・ｄ層は自然堆積の状態を示すが1a・ｂ層は水平堆積で整地に伴い埋め立てたものと思われる。

第１層からは内耳鍋（174・198・199)、大窯Ⅰ期の端反皿（172・173・175)、大窯Ⅱ期の丸皿（176)、15世紀末から16世紀前半の青花皿（177・191）と青磁碗（179)、同じく13世紀代の画花文碗（180）があり、中国磁器及び国産陶器の年代はもっとも新しい大窯Ⅱ期であるところから、整地（堆積）時期は16世紀中葉前後（1530～1560年頃)、第２段階は大窯Ⅰ期（1480～1530年）（藤沢2007）のうちということになる。

以上井戸SE06の廃絶後の埋没時期は大きく３段階で第１段階は冠水状態の生ゴミを含むゴミ捨て場、第２段階は井戸上部の崩落がはじまった段階、そして第３段階は井戸の大半が埋まり窪地となった所へ、恐らく整地に伴う埋め立てで完全に消滅したというプロセスが考えられるのであり、出土陶磁器類から第２段階は大窯Ⅰ期、第３段階は大窯Ⅱ期とすることができよう。廃絶時期は第一段階の堆積状態に井壁の崩落が認められないことから、廃絶から第２段階への時間的経過はさして置いていないことが考えられるのでSE06の構築は井戸の使用期間を25年とすれば（宇野1989）15世紀中頃から後半にかけてと思われる。

出土遺物は土器と陶磁器、石製品と木製品がある。陶磁器は中国産青磁と青花、国産の古瀬戸と大窯期の瀬戸・美濃の陶器である。中国産磁器は大部分が15世紀末から16世紀前半期、国産陶器の多くもその幅の中に収まるが、龍泉窯系の鉢（178）や画花文皿（190）は13世紀代に遡る。土師器皿はすべて3e・６層（第二段階）出土でＡ型（181～187・189）とＢ型（188）がありＡ型は法量により細分される。極めて画一化されていて、内耳鍋とともに16世紀前後の基準資料となりうる。なお、3e・６層は大半が3e層出土であり、同時取り上げした結果であるが、これらに型式差は認められない。

内耳鍋は大半が3c・ｄ層出土であるが１層出土が３点ある（174・198・199)。しかし、後者は小片で資料としては心もとない。内耳鍋は基本的にはすべてA2型（201～203）である。202は底部立ち上がりにカキ目がある。なお、195は口縁部内面に一条の沈線をめぐらしており類例はない。また、口縁端を平坦に面取りされた例もある（196・198)。

石製品は６層から粉挽き臼と3c層から茶臼が出土し、木製品は曲物が下部（６・８・９層）から側板（９～13）や底板（７・８）も含め出土したが多くは細片である。また、３層下部から一部炭化した建築部材（49・56）など出土した。投棄されたものであろう。また８～10層から出土した自然遺物は、15世紀代中頃の多様な食生活の一端を示すとともに、当地方の栽培植物を知りうる上で興味深い。このほか、3c層から鋸歯状の刻目のある竹製品３点（132～134）と鋸歯状刻目を持たないもの１点が出土した。マダケ製であり用途は不明である。

（４）素掘り井戸 SE10・SE09、区画溝 SD48、集石 SH05（第32・44・63図、PL3・9）

井戸 SE10・溝 SD48・井戸 SE09・集石 SH05は調査区最北端で、今次調査区ではもっとも標高が低い地点にある。広い南北丘陵の東斜面と小沢に伴う小谷地からなる緩斜面は東西谷北斜面に接続し、この接続部分が傾斜変更線である。この小谷地は調査区北壁などのトレンチ調査では中世末期には埋没し、窪地状ではあるが谷地形ではなかった。これは居住域Ⅰ・Ⅱにも共通する（第32図セクション D--D′）。

溝 SD48　幅120、深さ30cmの東西溝で傾斜変更線に沿っている。谷斜面の肩にあたる個所である。SD48は調査の当初には東西谷に沿って続くと予想したが、谷地部でははっきりとしない。SE10の北井壁より中央寄りにSD48の北壁に沿って平石を用いて６段に及ぶ石積があり、背後に控えの栗石を少量入れていた。この石積は溝SD48の構築に際して井戸 SE10を廃棄（縮小）して作られたものである（PL9-5・6)。SD48の東側延長線上には集石 SH05があるが遺構としてのまとまりは認められない。なお、調査区北壁の土層図には、谷地形の落ち込みを示し調査時点では落ち込みの始まる肩部分が溝の西端と考え、SD48が SE10の点で直角に曲がると思われたが、

溝は未検出であった。SD48は「まち」の北端にあって外堀とされる東西谷（第４図）を画する区画溝と思われるが、現状ではこれ以上の追跡は困難である。ただし、区画溝と仮定すれば、「まち」の形成過程を知る資料となり得るもので今後の調査が期待される。

素掘り井戸 SE10　径230cmの平面円形ですり鉢状であるが、下部は垂直となる。SD48の構築と関係があろう。下部の径は約100×110cmで楕円形であり、深さは120cmである。出土遺物は粉挽き臼（91・92）と土師器皿（211・212）、内耳鍋（213）があり、粉挽き臼は下部、他は埋土上部出土である。

素掘り井戸 SE09　100×80cm深さ110cmの平面楕円形の素掘り井戸である。井壁下部は垂直である。出土遺物はない。

集石 SH05　南北の谷地形の埋没後に構築された、東西1.3、南北1.5m の範囲に人頭～拳大の安山岩自然礫四十数個を集めたものである。検出状況から17世紀以降のものであり、すでに現地形がこの頃には形成されていたことを示している。

第４章　成果と課題

第１節　出土遺物の検討

１．土師器皿

（１）性格と研究史

中世の武家社会では素焼きの土師器皿（カワラケ）は宴会などのハレの場で使用され、使用後は汚れを嫌い、土坑などに埋め立てられて再使用されることはなかった。浅野春樹氏によると東日本ではすでに13世紀と15世紀後半から16世紀の２時期に土師器皿の大量廃棄が認められるという。これは社会的緊張の高まりの中で誓約など土師器皿を用いた儀礼が盛んであったことを示すものである（浅野1991）。北信地域にあっても15～16世紀代の城館跡遺跡から土師器皿の出土がとくに多く認められることは、甲越の戦いなどに象徴されるように、戦国時代の時代相を良く示しているものと云える。土師器皿は極めて政治的・社会的な遺物であり、一般の集落遺跡から出土することは少ないと云ってよい。しかし、土師器皿は燈明皿にも用いられるため、一定量は一般集落遺跡でも保持されていた。つまり、土師器皿の出土量が多いほど、その遺跡が支配階層と関係が深いことを意味する。かように土師器皿は戦国時代が終わり、幕藩体制が確立して来ると急速に消滅し、神事などごく限られた場でしか使用されなくなる。したがって、土師器皿は在地産土器として数量が多く文献史料の少ない中世において、遺跡の年代を知る尺度としての役割と、支配階層の政治的・社会的動向や儀礼などを探る資料として研究が進められて来たものである。中世の土師器皿はロクロ成形（Ⅱ群）とロクロを使用しない手づくねの皿（Ⅰ群）に２大別される。東日本では13世紀代には京都系の手づくね皿が主体であったが鎌倉系のロクロ皿にとってかわる。長野県も同様であるが、諏訪地方など諏訪信仰圏の強い地域では手づくね皿が長らく主流であった（柳川2005）し、越後も手づくね皿の分布域に属していた（品田1999）。土師器皿は時代相を受けて、15世紀代の東日本では変化し小地域ごとに特徴を持つに至る。服部敬史氏によると古利根川を境に東西の小地域ごとに地域性を見せていた土師器皿は「椀形」と「外反皿形」という二種の形態の異なる土師器皿に集約分布することになり、後者の領域からは後北条氏や武田信玄など戦国大名が出現する地域で、北信地方もこれに属すると云う。こうした東西に器形の異なる土師器皿の出現は鎌倉型の「椀形」皿を止揚し、新たな東西分布域を出現させた契機として、後北条氏などの戦国大名の成長にあり「外反皿形」を主流としたと説く（服部1996）。こうした服部氏の見解は広域編年の研究成果でもあり、極めて示唆に富む論考である。

北信地方の土師器皿の編年研究は中島庄一（中島1993）、原明芳（原1991）、鋤柄俊夫（鋤柄1997）、服部敬史（服部1996）、市川隆之（市川1997・1999）氏らによって進められて来ている。その学史は市川氏がすでにふれている（市川1997）のでここでは省くが、各氏に共通する点は13世紀代の手づくね皿が14世紀代にロクロ皿へと変遷し、以降内弯口縁の皿形から外反形態と移行する。移行する時期については微妙に異なるが大局的には中島氏以来の伝統的考え方として共通する。とくに市川氏は器形とともに胎土や色調なども取り込むとともに、同じ在地産土器類である内耳鍋や擂鉢も含めた編年であり、この方法は鋤柄氏にはじまり（鋤柄1986）松本平の資料を用いて検討した野村氏（野村1990）や長野市栗田城資料を元にした原氏の編年方法（原1991）を踏襲するものである。勿論各氏とも広域流通品である陶磁器や珠洲との共伴から実年代を求める点は共通する。しかし、特に14世紀代以前については資料が極めて少なく大系的な編年には至っていない。とくに編年の定点となる資料の収集

と編年の基準を、対象が小型で変化に乏しいという制約の中でどう分かりやすく表示するかが課題である。

本稿では学史を踏まえて、こうした土師器皿の基本的な課題解決を目標とし報告する。ただし、分類（第２図）にあたって手づくね皿（Ⅰ群）は数量も少なく確実性に欠けるので、対象外とした。ロクロ皿（Ⅱ群）は調査地全域で出土した（PL10）。大半が破片であり、総点数の約30％、156点を資料化した。遺構別ではSH01、SE07、SE08、SG01、SE06、SE02、SE04、SE10、SK1667、SK1661、SF02、SF08、SB01などと複数の柱穴（ピット）、SD29、SD41、SD44、SD45である。しかし、すでに各遺構で述べたとおり複数で比較的安定した出土状態にある土師器皿はSE06、SF08、SD41、SD44、SD45出土のものであり、これらについて以下述べる。

なお、土師器皿の胎土にはＡとＢがある。胎土Ａは混入物を含まず明黄灰（白）色軟質、胎土Ｂは砂粒を多く含み硬質で濃褐色である。このほかＡ・Ｂ中間型のＣがある。

（２）溝SD41・SD44・SD45出土の土師器皿（第45・46図）

これらの溝はSD38、SD41～43、SD46、SD47と新旧関係にあるとともに、SH01、SE07、SE08、SE11、SG01とも関係することはすでに述べた。その結果新旧関係では溝はSD46がもっとも古く古代に属し、以下中世でSD47、SD45、SD44、SD41、SD42、SD43、SD38の順で新しくなる（第９図）。出土した中世の焼き物類はSD45では珠洲Ⅱ～Ⅲ期の壺・甕類（297・299～301）と擂鉢（302・303・305）と市川氏分類（市川2002）の瓦質土器擂鉢Ｂ類（304・308）とＤ類（307）があり、Ｄ類を含むので市川氏の編年に従えば14世紀末から15世紀前半となる。ただし、307は口縁端部が丸味を帯び水平とはならず、Ｂ類からＤ類への移行期のものと思われ類例は他にもある（463）。だとするならばその年代はＤ類に先行することになり、かりにB-D類とする。他方伴出資料に複数の珠洲がありⅡないしⅢ期であるところから、SD45出土土器類は在地産擂鉢Ｄ類より先行し14世紀後半とすることができよう。下層遺構SD47・SE11では波状の卸し目のある珠洲Ⅱ期の擂鉢（270）と細密・羽状の叩き目のある壺（271）と龍泉窯碗（272）が出土している。よってSD47の年代を13世紀代まで求めることも可能ではあるが、SD47と関係するSE11やSG01から13世紀代を代表する土師器皿Ⅰ群は極めて少ない（116）ことを考慮に入れると、14世紀代中葉までとなりSD45の年代もそれに続く年代となろう。

SD45からは土師器皿Ｂ型９点（283・284・286・288～293）とＡ型２点（285・287）でＢ型が主流である。ともに大・中・小がある。底径が口縁に比較して大きく器高が低い、いわゆる皿形である。胎土はＢが多い。器壁は厚く底部見込みにナデが多くに認められ、結果として底部内面の体部立ち上がりに稜線ができ（283など）底部に板目圧痕を残している（284など）。表町遺跡ではＢ型は全域に散見できるが量は多くなく（188・238・257・388など）、SD45に集中していることになり、SD45土師器皿一括性の裏付けとなる。底径が大きく見込みの強いナデとその結果生じた稜線は器壁の厚さと係わりがあり、板目痕が多い点もＢ型の属性である。ただし、見込みのナデと板目との関係は不明である。類例は長野市栗田城館遺跡SK12の一括資料がある（原1991）。これはほぼ同量の中・大形の土師器皿、古瀬戸花瓶と須恵質の在地産擂鉢Ｄ類からなり、SD45と同様の年代が与えられる。なお、ちなみにSD45底面から宋銭４点と南宋銭１点が出土している。後者はもっとも新しい嘉泰通宝（1201年初鋳）で明銭は含んでいない（第66図、表７）。

SD44はSD45の２層上層の第８層に、SD41・42は第６層中にそれぞれ構築されている。SD44埋土中からは土師器皿ⅡB1（257）とⅡA3（258）が、古瀬戸前期様式の卸皿（259）、土師器鉢（内耳鍋）（260）と共伴している。土師器皿はともにロクロナデされ、257は体部内面に斜め方向のヘラミガキ痕が認められ胎土はＢである。土師器鉢（内耳鍋）（260）は硬質でＤ類であり、外面に煤が付着している。出現期の内耳鍋の可能性が強い。遺構の検出状況と鉢Ｄ類から15世紀末頃となりSD45に続く土師器皿となる。

SD41はSD42に切られるが、さして時間差はないものと思われる。埋土中から土師器皿ⅡA2（249・250）、Ⅱ

A3（251）、ⅡC3（252）、ⅡD1（253）の５点がある。いずれも小片で全器形を知りえないが、傾向は読みとれる。ここではA-C型の小型品が多く、新たに底部を手持ちのヘラケズリされた大型のD類（253）が加わる。A-C型では小型品であることにも起因し、口縁部の立ち上がりが急となる椀形は見られない。伴出した中世焼物は珠洲甕細片（255）と瓦質擂鉢D類（254）であり遺構の検出状況と市川編年に従えばSD41出土の土師器皿の年代は16世紀代となろう。

最上層のSD38からは威信財である中国産青白磁の梅瓶（273）など輸入陶磁器類の細片で土師器皿の出土は認められなかったために、遺構からの検討は不可能である。ただし、SE07・SE08との関係が予想されるので、すでに求めた各溝の年代はこの点からも是認される。

（３）SF08出土の土師器皿（第44図）

厚さ10cm前後の焼土内から出土した、土師器皿ⅡA2（231）、ⅡA4（232）、ⅡD1（228・229）など５点がある。これらに大窯Ⅰ期の端反皿（233）と天目（234）がある。よって、土師器皿は15世紀末から16世紀前半代となる。SD41とほぼ同一時期でD型土師器皿が主要な器種の一部であるとともに小型のA型皿が共伴していることを示している。かつて服部氏はこの「外反皿形」を関東地方の中世土師器皿編年の最終段階に位置付け15世紀後半とした（服部1996）し市川氏も同様の見解を示した（市川1999）。この大型で胎土AのD型土師器皿は京都系手づくね土師器皿が主体の越後においてもロクロ成形土師器皿が加わるという（品田1999）。

上越市至徳寺遺跡は越後守護の迎賓館跡とも云われ、青磁酒海壺など当時の一級威信財などとともに関東管領などをもてなすための多量の土師器皿が出土している。SX004出土の土師器皿D型である（鶴巻2003 836～838）。焼成の良い手持ちケズリで調整され、善光寺平との関係も覗えるが15世紀後半とされている。なお、D型は底部を手持ちヘラケズリされる（228・365）がむしろ糸切痕のままのものが多い。その多くが胎土Aであり15世紀から16世紀代前半の土師器皿として注視しなければならない。

（４）SE06出土の土師器皿（第43図）

井戸埋土3e・６層から９点の土師器皿が出土した。大半は3e層出土であるが一部は６層にも及び、分離できないものもあったため一括して取り上げた。いずれも小破片である。ⅡA2（181・183）、ⅡA3（182・185・186）、ⅡA4（189）、ⅡB4（188）でいずれも小型である。胎土はAが多い。188の体部下半には手持ちケズリが認められる以外は、小型で椀形のA型が多く規格性が強い。これは土師器皿に一括性が強く、井戸SE06の埋没第２段階にさして時間差を経ることなく埋まったことを意味している。よって、第３層出土遺物とも時間差は小さく一括性が強いと考えられるので、大窯Ⅰ期の示す年代である16世紀前後の資料とすることができよう。ただし、大窯Ⅰ期の天目（192）がより上位の3a層出土であることを重視すれば、土師器皿を含む3e層はそれよりも古いことになる。大窯Ⅰ期の瀬戸・美濃とともに出土した一括性の強い土師器皿は長野市松原遺跡県道地点のSD1・２がある（中殿1993）。ここの土師器皿は極めて規格性が強く赤焼きの胎土BでAは含んでいないが、いずれも表町分類に近い形態であり、SE06の土師器皿は松原遺跡例よりは先行する可能性があり、両者の内耳鍋にもその傾向が認められそうである。よって、SE06の土師器皿は松原遺跡SD1・２に先行する16世紀に近い年代が与えられるものと思われる。

（５）今後の課題

表町遺跡出土の土師器皿の変遷について述べてきた。それは土師器皿BからA、そしてDへの変遷である。これは服部氏や市川氏の変遷観に近いが、土師器皿AはBからDへと変遷する中で存続している点であり器高の深い椀形から背の低いB型とは異なる小皿化である。今後はこの点の変遷過程とB型からD型への変遷の契機も併せて明らかにすることが望まれる。

表町遺跡の土師器皿は同一遺跡で層位的に重複した小型の溝と井戸跡など資料に恵まれていた。しかしながら、土師器皿の持つ多量使用（製作）多量廃棄資料ではなく、破片からの検討で資料不足は否めない。加えて珠洲との関係で割り出された在地産擂鉢の年代比定の妥当性もさらに検証されねばならないであろう。

２．内耳鍋

（１）研究小史

内耳鍋は長野県内の中世後半の遺跡で土師器皿・粉挽き臼とともに良く見かける、いわば御三家とも呼ぶべき煮炊き用の鍋である。直径30cm前後でバケツ形、内面に一対の釣手用である環状の耳を付け、底は体部に比較して薄く、その体部外面には多量の煤が付着しているが、内面にはほとんどオコゲなどの残存物は認められない。耳にも釣る際に生じる磨耗痕は一般には認められない。しかし、長野市松原遺跡県道地点の溝SD1・２では明らかに磨耗痕があり、破損した耳にかわり、新たに開けられた孔にも磨耗が認められることから、釣手によって下げられて使用されていたものとしてよいが、むしろこれらは例外である。

内耳鍋（土鍋）を多角的、広域的に検討した服部敬史氏は東日本の後期の中世社会では煮炊き用の道具として鉄鍋との併用説を示した。服部氏は高価で入手が困難な鉄鍋の代替として内耳土鍋を製作し使用するとともに少量の鉄鍋を使用したとの指摘（服部1998）は内耳鍋の実態に照らした見解と思われる。具体的な使用法についてはふれていないが、戦前の農村社会では、煮炊き用の鉄鍋とともに煎るための焙烙が備えられていたことを前提としたものであろう。内耳鍋の使用法は重要な検討課題である。

県内の内耳鍋の編年研究は小林秀夫氏に始まり（1982）その後、野村一寿（1990）、服部敬史（1997・1998）そして市川隆之（1997・1999）の諸氏と引き継がれ今日に至っている。大規模発掘によって資料の増加があり、編年観などに見解の違いはあるものの、基本的には小林説の補説あるいは発展的見解と考えてよい。小林氏は内耳鍋にはＡ型（鍋型）、Ｂ型（浅鍋型）、Ｃ型（焙烙型）の３種があり、Ａ型は口縁部が「く」の字形に折れる、いわゆる外反口縁から、頸部のくびれが目立たなくなる直立口縁へと推移するとともに器高も低くなりＣ型へと推移することを示した。この編年観は基本的には野村・市川氏らの県内研究者に引継がれて今日に至っている。

野村氏は内耳鍋の口縁部内面の調整「回転横ナデ」を重視し調整によって生じた凹線の回数によって分類を試み、編年の基準としている（野村1980）。しかし、いわば調整技法の相異を編年に用いようとする試みは考古学的な検討方法として正論ではあるが、氏の云う調整回数が時間差を表すのか、その根拠が示されていないため説得力を欠くとともに、根本的に内耳鍋の基本的成形に係わる点で、用語も含めて誤解がありこの点は後述する。

市川氏は小林・野村・服部各氏や小山岳夫氏の小林説への批判（小山1986）も含めて長野盆地南部の内耳鍋について検討を加えている（市川1999）。とくに重視した論点をまとめるならば、小林氏の形態論、野村氏の成形技法論と小山氏が小林氏の型式分類は同時存在のバリエーションという主張に対する見解である。これについては服部氏の先にもふれた鉄鍋・土鍋同時使用という見解と石川条里遺跡や松原遺跡出土の丸底の内耳鍋の存在から鉄鍋からの影響を常時内耳鍋は受けているために器形上のバラエティーが生じたとし、具体的にいくつかの例を示しているが、一方で小林氏の形態論を受け継ぎながら一方では鉄鍋の影響から器形のバラエティーが増すという自己矛盾的で論点が分かりにくくなってしまっているように思える。

市川氏の編年論では口縁部内面の調整痕は凹凸のある調整（氏のＢ類）から次第に平滑となり、体部との境目（頸部）にある突出も鋭いもの（C1・C2）から鈍くなり（C3）、やがて棒で押さえるだけのものとなる（Ｄ）というものである。C1～C3類の検討は今後に残しているが成形技法が器形に与えた点を指摘していることは、大きく評価できる。ただし、Ｃ類の頸部内面の屈曲部を鉄鍋の影響としている点については後段で検討する。

次に鉄鍋が内耳鍋成立の契機となったという点についてふれておきたい。これも内耳鍋成立時の影響（小林1982・野村1990）と常時影響説（服部1997・1998、市川1999）とに二分される。中世後期（14世紀代）に突然と東日本の社会にあらわれた内耳鍋についての評価は服部氏の論文に詳しいが、その母体となった在地産須恵器や瓦質土器については鋤柄俊夫氏（鋤柄1985）以来、原明芳氏の指摘（1991）がある程度で研究が進展していない。貯蔵具である須恵器を土師器に転用して煮炊き具として用いられるのか、根本的な問題とともに中世前期の在地産土器の実態が不明であるからである。

さて小林氏分類でＢ類とした外傾の強い内耳鍋についてふれておきたい。これは恐らく、松原遺跡などで出土している丸底の内耳鍋にあたるものと思われ、まさに鉄鍋そのものの模倣品とすべきものであり、類例が石川条里・前山田遺跡などで増加しつつある（市川1999）。したがって内耳鍋の分類にあたっても、平底と丸底という器形上の相異と鉄鍋の影響を顕著に残すという点では小林氏の分類の妥当性が示されるものであり、Ａ型（平底の鍋型）、Ｂ型（丸底の浅鍋型）、Ｃ型（焙烙型）の３種とし、以下諸属性に従って細分すべきであり本稿もこれに従っている。ただし、Ｃ型は後述のとおり焙烙と17世紀代には機能分化し系譜を異にすることも予想され、内耳鍋と区別されるべきと思われるが、今回はＣ型（焙烙）を使用しておく。

内耳鍋の成形についてふれる。かつて佐原真氏はＭ・フォスターの定義を利用して「ロクロ」とは「回転運動によって生じた遠心力を利用して粘土塊から器の形を挽き出す装置」であり、これに「台上で粘土紐を積み上げるなどしてあらかたの形を作り『遠心力を利用して細部を仕上げる』装置をも」加えた（佐原1983・1986）。つまり、ロクロは広義の回転台の一種ではあるが遠心力を生み出す装置である点で、畿内の中期弥生土器などに用いられる回転台とは区別しているのである。よって須恵器などの細部調整はロクロの遠心力を利用しているもので、ロクロナデやカキ目などがある。「回転ヨコナデ」（野村1990）や「回転ナデ」（市川1999）はロクロナデであって学史上はふさわしい用語ではない。「ヨコナデ」もまた口縁部の調整に遠心力を利用しない手法（藤沢1943・佐原1986）で体部等の類似調整痕は「横方向のハケ」などと使用すべきである。

内耳鍋の成形はロクロ台の上で粘土紐（帯）を積み上げて形を成形する。この際に台上には離れ砂を敷いて、成形後に台から離れやすくする。ほとんどの広い平底の内耳鍋では底に砂が付着している。これは底部を器壁よりも薄く仕上げる工夫でもある。使用時に火熱を早く受けるためと思われる。またそれ故に体部から口縁部にかけての成形は粘土紐（帯）を積み上げた後、体部の最終調整はナデなど頸部から口縁部にかけてのみロクロナデ（巻きまたは積み上げロクロ法）される。ロクロナデが全面に及ばない点は広い平底の成形と深い係わりがある。そして最後は環状の耳（内耳）を貼り付けて完了する。

（２）表町遺跡出土の内耳鍋（第39～44・47・51・52図）

表町遺跡から出土した内耳鍋は破片総数で約828点あり、そのうち器形の分かるものの大半は図示し、その総数は58点であり、とくに検討の対象となる口縁部から頸部にかけての点数は34点である。内耳鍋は遺跡の全域から出土したがSH01とその周辺遺構、井戸跡とその周辺部から多く出土した。すでにふれてきたとおり本遺跡の内耳鍋は小林秀夫氏分類のＡ型（鍋型）であり、Ｂ・Ｃ型はない。Ａ型は「く」の字形となる外反口縁Ａ1型と直立ぎみに立ち上がるＡ2型がある（第２図）。これらは市川氏の先述の分類（市川1999）とは正確には一致しないが、Ａ2型は市川氏のＣ・Ｄ型を含む。Ａ型はさらに口縁部から頸部（口辺部）の調整方法の相異からａ・ｂの２種がある。いずれも器形にその結果が表現される。ａ種はハケ・ナデ・オサエ・ケズリなどの体部成形ののちにロクロナデをする２段調整、ｂ種はａ種同様の体部成形ののちに口縁部をロクロ成形したのち頸部外面を棒で沈線を描く（104・151）か、ヘラ（コテ）でナデル（99・123・153）、あるいは頸部を強くナデ（124・317）る３段調整がある。これらはいずれもロクロの回転を利用しており、その意味ではａ種の中にはロクロナデを口

縁端部にかけて連続して調整した場合にも結果としてｂ種に類似した調整痕が残される（103）。しかし、例えば棒で描く沈線などは小破片では全周するか部分調整であるものかは判断できない。よってａ・ｂはさらに類例を求めて判断されねばならないので、ここでは仮案として使用している。また、口縁部のみならず体部をロクロナデで調整した以下の例がある。体部下半内面（101）同じく外面（115）、体部から口縁の内面全域（151）、内外面全面（201）、外面全面（474）である。またカキ目（113・202）もロクロ利用に伴う調整痕である。ただし、体部内面のロクロナデは砂底成形によるためであろうか、十分な遠心力を生み出すには至っておらず回転痕にバラツキがある。ロクロナデは内耳鍋の内外面に凹凸のある調整痕を残すがとくに口縁部では著しい。よって、内耳鍋の調整は器面全域を対象として観察されねばならないし、一面でとらえられるべきものではない。

口辺部の２段調整ａはA1では８例（108・474・501など）、A2では20例（101～103、201～203・213・315など）、３段調整ｂはA1では１例（151）、A2では６例（99・104・123・124・153・317）となる（PL12）。

頸部成形と器形とは直接の関係は指摘できそうにない。つまり、口縁部の器面調整から内耳鍋の器形変化を読み取ることは現段階では困難であるが、器面調整によって生じる僅かな器形変化は読み取れるはずであり、編年研究に活用できると考えられる。頸部調整ｂはａよりも手数が多く、それだけに丁寧な成形でｂがａより先行すると思われるからであるが、今後の課題である。

表町遺跡の内耳鍋には原則として胎土内に雲母を含んでいる。同じ在地産の土師器皿には殆んど含んでない。明らかに意図的に含ませたものか、雲母を含んだ粘土を素材として使用されたかのいずれかである。表町遺跡の所在する鳥居川流域は火山岩地帯であって雲母を含む深成岩類は原則として上赤塩の円礫層中の少量の礫にしか産出しない（中条1980）から雲母を含んだ粘土はない。つまり、内耳鍋の製作は雲母を混和材として用いるか、雲母を含んだ粘土を素材としていることになる。ただし、雲母の混入量がごく微量であるし、含まないものもある（151）のでむしろ後者ということになる。内耳鍋の製作に際しては少なくとも遺跡周辺の雲母を含んだ粘土を素材として搬入していることを意味する。市川隆之氏の教示によれば内耳鍋の製作には工人集団が移動してあたったというのである。だとするならば、工人集団は素材の搬入も含めて各地を移動生産と販売したことになる。上流に広域の花崗岩地帯をかかえる犀川起源の粘土か盆地南部の閃緑岩地帯起源の粘土を素材としている可能性が強い。かつて、坪井良平氏は河内鋳物師集団が梵鐘を移動生産したことを説いた（坪井1976）し、市川氏もまた粉挽き臼についても同様の見解を示した（市川1999）。中世後半の社会における物作りの解明に、その製作技術とともに素材の問題も課題となってこよう。

次に内耳鍋の年代についてである。表町遺跡で年代の知り得る資料はSE06出土の内耳鍋である。すでに遺構の項で述べたとおりSE06廃絶後の埋積途中で廃棄されたもので埋没は第２段階にあたり、大窯Ⅰ期つまり15世紀末頃から16世紀前半かそれ以前となるA1型（200）とA2型（198・201～203）がある。口縁部成形はいずれも２段成形でありロクロ成形が顕著に認められる（201・202）。長野市松原遺跡県道地点SD1・SD2出土の内耳鍋はA2型では大窯Ⅰ期の丸皿が伴出しておりほぼ16世紀前半のものである（中殿1993）。A2型は市川氏のC2類にほぼ該当する。市川氏はC2類を16世紀中頃と想定しているがA2型は16世紀前葉としてとらえておきたい。

松原遺跡SD1・SD2出土の内耳鍋は土師器皿とともに編年の基礎資料となり得る善光寺平では数少ない好資料である。溝SD1・SD2に一括廃棄された土器類で数量も多く伴出した大窯Ⅰ期の小皿によって15世紀末から16世紀前半の年代が与えられ、市川氏も活用されている。内耳鍋はB2型と鉄鍋模倣の丸底内耳鍋に少量のＣ型内耳鍋（焙烙）の３種があり、以下の点で重要である。１点目は鉄鍋の影響についてである。市川氏は丸底内耳鍋の存在によって、鉄鍋は内耳鍋成立当初のみならず、以降も内耳鍋に影響を与え、それが頸部内面の突出や口縁内面の凹凸に見られるとした。鉄鍋の常時影響は服部氏も主張されているが、少なくとも市川氏の指摘はロクロの

成形技法に係わるものであって、鉄鍋の器形を意図的に模倣したものとは思えない。内耳鍋の基本的推移はすでに多くの研究者によって指摘されているとおり「く」の字形口縁から直立口縁、そして頸部のくびれ部の消滅である。頸部内面の突出や器面の凹凸はそうした内耳鍋の変化の中におけるロクロ技術の変化と理解すべきものと思われ、鉄鍋模倣とは直接関係はない。内耳鍋と丸底内耳鍋は少なくとも松原遺跡SD1・SD2では両者が独立した器種として並行して使用されているからである。

２点目はB2型内耳鍋とＣ型内耳鍋（焙烙）の共存である。Ｃ型内耳鍋は小林秀夫氏以来内耳鍋の器高の減少に伴って17世紀代に成立してきたという内耳鍋発展説とも云うべき考え方が支配的である（小林1982）。これに対して内耳鍋と焙烙は機能が異なる別系統とする服部敬史氏の考え方がある（服部1998）。松原遺跡例はまさに服部説を実証するものであり、16世紀前半、おそくとも中葉には焙烙が成立し、両者が並行して使用されていたことになる。

松原遺跡の内耳B2型の内耳には耳に使用による磨滅痕が著しく、欠損した耳の位置に円孔を穿孔し、それにも磨滅痕が著しい。従来耳に磨滅痕が殆んど認められないところから、耳の役割は吊ることを目的としたものではないという指摘もあったが、それを否定するものである。内耳鍋の底部は体部に比較して薄く作られている。また、外面には多量の煤が例外なく付着しているが内面には「オコゲ」などの付着物は認められないところから、鍋としての機能を否定する研究者もいたが、大きくて薄手の底部、吊るための耳、器外面における煤の付着は、鍋の機能を否定するものではない。

飯綱町芋川氏館跡第４次調査では内耳鍋と焙烙が層位的に出土した。内耳鍋は背が低く器高12cmで頸部のくびれがなく口縁から底部まで内弯する器形でA3型とする。口縁部は強くロクロナデされ、以下はユビオサエされるかカキ目を残すもので器壁は薄い。焙烙は口縁から底部まで丁寧にロクロナデされている。なお、ちなみに焙烙は胎土内に雲母を含んでいない。内耳鍋は、芋川氏館跡廃絶後の東堀埋土で、1637年創建の妙福寺塔頭と寺伝にある福正寺整地土下部と、福正寺の西側流路跡SD07出土の内耳鍋A3型、さらに善光寺地震（1847）で大打撃を受けた福正寺跡の整地層（第一検出面）出土の焙烙（内耳鍋Ｃ）である。東堀埋土は17世紀中頃、第一検出面は18世紀末頃であるからSD07は17世紀後半から18世紀代となる（笹澤・原田2014）。つまり内耳鍋A3型は17世紀中葉、内耳鍋Ｃ型は18世紀末頃のものとなる。内耳鍋の終焉は16世紀代とも思われ焙烙へ変化する（小林1982）と云われていたが服部氏が指摘したとおり、内耳鍋から焙烙への変化ではなく、内耳鍋の機能分化であり両者の併存（服部1998）は松原遺跡SD1・２にも見られ（中殿1993）、16世紀前半には内耳鍋A2型と焙烙が同時使用されていたことになる。

内耳鍋は中世考古学資料ではもっとも一般的資料でありながら、ナゾの多い資料であり多くの先学の努力にも拘らず研究が遅れている。すでに問題点にもふれてきたところであるが、研究視点が焦点化されていない所にひとつの原因があると考える。ひとつは前述したとおり内耳鍋が「く」の字形口縁から直立口縁、そして頸部のくびれの消滅、器高の減少化、とそれに対応した器形の変化である。製作技術ではロクロの使用であり、他の成形技法とともに、とくにロクロ技術に直視した検討が望まれる。

よって、内耳鍋は「く」の字形口縁からくびれの消滅、器高の減少化という形態変化の枠の中で検討することを基本とし鉄鍋の影響とする考え方はとるべきではないと考える。器形の変化には道具としての用途がある。内面にオコゲなどが見られないことも事実であるが例外的に痕跡が認められる（201）。耳の磨耗痕も含めて用途の検討も望まれる。中世・近世の食生活を考える上でも重要である。また、内耳鍋の成形技法は素材も含めて検討することによって生産体制も明らかになろう。

本遺跡で内耳鍋の年代を推定する根拠となる資料はSE06出土資料と芋川氏館跡の諸資料であり、他遺跡出土

資料も加えて地域ごとの検討がまず求められるものである。

３．擂鉢・鉢・甕・壺・風呂・香炉（第37～39・41・42・45～48・50～52図、口絵４、PL10・11）

能登の珠洲と在地産の瓦質土器や須恵質土器（須恵器）がある。前者は広域流通品であり東北信地域に広く分布する。表町遺跡では壺・甕と擂鉢があるが越前や瀬戸、常滑の貯蔵具は確認されていない。珠洲は吉岡編年（吉岡1994）のⅡ期からⅥ期までである。壺・甕類は体部の破片で器種名さえおぼつかないが器外面の叩目からおよその時期は知りうる。細密な打圧密度は珠洲Ⅱ～Ⅲ期であり（96・127・164・262・301・483・484・487）、綾杉文はおよそⅡ期（271）またはⅢ期（486・488）である。打圧密度が粗であるⅣ期以降の珠洲（95・97・126・162）は前者とほぼ同数である。この傾向は珠洲の擂鉢でも同様でⅡ期（467・468）Ⅲ期（302・303・466）、ⅢないしⅣ期（157・469・470）ⅤないしⅥ期（380・435・436・461・502）である。とともに珠洲の時期比定は小片が多く厳密性を欠くものもあるが、大略の傾向は知り得る。つまり、珠洲は壺・甕や擂鉢を伝統的に導入し生活用品としていたと考えられるのである。

つぎに、在地産の擂鉢・鉢についてふれる。これらは珠洲の補完として、珠洲焼を模して地元で生産されたものであり、鋤柄俊夫氏によって最初に指摘され（1986）、原明芳氏（1991）を経て市川隆之氏（2002）によって、伴出する陶磁器類とともに土師器皿や内耳土器の編年樹立の基準資料として多角的に検討されている。市川氏によれば、在地産擂鉢の器形は珠洲に近いが成形技法と胎土に大きな違いがあり、珠洲の模倣を続けた結果、器形は珠洲と同様の変遷をたどれるとした。ただし、その模倣が成立期ではなく、普及期のものとした（市川2002）。これは伴出する陶磁器類との年代観よりも古くなるためと思われる。何故普及期とするかの説明が十分ではないが、口縁端部の断面形が三角形（外傾）をＡ類、方頭をＢ類、内傾をＣ類、水平をＤ類、円頭をＥ類、その他をＦ類とし、Ａ類は軟質の須恵器、Ｂ類を硬質の須恵質、Ｃ類を瓦質土器、Ｄ類は土師質としＡ類を13世紀から14世紀前半、Ｂ類を14世紀中葉から後半、Ｃ・Ｄ類を14世紀末から15世紀前半としたものである。本稿も市川氏の分類を用いるが「須恵質」は日本考古学の土器分類上は還元炎焼成によるもので、須恵器の範疇として考え、古代の須恵器と区別する上で中世須恵器とするが未だ生産実態が不明であるので、便宜的に「須恵質」も用いている。

表町遺跡で出土した中世須恵器を含む瓦質土器などの在地産土器は中世須恵器では擂鉢Ｂ類（86）、Ｃ類（508）、瓦質土器では擂鉢Ｂ類（304・308）、Ｄ類（98・254・307・338・465）土師器（瓦質）では擂鉢Ｄ類（382・464）がある。ただし、瓦質土器と須恵器には識別困難のものもあり、厳格には市川氏分類にあてはまらないものもある。鉢では中世須恵器（170）、土師器（260）の２点があり、後者は擂鉢Ｄ類と共通するところから内耳鍋の祖形とも考えられる。また、古代須恵器とは異なる硬質の中世須恵器甕（30）がある。長野市豊野町中ノ丁採集の甕に似る硬質で赤紫色の発色を器面の一部にとどめる（笹澤・佐藤・市村ほか2001）。器形がともに不明のため存在のみとし、今後の資料増加に期待しておく。

珠洲及び在地産鉢・擂鉢類は遺跡全域から出土しているが、SD45などの溝跡とその周辺部に多い。

このほか、土師器皿胎土Ａと同様の胎土である土師器香炉（62）と瓦質土器の風呂（375）がある。前者は市川隆之氏の分析があり（市川1999）、後者は唐草文が体部下半に付せられており、茶の湯の風習と係わり、町内では芋川氏館跡から出土している（笹澤2003）。ともに威信財である。

４．石製品

表町遺跡で出土した石製品は、縄文時代に属する石器類を除けば大多数が中世後期を前後するものである。

生活用具と信仰・祭祀に係わるものとに大別される。前者には粉挽き臼・茶臼・石鉢・凹石・叩石・砥石があり後者には五輪塔・板碑がある。縄文時代と異なり鉄製品など金属器が普及し、石製品は限定した領域の道具として普及した。

石製品総数は129点で内訳は粉挽き臼37、茶臼12、石鉢７、凹石17、叩石３、砥石21、五輪塔26、板碑６点である（表５）。

遺跡内の出土状況は五輪塔・板碑類は、井戸跡や集石SH01に集中し、居住域からの出土は現代の溝SD29出土の地輪１点を除き認められなかった。五輪塔など信仰・祭祀遺物は墓域または信仰遺構に設置されるべきものであり、石臼類は保管も含めた使用場所にあるべきものである。その意味では製造場所でもない限り、特定地域に集中していることの意味は、転用か廃棄かを十分考慮に入れておかなければならない。

大型石製品は廃棄にあたり、新たに土坑を穿って埋めこむか、井戸跡など凹地に廃棄したものであろう。表町遺跡にみる大型石製品の出土状態は後者を意味する。ただし、石臼は廃棄にあたり、民俗伝承に見る「霊ぬき」行為の結果、石臼を破壊したのではないかという三輪茂雄氏の説（三輪1978）を踏襲した、小山岳夫氏の佐久市大井城跡（黒岩城跡）の石臼の分析結果もある（小山1986）。反面、石臼の破損は構造上の性格からくる自然破損で「素朴な信仰形態」に基づく人為的破損を否定した市川隆之氏の説もある（市川1999）。素材・使用状況・破損状態など多角的検討が必要である。

（１）粉挽き臼（第53～56・62・63・65図、PL14）

上臼と下臼がある。穀類から粉を製粉する道具であるが、製粉のみならず、豆腐や味噌、さらに金鉱山での製粉や火薬の製造など多岐にわたる。食生活の変遷や産業史を知る重要な道具であるが、意外に起源や型式学上の変遷など考古学上の研究は立ち遅れている。それは形態差が乏しい上に、現在でも使用例があり研究対象として積極的に取り組まれては来なかったことによる。また、出土量が多いとは云え、確実に年代を知りうる資料に恵まれて来なかったことにも起因する。本報告でも、基本資料を提示することを第一義的とした。

粉挽き臼は上臼26、下臼11の計37点である。すべて破片であるが下臼１点が異なる井戸SE08とSE02から半壊状態で出土し、復元されたものが完品としては唯一である（23）。残存状態では70％が上臼２、下臼１、50％が上臼４、下臼３、以下が上臼21、下臼６で上・下臼はともに残存率は極めて低いことになる。これは復元された個体を含むので、50％以下がさらに多くなる。つまり、粉挽き臼はほとんど破損したために廃棄されたことになる。

表町遺跡県道調査地点でも、井戸を中心に28点の粉挽き臼が出土している。上臼は14点でうち11点が、下臼も14点のうち13点がともに残存率50％以下である（中野2009）。

芋川氏館跡でも同様で、堀跡または堀内の石列跡から、上臼５、下臼７の総数12点が出土し８点までが50％以下である（笹澤2003・2004）。佐久市金井城跡や長野市小滝・北之脇など中世とされる諸遺跡出土の粉挽き臼にも共通する。上臼は凹状のくぼみ部・供給孔・挽き孔、下臼は芯棒孔穿孔を容易とするための、底部の深い抉りなども、臼の強度を弱体化させている。つまり、粉挽き臼の破損は臼の持つ構造に起因するのであり、人為的破壊とするにはそれを証明する根拠を明示されねばならない。

上臼は穀物を入れるくぼみ（皿）部と、下臼に固定された芯棒を受ける芯棒受孔、穀物を下臼すり面に流し込む補給孔、上臼の側面に回転用の挽き木を設定するための挽き木孔がある。芯棒受は臼の中心に設置され一般には貫通させていない。補給孔はくぼみ部の一方に片寄らせ、挽き木孔は多くが平面長方形である。芯棒受孔は芯棒回転に伴う磨滅痕が、挽き木孔は挽き木固定による磨滅が認められる。

くぼみ部は上縁とくぼみからなり、立ち上がり部、上縁端ともに別々に丁寧にハツリ成形される。この結果、

底部と立ち上がり部の接線は浅く沈線となる（２・４・７・20・25)。上縁端部は断面方形で多くに手ずれ痕がある。側面はタテあるいはナナメ方向に丁寧にハツル。

すり面にはすり目（溝）が刻まれる。目は10数目を１単位（分画）に５～８分画され、供給孔からすり面に対象物がスムーズに流れるように物くばりと呼ぶ凹部がある。すり目と物くばりは確認可能な資料はいずれも手の運動法則にそった左（反時計）まわりである（佐原1959、三輪1978)。分画数は６分画が11例（１・２・18・80など)、５分画が２例（83・91）で、６分画が圧倒的に多く下臼も同様である（11・14・23など)。県道地点でも確認できる粉挽き臼は、上・下臼合わせて推定も含め６分画は14例、４ないし５分画が１例、芋川氏館跡では６例中８分画・４分画各１で他は６分画で本例と同一の傾向を示している。６分画の粉挽き臼が長野県に多い点はすでに三輪氏によって指摘されていて（三輪1979)、地域的特徴と云える。

下臼は上臼の凹面状のすり面に対応した凸面状のすり面と、中央の芯棒孔に固定された芯棒に、上臼の芯棒受を載せ、上臼を回転させ、すり面から製粉を落下させる。このため、芯棒固定のため貫通させた孔の下部は円錐形として、そこにクサビを入れて固定したものであり、芯棒孔設定にあたり、底部をあらくハツっているが１例のみ非貫通の下臼がある（26)。これは後に凹石として再利用されたものである。

粉挽き臼の遺構別点数は、集石 SH01 13、石組井戸 SE08 10、貯水池 SG01 1、素掘り井戸 SE02 8、SE03 1、SE06 2、SE10 2である。SH01では集石内またはその下部からの出土で、集石の一部をなしている（１～11・14・124)。SE08では西井壁崩落の石群（21）北井壁控積（22）東井壁崩落石群（23・25）に見るようにSE08の石積の控積として他の石製品類とともに再利用されたものである。したがってSH01～SG01出土の石臼のうちSE08埋土出土の石臼５点（17～20・24）は、控積用石材の４例（21～23・25）より新しく、SH01出土石臼よりは古いことになる。また、下臼23は近隣する井戸SE02埋土上部（第３層）出土であり、SE02がほとんど埋没した窪地に同じ上層から出土した７点（80・82～87）とともに投げ込まれたものであり、SE08構築がSE02埋没後であることを示している。またSE02では埋土中層から１点の上臼（81）がある。曲物など植物質遺物とともに出土している。他に井戸SE06では上臼（89）が第６層から出土している。別章の検討のとおり第６層は15世紀後半から16世紀前後が考えられ、本遺跡で年代が想定しうる例である。黒灰色輝石安山岩製で軟質の地元産の岩石を素材としているが、破損が多く不明な点が多い。器面調整は丁寧である。すり面はふくみ高が高く分画数は不明であるが目の間隔は大きい。目の並びが不規則であり再目立てによるものか不明である。より古式の目の在り方かと思われ、今後の資料を待ちたい。また、3c層から茶臼下臼（90）があり、これも16世紀前後の基準資料となる。

以上から石臼類の出土状態、遺構間の接合関係、各遺構の層位関係、遺構の構築と廃棄状況などから、粉挽き臼の時間的前後関係は概ね以下のとおりとなる。

1500年			1650年		1700年
①	②	③	④	⑤	
SE06	SE02上層	SE08井壁控積	SE08埋土	SH01	
(89)	(80・82～87)	(21～23・25)	(17～20・24)	(1～11・14)	

しかしながら、これらの粉挽き臼は遺構の前後関係にそって配置したもので、臼類の変遷を明示していることにはならない。なぜならば、より長い時間幅で編年を組む縄文時代であれば型式変化を示して編年が可能となろうが、短い時間幅の中で編年が要求される歴史考古学資料では、いくつかの課題も付加して検討されねばならない。ひとつは型式的変遷が150年前後の時間帯の中で追求が可能かという点と、石臼の製作時から廃棄に至る時間幅をどう編年に取り込むかである。石臼は土器類より長期間使用される上に目立て直しによる再利用もあるか

ら、これらを前提とした変遷観が必要となる。しかし、資料数や完形品が少ないこともあって、石臼の器形上の変化追求には限界があり、ここでは石臼の機能面の心臓部であるすり面の目の構造についてふれてみる。

すり面は上・下臼一体で考えられるので、資料数が多ければそれだけ信頼性も得られる。ただし、使用による磨耗や目立て直しなど製作時とは異なる場合が予想されるのでこの点も含んでおかなければならない。

目は主溝・副溝からなり、10数本単位で１区画となり、目幅の相異と副溝の本数・区画数、さらにすり面の直径、ふくみ高によってすり面の構造が決まって来る。すり面の径は側辺が直立する限り石臼の径と一致する。本資料では、すり面と石臼の径が一致し、加えて直径が最小で28.4cm（92）、最大で35cm（24）で32cmを中心に30～33cmの間に大多数が収まる。すり面のふくみも1.4（27）から4.5cm（83）とバラツキはあるが計測可能な資料ではその数値の中にある。ふくみ、つまりすり面の曲線のバラツキは破片からの復元値に基づくものであるだけに今後の課題ではあるが、一定の範囲に収まる。

目幅１cm以下をＡ、１～２cmをＢ、２cm以上をＣとして、遺構ごとにまとめる（表２）とＣは各遺構に数こそ少ないものの分布する。Ａは遺構が新しくなるにつれて多くなるのに対して、Ｂは逆の傾向にある。ただし、SH01では逆の結果を示しているが、SH01はより時間幅の広い遺物を含むからである。目幅の広狭による新旧の判断は、さらに機能面や民俗例も加えた検討が必要であるが、ひとつの目安として有効であろう。

目幅	A 1cm以下	B 1～2cm	C 2cm以上	不明	計
SE06			1（89）		1
SE02（8～15層）		1（81）			1
〃　（1～4層）	2（80・85）	4（83・84・86・87）	1（82）		7
SE08（部材）	1（21）	1（23）	1（22）	1（25）	4
SE08（埋土）	5（17～20・24）				5
SH01	3（2・4・6）	6（1・3・8・10・11・14）	1（7）	2（5・9）	12
計	11	12	4	3	30

表２　目幅の広狭差による粉挽き臼の遺構別数　（注）目幅の距離は概数　（　）は図番号

（２）茶臼（第54・55・63・65図12・13・15・16・90・125～127、PL14）

上臼３、下臼９計12点がある。遺構別ではSH01 6、SE08 1、SX01 1、SE06 1と居住域Ⅰ、同Ⅱから１と表採が１であり、表町遺跡内では県道地点（中野2009）で７、旧学校の水田跡で２、矢筒城館跡で１（牟礼村教委1981、矢野1998）、が出土または表採されている。

上臼３点のうち２点は図化可能でSH01（12）　SE08（16）である。12は小さな欠損はあるものの完存している。茶臼は挽き木孔が対面に一個ずつあり装飾凸帯をもつ。２段に四辺が弧状となる２段重弧状四角文を浮彫りするもの（12、PL14）と、恐らく弧状とはならない有段の重四角形文（16）がある。６分画（12）と８分画（16）である。後者は目の在り方からこぼれ目型（三輪1978）であるが、目間隔にバラツキがあり、目立て直しの結果であろう。器面成形はタテハツリでともに丁寧であり、くぼみには黒漆が塗彩される。県道地点では７点の茶臼上臼が出土し、６点に挽き木孔があり、３段重四角形文（中野2009-262）、２段重四角形文（同－266）、２段重弧状四角形文（同－264）である。旧学校水田出土のものは有段の重四角形文をもつ。芋川氏館跡では３

段重四角形文の上臼がある（笹澤2003-1）。本例（12）は県道地点264と同一であるが、今のところ類例は他に知られていない。

町外では長野市北之脇・前山田（市川1999）石川条里遺跡（市川1997）に２段重四角形文を装飾凸帯とする上臼が各１点ずつ認められる。佐久市大井城跡（小山1991）上越市子安遺跡（戸根2004）でも認められており、飯田市南の原遺跡には重菱形文がある（三輪1978）。重四角形文を装飾とする茶臼は東北信などを中心にかなり広い分布域を示すようであり、少なくとも飯田地域とは異なるエリアとなる。

下臼は９点がある。器形を示せる例は３点（13・15・90）で、他は受け皿部の破片（125～127）など小片である。凸形のすり面と抹茶を受ける受け皿からなり、中央には芯棒を固定するための芯棒孔が穿孔される（13・15・90）。孔の上部は芯棒を差し込むために円筒形に、下部はつめ木を入れるために円錐形としている。円筒部分は芯棒を受けて磨滅している。受け皿の端部は弱く欠損する（125～127）。すり面はいずれも８分画であり細く直線的な目を配しているが、15は目に重複や乱れがある所から目立て直しされた結果であろう。成形は上臼同様に丁寧である。

素材は輝石安山岩（15）、角閃石輝石安山岩（12）以外は、在地の黒灰色輝石安山岩である。後者は前二者に比較して軟質で加工しやすいが、茶臼の作成にあたっては多孔質の素材を明らかに避けている。輝石安山岩は飯縄火山岩にもあるので黒灰色輝石安山岩製とともに在地生産品であろうが、角閃石輝石安山岩は長野市西部の郷路石で県道地点の上臼にも１点認められる（中野2009-262）。

茶臼は碾茶を抹茶にする道具であり、茶の湯の風習は武家や寺院など中世社会でも上流階級の間で盛んとなったものである（三輪1978）。それだけに、茶臼の製作には粉挽き臼とは異なり、丁寧さと装飾が加わった。挽き木孔の装飾凸帯や黒漆塗り（16）はそれの現われである。つまり、装飾性の強い茶臼の存在は、それを保持していた社会に上級階層の存在を示すものと云ってよい。表町遺跡では矢筒城館跡を含め本地点で12、県道地点で９点をはじめ合計24点の茶臼が出土しており、数の多さからも本遺跡が単なる農村遺跡でないことを示している。

なお上臼の側面は一般にタテハツリであるが、県道地点の上臼は郷路石製で横方向に丁寧にハツって仕上げており、成形技法の点でも地元産と異なる所から素材の類似点も含めれば12とともに郷路石産地域（長野市西長野）からの搬入品とすべきである。

（３）石鉢・凹石・叩石

素材を全面または一部を加工したくぼみを道具として使用した石器である。全面加工し一定の器形とした石鉢と、一部加工または自然石にくぼみのある凹石がある。後者は小型の凹石Ａと大型の凹石Ｂがある。Ａは縄文時代の凹石と、Ｂは石皿と共通する特徴を持つが系譜は明らかでない。また、石鉢は「容器」としての深さを前提として作られている一方、多くの凹石Ａは縄文時代のものと同様に使用の結果生じたものと、当初からくぼみを意図して作られたものとがあるが、実際には識別がしにくい。

一般に臼は搗臼と挽臼があり、主として前者は脱穀、後者は製粉として用いられ、機能と器形は明らかに異なる。問題は農業用収穫具以外も含めて、搗臼をどう理解し、把握するかにある。それは木製や土製品の補完器種もあろう。搗臼は穀類を搗き脱穀するための道具であれば、当初より目的に応じた道具作りを行うはずであり、くぼみとその在り方が機能（用途）とどう結びつくか検討がなされて、器種名が決定されることになる。この点の分析が不十分であり本稿では石鉢とし、「搗臼」の名称は使用していない。今後の課題としておく。

こうした前提に立脚して決定した器種は、石鉢７、凹石17と叩石２点である。叩石は凹石と一対の石器である。遺構別では、SH01がもっとも多く、石鉢５、凹石12、SE08から石鉢１、凹石１、SD45から凹石２であり大半はSH01とその周辺に集中していたことになり、石製品全体と同様の傾向にある。

石鉢（第57・65図33～35、128～131）　郷路石製の１点（130）を除けば加工しやすい軟質の黒灰色輝石安山岩を素材として、ノミでハツリながら加工している。素材の入手が容易で、黒色で多孔質の石材を使用している。このことは素材入手・加工の容易性とともに多孔質であっても使用できる道具であったことを示しており、石鉢の用途を考える上で重要である。口径は推定で20～35cm、器高は20cm前後で台が付く。片口（128・131）で台付が多かったが、県道地点では無台もある。町内では矢筒城館跡（牟礼村教委1981）、芋川氏館跡（笹澤2003）鐘山遺跡（百瀬1984）などに類例がある。

凹石（第56～58・63・64図26・28～32・38・40～47・93・95、PL14）　凹部を道具として使用した石器で、小型の凹石Ａ（28・29・38・40・44～46）と大形の凹石Ｂ（26・41～43・47）があり、後者には片口（47）や規模の大きいカール状の凹部のある例（26・41～43）もあり、Ａの凹部と異なりＡとＢでは機能上の相異があるものと思われる。なお、26は粉挽き臼の下臼を再利用している。素材は黒灰色輝石安山岩または輝石安山岩製で在地石材を利用しているが、片口付きの凹石は鬢山産の角閃石輝石安山岩製で製作地は異なる。

叩石（第64図115・116・118、PL15）　長さ12～16cm径5cmの円筒形の円礫の先端に敲打・磨滅痕がある。ホルンフェルス（115）硬めの輝石安山岩（116）石英閃緑岩（118）製で、凹石とセットで使用されたものと思われる。凹石の量から云って出土点数が少ない点は注目しなければならない。

（４）砥石（第57・60・64図36・37・39・72・98～113・117、PL15）

携帯用のＡ（36・37・98・99・101～111・113）、固定用のＢ（100・112）とＣ（39・72・117）がある。総数は21点でうちＡが16、Ｂが２、Ｃが３点である。出土地点別ではSH01、SG01内とその周辺部（居住域Ⅲ）に集中していた。Ａは断面四角形で長方体の３ないし４面を砥石として利用する。砥石面は使用により弯曲し、使用痕は斜方向に残る。紐をとおすための穴は本資料には認められない。端部に切断痕がある（36・106）。鎌用の砥石であり、すべて緑色凝灰岩製である。

Ｂは板状の直方体で砥石面が平坦で弯状とはならない。緑色凝灰岩製であるがＡより細粒である。ヤリガンナなどの仕上げ砥石であろうか。

Ｃは不定形の安山岩製の自然礫に鉄製刃器の先端研磨痕のあるもの（39・72）と石英質砂岩製の荒砥用砥石（117）がある。

砥石Ａ・Ｂの素材が裾花凝灰岩層で産出する緑色凝灰岩であり、長野盆地西縁部に広く分布する。その産出地は不明であるが、緑色凝灰岩製の砥石を生産する工人集団が盆地西縁部に存在していたことは確かである。長野盆地東縁部の北之脇遺跡など中世遺跡で出土する砥石の大部分が頁岩などで緑色凝灰岩製は少ない（市川1999）ところを見ると、盆地の西と東で素材の異なる砥石の製作集団が存在していたものと思われる。

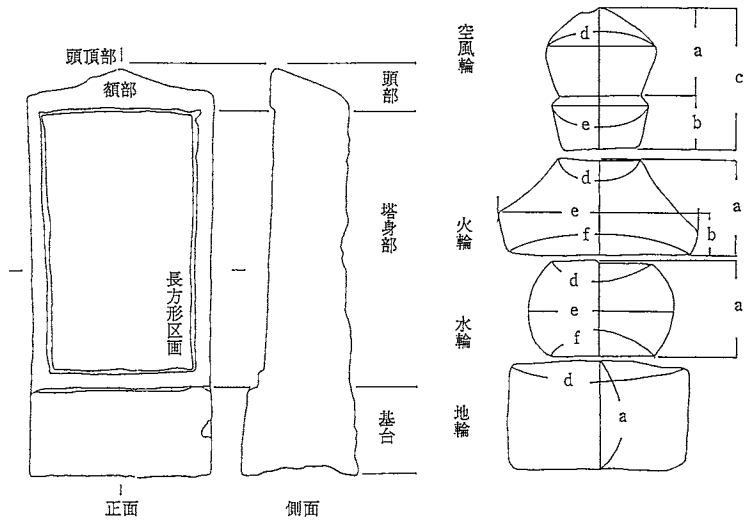
砥石の主体はＡであり、県道地点でも同様である。砥石Ａが鎌用砥石とするならば、表町遺跡の住人の多くが農業に係わっていたことを示すことになろう。砥石Ａの機能面の追及も今後の課題となる。

（５）板碑（第10・61図、PL13）

器形・成形・素材　完形品４点と上半部欠損の２点の計６点がある。石組井戸SE08東井壁崩落石群（74・79）、SE08埋土下部（78）のSE08関連の３点と集石SH01中央（76）同下部（75・77）の３点である。出土状態については他の出土遺物とともに遺構のところで分析されるが、板碑のみで見るならば、SE08構築部材として用いられたもの（74・79）とSH01の集石の一部となるもの（75～77）とに大別される。

このように６点の板碑は出土状態に差はあるものの、素材・器形・法量・成形技法などが極めてよく似る、いわゆる定形化された「善光寺平型板碑」（小山2000）であり、屋根形の頭部と塔身部・基台が一体化されている。頭部は正面が三角形の上部とそれに続く額部、外傾し中軸線の左右を切妻の屋根形とした頭頂部からなる。武蔵

型に見られた二条沈線は省略されている。塔身部は直方体で正面・両側面と背面からなる。正面は長方形に一段掘り下げ、この空間を長方形区画と呼び、ここに信仰する主尊や年紀・供養者名・造立趣旨を陰刻するか墨書をする。これらの銘の一部が省略されたり、「無銘」となっているものもある。この場合は「無銘」板碑ではなく、墨書が消失した「銘不明の板碑」と呼ばなくてはならない。本遺跡の６点の板碑はこれに属する。基台部は長方体で塔身部より一段高い。かつて独立して塔身が基台上に置かれていた両者が結合した表れである。



第10図　板碑（左）（1：8）・五輪塔（右）（1：12）の部分名称

素材はすべて黒灰色輝石安山岩で輝石安山岩とともに飯縄火山に起因する火山岩である。法量は器高が37.7（74）、38.2（76）、38.5（79）、39.4cm（75）で差は1.7cmである。塔身幅は最小17.0（77・79）、最大17.5cm（76）で、差は僅かに0.5cmである。総数が少ないために一般化するには資料の増加が望まれるが本資料に限定した場合に、法量的には極めて規格化されていると見てよい。

成形技法にも強い規格性が認められる。その工程を復元的にみた場合に、長方体にあら削りされた素材を、ハツリ成形する。ハツリ手法は方向から、右下がりをＡ、左下がりをＢ、両者併用をＡ＋Ｂ、タテをＣとする。正面ではハツリＡ（75・79）、Ｂ（74）、Ａ＋Ｂ（左側右下がり・右側左下がり）（76）、正面頭部はＡ（74・75）Ｂ（76）である。長方形区画内はすべてハツリＡで区画内上端にハツリＣを加える（76）。区画内のハツリは中央が窪むようにカール状とし、軽い研磨を加える（74・76・79）。基台正面はＢである。頭頂部は中軸線を境として左右でハツリの方向を変える（74・75）か、一定方向（76・79）の２種がある。側面は右下がりであり、２段とする例（79の右側面）もあるが、上・下端の一方向あるいは両端で90度方向を変える。

以上、正面・頭頂部と側面は器面を平坦とすべく丁寧にハツルが、背面は第一次成形段階の粗い大割りで生じた高い部分を、正面などの成形具よりも大型のノミなどで大雑把にハツル程度であり、第一次成形時の粗割り痕を残している。ハツリはＡ（右下がり）（74・77）か、結果として「ハ」の字状となるハツリ（75・76・78・79）である。底部は第一次の粗割りで窪めた部分を部分的にハツル程度で粗割り部分を多く残している。この窪みは設置にあたり、粘土などを詰めた固定用の工夫であろうか。

以上から板碑は正面・頭頂部・側面を丁寧に、背面と底部は粗割のままか、ごく一部を成形するだけである。正面から見える部分を特に入念に成形していることは「見映え」もあろうが、それ以上にこれらが、墨書などで銘を入れるなど、重要な機能を担っていたことを暗示する。しかし、本例に見る区画外の空間は極めて狭く、銘（墨書）を入れるものとは考えられない。むしろ前型式からのレリックの可能性が強く、本遺跡にみる板碑の主要部は長方形区画内で、ここに主尊や供養者名などが墨書きされたものであろう。なお、今回は成形痕の観察は可能な限りおこない、ハツリ技法にＡ手法（右下がり）の多いことが観察できた。しかし、工具まで想定した分析には至らなかった。素材も含めた成形技法の分析によって今後は工人集団の存在と系譜、さらに板碑の流通

形態などが明らかにされるであろう。

善光寺平型板碑の年代　板碑は死者の追善や生前の逆修供養のために作られた中世の石製卒塔婆－供養塔である。武蔵地方で産出する緑泥片岩を素材とし、三角形とした頭部に２重の沈線を刻み、その下方に信仰する主尊・造塔の趣旨・供養者や紀年銘などを刻む（千々和1976）。

北信地方における板碑研究は途についたばかりであり、小山丈夫氏によって進められている（小山1992・2000）。氏によれば、初期の板碑は武蔵地方からの搬入品で、運搬の便を考えて小型品であった。武蔵型と呼ぶもので、頭部に２条の沈線を刻み台石などに差し込むための凸型のソケット（柄）を備えたものであったが、やがて在地の安山岩を素材とした板碑が作られる。「善光寺平型板碑」と呼び、その初現は、応永十五年（1408）の年号を刻む長野市後町十念寺板碑からで15世紀代には出現していた。この初期の善光寺平型板碑は16世紀代には台石と塔身が一体化し、高さも40cm前後に統一され形式化し量産化されたが、天文二十二年（1553）を最後に姿を消し、その理由を甲越の戦いに求めた。この戦いが北信地域の供養の姿を変えたというものである。

この小山氏の研究成果を基本に本遺跡出土の板碑の年代を想定してみたい。まず、初源期の善光寺平型板碑をＡ型、塔身と台石から組み合わさる板碑をＢ型、塔身と台石が一体化した板碑をＣ型とするならば、Ａ型は善光寺大本願明照殿地点出土の「永□四年」銘（宿野2008）、飯綱町旧世尊庵跡（永享二年）、長野市福生院板碑（永享十一年）がある。福生院板碑は上部を欠損し、旧世尊庵跡板碑は蓮華台にコンクリートで固定されており台が当初からのものか不明であるが、塔身頭部の三角形の作り出し１条の沈線や明照殿地点の塔身下部のソケットは明らかに武蔵型板碑を模倣したものである。

Ｂ型板碑は明照殿地点の永正三年（1506）銘板碑や長野市上松十王庵天文二十年（1551）銘板碑であり、紀年銘による限りＡ型より後出でＣ型と同年代である。Ｃ型板碑は小山氏によれば16世紀初頭に出現する（小山2000）とされているが明照殿地点出土の文明十六年（1484）銘板碑によって、15世紀後半まで遡ることが明らかとなった。型式学的にはＡ→Ｂ→Ｃが考えられるが、紀年銘の実態からつまりＡ→Ｂ・Ｃへの変化は２条沈線の喪失と不要となった頭部と額部分の縮小は長方形区画の重要視化の表れである。器形と銘文の長方形区画内への集中に伴い、銘文の一部省略と言う形で板碑の形式化・定形化をまねき、善光寺平板碑Ｃ型の成立となった。この経過は例えば初期の善光寺平型板碑である飯綱町旧世尊庵跡板碑は区画外や側面も広くとり碑面を丁寧に研磨して、そこに供養者名などを連記した。だからこそ、側面も含めた板碑製作であったが、板碑供養の増加に伴いＣ型板碑出現の契機となったものと思われる。

本遺跡の板碑は塔頂部と塔身及び側面は丁寧にハツリ成形され、粗い背面の成形とは異なる。とくに長方形区画内の碑面成形は一部に研磨を加えるなど、重視して仕上げられており、ここに供養者名などが墨書されていたものと思われる。陰刻と墨書の相違が依頼者（供養者）の社会的地位や経済上の優劣に起因するものか、工人層との関係、さらに五輪塔など供養塔を含めた信仰に起因するものなのか、中世史の動向の中で多角的に検討されねばならない。しかし、少なくとも善光寺平型板碑Ｃ型が15世紀後半には在地の信仰形態として成立し、小山氏が主張するように16世紀半ばには消滅したとするならば、本遺跡出土の板碑群もその年代の中に収まることになる。Ａ型板碑である旧世尊庵跡板碑の素材が表町板碑群と同一石材であることから旧世尊庵跡板碑の造立年である永享二年（1430）には飯縄火山岩を素材とした板碑製作が行われていたことになり表町遺跡の板碑群が旧世尊庵跡板碑と同一系統の工人の延長上にあったものと云えよう。だからと云って、本板碑群が15世紀代前葉にまで遡るという確証はなく上限は明照殿文明十六年板碑の示す15世紀後半までであろう。

板碑は五輪塔とともに墓地に設置された供養塔であるという前提に立てば、すでにSE08・SH01で検討したとおり、表町遺跡の板碑群は本来の設置場所から人為的に動かされ、SE08構築の部材として再利用されたもので

ある。SH01はSE08の崩落後の堆積土（２層）中に構築されており、SH01出土の板碑（75～77）はSE08出土の板碑（74・78・79）より層位学的には後出的となるが、前段で指摘したとおり、型式学的には同一型式に属するとともに当初の設置場所から移動しており両者に年代差を認めることは出来ない。この点は五輪塔についても指摘できる所であり、SE08とSH01出土の板碑の示す年代は、それぞれの遺構の年代を示すものではない。しかしながら、五輪塔を含めSH01とSE08板碑の再移動後の年代の上限はSE08、下限はSH01の年代が与えられる。SE08は肥前陶磁編年のⅡ期の17世紀前半代以前に廃棄されているので、板碑群が五輪塔とともに墓地に設置された時期はそれより以前の生産期間の15世紀後半から16世紀半ばの間、SE08の構築は墓地での使用期間を差し引いた16世紀中葉かそれ以降ということになる。ただし、刻銘から墨書銘という記銘方法の変遷がＣ型板碑の成立から大きく時間的な隔たりはなかったということが前提となる。善光寺平板碑の下限は小山氏の主張どおり天文二十二年（1553）頃だとするならば表町遺跡のＣ型板碑群の製作年代はおそくとも15世紀末から16世紀代前半ということになろう。かように板碑は製作年を示す銘が失われても空間的・年代的に限定される善光寺平型板碑Ｃ型は文字資料を補完する資料として有効であり、その意味では板碑の編年研究は今後強く望まれる。それはひいては善光寺平の葬送儀礼や社会意識の動向を知る資料としても貴重となる。

（６）五輪塔（第10・59・60図、PL13・14）

基本的には中世以降の墓地などに建立された石造の供養塔で方・円・三角・半月・団形の五輪からなり、地・水・火・風・空の宇宙の五大を表現している。北信地方ではほとんどが、上部の風・空輪を一石で作った四石五輪である。古い型式では大型品が多いが中世後半には小型品が量産される。梵字や造立趣旨、造立年月日などを刻んだ銘のあるものと「無銘」とがある。しかし、板碑同様に墨書された五輪塔もあり（中野市教委1994）、本来は「無銘」ではなく墨書銘があったものと思われる。

近年大規模な開発に伴う発掘調査によって、ようやく五輪塔の考古学的調査が試みられつつある。坂城町観音平経塚（若林1999）、小布施町玄照寺跡（中島・土屋1997）、中野市がまん淵（西山中世墓地）（檀原ほか1994・檀原2010）、清水山古窯跡（中島1994、檀原2010）、対面所遺跡（中島1998）、長野市松原遺跡（上田2000）、善光寺大本願明照殿地点（宿野2008）などがある。これらには、正確な実測図の作成と素材も含めた計測と観察結果が、遺構・遺跡の性格付けも含めて、五輪塔の編年的研究を試みているが、根拠が曖昧なものもあり十分な成果はあがっていない。研究方法を含め抜本的検討に立脚した五輪塔の編年研究が望まれる。本遺跡の五輪塔群の報告もそうした検討化への一資料として提示するものである。

中世の五輪塔は多量に出土するために、五輪原とか五輪林など地名としても残されることがある。町内でも東黒川の五輪山はその例であるし、御所之入の墓地には多量の五輪塔を見ることができる。しかしながら、４石で組み合わされる五輪塔は、長い年月の間に倒壊し銘も失われ、加えて多数にのぼる所から、組合せはおろか正面や上下すら不明のものが大多数である。各輪または各輪の型（形態）と素材との関係は、型式学的検討上、重要な属性であるとともに、一括性が求められる資料の分析が必要となる。

本遺跡出土の五輪塔は空風輪９、火輪８、水輪５、地輪４の計26点である。いずれもSH01、SE07・SE08の部材またはそれらの周辺部から出土し、板碑と同様に供養塔として墓域に設置されたのち石組井戸の部材などとして運搬されて来たもので、製作時から時間的経過を経ているうえ、各輪の数にバラツキが生じている。つまり、本遺跡の五輪塔は五輪塔の製作と旧墓地への設置－SE07の石組の構築と崩落－SE08石組の構築と崩落－埋没－SH01の形成という動きの中で捉えられる。よって五輪塔の示す年代が即、各遺構の年代を示すものではない。素材別では、輝石安山岩製が、水輪２点（58・71）と地輪１点（53）で総数26点のうち11％で、他は黒灰色輝石安山岩製である。両素材の大きな違いは、ともに飯縄火山岩に属するものであっても、生成条件の相違に起因す

るところから、見た目にも識別可能なものが多い。輝石安山岩は白っぽくて緻密・重いのに対して、黒灰色輝石安山岩は黒っぽく多孔質・軟質で加工しやすい反面、破損しやすい。こうした素材の属性の違いは中世の石製品製作に際し強く反映されている。五輪塔の場合形態上より細部加工が要求される空風輪や火輪に、加工しやすい黒灰色輝石安山岩のみを多用するのである。加えて、地輪や水輪に輝石安山岩の使用例が加わっていることは、重量があり安定性を求めた結果とも思われる。このように表町遺跡の五輪塔群と素材の関係が他遺跡でも該当するのか今後見極めていかなければならない。

各輪は以下のとおり分類をする。空風輪は半月形の風輪と団形の空輪が一体化されたものでくびれ部以下の形状には大きな相違が認められないので、空輪が分類の基準となる。なお、空風輪の細部呼称は空輪を最大径で上下に二分し上部を空輪頭部と頭頂部、以下を空輪下部とし、くびれ部以下を風輪とする。

空風輪Ａ型（48・49・59～61）空輪頭部、下部、風輪の各長さがほぼ等しいもの。つまり各部位が器高の３等分に相当する。成形は丁寧にハツリ、方向は原則として各部位では一定方向であり、部位ごとに方向を変え空輪最大径に稜がつく。くびれ部は横方向にハツリ、この部分を強調する例（59）もある。

空風輪Ｂ型（63～65）空輪にまるみを持たせてハツルために最大径に稜ができない。頭頂部は突出させると思われるが、欠損させ凹ませている。底部に接合用の柄（63）や凹部（64・65）があり後述する。

空風輪Ｃ型（62）器高が低く頭部を大きく半球状とするための空輪下部は小さい。

空風輪Ａ・Ｂ・Ｃの３種それぞれは丁寧に細かく方向を変えてハツられる。Ａ型では上部（頭頂部）を左下がり（ハツリＢ）、下部を右下がり（ハツリＡ）または縦方向（ハツリＣ）と、結果として最大径に稜ができる。ただし、60は両部ともタテ方向であるが下部を直線とし、意図的に稜を作り出している。空風輪Ｂ・Ｃ型は上部から下部にかけて同一方向にハツリ、頭頂部に丸みを帯びさせ、結果として稜ができない。逆に云えば稜を作らず円形とするために同一方向にハツッタとも云える。くびれ部はヨコ方向のハツリを入れた例（62・63・65）と斜めまたは縦方向に小さくハツリ、くびれ部の稜を造り出している。以上、当然のことながら成形方法（技法）と形態は密接に結びついている。

火輪Ａ型（55・56・67・68）軒の高さが器高の1/3以下のものである。頂部に箱形の凹部がある。

火輪Ｂ型（50～52）器高に対して軒の高さが1/3以上を超えるもの。火輪は屋根部と軒部からなり軒高の高さ（位置）によってＡとＢとした。器高や底辺の幅によっても火輪の器形が異なるが、軒の位置が屋根や軒下の形を規定して来るからであり、屋根スロープの反り具合や軒が直か内傾かは両者にあり、分類基準の要素とはしない。屋根は寄棟で、ハツリで成形されるが研磨が加わるなど変化がある。ひとつは、４面が同一方向であるが軒先（屋根下部）を帯状（51・68）または一部（52）を研磨しそれが軒部に及び、全面（52）あるいは、隅部分（51・55・68）などがある。屋根下部の研磨は斜面に弯曲を与えている。底部は中央を円形にハツリ周辺または四隅を研磨する（51・55・56）。水輪との接着面を意図するとともに軒の反りを表現するためのものである。このようにＡとＢでは、成形方法は共通しているがＢでは高く隣り合う軒面２面を研磨し、１面は光沢が出るほどであり、この面が火輪の正面であろう。

水輪・地輪　成形は器形とともに差がなく型式細分はしていない。資料が少ない点と、細分することで検討の方向性が失われることをさけるためである。水輪の上面は平面楕円形で横方向にハツリ平坦であるが、凹状もある（70）。側面上下面に研磨痕は認められず、上下及び正面とする手がかりはない。上・下面の平面楕円形が関係するのか気になるところである。地輪の上・下と側面は成形の相異で判断できそうであるが数量が少なく手がかりがない。しかし、上下の判断は可能で丁寧なハツリ面が上である（53・54と73下面）。

つぎに、各輪の組み合わせについて検討してみる。信頼性のもっとも高い組合せは凸形柄をもつ空風輪Ｂ型

(63) と箱型の凹型柄孔の火輪Ａ (55) や円錐状柄孔の空風輪Ｂ (64・65) との組合せである。後者は恐らく木製の柄で組み合わされたものであろう (PL13)。こうした意味では、これらは接合型の五輪塔とも呼ぶべきであり、一石五輪塔との関係が注目されねばならないが、それはさて置き、これらがセットとして組み合わさる以上、空風輪Ａ・Ｂと火輪Ａが同時期に製作されたとしてよい。よって、型式上の変化がある空風輪と火輪、変化の少ない水・地輪が成形上の斉一性が強い所から、短期間に造り出されたものとしてよい。型式学的に変化の少ない水・地輪も成形・器形上の類似と合せ考え、接合型の五輪塔と組み合わされるであろう。よって、ここで問題となる点は、空風輪Ａ・Ｃ型の位置付けであるが、成形上の類似点と素材の共通性以外に、他の五輪塔群と同時性を示す積極的根拠は持たない。しかしながら、板碑の項で検討したとおり、板碑と同様な移設が考えられるとするならば、五輪塔群もまた、一括性の強い遺物群として把握が可能で、その製作年代も板碑と同様に15世紀末から16世紀代前半の中に求められるであろう。そして、Ａ～Ｃ型にわたる空風輪は火輪のＡ・Ｂ型ともに、同一時期における型（形態）の相異となる。なぜならば、「型式」が時期を表示する用語である以上、空風輪Ａ～Ｃ、火輪Ａ・Ｂは型式とはならない。つまり、型式を設定し、編年研究をおこなうには銘のある五輪塔を含めた他遺跡のものとの比較検討を同一の視点でおこなう必要がある。型の異なる五輪塔群の同時存在が時間差を示さないとするならば工人の差かあるいは、依頼者の信仰上の理由によるものなのか十分に考慮に入れた検討が望まれよう。少なくとも本遺跡の五輪塔は発掘資料としての一括性があり、型（形態）のちがいを含む15世紀末から16世紀前半の五輪塔群の基準資料として提示できるものである。

５．出土品に見られる表町遺跡の性格

（１）陶磁器類の性格と課題

中世社会の支配者層は、その権力を誇示し支配の道具とした。それを威信財と呼び中国からの輸入陶磁器や絵画など唐物と呼ばれるもので、酒宴や茶の席用の屋敷と部屋をしつらえ飾ったり使用したりした。その有様は「祭礼草子絵巻」などに見ることができる（河原ほか1990)。

威信財とされる考古資料には茶器・花器や香炉などがある。良質の青磁・白磁・青白磁・青花や天目茶碗などの輸入陶磁器である。梅瓶や酒海壺、花器や大皿などの伝世品は一級品として尊ばれたし、古瀬戸などの国産陶器の一部も含んでいた。よってこれらが遺跡から出土することはその遺跡が当時の支配層と深い係わりがあったことを示すものである。それは生活の場であったり威信財を蔵骨器として用いた墓地であってもほぼ同様と理解される。考古学では中世の遺跡ごとの出土品のうち、とりわけ輸入陶磁器の内容について重視することは、その遺跡のもつ歴史的性格を紐解く重要な鍵となるからである。勿論こうした遺物が遺構と結び付いたものであればよりベターであろうが、北信地方ではそうした例はごく僅かである。当町の芋川氏館跡（笹澤2003）や長野市栗田城跡（矢口・市川1991、青木・市川・河西1994、千野・市川1995、田中2013)、中野市高梨氏館跡（中島ほか1993、中野市教委1999・2000）や建応寺跡（中野市教委1979・1980・1983）などの館跡や寺院址などの調査例があり、それら遺跡の性格について出土陶磁器は一定の役割を示している。また、それには茶の湯が浸透して来る中世末期においては、茶臼や風呂も加わり、武器類など、威信財は多種多様となり、その識別が大きな課題となる。例えば、輸入陶磁器は中世末期には中国大陸で多量生産され、その質を問わずわが国に請来され一般に食器として用いられたとされる（小野1990)。碗など輸入陶磁器が北信地域の中世、特に末期の社会でどの階層まで評価され使用されていたか直接に知る資料は乏しい。

善光寺平南部の千曲川右岸山麓裾に近接して営まれた16世紀代の長野市小滝・北之脇・前山田の３遺跡は市川隆之氏の分析（市川1999）によれば、山頂にある山城（春山城）の在地領主が戦争に備えて作った防衛施設を備

えた計画的集落であるが、３遺跡はそれぞれ性格を異にすると云う。小滝遺跡は道路に面し並列した掘立柱建物群（Ａ種建物）と谷を挟んだ山裾の礎石建物（Ｂ種建物）から、北之脇遺跡はＡ種建物、前山田遺跡はＢ種建物からそれぞれなり、Ａ種建物は上層階層の屋敷地、Ｂ種建物は町屋で職人層の住まいとした。市川氏は慎重に結論を保留しているが、文脈から在地領主層が戦争に備え自己の居館と町屋とは別の一時的に作った言わば戦略的集落で、そこに配下の武士層や職人層を配した３集落ということになる。つまり、それは居館でも農村集落でもない第３の集落で戦国時代特有のものと云えるもので、甲越の戦いを中心とした北信地方特有のものなのか、さらに検証が必要であるが興味ある指摘である。ここではこれ以上の深入りは避けるが、市川氏はさらにこれら遺跡から出土した陶磁器について分析をおこない、上層階層の屋敷地の方がより器種と数量が多いという。職人層と考えられる階層でも輸入陶磁器を食器として使用してはいたが、量も種類も多くないということになる。

以上から輸入陶磁器や国産陶磁など広域交易品から遺跡の性格を論ずる場合には、時代とともに器種や数量と質が問題となる。ただし、食器に限定した場合には在地産土器類は用途が異なるものが多く別問題となる。また、木製品などの使用も視野に入れて農民層を含めた食器の組合せなどを検証しておくことは緊急の課題であるし、中世の上級社会では、伝世陶磁器を重要視し保持していたことも視野に入れておかなければならない。

（２）表町遺跡の陶磁器

輸入陶磁器はすべて中国産で青磁・白磁・青白磁・青花の磁器と天目茶碗の陶器である。須恵器を含む国産陶磁器は瀬戸・美濃の陶器に肥前陶磁器と若干の越中瀬戸に加えて珠洲の須恵器がある。これらはいずれも広域の流通品である。後二者は貯蔵具である壺・甕鉢や調理具であり前者には見られないので、ここでは食器や花器などを扱う。大多数が破片で細片を多数含むので器種や製作年代が確定できない物も相当数含むが、表町遺跡の陶磁器の傾向を知るのには特に差し障りはない。

陶磁器類は土師器皿と同様に調査地全域から出土したがSE08、SH01、SG01に集中していた。他の遺物と同様に廃棄されたからである。その他居住域Ⅰ・Ⅱの掘立柱建物群とその周辺にも見られたがとりわけ多いというものではなかった。それは包含層そのものが地表に近く傾斜地にあることと、整地などによって動いた遺物も

	年代／器種	12c	13c	14c			15c			16c			17c			18c			19c	年代不明	合計
				前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前		
輸入陶磁器	碗	8	4					9	8	8										4	41
	皿	2	1					1	3	3											10
	梅瓶・盤・水注ほか	1	4					4	1	1										3	14
	天目									1											1
	器種不明品	4	1					1	2	1										22	31
古瀬戸　瀬戸・美濃	碗・皿・卸皿・鉢		3			1		4	3	8	3									5	27
	天目					6	1		3	4										12	26
	花器			2																	2
	器種不明品								2				2							4	8
肥前陶磁器	碗・皿ほか												10	5	2	5		1	2	29	54
合計		15	13	2		7	1	19	22	26	3		12	5	2	5		1	2	79	214

表３　表町遺跡出土の陶磁器集計表（他に越中瀬戸２点あり　珠洲は須恵器とし除外）

あったものと思われる。

時期別に陶磁器の出土量を見ると、輸入陶磁器とは12世紀末から13世紀代、15世紀中葉代から16世紀前半と２ケ所に山があるが数量は後者が圧倒的に多い（表３）。古瀬戸と瀬戸・美濃は13世紀代から16世紀後半までと幅があるが16世紀前後が多い。これは大窯製品が比較的多いことと関係がある。肥前陶磁は16世紀末から17世紀前半に集中し僅かながら18世紀前半にもある。12・13世紀代の輸入陶磁器には梅瓶や水注と思われる青白磁などの威信財、龍泉窯系の鉢や盤と画花文のある碗、あるいは同安窯の碗など優品が多い。梅瓶は長野県内では長野市栗田城跡（矢口・原1991、田中2013）、松本市北栗（野村1990）、下諏訪町殿村・東照寺（宮坂1990）、茅野市千沢城下町（守矢1993）などの遺跡についで５例目である。栗田城跡は信濃の有力豪族栗田氏の居館跡である（矢口・原1991）。また、諏訪地方の２遺跡は諏訪氏と関係の深い遺跡とも云われる（守屋1993・宮坂1990）し、越後の守護所が置かれ、その迎賓館とも云われる上越市至徳寺遺跡でも梅瓶や酒海壺などが出土している（水澤・鶴巻2003）。もとよりこれらの遺物はその遺物の製作年代を持って表町遺跡が13世紀代の遺跡とすることはできない。他の12～13世紀の輸入陶磁器の大多数もまた同様で表町遺跡の全盛期、恐らく15世紀から16世紀代において、当時にあって伝世品である一級の文物を所持した人物が表町遺跡にいたことを示すものである。何故ならば13世紀代を代表する土師器皿Ⅰ群（手づくねカワラケ）はごく僅かしか出土していないことによる。町内の小野遺跡では13世紀代の輸入陶磁器や国産陶器をもって遺跡の年代を推定したが、それは土師器皿Ⅰ群の存在と掘立柱建物の構造的特徴から判断したものである（笹澤・小柳・市村・中村2012）。勿論、表町遺跡にもごく微量の土師器皿Ⅰ群が存在する以上、初期の輸入陶磁器も存在した可能性は皆無ではないが、確実にその頃の遺構が見つからない以上、積極的に13世紀代とすることはできない。かように考えて来ると表町遺跡の12～13世紀代の輸入陶磁器や国産陶磁器の花瓶なども伝世品として威信財とすることができる。

一方、量的に多く主体である15～16世紀代の陶磁器は在地産土器類や珠洲から表町遺跡の年代を示すものとしてよい。中世末期の社会において支配者層に茶の湯が盛んであったことは茶臼の項でふれた所であるが、天目茶碗もまたそのことを示すものである。表町遺跡では天目茶碗は総数27点にも及び出土量が多い。１点の中国製品（78）とともにほぼ年代の分かる古瀬戸や大窯期の天目茶碗も14点あり、14世紀末から16世紀代初頭のものである。14世紀代などは伝世品もあろうが、大多数は15～16世紀代のものであり、その頃の支配者層の遺跡であることを示している。また、瀬戸・美濃でも大窯Ⅰ・Ⅱ期の、肥前陶磁でも同Ⅰ・Ⅱ期が多いことも輸入陶磁から国産陶磁器、さらに瀬戸・美濃から肥前へ食器が移行して行ったことを示すものであり、その下限はSE08の廃絶に見られた肥前陶磁Ⅱ期の染付け碗の示す年代17世紀中葉はさかのぼらない。肥前陶磁Ⅲ期の碗類もごく少量見られるので、集落としての廃絶は18世紀代に入ってからであろう。

（３）金属器に見られる表町遺跡の性格（第66・67図、口絵４、表７）

表町遺跡の出土品には土師器などのやきものや石製品以外には金属器と木製品がある。金属器は銭貨・鉄・銅製品、木製品は漆器椀・木地椀・曲物・蒸器（甑板）・柄杓・匙・盆・桶・四乳ソリなどと桝・井戸や建築用部材など多様である。

銭貨は22点出土し、唐銭１枚（５）、宋銭17枚（１～３・８～18・20～22）、明銭１枚（４）である。宋銭は南宋銭１枚（14）を除けば北宋銭である。このほか不明が３点ある。出土地別ではSH01、SE08、SG01に９点、SD45に５点、居住域Ⅰに４、同Ⅱに３、同Ⅲに１点となる（表７）。県道地点では元豊通宝と祥符通宝各１点が見られる（中野2009）が数量に大きな違いがあり、銭貨にも調査地点の性格が反映されている。

鉄製品にはSE08底部から出土した３振りの短刀（歴史群像編集部2012）がある（29～31）。SE08西井壁下から出土した短刀（31）は先端を僅かに欠損するが現長26.4、最大幅2.8、同厚さ0.4、身の長さは17.2cmである。茎

（こみ）との境には刃区（はまち）棟区（むねまち）があり茎には関（まち）側に目釘穴がある。重量は90gである。SE08南井壁際から出土した２振り（29・30）のうち29は僅かに先端を欠くが、全長21.5、幅2.2、厚さ0.4cmで関が大きく茎を細かくしている。目釘穴を欠くので柄へは差し込み式で、関や茎への造作もそのためのものである。身の長さは15cm、重量41gである。なお、全体に変形し捩じりがある。30は全長27.6、最大幅は鏃元（はばきもと）で2.4、厚さは0.4cmである。身は16.8cmで細身のうえ切っ先は鋭利な鉾切先（かますきっさき）であるのに対して他の２点は丸味をもつ脹切先（ふくらきっさき）である。鏃元は幅１cmで刃区・棟区とも小さくして茎となる。目釘穴が関側にあり茎先はまるく仕上げており31と共通する。茎には鑢目（やすりめ）が多数残されている。重量70gである。全体に３振りとも保存状態は良い。これらはSE08構築時に井戸祭祀（鎮魂用）に用いられ、SE08構築に際して短刀を所持しうる支配層が関与したという点についてはすでに述べた。このほか鉄製品に刀子（27・28）や釘（33～39）がある。いずれも居住域からの出土である。また41は丸釘でSH01の上部からの出土で新しい。そのほか用途不明の鉄製品がある。

銅製品には銭貨以外に和鏡（24）・馬具（23）・鋲（26）と不明銅製品残欠があり、いずれも表町遺跡に支配者層が存在したことを示すものである。和鏡は捩菊文を持つ鈕座で、蝶または草木文と思われる文様を配している。質の良い恐らく白銅鏡かと思われる。器面にねじりが見られ変形している。厚さは0.1、鈕座高は0.3、現存2.9cmで、SH01出土である。捩菊鈕座は藤原時代後期に多い和鏡であると云われる（広瀬1974）。同笵鏡は明らかにしえなかったため鏡面の文様構成は不明である。これもまた伝世された威信財のひとつと思われる。

23は馬具の鞍金具の一部である鞍（しおで）穴に取り付けた青銅製金具である鞍の緒通し管（原1986）である。鞍（四緒手）は鞍の前輪と後輪（しずわ）の左右爪先（下端）近くの鞍の緒通し管を通して面懸（おもがい）と尻懸（しりがい）を鞍で固定する。時期によって鞍の緒通し管は２個１対で計８個であったり１個ずつの４個と違いがある（末崎1991）。青銅製で長さが6.8、直径１cm、厚さは１mm、重量18.2g、両端で僅かにすぼまるために平面形では細長の樽型となる。中央に鞍を通すための孔があけられ両端には鞍に通したためのあたり痕が幅0.5cmにわたってある。本例は鍛造した青銅板を背面中央で縦位に接合し、その接合線を中央にして左右を無文帯として器面の1/2を残し、残りを長方形に細線で区画しその中に柳葉文と思われる植物文と半円を連続した魚子文（ななこもん）を組合せている。枝は太めに柳葉は細く同一方向から各文様を描く。いずれも毛彫りである。なお、文様帯下部は腐食のため不鮮明で読み取れない。また、部分的に打圧を受け変形が見られる。出土例は極めて少なく古代では塩尻市吉田川西遺跡（原1986）に見られる。

吉田川西遺跡では平安時代後半のSX21から多量の土器類とともに出土した。現長3cm、内径0.8cmで中央が僅かに膨らむ。本例より小型ではあるが器形は類似する。器面は剥離するが残された面に円形の魚子文が認められる。原明芳氏の教示によれば、京都市法住寺殿跡でも鞍の緒通し管が出土しており、そこにも魚子文が描かれており、平安時代の上級貴族（武家）は魚子文を鏡など人目に触れない部分に使用していたと云う。

本例も含め出土数が全国で３例と数が少なく、現存する馬具も含めて検討例もない中で結論は出しえないが、現状では本例は平安時代後期の馬具の可能性が強い。こうした馬具はいわゆる飾り馬用であり中世まで伝世され使用されたとするならば、表町遺跡の中世における遺跡のランクが極めて高いことになる。

その他にSF08出土の青銅製品残欠（25）は長さ5.8、幅3.5cmで重量30gの鋳造品で周縁部は欠損する。厚さは0.6cmほどで表面にごく僅かな赤色顔料が認められる。断面形では軽く弯曲があり仏具の一部とも思われるが器種名は不明である。26は銅製の鋲で居住域Ⅰ出土である。長さ1.9cmで頭の径は笠状で現状では0.5cmで重量は500mgである。身の断面形は方形であり、飾り金具などを打ち止める鋲（釘）と思われる。

第２節　発掘調査が語る表町遺跡

１．文献に見る表町遺跡と矢筒城跡

表町遺跡と矢筒城跡に係わる同時代の史料はなく、明治時代初期の伝承を記録したものしかない。ひとつは1875年（明治８年）の「牟礼神社の由緒届書」（註３）であり、いまひとつは『長野県町村誌』にみえる1880年（明治13年）に牟礼村より長野県へ提出された矢筒城と表町の伝承（註４）である。一部に史実と異なる所もあるので補足を加えながら表町の係わる点を中心に述べる。

牟礼神社の由緒届書は文字通り、神社の沿革を記したものであり、それによれば、神社は島津権六郎を城主とする矢筒城南麓の城下である村井（牟礼）の一郭にあって、島津家の鎮守であったが、村上義清と武田晴信の数度にわたる戦いで島津家をはじめ城下ならびに神社は灰燼となり、城下の住民居住するも「表町用水」は「悉く不便」のため多くが現在の牟礼の地へ転居した。

天正十年武田氏滅亡を受け織田信長は森長可らを派遣し上杉景勝を攻めたが、この時牟礼の地に陣を構え、再建のために幣帛などを下した。森長可は北信四郡を支配し、芋川親正らの反乱を押さえたが、本能寺の変における信長の死を受けて北信を去り、代わって上杉景勝の支配下となり、牟礼の地は長沼城主島津忠直に与えられた。上杉景勝（由緒届書では徳川家康とあるが誤記）は天正十一年に長沼城と長沼城下保護策として、北国街道を町―白坂峠―神代―長沼城と定め、善光寺経由を北国往還の横道として禁じた。神社は慶安四年現在地へ遷座した。それは「人民の居村今所よりは遥かに遠くして、幼老社参疎々敷甚不便」になっていたからである。かつての表町の賑わいはそこになく、牟礼宿の発展によるものである。

長野県町村誌によれば牟禮町〔字表町に村落をなす、七割、陣場、左軍神、舟繋石、堀形、家老地等の地名あり〕「慶長以来宿驛が置かれ、傳馬の運搬を勤るに至り、又水利の便を以って今の地へ移る。」

『矢筒城墟』は、西は黒川村地内、南は表町、東は西前坂、古屋敷、北は瀧沢川を以って久保田に界す。東西四町四十間南北三町廿八間で石壁・堀跡・大手口の伝承地「永正の頃島津氏居城、天文の頃是れ毀つ」とある。「天文の頃是れ毀つ」は「信濃国関係島津氏略系図」によると「権六郎景秀（矢筒山城主天文二十二年信玄に滅ぼされるに）」に対応する。これについては史料の信憑性について検討が必要である。享保（禄）二年迄島津権六居城、村上家に於て誅す。黒川村浄土宗長国（谷）寺の開基（『科野さざれ石』）とあるなど伝承にも異説がある。また、甲越の争いで牟礼の地における直接の軍事行動は認められない（矢野1996）と云う考え方もあるが、おそらく伝承からは甲越その他の戦乱の中で城と城下が兵火に見まわれ、やがてゴーストタウン化に向かう姿としてとらえられる。それは慶長十五、六年頃の牟礼宿誕生の道程でもある。そして興味深い点は表町が「用水」に難があり、廃町のひとつの大きな理由としている点は重要である。

伝承の中でいまひとつ重要な点は矢筒城及び表町の一体化とそのはじまりについて、どう語られて来ているかであるが、矢筒城は永正の頃島津氏の居城であり表町はその城下とすれば永正の頃にはすでに成立しており天文・永禄の頃の甲越の戦いの時には上杉方の重要な居城のひとつであったことは間違いない。それは伝承によるごとく島津権六郎家が断絶した（島津1989）としても、島津一族の居城として存在し続けたと思われる（長野県史刊行会1969）。よって問題は矢筒城及び表町がいつ作られたかである。

武礼城主光井修理之介光信、本願寺三代覚如の弟子になり正安二年（1300）越後蒲原郡和納村に草庵を開いたという、西蒲原郡岩室村和納、願善寺の伝承によれば13世紀代末には武礼城があったことになるが不明である。

もともと中世前半に牟礼の地が太田荘に属し赤沼または長沼島津氏との関係で所領関係が指摘されるとあっても、文献から表町及び矢筒城の存在を15世紀代に遡って語ることはできない。その点では表町遺跡を16世紀代とした中野氏の指摘は当を得ていると云ってよい（中野2009）。

２．用水施設の変遷

今次調査で検討した用水施設は谷地部に段階的に認めることができた。しかし、調査範囲がその谷地部の一部にあったため未調査地が多く、不明な点も数多く残された。とくに取水・貯水施設であるSG01やSE07・SE08、あるいはSE11と導・配水施設であるSD47以下の溝との関係である。初期の用水施設はSG01とSE11を経て桝SX03を含むSD47からなり、谷地部を東西に直線的に構築されていたが、SD45以下は次第に規模も小さくなり溝も蛇行するなどSG01からSE08に至る取水施設に比較して時代が下るにつれて余りにも貧弱となる。恐らく、調査地外の北側にSD47そのものかそれに続く導・配水施設があるものと思われる。これらの点は今後の調査に委ねるとして以下、用水施設についてまとめる。

谷地部の谷部軸を外し西側の丘陵裾部を大きく掘下げて作られた貯水池SG01の西北隅に導水路を通して貯水施設SE11で貯水・ろ過されたのち、推定上段幅2m、深さ1mの断面台形の導・配水用の溝SD47を通して下方の居住域Ⅰ・Ⅱへ飲料水は流されたものと思われる。木製桝SX03の方向は長軸方向がSD47のN70°Wに対して、N49°Wで約20度北に振っている。木製桝の南壁板が3mまで確認できる所を見るならば、SD47の本流とは別に木製桝SX03で一部の水を分岐したものと思われる。その先は未調査地のため不明であるが、表町遺跡の初期の上水施設は想像以上に整備されていた可能性が強い。残念ながら居住域Ⅰ地区でおこなった谷地部での２本のトレンチ調査（トレンチ２・３）ではSD47などの構造物は未検出であった。谷地部がトレンチより北側に寄っている所を見れば、SD47の下流は調査地外北側にあたるものと思われる。同様に木製桝SX03で分岐されたと考えられる導水路もまた、調査地外となる。

このように、各遺構の項で検討したとおりSG01とSE11、SD47、SX03の諸施設の設備は14世紀中葉を下らない。つまり、表町遺跡の谷地部を中心とした本格的で最初の上水道施設は14世紀中頃まで成立していたものとするならば、それを核とした表町の「まち」としての原形がこの頃すでに成立していたことになる。陶磁器類も14世紀代後半から多くなる（表３）ことも傍証となろう。しかし、14世紀代と云える確実な掘立柱建物跡は確認されておらず今後の課題として残される。

溝SD45はSE11・SX03およびSD47埋没後にSD47の方向にそってその堆積土を切って構築されたもので、規模は幅0.9m前後と小さい。恐らく、SD47の左岸と方向が一致するところからSD47埋没の最終段階に構築されたもので、出土遺物と遺構の検出状態から14世紀末を下ることはないものと思われる。そこには貯水・濾過施設SE11や分水施設である木製桝SX03を欠き、SG01からの導水部分は簡易な配石で溝側壁としている。上水施設の簡略化のあらわれで、SG01をはじめとする上水道施設のゆきづまりであろうか。以降、導水道は廃水施設化していったのであろうか、15世紀代中葉以降溝SD41・42・43・44などは規模も小さく蛇行する自然水路化していった。調査地外北側に導・排水路が作られていないとすれば、取水・貯水用のSG01も本来の機能を失って来たと云える。つまり貯水施設が飲料水用であれば下流施設である溝との一体的な維持・管理が言わば絶対的条件であり、少なくとも発掘調査の所見で見る限りSD44以降の溝のあり方からは一体的維持・管理は窺えない。SE07・SE08の構築以前のSG01の埋土堆積状態がSE07・SE08の構築、あるいは崩壊に伴い十分に窺い知り得ないが、SE07構築時にSG01内の堆積土を掘下げている所を見るならばSE07構築時と思われる16世紀前半代にはSG01はかなり荒廃が進んでいたように見える。本来矢筒城下として表町の機能を強化されるべき16世紀代に画

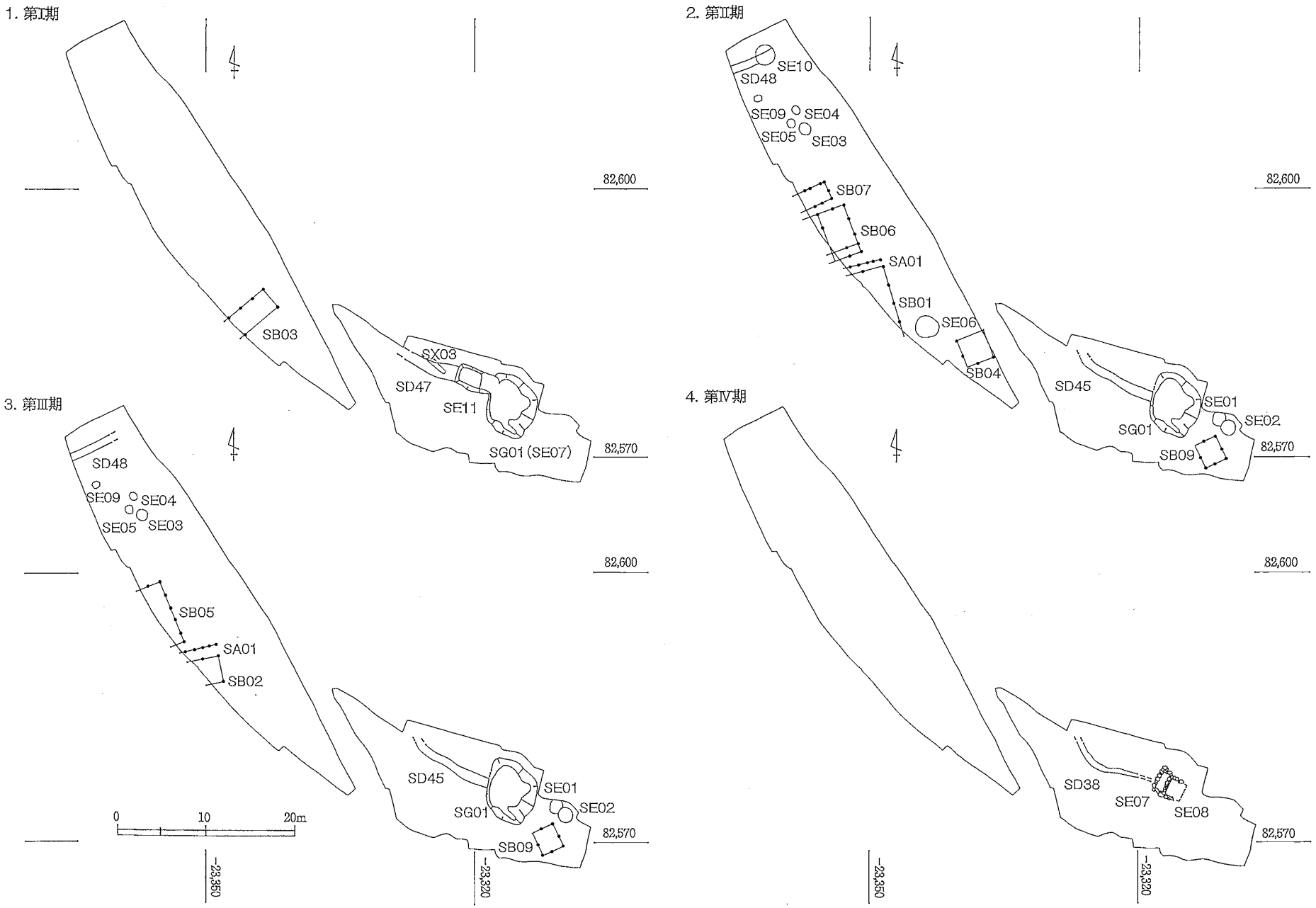
期的とも云えるSG01・SE11・SD47からなる上水施設が十分に機能をはたせなくなったことは表町周辺の開発に伴う環境の変化であろう。当然のこととはいえ町化に伴い遺跡周辺が花粉分析の結果では草原化が目立ち（第５章第２節）、森林が失われていた以上、狭い地域内では一極集中的なSG01から安定した湧水は確保できず、素掘りの深井戸に飲料水を頼らざるを得なかったことになる。それは中野亮一氏が県道地点の調査で指摘したとおり、恐らく、表町遺跡の最盛期と思われる15世紀から16世紀代にかけて井戸を中心とした「まち」（集落）が計られたことになる。明治初年の伝承にある表町遺跡の宿命とも云うべき良水の確保のための次善の策であろう。この次善の策は表町の城下町としての発展と上水施設貯水池SG01の機能低下に伴い順次なされたものであろう。居住域Ⅰの小型の井戸群は鍛冶工房用として除外される。居住域ⅡではSE06が15世紀中頃に居住域ⅢでもSE01そしてSE02とほぼ同じ頃に作られている。そして、貯水池SG01も井戸SE07と姿を変えることになる。それはSE02の後続の施設でもあり、SE02が廃絶後ほとんど埋没した段階でSE08を構築したことは半壊した粉挽き臼の出土によって知りうるし、SE08がSE07の作り直しであることもすでにふれた。SE07の構築時期は別にあった墓地を破壊して得た五輪塔や善光寺平型板碑を石組に用いていることにより、構築年代がほぼ16世紀前後に求められ、SE08は出土遺物のうち井戸底部から出土した最も新しい陶器が肥前陶磁Ⅱ期の染付け碗である所から、17世紀の前半代には廃絶していたことになる。SE08の廃絶は表町の廃町と牟礼宿の樹立と年代的に一致するところから、表町の最後の上水施設となり、明治初年の表町伝承が歴史を反映したものとしてとらえることができる。一方、SE08を16世紀後半の構築とするならば、これまた表町伝承の反映とすることも不可能ではない。伝承には「天文の頃、町が破壊され、その後再建された」ことと「矢筒城主島津権六郎」は村上義清に捕らえられたことも伝える。これが史実を反映したものであれば、天文二十二年（1553年）の第１回の甲越の戦（湯本1987）の時に、矢筒城は反村上（上杉）方でありその余波を受けたことになり、墓の破壊もその反映とも云えようが、戦国時代における五輪塔などの再利用が既に述べたとおり、しばしば行われており何とも云えない。その後表町は上杉景勝によって越後の春日山城と長沼城を結ぶ中継点として重視された（矢野1996）。よって、史実は今後の検証が必要であるが、城下表町の再構築の一環として、SE07（あるいはSE08）が造られたことになる。

３．表町遺跡の変遷（第11図）

表町遺跡町道地点の上水道施設は前項で示したとおり、14世紀中葉に始まり17世紀前葉まで続くことを明らかとして来た。それは取水・貯水池と水路に始まり、素掘り井戸の段階を経由して石組井戸の３段階に渡る。勿論これらは一系的ではなく相互に重複して使用されていたものと思われる。かように上水道施設の変遷過程は調査区が谷地部を多く含んでいたからに他ならないが、調査が谷地部の全域に及ぶものでないだけに不明部分も多く制約もある。

他方、居住域は谷地部西側の東西尾根裾部の狭い範囲に限定されていたため、ごく一部しか調査は及ばず検出された掘立柱建物跡も僅か９棟である。多数の柱穴を含む掘方が検出され、相当数の新旧の掘立柱建物の存在は予想されるが把握できなかった。

居住域Ⅰの掘立柱建物は比較的小型で建物内に炉床を持つ。掘立柱建物の側柱にそった線に多くの小型の炉床を並置させたSB06と建物内に比較的大型の炉床をもつSB05があり、物置小屋SB07を伴う。鍛冶工房跡で少なくとも２時期があり居住域のはずれに３基の小型の素掘り井戸を持ち、西は区画溝SD48に区画されさらに外側は東西谷の斜面となる。以上の推定に誤りがないとすれば、表町の工房域は表町の西のはずれに一角を占め東西谷を挟んで対岸に矢筒城城館と対峙することになる。この東西谷を矢筒城の外堀とする考え方もある（三島2000）。



第11図　表町遺跡変遷図（1：600）
時期区分のⅠ期～Ⅳ期は相対的な時間軸を示し、掘立柱建物は把握できたもののみ記載。

居住域Ⅱは柵列SA01を挟んで井戸SE06を中央広場に持つ比較的大型の掘立柱建物SB01と付属建物SB04からなる住宅域である。これらは鍛冶工房SB05、SB06と一体と考えられるもので、少なくともここでは工房と居住がそれぞれ分離していたものと思われる。時期はSE06の存在期間が15世紀後半代と思われるところから、ほぼその年代が下がっても16世紀代初頭となる。しかし、工房跡とするSB05・06と居住域ⅡでもSE06及び建物配置からそれぞれ３時期は少なくとも認められるので、居住と工房との関係は15世紀代後半には始まり16世紀代を通して存続するとともに、上限はSE06の構築以前のSB03が15世紀代前半にさかのぼる。今次調査で明らかとなった掘立柱建物の最も古い例である。

上水道施設の項で検討したとおり表町遺跡の「まち」としての形成が14世紀代中葉からと仮定すると、それに相応した建物跡は調査地対岸の谷地を挟んだ東西の台地も含めて当然あるはずで、今後の検討に委ねられる。

以上、表町遺跡の変遷を語るには、「まち」地域に多くの未調査地を残し、不明部分が余りにも多い。しかし、地元に残された伝承と、発掘調査の成果をもとに、おぼろげながら表町の移り変わりが分かりかけて来た。多くの課題はあろうが、表町遺跡の変遷は第11図としてまとめられる。それは最初の第Ⅰ期（14世紀中～後半）が、かなり規模の大きな上水道関係の設備の導入に始まる（１）。それが、最初の居館跡と係わる可能性がある。つまり、矢筒山麓に居館が移る前の初期の居館であり、遺跡全体に広く出土する威信財の出土と、比較的規模の大きい上水道施設の導入はこのことを暗示する。そして、恐らく「まち」の形成も始まったものと思われる。掘立柱建物SB03である。

第Ⅱ期（15世紀代）には上水道施設の弱体化に見られるとおり、第一次居館は矢筒山麓に移り、この頃戦国時代の幕開けと深く係わり、矢筒城と一体化した城館が形成される。それとともに「表町」の建設が本格化する（２）。「外堀」に接した「まち」の北はずれに、工房群が作られるとともに、井戸を中心とした「まち」作りが進み「表町」の全盛期（第Ⅱ・Ⅲ期、15～16世紀）を迎える（２・３）。伝承にあるとおり「まち」はしばしば甲越の戦乱の舞台となったであろうか。その影響と新たな牟礼宿の開設は、やがて「表町」を歴史の舞台から遠ざけてゆく（第Ⅳ期、16世紀後半～17世紀前半）。

４．表町の農地化

17世紀の中葉までに石組井戸SE08が廃絶した後は井戸跡は沼地化し、滞水状態で土砂の堆積は進行する。沼地から陸地化する過程で礫や陶器類、粉挽き臼などの石製品、曲物などの木製品などが投棄される。陸化後集石SH01が構築される。60センチ前後の大型の平石を核に五輪塔や板碑などの石製品・玉石などを集めたものであるが、その意図は不明である。表町廃町後に生じた不用品を廃棄した石捨て場がSH01であろうか。そして、その言わば石塚に２基の木桶の埋設がある。肥溜である。時期は不明であるがSH01の構築後であり、18世紀以降である。調査区の全域で出土した最も新しい陶磁器類は肥前陶磁編年のⅣないしⅤ期の陶胎碗類である。県埋文調査地区でも近代とする掘立柱建物が検出（中野2009）されており、表町遺跡内に住居が全くなかったわけではない。再三ふれて来たとおり「まち」に居住するためには地元で云う「赤ソブ」を含まない良質飲料水の確保が絶対条件であり、「まち」が消えた最大の理由もこの点にあろう。よって、今日でも果樹や畑作を中心とした農地が展開し水田はごく少ない。こうした畑作中心の農業経営は「まち」が消えてから徐々に進行していったものであろう。

５．表町遺跡の今後への課題

表町遺跡の出土品には梅瓶など輸入陶磁器類や国産陶器類など、12世紀後半から13世紀代の遺物が相当数ある

(第３表)。また、捩菊紐座の和鏡も平安時代末期から中世前半の製作に係わるものである。梅瓶などの青白磁などと共に威信財のひとつである。年代がはっきりしない鞍の緒通し管も含めて、これら威信財を中世後期の国人層の伝世品を貴ぶ、いわば骨董趣味として表町遺跡の在地領主―島津氏が所持していたとすれば、その地位は相当なものであると云える。それは矢筒城の主が、茶の湯に親しみ伝世品を入手し得る財力ある国人層であったことを示している。こうした威信財は一般的には在地領主層の居館跡で出土することが普通だからである。

矢筒城の「居館跡」は1979年の病院建設時と1986年の健康管理センター建設に先立つ２回の調査で堀（内堀）の検出や出土遺物によって、その外側の平坦部を「矢筒居館跡」とされた（牟礼村教委1981）が居館跡とする直接の根拠は遺構・遺物ともに得られていない。

発掘調査がトレンチ調査のごく一部であることも起因し、今となっては現状では確認のしようがない。山城と居館が一体となったと思われる遺跡の解明に、前記の発掘調査は大きな期待があっただけに千載一遇の機会を失ったとも云えよう。

しかし、表町遺跡の今次調査で得られた多数の威信財は「矢筒城館跡」の実態が不明な中にあって、調査地点のごく周辺に「矢筒館跡」があった可能性がある。14世紀中頃には作られたと思われる施設は、居住域との関係は推定できても、具体的に関係した遺構ははっきりしない。しかしながら、決して規模は大きくないにしても、上水道施設の建設には、矢筒城主の意向が強く働いていたと見る方がごく自然であり、改修された石組井戸の建設にも鎮魂用の３振の短刀が使用されているのである。よって、上水道施設に付帯した居館跡が今次調査地に近接してあった可能性があり、「まち」の原形あるいは「矢筒居館」が従来云われていた戦国期（中野2009）ではなく、14世紀中頃まで溯りうることを明示し得たことは、今次調査の最大の成果のひとつである。ただし、居館跡の存在は状況証拠だけでは何とも覚束ない。また、居館跡が移動することも考えられるので、山城と一帯化する以前の居館跡とすることは許されるにしても、今後の調査に期待するしかない。

輸入陶磁器など古代末期から中世前期の威信財の存在から、それらを在地領主層の伝世とは考えずに、それらの相当数が、当初またはさして時間を経ることなく、当地に搬入され廃棄された可能性も否定できない。飯綱町内には中世関係の遺跡はすでにふれられたとおり決して多くはないが、遺跡の内容が判明している例は当遺跡を除けば、芋川氏館跡と小野遺跡（笹澤・小柳・市村・中村2012）ぐらいである。このうち小野遺跡では中世前期の支配者に係わる遺構の一部が明らかにされた。ここでは掘立柱建物と輸入陶磁器が土師器皿Ⅰ群とともに認められた。よって、表町遺跡でも古代末期から中世前期の支配層に係わる遺構が発見される可能性がある。こうした遺跡は小野遺跡以外に北信地域では明らかにされていない。表町遺跡で中世前半の遺構が見つかれば、伝承に云う島津氏や太田荘の問題など、当地方のみならず、善光寺平の中世史に大きな一石を投ずることになるとともに、飯綱町の地理的位置から、越後との関係をも知る上で重要な手がかりを得ることになる。しかしながら、山城・居館・町屋（城下）が三位一体の遺跡として重要であるという認識はあっても、過去の牟礼村教委の数回にわたる小規模な発掘調査や、県埋文センターそして今次調査で三位そのものの実態がいまひとつ明らかにされてはいない。山城の構造・居館跡の位置や構造、町屋の構造などである。とくに後者では、町屋が地名や伝承に基づくならば、相当の規模を想定することも可能であるが、県埋文センターの調査では町屋の規模は散在的で町屋としてのイメージが湧いてこないが、今次調査によって、外堀とされる東西谷に近接した地点での町構造の一端がようやく明らかとなった。

長野県内の中世遺跡の大部分は、市街地化などで変容している。表町遺跡は「山城」・「城館跡」と「城下町」が一体の遺跡として、景観も含めて良く保存され今日に至っており、今次調査で得られたとおり重要な情報を埋蔵しており、中世史研究の遺跡としても極めて重要である。可能な限り現状保存を望みたい。

註３

「牟礼神社の由緒」明治８年（1875年）牟礼村から長野県庁への神社由緒届書

長野県管下第廿六大区壹小区信濃国水内郡牟礼村

鎮座字裏町

諏訪神社　　弐拾七ヶ村郷村

祭神建御名方命　御神璽古鎗身

旧神官家系は天文年中隣村芋川村神官近藤家受持其後黒川村旧神官近藤大和へ依頼奉仕すと云、其年暦不詳、或曰承応の始と云、数代右大和歳内三日五位吉田家へ請ひ内二日当社江其官服にて奉仕す、又歳々一月朔旦の神拝も当社を以て首とす。

由緒、当村古城主島津氏は武将頼朝公の落胤にして寿永二年木曽義仲北国へ下り平氏と戦はんと欲して将帥襄へ通るの時、軍帥合併して兵卒を出さざるを以て放火に逢と。其後営膳有て城郭元の如しと云（年暦不詳）、是を箭筒の城と云。

島津権六郎は又左京進と称す、累代村上家の旗下に属すと世の口碑に伝る侭を記す。当神社は自居村当南岡に字有名横吹山と往昔是に鎮座す。其原由・古記・神器、頻近郷に無比類を以て領主島津家も鎮守となし尊信す。然るに前顕の為放火の社殿不残焼失す。再び城郭営の後、当城の正東字馬場先（当今古宮と云）西の高みへ勧請あり、則神社領として永五貫文の地を寄附せられ、厚く崇敬し奉所の神社也。此時は市中人民方今の字表町に居住し村井と云（今の牟礼也）。然るに永禄・天文度、村上義清、武田晴信と度々戦争ありて村上家終に亡落に及び、尋て島津家も兵災に逢ひ家族士卒一時に分散し、可概社殿及び城郭民戸暫時に灰燼となり、此時神宝・古伝。祭器等不残焼亡なし畢。然るに人民居住なす表町用水に悉く不便なるを以、堤隍の柵を切流し方今の地へ転宅なす者多く、焼残りたる者は其侭居住するもあり、

然るに天正十年従来の地へ再建致さんと地形を築き、此時土中より掘出し得たる古槍の身壱本、是を神璽として社殿建設あり。然るに営膳未だ半はならざる時、織田信長の命に依、越後国春日山の城主上杉景勝を攻として滝川左近将監・森武蔵守両将を下しめ、爰に陣墜を居ひられ、其際細民の微かを以再建の志を感せられ幣帛五両を下され、尚祭祀料として高拾五石を寄附せられ、翌天正十一年未三月徳川家康公より北国往還の横道を経るの輩を御禁制の御朱印証書並に神社崇敬之制札等御下ヶ渡しに相成。其後延宝六年午八月佐久間大膳亮殿検地の節、従前の除地廃せられ、更に高三石除地に賜ふ。然るに人民の居村方今所よりは遥に遠くして幼老社参疎々敷甚不便を以て村民衆議の上、慶安四年方今の地字裏町へ御遷座なし奉り於今に崇敬し奉る所なり。

勧請　　年暦不詳
例祭日　　九月十八日
社殿建坪　三拾三坪
境内反別　壹反歩
旧社領　　三石除地
氏子　　弐百拾五戸
自該庁距離　三里三拾丁
以上

明治八年六月

右用掛　横山四郎兵衛㊞
同　牧野藤治郎㊞
右社祠掌　丸山理平㊞
戸長　柳沢六左衛門㊞

長野県参事楢崎寛直殿

（飯綱町役場文書「自明治八年五月至仝十五年六月　社寺関係書類　牟礼村」綴に収載。なお原文カタカナをひらがなとし、句読点を付した。）

註４

明治13年（1880年）牟礼村が長野県令へ提出した「牟礼村誌」にみえる矢筒城と表町の伝承（長野県立歴史館所蔵「郡村誌　上水内郡」（A-35-80）所収「牟礼村」。のちに長野県編『長野県町村誌』1936年として活字化。）

牟禮村

本村古時太田郷、後柳原荘に屬す。牟禮町〔字表町に村落をなす、七割、陣場、左軍神、舟繋石、堀形、家老地等の地名あり〕黒川村と一村たり。年號不詳二村となり、牟禮町は慶長以來宿驛を置かれ、傳馬の運搬を勤るに至り、又水利の便を以て今の地へ移る。同十七年室飯町と改稱す、元祿中再び牟禮町と稱す。天保九年十月牟禮驛と稱し、弘化元年牟禮村に復す。

（中略）

古跡

【矢筒城墟】本村未の方に當れる孤山にして村の中部に聳え、西は黒川村地内を堺し、南は字表町に隣し、東は字西前坂、古屋敷兩字に連り、北は瀧澤川を以て字久保田に界す。東西四町四十間、南北三町廿八間、周囘十町廿三間三尺高さ二百廿間二尺六寸。登路二條一は本村東の方字備後澤より上る高四町四十九間五尺四寸、一は西の方黒川村界より登る、高二町二間三尺、箙の形をなす、依て矢筒の城と云ふ。峯嶺に至れば石壁猶存す、中段南の方空湟あり、下段に堀あと及び大手口と唱ふる所あり、此所の耕地を鑿つ者古金銀鍋の欠、陶器の片われ等を得るもの往々有之、永正の頃島津氏居城、天文の頃是れを毀つと云ふ。嶺に石祠あり、同氏を祭ると言傳ふ。

【陣場】村の午の方表町南部を陣場と唱ふ。方今耕地にして皆畑なり、其畦徑の傍に埋石あり、土中埋入する何尺なるを知らず、上面に馬足跡の形あり。

【舟繋石】村の午の方字表町田畑の畦間にあり。大石板の如くに突出せり、其中央に穴突抜たり、直徑五寸、周囘一尺六寸、深さ三尺、往昔城廓存在の時、堀江舟繋石と言傳ふ。

（後略）

表町遺跡引用・参考文献

青木和明・市川隆之・河西克造　1994『栗田城跡（２）』長野市教委

青木和明・遠藤恵美子　2010『小島・柳原遺跡群水内坐一元神社遺跡（５）中俣遺跡（４）』長野市教委

浅野晴樹　1991「東国における中世在地系土器について―主に関東地方を中心にして―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集

飯綱町教育委員会　2004『長野県宝永正地蔵尊』（パンフレット）

市川隆之　1995「出土遺物の若干の考察」『栗田城跡（３）』

市川隆之　1997「中世の遺構と遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15―長野市内その３―石川条里遺跡第１分冊』長野県埋文センター

市川隆之　1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書９―長野市内その７―小滝遺跡・北之脇遺跡・前山田遺跡』長野県埋文センター

市川隆之　2002「中世信濃産すり鉢について」『長野県考古学会』98

上田典男　2000「中世以降の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　松原遺跡　古代・中世』長野県埋文センター

宇野隆夫　1989「井戸考」『考古資料にみる古代・中世の歴史と社会』真陽社

遠藤公洋　2009「砦大城と長野県北部の城館遺構―横堀遺構に着目した再評価の視点―」『市誌研究ながの』第16号

遠藤公洋　2013「若宮城」「砦山城」『長野県の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版

大橋康二　2000「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

小和田哲男　1995「石塔類の石垣転用に関する一考察」『城郭史研究』第15号　日本城郭史学会

小野正敏　1990「中世のやきもの」『古代史復元10　古代から中世へ』講談社
河原純之ほか　1990『古代史復元10　古代から中世へ』講談社
桐原　健　1968「平安期にみられる山地居住人の遺跡」『信濃』Ⅲ・20-4
黒岩英治　1933「芋川雑記」『信濃』Ⅰ・2-3
黒崎　直　1976「平城宮の井戸」『月刊文化財』4月号
小柳義男・矢野恒雄　1992『平出遺跡群発掘調査報告書』牟礼村教委
小山岳夫　1986「第2節中世の遺物」『大井城跡』佐久市教委
小山丈夫　1992「長野盆地周辺の板碑について」『長野市立博物館だより』第21号　長野市立博物館
小山丈夫　2000「石造文化財」『長野市誌第二巻歴史編　原始・古代・中世』
小山丈夫　2013「矢筒城」『長野県の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版
坂井秀弥　1984「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『上信バイパス関係遺跡発掘調査報告書1』
笹澤浩・原田勝美・佐藤慶二・小林孚　1986『前高山窯跡群』牟礼村教委
笹澤　浩・佐藤慶二・市村勝巳ほか　2001『豊野町誌―豊野町の資料（1）』
笹澤　浩　2003『芋川氏館跡発掘調査報告書』三水村教委
笹澤　浩　2004『田中下土浮遺跡・芋川氏館跡（第3次）発掘調査報告書』三水村教委
笹澤浩・小柳義男・市村勝巳・中村由克　2012『小野遺跡発掘調査報告書』飯綱町教委
笹澤浩・原田勝美・横山かよ子　2014「芋川氏館跡（第4次）・願生寺跡発掘調査報告書」飯綱町教委
佐原　真　1974「弥生土器製作技術に関する二、三の考察―櫛描文と回転台をめぐって―」『私たちの考古学』5-4
佐原　真　1979「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ（2）』有斐閣
品田高志　1999「第3節中世の在地生産　第1項中世土師器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会　高志書院
信濃史料刊行会　1969『信濃史料補遺上』
島津義忠　1989『我が家の歴史島津家』
宿野隆史　2000「大本願明照殿地点の調査概要―石製品」『長野遺跡群・元善町遺跡・善光寺門前町跡（2）』長野市教委
末崎真澄　1991「用語解説」（近世編）『日本馬具大鑑第四巻近世』日本中央競馬会
鋤柄俊夫　1986「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』Ⅲ・38-4
鋤柄俊夫　1997「中世食器の地域性―信濃（長野）」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
田中暁穂　2013『栗田城跡（4）』長野市教委
田淵実夫　1975『ものと人間の文化史15・石垣』法政大学出版局
檀原長則　1997「江戸中期農家の土座調査」『高井』118号
檀原長則　2010「中野市の中世墓址と関連する遺跡」『考古学からみた高社山周辺の歴史』しなのき書房
壇原長則ほか　1994『がまん渕遺跡（西山中世墓址）発掘調査報告書』
千々和実　1976「板碑」『新版仏教考古学講座第3巻塔・塔婆』雄山閣
千野　浩・市川隆之　1995『栗田城跡（3）』長野市教委
坪井良平　1976『梵鐘』学生社
鶴田典昭・中島英子・土屋　積　1997「飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13―小布施町内・中野市内その1・その2―』長野県埋文センター
戸根与八郎　2004「子安遺跡」『上越市史叢書8　考古―中・近世資料』
中島庄一　1993「成果と課題―出土遺物について」『高梨氏館跡』中野市教委
中島英子　1994『清水山古窯跡（中世墓地群）』中野市教委
中島英子　1998「対面所遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14』長野県埋文センター
中条正勝　1980「地勢―地質」『三水村誌』三水村
中野亮一　2009『長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　西四ツ屋遺跡　表町遺跡』長野県埋文センター
中野市教育委員会　1997「建応寺跡第一次発掘調査報告」『高井』46号
中野市教育委員会　1980「建応寺跡第二次発掘調査報告」『高井』50号
中野市教育委員会　1983「建応寺跡第三次発掘調査報告」『高井』62号

中殿章子　1993「中世溝跡出土の土器について」『松原遺跡Ⅲ』長野市教委
野村一寿　1990「中世の遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書８　北栗遺跡』長野県埋文センター
野村一寿　1990「中世土器・陶磁器」『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　松本市内その１　総論編』長野県埋文センター
服部敬史　1996「東国における15-16世紀の土師器皿の様相」『八王子市郷土資料館研究紀要八王子の歴史と文化』第９号
服部敬史　1997「内耳土鍋の研究（上）」『土曜考古』第21号　土曜考古学研究会
服部敬史　1998「内耳土鍋の研究（下）」『土曜考古』第22号　土曜考古学研究会
原　明芳　1989「第７章成果と課題―第３節―１金属製品と鍛冶資料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３―吉田川西遺跡』長野県埋文センター
原　明芳　1991「遺物」『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（３）』長野市教委
広瀬都巽　1974『和鏡の研究』角川書店
藤沢宗平　1943「土器造り雑考―手造りに就いて―」『古代文化』14-6（『藤沢宗平著作集　信濃先史文化の研究』1989年所収）
藤沢良祐　2007「総論―瀬戸大窯の時代」『愛知県史別編　中世・近世・瀬戸系　窯業２』愛知県
文化財保護委員会　1966『埋蔵文化財発掘調査の手びき』国土地理協会
三島正之　1999「信越国境（牟礼盆地）の防備―矢筒城・髻山城をめぐって―」『中世城郭研究』第13号
水澤幸一　2002「北陸における中世後半期の井戸―水溜・石組側・桶―」『地域考古学の展開―村田文夫先生還暦記念論文集』
水澤幸一・鶴巻康志　2003「至徳寺遺跡」『上越市史叢書８　考古―中・近世資料―』上越市史専門委員会考古部会
宮坂　清　1990「殿村・東照寺址遺跡の中世陶磁器・土器類について」『殿村・東照寺址遺跡』下諏訪町教委
宮坂　清　2009『四王前田遺跡―長野県下諏訪町四王前田遺跡発掘調査報告書―』下諏訪町教委
三輪茂雄　1978『ものと人間の文化史25　臼（うす）』法政大学出版
牟礼村教育委員会　1981『矢筒城館跡』牟礼村教委
牟礼村教育委員会　1988『矢筒城館跡（第２次発掘）』牟礼村教委
牟礼村教育委員会　2000『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』牟礼村教委
守屋昌文　1993『千沢城下町遺跡』茅野市教委
百瀬忠幸　1984『鐘山遺跡緊急発掘調査報告書』三水村教委
矢口忠良・原明芳　1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（３）』長野市教委
矢口忠良・前島　卓　1995『松代城跡―国補神田川改修事業地点―』長野市教委
矢野恒雄　1993「若宮城」『信州の山城』信毎書籍
矢野恒雄　1996「古代・中世から近世の牟礼」『長野県牟礼村誌上』牟礼村
矢野恒雄　1998「表町出土の石臼」『飯綱山の見える村々』
柳川英司　2005「長野県中・南信地方の様相２―瀬戸・美濃流通網の中の在地土器と遺跡の性格について」『海なき国々のモノとヒトの動き』内陸遺跡研究会
湯本軍一　1987「第三章戦国の争乱と信濃第一節応仁・文明期の信濃」『長野県史　通史編中世二　第三巻』
横田賢次郎・森田　勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４
横山かよ子　2011『矢筒城館跡Ⅵ』飯綱町教委
横山かよ子・矢野恒雄・小柳義男　1998『家岸遺跡』牟礼村教委
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
歴史群像編集部　2012『日本刀事典』学習研究社
若林　卓　1999「観音平経塚」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21―上田市内・坂城町内―』長野県埋文センター

第５章　科学分析

第１節　植物遺体の同定

㈱吉田生物研究所

１．調査した試料

試料は、遺構SD44（３試料：試料番号１～３）、SD45（２試料：試料番号4,5)、SD46（１試料：試料番号６)、SE02（７試料：試料番号７～13)、SE06（23試料：試料番号14～36)、SE07（３試料：試料番号37～39)、SG01（１試料：試料番号40)、SH01（６試料：試料番号41～46）と遺構不明（15試料：試料番号47～61）より採取された61試料である。

２．調査方法

試料を実体顕微鏡下で観察し、その形態から種の同定を試みた。その際、石川茂雄（1994年)、大井（1978年)、北村・村田（1979年)、中山・井之口・南谷（2000年）を参照した。

３．結果

遺構SD44からはモモとスモモの木本類２種が検出された。SD45からはモモとスモモの木本類２種が検出された。SD46からは堅果類の木本類１種が検出された。SE02からはモモ、サクラ亜属とハシバミ？の木本類３種と、アサ、ソバ、タデ属、アカザ科 or ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キビ、オオムギ、イネ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科の草本類12種が検出された。また囲蛹と昆虫が確認されている。SE06からはオニグルミ、モモ、スモモ、サクラ亜属、イヌザンショウ、カラスザンショウ、トチノキ、ノブドウ、ブドウ属、クマノミズキの木本類10種と、アサ、ソバ、タデ属、ハコベ属、アカザ科 or ヒユ科、アブラナ科、キイチゴ属、カタバミ属、ウリ、キカラスウリ、シソ科？、タンポポ亜科、キク亜科、コムギ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科の草本類17種が検出された。また囲蛹と昆虫が確認されている。SE07からはモモの木本類１種とソバ、タデ属、ウリ、タンポポ亜科、イネの草本類５種が検出され、また囲蛹と昆虫が確認されている。SG01からはモモの木本類１種が検出されている。SH01からは堅果類、モモ、スモモ、カラスザンショウの木本類４種と、アサ、ソバ、タデ属、ハコベ属、アカザ科 or ヒユ科、アブラナ科、マメ科、ウリ、シソ科、オミナエシ属？、メナモミ属、オオムギ、コムギ、イネ、カヤツリグサ科の草本類15種が検出され、昆虫が確認されている。遺構不明からは堅果類？、モモ、スモモ、サクラ亜属、カラスザンショウ、トチノキ、クマノミズキの木本類７種と、カナムグラ、タデ属、ハコベ属、アカザ科 or ヒユ科、カタバミ属、マメ科、ウリ、ユウガオ属、シソ科、メナモミ属、コムギ、イネ科、ホタルイ属の草本類13種が検出され、昆虫が確認されている。以上の各種の写真を示し（図版)、同定結果を表に記す。学名は北村・村田（1979年）によった。

４．まとめ

各遺構共に、モモ、イネ、コムギ、ソバ等の食用植物の残滓が検出されている。中でも遺構SE02、SE06、SE07においてはトイレやゴミ溜で見られるハエ類の囲蛹やゴミムシ類の可能性がある昆虫の外骨格が伴って検出されており、植物残滓等の生ゴミを遺棄する場所であった可能性が推測される。

タデ属、ハコベ属、アカザ科 or ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、イネ科の種実の検出が多いことから、遺跡周辺は低木などがまばらな草地が広がっていたと考えられる。　（汐見　真）

No.	整理番号	遺構名	グリッド	出土土層	個数	和名	科名	学名	種類	部位
1	201-2/2	SD44	ⅢB-T12	有機質砂礫混黒色土	1	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
2	212-1/2	SD44	ⅢB-T12	有機質砂礫混黒色土	1	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
3	212-2/2	SD44	ⅢB-T12	有機質砂礫混黒色土	5	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
4	181	SD45			1	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
5	191-1/2	SD45	ⅢB-S11	漆黒色粘質土	1	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
6	176	SD46	ⅢC-R11	黒色砂質土	多数	堅果類	—	—	木本	堅果
7	159	SE02		NO32-3	2	オオムギ	イネ科	*Hordeum vulgare* L. var. *vulgare*	草本	果実
					1	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
8		SE02			1	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
					1	タンポポ亜科	キク科	Cichorioideae	草本	痩果
					1	イネ	イネ科	*Oryza sativa* L.	草本	籾殻
9		SE02			3	タンポポ亜科	キク科	Cichorioideae	草本	痩果
					1	イネ	イネ科	*Oryza sativa* L.	草本	籾殻
10		SE02			1	不明種実	—	—	—	種子
					1	ソバ	タデ科	*Fagopyrum esculentum Moench*	草本	痩果
					8	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					18	ホタルイ属	カヤツリグサ科	*Scirpus* sp.	草本	痩果
					17	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
					1	樹皮?	—	—	—	—
11		SE02			1	キビ	イネ科	*Panicum miliaceum* L.	草本	痩果
					1	アブラナ科	アブラナ科	Brassicaceae	草本	種子
					3	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					2	アサ	クワ科	*Cannabis sativa* L.	草本	痩果
					5	ホタルイ属	カヤツリグサ科	*Scirpus* sp.	草本	痩果
					7	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
					3	不明種実	—	—	—	種子
12		SE02			1	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
13		SE02			4	ソバ	タデ科	*Fagopyrum esculentum Moench*	草本	痩果
					23	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					4	外骨格	昆虫	—	—	—
					3	囲蛹	昆虫	—	—	—
					14	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	草本	痩果
					6	イネ科	イネ科	Gramineae	草本	痩果
					1	ハシバミ?	カバノキ科	*Corylus heterophylla* Fischer	木本	果皮
					58	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
14	164	SE06	ⅢB-I8		1	アサ	クワ科	*Cannabis sativa* L.	草本	痩果
15	207	SE06			1	オニグルミ	クルミ科	*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. Sieboldiana	木本	核
16	289	SE06			1	タンポポ亜科	キク科	Cichorioideae	草本	痩果
					1	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	草本	痩果
					4	キク亜科	キク科	Asteroideae	草本	痩果
17		SE06			1	外骨格	昆虫	—	—	—
18		SE06			1	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
19		SE06			1	キカラスウリ	ウリ科	*Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. *japonica* Kitam.	草本	種子
20		SE06			2	カラスザンショウ	ミカン科	*Zanthoxylum ailanthodes* Sieb.et Zucc.	木本	種子
					2	ノブドウ	ブドウ科	*Ampelopsis* Michx.	木本	種子
					3	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
21		SE06			1	ソバ	タデ科	*Fagopyrum esculentum Moench*	草本	痩果
					8	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
22		SE06			3	外骨格	昆虫	—	—	—
					多数	節足類	節足類	—	—	—
					1	有機質	—	—	—	—
23		SE06			1	ウリ	ウリ科	*Cucumis melo* L.	草本	種子
					1	樹皮	—	—	—	—
24		SE06			2	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
25		SE06			2	タンポポ亜科	キク科	Cichorioideae	草本	痩果
					4	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					1	ブドウ属	ブドウ科	*Vitis* sp.	木本	種子
					1	コムギ	イネ科	*Triticum Aestivum* L.	草本	痩果
					8	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
					9	有機質	—	—	—	—
					2	囲蛹	昆虫	—	—	—
26		SE06			2	クマノミズキ	ミズキ科	*Cornus macrophylla* Wallich C.crispula Hance	木本	核
					2	不明種実	—	—	—	種子
27		SE06			1	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
					1	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
28		SE06			1	不明種実	—	—	—	種子
29		SE06			12	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					1	ソバ	タデ科	*Fagopyrum esculentum Moench*	草本	痩果
					6	ハコベ属	ナデシコ科	*Stellaria* sp.	草本	種子

No.	整理番号	遺構名	グリッド	出土土層	個数	和名	科名	学名	種類	部位
29		SE06			1	不明種実	—	—	—	種子
					1	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	草本	痩果
					1	ホタルイ属	カヤツリグサ科	*Scirpus* sp.	草本	痩果
					1	シソ科?	シソ科	Labiatae	草本	分果
					2	カタバミ属	カタバミ科	*Oxalis* sp.	草本	種子
					88	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
					1	外骨格	昆虫	—	—	—
30		SE06			2	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
31		SE06			1	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
32		SE06			2	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
33		SE06			1	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
34		SE06			1	囲蛹	昆虫	—	—	—
					1	イヌザンショウ	ミカン	*Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc.	木本	種子
					1	クマノミズキ	ミズキ科	*Cornus macrophylla* Wallich C.crispula Hance	木本	核
					1	カタバミ属	カタバミ科	*Oxalis* sp.	草本	種子
					130	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
					17	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					5	イネ科	イネ科	Gramineae	草本	痩果
					5	ハコベ属	ナデシコ科	*Stellaria* sp.	草本	種子
					2	不明種実	—	—	—	種子
35		SE06			18	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					2	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	草本	痩果
					1	キク亜科	キク科	Asteroideae	草本	痩果
					50	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
					4	ハコベ属	ナデシコ科	*Stellaria* sp.	草本	種子
					2	アブラナ科	アブラナ科	Brassicaceae	草本	種子
					1	不明種実	—	—	—	種子
					5	イネ科	イネ科	Gramineae	草本	痩果
					2	外骨格	昆虫	—	—	—
36		SE06			1	オニグルミ	クルミ科	*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. Sieboldiana	木本	核
					1	囲蛹	昆虫	—	—	—
					20	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					2	トチノキ	トチノキ科	*Aesculus turbinata* Blume	木本	堅果皮
					3	キイチゴ属	バラ科	*Rubus* sp.	草本	核
					4	カタバミ属	カタバミ科	*Oxalis* sp.	草本	種子
					6	ハコベ属	ナデシコ科	*Stellaria* sp.	草本	種子
					6	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	草本	痩果
					2	ホタルイ属	カヤツリグサ科	*Scirpus* sp.	草本	痩果
					5	イネ科	イネ科	Gramineae	草本	痩果
					1	外骨格	昆虫	—	—	—
					2	不明種実	—	—	—	種子
					87	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
37		SE07	IIIC-B13		3	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
38		SE07	IIIC-B13		5	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					1	ソバ	タデ科	*Fagopyrum esculentum Moench*	草本	痩果
					2	外骨格	昆虫	—	—	—
					1	囲蛹	昆虫	—	—	—
					2	ウリ	ウリ科	*Cucumis melo* L.	草本	種子
					2	タンポポ亜科	キク科	Cichorioideae	草本	痩果
					3	有機質	—	—	—	—
39		SE07	IIIC-B13		6	イネ	イネ科	*Oryza sativa* L.	草本	籾殻
					1	ウリ	ウリ科	*Cucumis melo* L.	草本	種子
					1	囲蛹	昆虫	—	—	—
					多数	有機質	—	—	—	—
					1	外骨格	昆虫	—	—	—
					1	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
40	224	SG01			2	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
41	194-2/2	SH01	IIIC-C12		2	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
42		SH01	IIIC-C12		7	ハコベ属	ナデシコ科	*Stellaria* sp.	草本	種子
					2	ソバ	タデ科	*Fagopyrum esculentum Moench*	草本	痩果
					105	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					193	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
					1	外骨格	昆虫	—	—	—
					1	コムギ	イネ科	*Triticum Aestivum* L.	草本	痩果
					18	アブラナ科	アブラナ科	Brassicaceae	草本	種子
					1	シソ科	シソ科	Labiatae	草本	分果
					1	1オミナエシ属?	オミナエシ科	*patrinia* sp.	草本	痩果
					1	メナモミ属	キク科	*Siegesbeckia* sp.	草本	種子
					2	不明種実	—	—	—	種子

No.	整理番号	遺構名	グリッド	出土土層	個数	和名	科名	学名	種類	部位
42		SH01	ⅢC-C12		4	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	草本	痩果
					1	ウリ	ウリ科	*Cucumis melo* L.	草本	種子
					1	アサ	クワ科	*Cannabis sativa* L.	草本	痩果
43		SH01			4	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
44		SH01			19	ソバ	タデ科	*Fagopyrum esculentum Moench*	草本	痩果
					1	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	草本	痩果
					2	ウリ	ウリ科	*Cucumis melo* L.	草本	種子
					1	カシ類	ブナ科	Fagaceae	木本	堅果
					2	オオムギ	イネ科	*Hordeum vulgare* L. var. *vulgare*	草本	果実
					1	カラスザンショウ	ミカン科	*Zanthoxylum ailanthodes* Sieb.et Zucc.	木本	種子
					1	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	草本	痩果
					1	有機質	—	—	—	—
					28	アサ	クワ科	*Cannabis sativa* L.	草本	痩果
45		SH01			一群	マメ科	マメ科	*Leguminosae*	草本	種子
46		SH01	ⅢC-C12		31	イネ	イネ科	*Oryza sativa* L.	草本	籾殻
					2	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					1	不明種実	—	—	—	種子
					7	イネ	イネ科	*Oryza sativa* L.	草本	痩果
					6	コムギ	イネ科	*Triticum Aestivum* L.	草本	痩果
					4	オオムギ	イネ科	*Hordeum vulgare* L. var. *vulgare*	草本	果実
					1	ウリ	ウリ科	*Cucumis melo* L.	草本	種子
					1	外骨格	昆虫	—	—	—
47	172		ⅢB-J12		1	カナムグラ	クワ科	*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc	草本	種子
					2	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
48	179		ⅢB-J12		1	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
49	98		ⅢB-R10	有機混黒色砂質土	1	ユウガオ属	ウリ科	*Lagenaria* sp.	草本	果皮
50			ⅢB-R12	黄褐色混黒褐色粘質土	1	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
51	180		ⅢB-T12	黄色混黒色土	1	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
52	198-1/2		ⅢB-T12	有機質砂礫混黒色土	1	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
53	209		ⅢB-T12		1	トチノキ	トチノキ科	*Aesculus turbinata* Blume	木本	堅果皮
54	162		ⅢC-A12	黒色土	1	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
55			ⅢC-B13		2	スモモ	バラ科	*Prunus salicina* Lindley	木本	核
56			ⅢC-B13		1	モモ?	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
57			ⅢC-B13		2	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
					1	ウリ	ウリ科	*Cucumis melo* L.	草本	種子
					2	クマノミズキ	ミズキ科	*Cornus macrophylla* Wallich C.crispula Hance	木本	核
					1	コムギ	イネ科	*Triticum Aestivum* L.	草本	痩果
					1	堅果類?	—	—	木本	堅果
					1	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
58			ⅢC-B13		24	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					1	不明種実	—	—	—	種子
					2	メナモミ属	キク科	*Siegesbeckia* sp.	草本	種子
					6	ハコベ属	ナデシコ科	*Stellaria* sp.	草本	種子
					2	イネ科	イネ科	Gramineae	草本	痩果
					1	カタバミ属	カタバミ科	*Oxalis* sp.	草本	種子
					173	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
59	186-1/3		ⅢC-B14	黒色土	1	サクラ亜属	バラ科	Subgen. *Cerasus*	木本	核
60	214		ⅢC-C13	黒色粘質土	1	ユウガオ属	ウリ科	*Lagenaria* sp.	草本	繊維
61			ⅢB-L11		2	モモ	バラ科	*Prunus persica* Batsch	木本	核
					110	タデ属	タデ科	*Polygonum* sp.	草本	痩果
					3	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
					63	ハコベ属	ナデシコ科	*Stellaria* sp.	草本	種子
					1	カラスザンショウ	ミカン科	*Zanthoxylum ailanthodes* Sieb.et Zucc.	木本	種子
					1	マメ科	マメ科	*Leguminosae*	草本	種子
					1	不明種実	—	—	—	種子
					3	カタバミ属	カタバミ科	*Oxalis* sp.	草本	種子
					3	イネ科	イネ科	Gramineae	草本	痩果
					2	シソ科	シソ科	Labiatae	草本	分果
					5	外骨格	昆虫	—	—	—
					83	アカザ科orヒユ科	アカザ科orヒユ科	Chenopodiaceae or Amaranthaceae	草本	種子
					1	ホタルイ属	カヤツリグサ科	*Scirpus* sp.	草本	痩果

[参考文献]

石川茂雄（1994年）『原色日本植物種子写真図鑑』、石川茂雄図鑑刊行委員会

大井次三郎（1978年）『改訂増補新版日本植物誌　顕花編』、至文堂

北村四郎・村田　源（1964年）『原色日本植物図鑑　草本編』上、中、下保育社

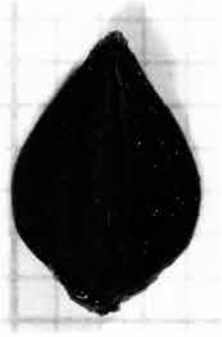
北村四郎・村田　源（1979年）『原色日本植物図鑑　木本編』Ⅰ、Ⅱ保育社

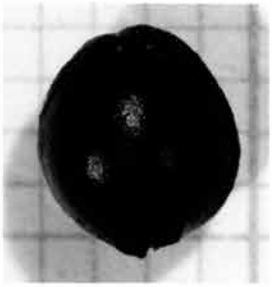
中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000年）『日本植物種子図鑑』、東北大学出版会

牧野富太郎（1989年）『改訂増補牧野新日本植物圖鑑』、北隆館

No.1　モモ核

No.2　スモモ核


No.13　ソバ痩果

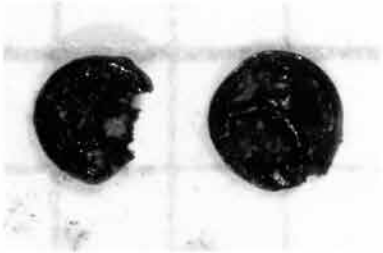

No.14　アサ種子

No.7　オオムギ痩果

No.11　キビ痩果

No.19　キカラスウリ種子

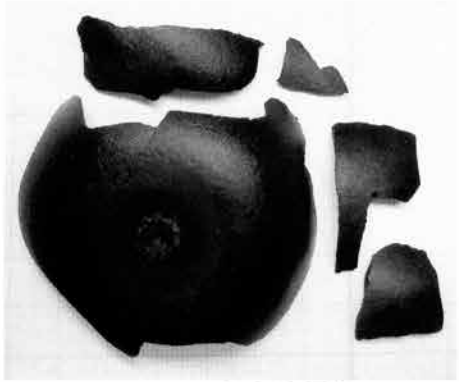
No.25　コムギ痩果

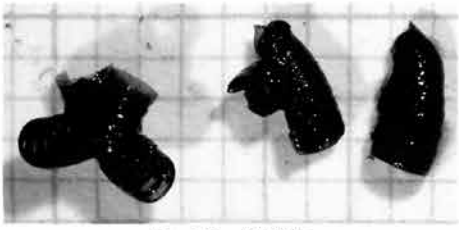

No.35　アブラナ科種子

No.39　イネ籾殻

No.39　ウリ種子

No.42　シソ科分果


No.49　ユウガオ属果皮


No.22　節足類

No.46　イネ痩果

No.34　囲蛹

No.20　ノブドウ種子

第２節　花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長野県上水内郡飯綱町牟礼に所在する表町遺跡は、三登山山系の鍔山北側の丘陵に位置する。調査地付近は、東側、西側、南側の三方より緩やかに傾斜し、全体的に北側に向かう緩傾斜地となっている。本遺跡の発掘調査の結果、８ｍ×７ｍを呈する中世の貯水池SG01をはじめとして、井戸跡、土坑、炉址などが検出されている。本報告では、中世および以降の古植生の検討を目的として、SG01の埋積物を対象に花粉分析を実施した。

１．試料

試料は、貯水池SG01に設定された南北の土層断面より採取された土壌９点（試料No.１～９）である。これらの試料の観察では、いずれも黒色を呈する泥からなり、灰白色、褐～灰褐色泥の偽礫や砂の混入の程度が堆積物によって異なる状況が確認できる。発掘調査時の記録に基づくと、上記した９試料は、No.１が褐粒多量混黒色土、No.２が褐粒少量混黒色土、No.３が黒色土、No.４が暗黒色土、No.５が黄色土混暗黒色土、No.６が黄色ブロック混暗黒色土、No.７が有機質多量混暗黒色土、No.８が黄色ブロック混暗黒色土、No.９が黒色粘質土に相当する。試料の採取位置を図１に示す。

２．分析方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類を「－」で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

３．結果

結果を図２、表１に示す。堆積物の時代観からみた、花粉化石の保存状態は普通である。分析残渣量は比較的多いが、分析残渣の大部分が微粒炭であり、花粉・胞子化石はさほど多くない。そのため、通常よりも多くの残渣を対象として検鏡を行った。

花粉化石群集は、全体的に類似するが、詳細にみると試料No.７と試料No.８を境にして、２分される。

堆積層下部に相当する４試料（試料No.４、５、８、９）は、花粉・胞子化石全体に対して木本花粉の占める割合が大きい。木本花粉ではトウヒ属の出現率が高く、木本花粉全体の50～60％を占める。次いでマツ属が20～30％、モミ属、ツガ属がそれぞれ10％と続く。木本花粉の大部分が針葉樹であり、広葉樹はコナラ亜属やハンノキ属が産出するが、出現率は低率である。草本花粉もヨモギ属やイネ科、アカザ科などが産出するが、出現率は低率である。

堆積層中～上部に相当する５試料（試料№１～３、６、７）は、全体に占める木本花粉の割合が減少し、草本花粉の割合が増加する。木本花粉は、上記した４試料と同様にトウヒ属の出現率が高いが、その出現率は約40％程度に減少し、代わってマツ属が30％以上を占める。また、コナラ属、ニレ属―ケヤキ属などの広葉樹花粉が漸増するほか、試料№２ではスギ属花粉の出現率が高い。草本花粉では、アカザ科の出現率が高く、イネ科、ソバ属、ヨモギ属なども産出する。

栽培植物は、ソバ属とベニバナ属が産出する。ソバ属は、すべての試料から検出されるのに対し、ベニバナ属は試料№１～３、６、７からのみ検出される。また、イネ科花粉中には、イネ属花粉が少量確認されたが、保存状態が悪くイネ属と判別し難いものはイネ科に含めたため、実際のイネ属花粉はもう少し多く含まれた可能性がある。なお、検出されたイネ科花粉中には、野生のイネ科花粉よりも1.5倍以上大きなものが少量確認されたため、他のイネ科とは別に計数した。大型のイネ科花粉は、コムギ、ハトムギ、トウモロコシなどの栽培植物由来のものが多い（藤,1987）ことから、これらも栽培種に由来する可能性がある。大型のイネ科花粉の詳細な区分は、中村（1980）によるイネ科花粉の表面模様による形態区を考慮した検討が必要である。ただし、今回の個体は保存状態が悪く、検出数も少量であったことから、表面観察用の電子顕微鏡観察用試料の作成は困難であり、細分には至らなかった。

４．考察

貯水池 SG01の堆積層より採取された試料は、いずれも針葉樹のトウヒ属の出現率が高いという特徴を示した。また、花粉化石群集は、花粉化石・胞子全体に占める木本花粉の割合およびトウヒ属とマツ属の消長から、２分された。

各試料で高い出現率を示したトウヒ属は、亜高山帯を構成する代表的な樹種であり、長野盆地周辺では志賀高原など標高1,600m以上でみられる種類である。本遺跡は、標高は約525m 付近に位置することから、落葉広葉樹林が発達する冷温帯域にあると考えられ、このような針葉樹が周辺に発達するとは考えにくい。また、本遺跡北側の矢筒山における植物調査においてもトウヒ属は発見されていない（川上ほか、2007）。トウヒ属の中にはヒメバラモミやヤツガタケトウヒなど冷温帯に分布する樹種もあるが、八ヶ岳山麓や南アルプスなどに最終氷期の遺存種として少数が隔離分布しているのみである。

本遺跡の西方、飯綱山の南東山麓に広がる飯綱高原には逆谷地湿原があり、これまでの調査から約10万年以降の植生変化が確認されている（富樫ほか、1999）。逆谷地湿原は、本遺跡より約400mほど標高が高い地点にあるが、おなじ冷温帯域にある。この逆谷地湿原を構成する堆積物（逆谷地泥炭層）の上部泥炭層の花粉分析結果では、トウヒ属の出現率が高い試料は、暦年較正年代で9,000～9,400年以前に相当し、トウヒ属、次いでマツ属が多い針葉樹花粉主体の組成を示し、広葉樹花粉や草本花粉がほとんど産出しないという特徴を示す（富樫ほか、2004）。

本遺跡では、貯水池 SG01の調査時に、基底に泥炭層が確認されている。前述したトウヒ属の分布や逆谷泥炭層の花粉分析結果を考慮すると、調査時に確認された泥炭層は最終氷期のものである可能性が高い。SG01の埋積物は、おそらく泥炭層の二次堆積などの影響により針葉樹を主体とする組成を示した可能性が高く、古植生を正確に反映していないと考えられる。これらの点を考慮し、SG01埋積物の花粉化石群集をみると、堆積層下部に相当する４試料（試料№４、５、８、９）では、イネ属やソバ属などの栽培種が検出されていることから、当時の周辺域での栽培が推定される。また、ヨモギ属などの草本花粉、ハンノキ属やコナラ亜属などの広葉樹花粉も、当時の周辺植生に由来する可能性がある。

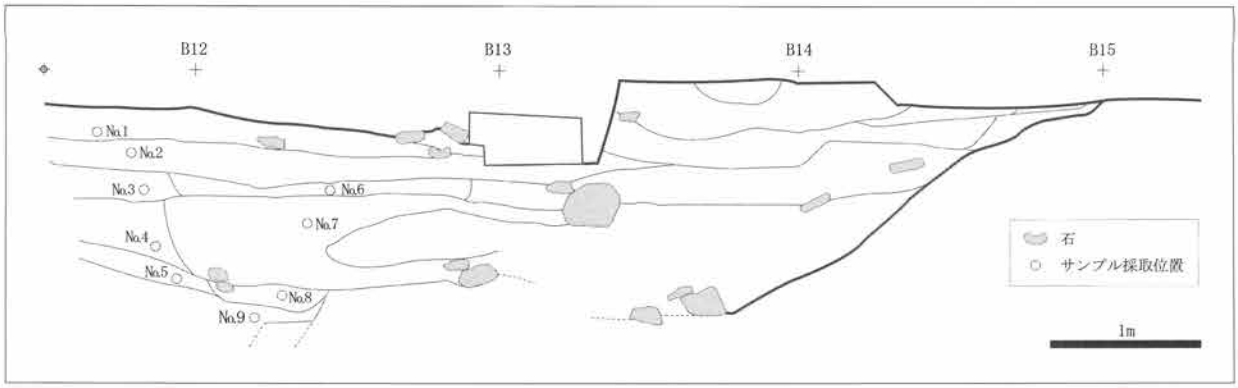
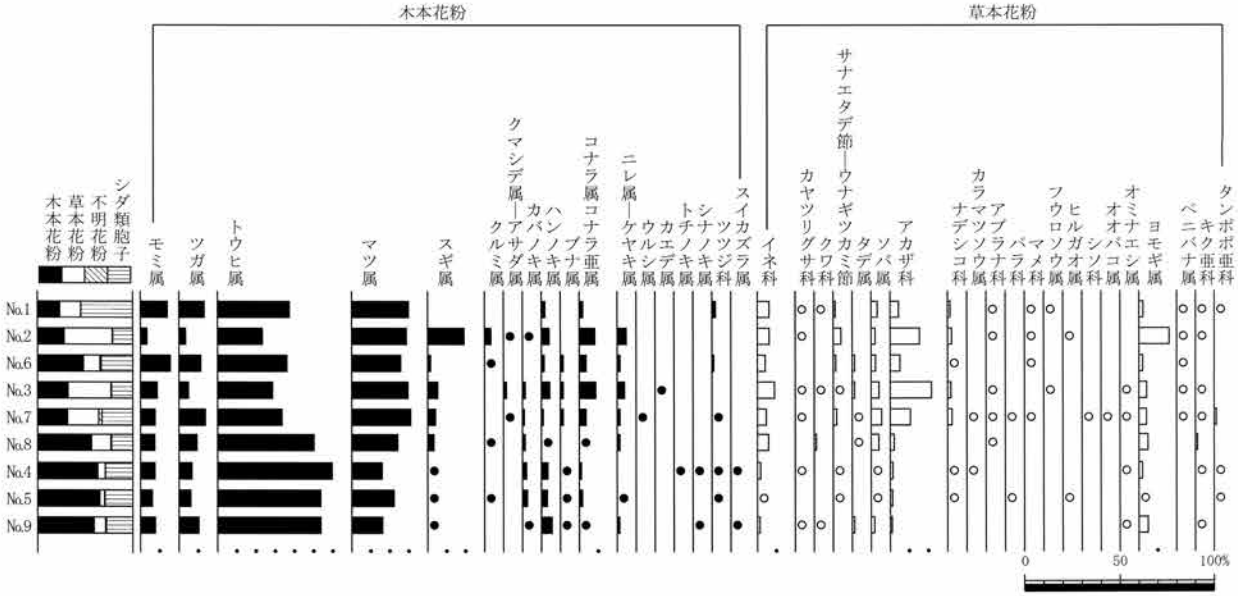
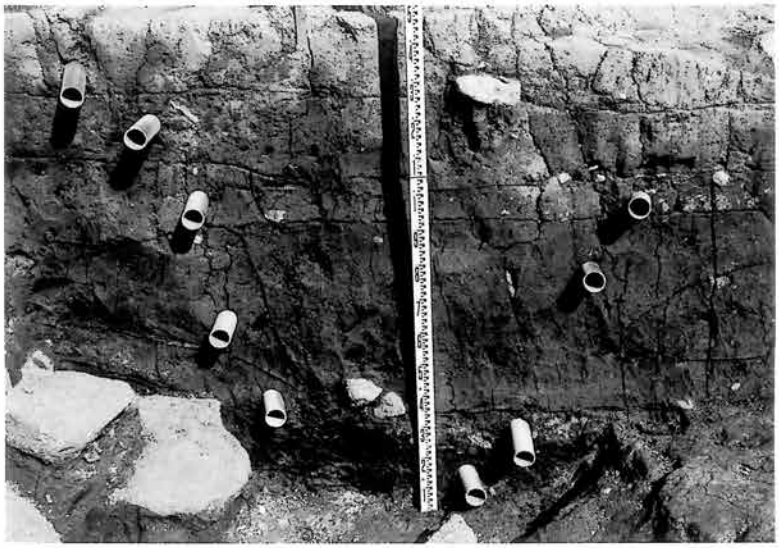


図１．SG01サンプル採取位置



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数により不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。●○は１％未満を示す。

図２．花粉化石群集



一方、堆積層中～上位の５試料（No.１～３、６、７）では、草本花粉の割合が増加し、針葉樹のトウヒ属の出現率の減少と、マツ属の増加という特徴を示した。上述した逆谷地泥炭層では、花粉分析結果および微粒炭量の変化から、中世は森林への火入れになどによる植生破壊の極大期、近世は火入れ行為の抑制と森林の回復、アカマツ林の拡大、植林によるスギ林の拡大が想定されている（富樫ほか、2004）。また、古い写真や聞き取り等による矢筒山の植生変遷調査（富樫,2007）によれば、明治期には森林がほとんど存在せずはげ山状態であり、大正～昭和初期にかけて北側では森林が回復し、南側では大豆、ムギ、クワなどが栽培されていた。その後太平洋戦争前後では畑地が極大を迎え、回復してきた北側の森林も燃料材として伐採された。戦後に入り、桑畑がリンゴ畑に転換されるなどしたが、高度経済成長期以降はこうした農地が放棄されるなどして森林面積が広がる一方、下草刈りなどが行われなくなった結果、里山林の樹勢が衰えるようになったとされている。

したがって、貯水池SG01の堆積層中～上位試料の花粉化石群集の特徴は、逆谷泥炭層の古代～近世および近世以降の堆積物のマツ属とスギ属の消長に対応すると考えられる。遺跡周辺には草本類のアカザ科、ヨモギ属、イネ科、オオバコ属などが生育する草地が広がっていたと推定され、イネやソバ属、ベニバナ属の栽培も示唆される。また、標高の近い野尻湖の花粉分析結果を考慮すれば、クルミ属、クマシデ属―アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属―ケヤキ属などの木本花粉は、周辺の自然度の高い山野などに由来する可能性もある。

引用文献

藤　則雄、1987、考古花粉学．雄山閣、251p.

川上美保子・大塚孝一・富樫　均、2007、飯綱町矢筒山の植物相．長野県環境保全研究所研究報告、３、93-99.

中村　純、1980、日本産花粉の標徴Ⅰ・Ⅱ、大阪市立自然史博物館収蔵試料目録　第12集・13集、大阪市立自然史博物館

富樫　均・酒井潤一・公文富士夫・小林舞子、1999、飯縄火山南東麓の逆谷地泥炭層の層序．日本第四紀学会講演要旨集、29、68-69.

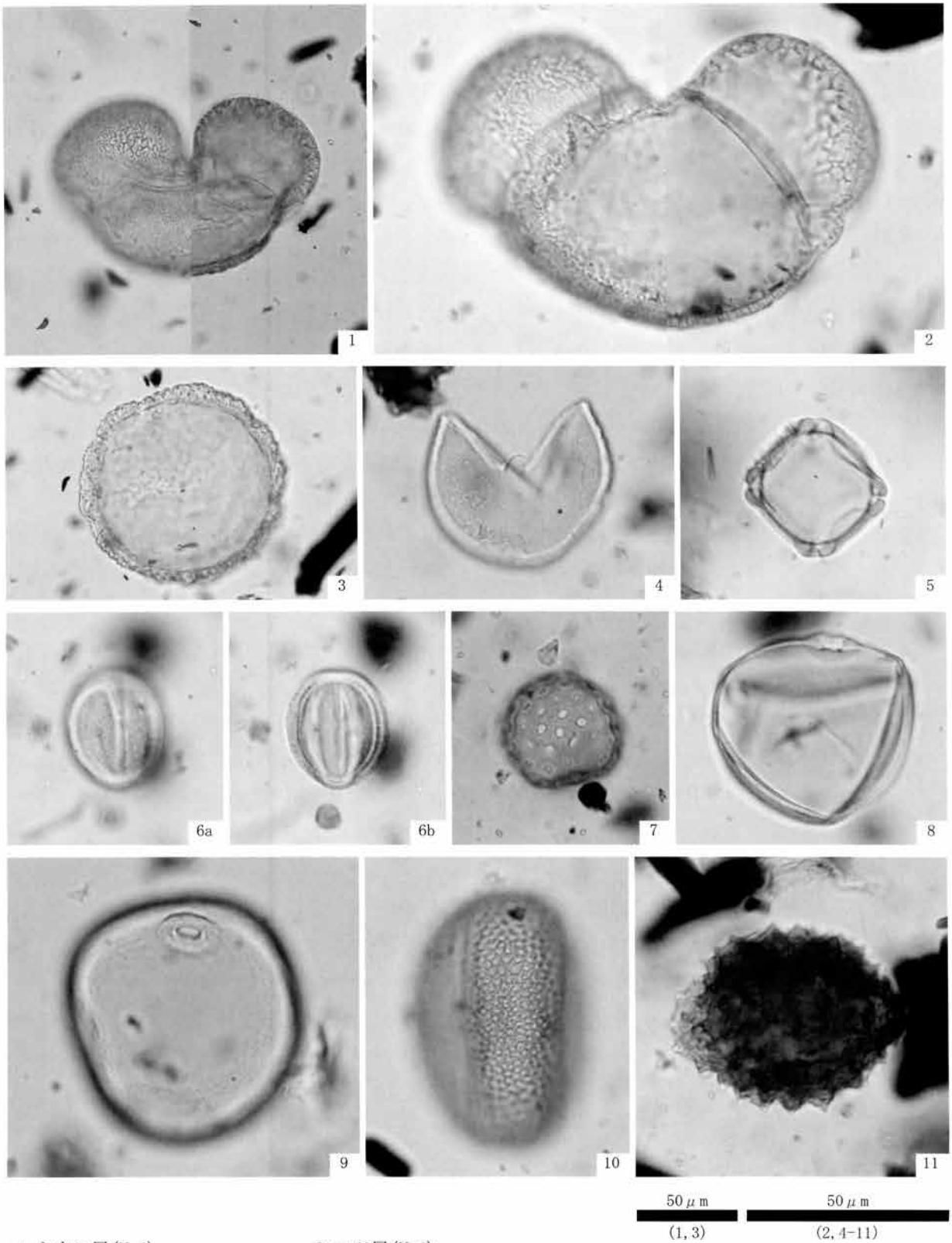
富樫　均・田中義文・興津昌宏、2004、長野市飯縄高原の人間活動が自然環境に与えた影響とその変遷．長野県自然保護研究所紀要、７、1-16.

富樫　均、2007、過去100年にわたる里山の環境変遷復元の試み―飯綱町矢筒山の事例―．長野県環境保全研究所研究報告、３、79-86.

表1．花粉分析結果

分類群	試料名								
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9
木本花粉									
モミ属	15	5	18	20	14	30	15	16	18
ツガ属	14	5	10	18	14	22	27	20	24
トウヒ属	40	34	59	160	123	70	66	108	126
カラマツ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–
マツ属単維管束亜属	4	1	2	3	14	6	3	1	2
マツ属複維管束亜属	8	6	9	–	–	1	–	2	1
マツ属(不明)	20	35	50	40	37	43	58	49	35
スギ属	–	28	11	2	1	3	8	7	2
マオウ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–
ヤマモモ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–
クルミ属	–	5	–	–	1	1	–	2	–
クマシデ属―アサダ属	–	1	3	–	–	–	1	–	–
ハシバミ属	–	–	–	–	3	–	–	–	–
カバノキ属	–	1	3	6	6	–	2	3	1
ハンノキ属	2	6	9	9	7	3	2	2	13
ブナ属	–	–	3	1	1	3	3	–	2
コナラ属コナラ亜属	2	12	18	3	4	7	7	2	2
クリ属	–	–	–	–	2	–	–	–	–
ニレ属―ケヤキ属	–	7	8	–	1	3	3	3	3
アカメガシワ属	–	–	–	–	–	–	–	–	2
ウルシ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–
カエデ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–
トチノキ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–
シナノキ属	–	–	–	1	–	–	–	–	1
ツツジ科	2	–	–	1	1	2	1	–	–
ウコギ科	–	–	–	1	–	–	–	–	–
スイカズラ属	–	–	–	1	–	–	–	–	2
草本花粉									
イネ属?	2	2	3	–	–	2	2	1	1
イネ科(大型)	–	–	–	–	–	1	–	1	–
イネ科	26	30	54	7	2	13	26	20	4
カヤツリグサ科	1	3	3	1	–	–	5	–	2
クワ科	1	–	2	–	–	–	–	4	1
サナエタデ節―ウナギツカミ節	5	21	1	1	1	5	11	–	–
イタドリ節	–	–	5	–	–	–	–	–	–
タデ属	–	–	8	–	–	5	4	2	5
ソバ属	15	11	26	3	2	9	33	15	7
アカザ科	20	79	137	6	4	20	64	8	4
ナデシコ科	6	11	11	1	1	3	14	–	–
カラマツソウ属	–	–	–	1	–	–	1	–	–
キンポウゲ科	–	–	1	–	–	–	–	–	–
タケニグサ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–
アブラナ科	1	4	1	–	–	–	2	3	–
ワレモコウ属	–	1	–	–	–	–	–	–	–
バラ科	–	–	–	–	1	–	1	–	–
マメ科	2	3	–	–	–	1	1	–	–
フウロソウ属	3	–	1	–	–	–	–	–	–
ヒルガオ属	–	1	–	–	1	–	–	–	–
シソ科	–	–	–	–	–	–	1	–	–
オオバコ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–
オミナエシ属	–	–	1	1	–	–	1	–	1
ヨモギ属	10	82	26	8	3	8	24	18	19
オナモミ属	–	6	–	–	–	–	–	–	–
ベニバナ属	1	2	5	–	–	2	1	–	–
キク亜科	4	4	2	3	–	–	6	4	2
タンポポ亜科	3	–	–	1	1	–	7	–	–
不明花粉	1	2	4	1	2	6	21	3	4
シダ類胞子									
ヒカゲノカズラ属	–	–	1	–	1	–	–	–	–
ゼンマイ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–
他のシダ類胞子	246	108	139	121	100	132	200	84	108
合　計									
木本花粉	107	146	206	268	229	194	197	215	234
草本花粉	100	260	287	33	17	69	205	76	46
不明花粉	1	2	4	1	2	6	21	3	4
シダ類胞子	246	108	141	121	101	132	200	84	108
総計(不明を除く)	453	514	634	422	347	395	602	375	388

図版１　花粉化石



1. トウヒ属(No.4)
2. マツ属(No.4)
3. ツガ属(No.4)
4. スギ属(No.9)
5. ハンノキ属(No.9)
6. ヨモギ属(No.2)
7. アカザ科(No.2)
8. イネ属?(No.2)
9. 大型のイネ科(No.9)
10. ソバ属(No.4)
11. ベニバナ属(No.2)

あとがき

平成21年は久し振りに、８ケ月に及ぶ長期の発掘調査を経験した。飯綱町内の芋川氏館跡（第４次）・表町・願生寺跡の中・近世の３遺跡である。いずれも歴史考古学の分野であり、芋川氏館跡や上田市塩田城跡の発掘調査の経験はあるものの、決して得意とする分野ではない。加えて願生寺跡の調査が飛び込みで加わった。これは横山かよ子さんに対応をお願いし、言わば２足のワラジを履くこととなったが、横山さんの努力と、芋川氏館跡・表町遺跡の調査主任を勤めた原田勝美さんの協力もあって、無事責任をはたすことができた。特に、芋川氏館跡の掘跡、表町遺跡の貯水池や上水道関連の遺構など低湿地性遺構の調査では原田さんの土木に関する知識で大いに助けられた。彼とは長野市内で何回かチームを組んで調査をした仲である。

発掘調査された中世の遺跡では歴史上著名な場合を除いては、伝承すら残さない場合が圧倒的に多い。広島県草戸千軒町遺跡は30数年にわたる発掘調査で、芦田川の河底から掘り出された地方の港町で、江戸時代初期の記録にあるものの実態は不明であったが、発掘によって伝承が証明され歴史の表舞台に登場した遺跡のひとつである。表町遺跡も同様である。本文中でも再三にわたり、表町遺跡に係る「伝承」についてふれた。もとより、県埋文センターの調査と本調査だけでは「伝承」を実証するには余りにも資料不足である。しかし、「表町」に係る「伝承」が単なる言い伝えではなく、飯綱町ひいては甲越の戦いという日本歴史上の出来事を解明するさまざまな史実が含まれていると云っても良く、その謎解きに表町遺跡は欠くことの出来ない遺跡であると断言しても良い。

かように、矢筒城館跡を含む表町遺跡は信頼度の高い「伝承」を持ち、それだけにこれらの保存と今後の計画的調査が進められ、新たな歴史像を明らかにする契機に本報告書が役立つならば、関係者のひとりとして望外の喜びである。

報告書を作成するにあたって中・近世考古学研究者の層の薄さと、基本的事項でさえ未解明のままであることを思い知った。そうした中で多くの諸氏、とりわけ陶磁器鑑定の市川隆之・田中暁穂、岩石鑑定の中村由克の各氏にはお世話になった。また先行して調査にあたった中野亮一氏や多数の研究者にも指導・助言や文献の供与を受けた。

報告書の作成は発掘調査と同様に専門性が問われるし、時間がかかる。記録保存を前提とする以上、報告書の内容もより、それにふさわしいものでなければならないと考える。それは遺跡の破壊を前提としているからであるとともに、残った遺跡の保存にも係るからである。

今回報告書の作成にあたり染付など陶磁器類の表現にあたり、かつての紙焼きの印刷技術を用いた。手間が掛る上に印画紙も生産中止であるという中で労をとってくれた信毎書籍の小山義広氏にも感謝したい。今日の報告書はデジタル化や合理化などにより、長短織り交ぜたもので、そこにはかつての図版に見られた鮮明さや手作りの良さが失われつつあると感ずるのは私だけであろうか。

最後に、いつもながら、発掘調査から報告書の作成まで、背後から支えてくれた事務局の諸氏、実務を積極的にこなしてくれたスタッフの皆さんにともども感謝申し上げる。

（笹澤　浩）

表４　表町遺跡（MOM）出土土器・陶磁器観察表（註）遺構名ローマ数字は居住域を示す

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
1	122	ⅢCA11				須恵器	坏C		古代	14.2			ロクロナデ				
2	323	ⅢBF4				〃	〃		〃	12.4			〃				
3	121	ⅢBQ12			215	〃	〃		〃	12.0	6.0	4.0	〃				
4	124	ⅢCA14				〃	〃		〃		6.2		ロクロナデ、回転糸切、底部周辺打欠き、見込み、磨き				
5	118	ⅢBS12				〃	坏B		〃		11.4		付け高台、ロクロナデ、見込み降灰付着			1/4	
6	324	ⅢBF4				黒色土器	坏		〃	12.0			ロクロナデ、内面タテヘラミガキ		黒褐	1/6	
7	308	ⅢBS11				土師器	〃		〃	12.4			ロクロナデ		淡褐	〃	
8	215	ⅢBQ12				黒色土器	〃		〃		7.2		ロクロナデ、底部手持ケズリ(左)、(内)タテヘラミガキ	石英など少	暗褐	1/5	
9	299	ⅢBQ11				〃	〃		〃		5.2		ロクロナデ、回転糸切、(内)タテヘラミガキ	高温石英多	暗橙褐	1/3	
10		ⅢBQ12				土師器	塊B		〃	11.2			ロクロナデ＋ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ、(内)ロクロナデ、一部ハケ	粘土良	黒褐		
11	297	ⅢBQ11				黒色土器	〃		〃	12.8			ロクロナデ(内)ヨコ・タテヘラミガキ	輝石など多	暗褐	1/10	
12	298	〃				〃	〃		〃	10.6			〃	石英多	〃	1/8	
13	309	ⅢBS11				〃	〃		〃		7.2		〃	石英少	褐	1/3	
14	276	ⅢCB11				〃	〃		〃		5.4		ロクロナデ(内)ミガキ		明淡橙白	〃	
15	87	ⅢBQ14				灰釉陶器	〃	大原2号窯	〃	18.0			ロクロナデ		灰白	1/10	
16	85	ⅢCD12				〃	〃	光ヶ丘1号窯	〃		7.2		ロクロナデ、釉ハケ、付け高台		〃		
17	904	ⅢCA11				〃	ⅢB	〃	〃				ロクロナデ、釉ハケ		〃	1/12	
18	905	〃				〃	〃	大原2号窯	〃	12.0			ロクロナデ		〃	1/8	
19		ⅢBS11			190	〃	〃	黒笹90号窯	〃							1/18	
20	119	ⅢBQ10			371	〃	手付瓶	猿投窯	〃		9.0		回転糸切、ケズリ出し、見込み　灰釉・敲打痕	花崗岩片少	灰白		
21	310	ⅢBS12				土師器	甕		〃				ロクロナデ	石英など少	黒褐		
22	70	ⅢBR14				〃	〃		〃	31.2			〃	チャート雲母少			
23	312	ⅢBR12				〃	小型甕		〃		6.6		ロクロナデ、カキ目、回転糸切	石英など多	暗赤褐		
24	95	ⅢBQ11				〃	〃		〃		6.0		ロクロナデ、回転糸切、瓦質	石英など少	暗灰一褐		
25	270	ⅢCA12				〃	〃		〃		5.8		ロクロナデ、回転糸切		赤褐	1/2	
26	100	ⅢBF2				須恵器	甕		〃		10.0		ロクロナデ、タタキ、糸切＋ケズリか		暗黄灰	1/5	中世(?)
27	98	ⅠVE19			596	〃	〃		〃				巻上げロクロ(巻上痕)		暗灰		
28	94	ⅢCA12				〃	〃		〃				巻上げロクロ、タタキ		青灰		
29	346	ⅢBL11				土師器	高坏		古墳				タテハケ(細い)、坏接合部内面に刺突痕、(内)ミガキ		茶褐		
30		ⅢBF4			504	須恵質	甕		中世				タタキ	硬質	黄灰		
31	136	ⅢC　Z				土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA3	〃	8.8	4.6	2.5	ロクロナデ、糸切	A	暗黄灰	1/3	
32	278	Z				〃	〃	〃	〃	6.8	3.6	2.0	ロクロナデ、糸切(太い)	C	茶褐	1/2	
33	23	〃				陶器　古瀬戸	天目	後期様式	Ⅳ期		4.0		ケズリ出し高台(左)、鉄釉		黄灰		
34	636	〃				陶器　越中瀬戸	壺				10.6		鉄釉、糸切(釉なし)	石英微	暗黄灰		
35	682	〃				陶器　肥前	小皿	端反形	Ⅰ				灰釉		〃	1/12	
36	86	〃				磁器　染付	〃		不明		3.4		透明釉				
37	983	ⅢCA11	SH01	2		土師器	Ⅲ(カワラケ)	Ⅰ		10.4			口縁部ヨコナデ、体部下半(外)ケズリ	C	黄灰	1/8	摩滅・不鮮明
38	280	ⅢCB13	〃	〃		〃	〃	〃		9.3			〃	A	黄白	1/6	ⅢCD13と接合
39	281	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡA2		10.0			ロクロナデ	C	黒褐	1/8	
40	279	〃	〃	〃	88	〃	Ⅲ(澄明Ⅲ)	〃		10.8	6.0	3.2	ロクロナデ　糸切	A	橙白	1/3	
41	268	ⅢCA12	〃	〃		〃	Ⅲ(カワラケ)			10.8			ロクロナデ(丁寧)	C	黄灰	1/8	
42	985	ⅢCA14	〃	〃		〃	〃	ⅡB4		6.8	6.0	1.8	ロクロナデ(丁寧)　糸切、板目	B	茶灰	1/5	
43	285	ⅢBT13	〃	〃		〃	Ⅲ(澄明Ⅲ)	ⅡA4		6.2	4.0	2.0	ロクロナデ、糸切＋ケズリ(?)	A	黄白	完	
44	255	ⅢCC14	〃	〃		〃	〃	ⅡD2		11.0	5.2	3.0	ロクロナデ　糸切	C	黒褐	1/2	
45	245	ⅢCB11	〃	〃	24	〃	Ⅲ(カワラケ)	〃		9.8	4.8	2.0	〃	A	橙白	1/5	
46	269	ⅢCA12	〃	〃		〃	〃	〃		11.0	6.0	3.0	ロクロナデ(丁寧)　糸切	〃	〃	〃	
47	248	ⅢCC12	〃	〃		〃	〃	ⅡA2		10.4	6.0	3.4	ロクロナデ(＋ミガキ?)	〃	〃	1/3	
48	263	ⅢCC13	〃	〃		〃	Ⅲ(澄明Ⅲ)	〃		10.4	6.6	3.5	ロクロナデ　糸切	B	茶灰	1/4	
49	182	ⅢCC12	〃	〃		〃	Ⅲ(カワラケ)	〃		10.2	6.2	3.0	ロクロナデ(丁寧)　糸切	A		1/6	
50	246	〃	〃	〃		〃	〃	〃		9.6	5.6	3.0	〃	C	橙褐	〃	
51	253	〃	〃	〃		〃	〃	〃		10.0	5.6	2.6	ロクロナデ、糸切、内面に黒斑	A	黄灰	1/3	
52	244	ⅢCD12	〃	〃		〃	〃	ⅡD1		13.2	8.0	2.8	ロクロナデ、底部手持ケズリ、黒斑	〃	〃	1/5	
53	264	ⅢCC13	〃	〃		〃	〃	〃		12.3			ロクロナデ	〃	橙白	〃	
54	254	ⅢCC14	〃	3	124	〃	Ⅲ(澄明Ⅲ)	〃		12.0	5.9	2.4	ロクロナデ、糸切＋手持ケズリ	〃	橙褐	完	
55	252	ⅢCC12	〃	2		〃	〃	ⅡA3		8.5	5.6	2.6	ロクロナデ　糸切	〃	灰白	完	
56	282	ⅢCB13	〃	〃		〃	〃	ⅡA4		6.8	3.8	2.0	〃	B	橙褐	1/4	
57	273	ⅢCA13	〃	〃		〃	Ⅲ(カワラケ)	〃		6.9	4.1	2.0	〃	A	橙白	1/5	
58	275	ⅢCB12	〃	3	216	〃	〃				3.8		ロクロナデ、見込みナデ、糸切＋板目	C	茶褐	1/2	

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
59		ⅢCB12	SH01	3		土師器	Ⅲ(カワラケ)	Ⅰ			5.2		ヨコナデ、見込みハケ、(底)オサエ	C	黄褐	1/4	
60	249	ⅢCC12	〃	2	121	〃	Ⅲ(燈明皿)底部有孔土器	ⅡA4		6.0	3.5	1.5	ロクロナデ　糸切、油煙	A		完	焼成後穿孔
61	274	ⅢCA13	〃	〃		〃	Ⅲ(底部有孔土器)	〃		5.6	3.6	1.8	ロクロナデ　糸切	〃	橙白	1/3	焼成前穿孔
62	271	ⅢCA12	〃	3		〃	香炉				7.5		3脚(貼付け)　ロクロナデ、底部外面ケズリ	〃	灰白	1/4	
63	906	ⅢCD12	〃	2		陶器　肥前	小皿	丸形	Ⅰ－2	13.8			灰釉、(暗黄緑釉)		暗灰	1/5	
64	11	ⅢCC12	〃	〃	1	〃	〃		Ⅰ		3.2		灰釉(体部下半まで)、ケズリ出し高台		暗紫	1/3	
65	418	〃	〃	〃		磁器　肥前染付	碗		Ⅱ		5.8		外面圏線、見込みに二重圏線・菊花文、畳付無釉、紅彩			〃	内面細粒(鉄)少量付着
66	90	〃	〃	〃		陶器　肥前	〃		Ⅲ～Ⅳ	11.8			透明釉		茶灰	1/10	
67	31	ⅢCB12	〃	〃	11	中国磁器　青花	Ⅲ		16C前		9.0		二重圏線、草文			1/8	
68	27	ⅢCC14	〃	〃		〃	〃		〃	12.2			(外)圏線、草文、(内)二重圏線・圏線			〃	
69	901	ⅢCA12	〃	〃		中国青磁　龍泉窯	碗		12C				画花文				
70		ⅢCB12	〃	〃	146	中国青磁　龍泉窯(?)	玉縁碗		15C前～中	13.4				密	白灰	1/12	
71	6	ⅢCC13	〃	〃	119	中国青磁	碗		15C後		4.4		圏線、見込みにスタンプ文(文字不明)			略存	
72		ⅢCB14	〃	〃	28	中国青磁　同安窯	〃		12C				内外面に櫛描文				
73		ⅢCA11	〃	〃	25	中国青磁	蓮弁文碗		15C後		14.6					1/7	
74	902	ⅢCA13	〃	〃		中国青磁　龍泉窯	〃		13C				鎬蓮弁文				
75	423		〃	〃		中国青磁	細線蓮弁文碗		15末～16C初								
76	16	ⅢCB12	〃	〃	299-2	〃	細線蓮弁文碗(幅広)		15C後半		9.0		見込みに画花文、高台内釉なし、回転ケズリ			2/3	
77	18		〃	〃	299-1	〃	輪花皿		〃	11.6						1/8	
78		ⅢCA11	〃	〃	10	中国陶器	天目		15末～16C	11.0			鉄釉2回の柄掛け体部下半まで	淡白色		〃	
79		ⅢCA13	〃	〃	48	陶器　古瀬戸	〃	後期様式	Ⅰ期	12.2			鉄釉	青味帯びた白灰		1/4	14C後半
80		ⅢCA11	〃	〃	128	中国青磁	皿		15C(?)				蓮花文				
81	439	ⅢCB13	〃	〃		〃	〃		〃				〃				80と同一片(?)
82	24	ⅢCA14	〃	〃		陶器　古瀬戸	天目	後期様式	Ⅰ期		4.4		輪高台、ケズリ出し、体部下半～底部無釉			1/3	
83	116	〃	〃	〃		瓦質土器	擂鉢				12.0		底部板目、石英砂多量付着(離れ砂)、底部内面卸し目(3mm)磨耗著しい、体部との接合ユビオサエ	石英など少		1/4	内耳鍋と成形類似
84	26	ⅢCA13	〃	〃		中国白磁	Ⅲ		15C		9.0		体部中央までつけ掛け	灰白(黄色帯)		1/5	産地不明
85	25	ⅢCA14	〃	〃		陶器　古瀬戸	卸皿	前期様式	Ⅱ期	12.4	9.0	3.2	灰釉(刷毛)	暗灰	下半淡黄桃	1/8	
86	128	ⅢCA13	〃	〃	62	須恵器(須恵質)	擂鉢		中世				体部外面タタキのちユビナデ、口縁ロクロナデ、内面摩滅卸し目3mm	やや瓦質	青灰	1/16	
87		ⅢCC12	〃	〃	5	須恵器　珠洲	壷		Ⅵ				タタキ(打圧密度8目)、(内)ユビナデ、外面灰かぶり	灰色			
88	1053	ⅢCC13	〃	〃		〃	甕・壷		Ⅴ				タタキ(打圧密度10目)、(内)ユビナデ	硬質			
89		ⅢCB12	〃	〃	144	〃	〃		Ⅲ				タタキ綾杉文(打圧密度13目)	〃	青灰		
90	132	ⅢCA13	〃	3		瓦質土器	擂鉢						オサエのちナナメナデ　卸し目(3mm)8目	石英など少	灰		
91	134	〃	〃	〃	45	須恵器　珠洲	〃		Ⅵ				体部下半(外)ヨコヘラナデ(雑)、卸し目密接、1単位3.0～3.5cm15目　擂原体先端ワレか、内面磨耗著しい	石英少やや粗	〃		
92	370	ⅢCA12	〃	2		須恵器	壷・甕						タタキ、巻き上げ痕、(内)ヘラナデ	やや粗	青灰		
93	1042	ⅢCC12	〃	〃		須恵器　珠洲	擂鉢		Ⅱ				ロクロナデ、(内)ロクロナデ(雑)、卸し目波状	白粒微	〃		
94	1057	ⅢCA13	〃	〃		須恵器	〃						卸し目1単位(3.5cm)11条まで確認　硬質、(内)ナデ、(外)ケズリ	器壁に白色層石英粒少			
95		ⅢCC13	〃	〃	6	須恵器　珠洲	甕		Ⅵ				タタキ(打圧密度8目)、(内)ナデ、硬質	白粒少	暗茶褐(内)青灰		
96	1055	ⅢCA13	〃	〃		〃	〃		Ⅱ				タタキ(打圧密度15目)　(内)当て具痕、一部ナデ、硬質	白粒微	青灰		
97	99	ⅢCB12	〃	〃	55	〃	〃		Ⅳ				タタキ(打圧密度10目)、(内)当て具痕のちタテ・ナナメナデ	〃	〃		
98	272	ⅢCA12	〃	〃		瓦質土器	鉢			(20.4)			ロクロナデ、成形ラフ　硬質		灰	1/12	
99	58	ⅢCC14	〃	〃		土師器	内耳鍋	A2		26.0			(外)口縁部ロクロナデ②、口縁下端～頸部ヘラナデ③、体部ナデ①、端部ヘラナデ平坦、(内)口縁部ロクロナデ、体部ユビナデ①	石英・雲母少	暗褐	1/8	
100	57	〃	〃	〃		〃	〃	〃		26.4			(外)口縁部ロクロナデ②・体部ナデ①、(内)ナデ①、以下不明	〃	〃	1/10	
101	78	ⅢCC12	〃	〃		〃	〃	〃		27.0	22.0	16.0	口縁部ロクロナデ①　体部下半(外)不明(内)上半ナナメナデ②、下半ロクロナデ	〃	〃	1/3	
102	77	〃	〃	〃		〃	〃	〃		26.0			口縁部ロクロナデ①、体部内面ロクロナデ②、体部外面不明	〃	〃	1/8	
103	56	ⅢCC14	〃	〃	89	〃	〃	〃		25.4			口縁部ロクロナデ②、頸部ロクロナデ、体部ユビナデ②、(内)体部ナデ①、口縁ロクロナデ②	〃	〃	1/4	
104	74	ⅢCB12	〃	〃	216	〃	〃	〃		31.0	27.2	16.5	口縁部ロクロナデ②、(外)頸部櫛による沈線③、(外)体部ナデ①・上半沈線、(内)耳部ハケ・オサエ、体部下半ロクロナデ(?)	〃	〃	〃	

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
105	43	ⅢCB14	SH01	2	60	土師器	内耳鍋	A2					(外)口縁部ロクロナデ、内耳貼付けオサエ、(内)オサエ	石英・雲母少	褐		
106	44	ⅢCC14	〃	〃	89	〃	〃	〃		29.0			口縁部ロクロナデ②、体部ユビナデ①、頸部ロクロナデ②	〃	明黄褐	1/8	
107	79	ⅢCB12	〃	〃		〃	〃	〃		26.2			口縁部ロクロナデ②、体部ユビナデ①、(内)耳部ハケ	〃	〃	1/6	
108	82	ⅢCC12	〃	〃		〃	〃	A1		29.0			口縁部ロクロナデ	〃	〃	1/10	ⅢCB12と接合
109	45	ⅢCC14	〃	〃		〃	〃	〃		26.4			口縁部ロクロナデ③、体部内面カキ目②、外面ユビナデ①	〃		1/5	SD25と接合
110	54	ⅢCC13	〃	〃		〃	〃	〃					口縁部ロクロナデ②、体部オサエ①	〃	黄褐		
111	75	ⅢCC12	〃	〃		〃	〃				22.0		体部下半(外)ナナメハケ・(内)ハケ、ユビナデ、底部(外)ケズリ	〃		1/8	あるいはAか
112	46	ⅢCB14	〃	〃		〃	〃				28.8		体部下半ヨコまたはナナメナデ	〃	暗黄褐	〃	煤なし
113	48	ⅢCC14	〃	〃		〃	〃				25.4		体部下半(外)ナナメハケ、最下段ヨコハケ　下半～底部(内)ヨコハケ(回転利用か)	〃	茶褐	〃	
114	52	ⅢCC13	〃	〃		〃	〃				25.0		底部(内)ユビナデ	〃	〃	〃	
115	135	ⅢCB13	〃	〃		〃	〃				24.0		体部(内)ナナメハケ、体～底部(内)ロクロナデ(か)(最終)	〃	茶白	〃	
116	982	ⅢCA12	SG01	5		〃	Ⅲ(カワラケ)	I		10.8			口縁部ヨコナデ、体部下半(外)手持ケズリ、沈線	C	黄灰	1/10	
117	257	ⅢCC14	〃	〃		〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡA2		9.2			ロクロナデ	A	黄白	1/5	(内)油煙、全面煤
118	265	ⅢCB14	〃	〃	93	〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡC2		9.3	5.7	3.0	口縁部ロクロナデ、体部下半ユビナデ、底部糸切＋板目	C 砂粒微	茶褐	1/10	
119	256	ⅢCC14	〃	4	149	〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡA4		6.8				B 砂粒微	橙灰	1/2	(内)油煙
120		ⅢCB13	〃	〃		〃	Ⅲ(カワラケ)						底部糸切＋板目	B	茶褐	1/3	
121		ⅢCB14	〃	〃	85	陶器　古瀬戸	天目	後期様式	Ⅳ期	11.4			鉄釉、体部下半(外)ケズリ・露胎			1/4	
122	197	ⅢCD13	〃	3	322	土師器	内耳鍋	A2		28.0			口縁部ロクロナデ②、体部(外)ユビナデ①、(内)ハケ①	雲母・石英少	黒褐	1/8	
123	80	ⅢCC12	〃	2	92	〃	〃	〃		22.0			口縁部ロクロナデ②、頸部ロクロナデ③、体部下半(外)ナデ①、(内)ナデ①	〃	〃	1/4	
124	55	ⅢCC14	〃	〃	2	〃	〃	〃		31.5			口縁部(外)ロクロナデ②、頸部(外)ロクロナデ③、体部(外)ユビナデ③、体部(内)ハケ①、口縁(内)ロクロナデ②	〃	茶褐	1/8	
125	64	〃	〃	6	70	〃	〃	〃					内面ユビオサエ	〃	黒褐		
126		ⅢCB14	〃	4	156	須恵器　珠洲	壺		Ⅳ				打圧密度9目、内面タテヘラナデ		青灰		
127		ⅢCA12	〃	3	193	〃			Ⅱ～Ⅲ				打圧密度15目	白粒少	〃		器面ガラス化
128	109	ⅢCC14	〃	〃		〃	擂鉢		〃		10.8		ロクロナデ、底部外面に使用による磨耗痕、糸切		青白	1/4	
129	127	ⅢCC13	〃	〃	141	〃	〃		Ⅳ		14.0		ロクロナデ、卸し目7目、底部板目	石英微	青灰	1/10	
130	112	ⅢCA13	〃	5	202	〃	〃		〃		10.8		ユビナデ、卸し目7目集合線化、板目	石英少	暗青灰	1/5	
131	169	ⅢCC13	SE08	6	326	土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡD1		11.3	6.0	3.3	ロクロナデ(丁寧)、糸切	A 砂微	明橙白	1/3	
132	170	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡD2		10.0	5.2	3.0	糸切、黒斑、ロクロナデ	A 雲母微	〃	〃	
133	165	ⅢCC12	〃	〃	362	〃	〃	〃		10.2	4.6	2.7	ロクロナデ(丁寧)、糸切	A	橙灰	〃	
134	177	ⅢCB13	〃	〃		〃	〃	〃		10.4			ロクロナデ(丁寧)	〃	明黄白	1/8	
135	195	ⅢCC13	〃	5		〃	〃	ⅡA2		10.8			ロクロナデ	B	黄褐	1/4	
136	196	〃	〃	6		〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡD1		13.8	6.6	3.0	ロクロナデ(丁寧)、糸切＋ケズリ	A		1/5	
137	247	ⅢCC12	〃	5		〃	Ⅲ(カワラケ)	〃			7.0		ロクロナデ、糸切	C		1/4	
138	251	〃	〃	6		〃	〃	ⅡC3		7.6	6.0	2.0	〃	A		1/6	
139	250	〃	〃	7		〃	〃	ⅡA4		6.8	4.0	2.0	ロクロナデ、糸切、底部内面ナデ	C	茶褐	完	
140	167	ⅢCC13	〃	6	328	〃	〃	〃		6.2	3.6	1.8	ロクロナデ、糸切	B 雲母少	橙褐	〃	
141	261	〃	〃	〃	169	〃	〃	〃		6.4	2.0	3.0	〃	C	茶褐	〃	
142	262	〃	〃	〃		〃	〃	〃		6.6	3.8	2.0	ロクロナデ、糸切	B	暗褐	1/5	
143	168	ⅢCC12	〃	7	404	〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	〃		5.6	3.2	1.3	ロクロナデ、糸切(?)	C	黄褐	4/5	
144	166	ⅢCB13	〃	6		〃	〃				5.0		ロクロナデ、糸切				
145	81	ⅢCC12	〃	〃		〃	鉢			(27.0)			ロクロナデ、口縁に僅かに煤	雲母・石英微	茶褐	1/8	擂鉢(?)
146		ⅢCC13	〃	〃	168	中国磁器　青花	Ⅲ		16C前				草花文				
147	21	ⅢCC12	〃	〃	403	陶器　瀬戸・美濃	内禿Ⅲ	大窯	Ⅲ	10.4	6.2	2.0	鉄釉　輪花　見込み中央釉剥ぎ			1/5	最下層
148	15	ⅢCC13	〃	7	316	中国青磁	玉縁碗		15C中		4.8		高台内に高台にそって同心円状釉剥ぎ、トチン状の窯滓付着			底部ほぼ存	ⅢCB13と接合
149	4	ⅢCB12	〃	〃	357	中国青磁　龍泉(?)	〃		15C前～中		4.8		底部高台から内側釉なし、右回りナデ				
150		ⅢCC13	〃	5	163	土師器	内耳鍋	A2		30.0			口縁部ロクロナデ②、体部(内)ユビナデ(ハケ)①、(外)ユビナデ①、端部ヘラナデ平坦	白粒少 中瓦質化	黒褐	1/16	外炭化物多
151	53	〃	〃	4	141 -1	〃	〃	A1		30.0			口縁部ロクロナデ(顆著)③、頸部外面鎚沈線②、体部外面上部ヨコ・ナナメヘラケズリ①、下半ユビナデ①、体部内面ロクロナデ(回転遅速)①、黒斑	石英少 硬質	黄褐	1/8	体部下半底部に移行ただし底部形態不明(平底か)
152	1065	〃	〃	6		〃	〃				26.4		体部下半外面タテヘラナデ、底部粘土を盛り接合ナデ、(内)ロクロナデ	白色粒少		1/12	
153	49	〃	〃	〃	170 -1	〃	〃	A2		29.8			口縁部(外)ロクロナデ②、頸部ヘラ使用のロクロナデ③、体部ナデ①、口縁(内)ロクロナデ②、体部(内)ハケ①、下半ロクロナデ(?)	石英・雲母微 硬質	黒褐	1/4	

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
154	50	ⅢCC13	SE08	6	170-2	土師器	内耳鍋						口縁部ロクロナデ、頸部横によるナデ、体部ナデ、耳部ロクロナデのち貼付けナデ、口縁部フラット(ヘラナデ)	石英少	黒褐		
155	76	〃	〃	〃		〃	〃	A2					口縁部粘土紐巻上げ、ロクロナデ成形のち耳部貼付け粘土そえ、内面はユビオサエ、外面は横によるナデ、口縁端部ヘラでナデ平坦とする	石英・雲母微	〃		
156	270	ⅡCA12	SE07	4		〃	小型甕		古代				ロクロナデ、糸切		茶褐		
157	107	ⅢCB12	〃	6	315	須恵器　珠洲	擂鉢		Ⅳ	(34.0)			片口、ロクロナデ、卸し目11条、密接	白粒微	青灰	1/12	
158	19	〃	〃	〃	315-1	中国青磁	玉縁碗		15C前～中	14.4			暗灰色僅かに青緑色を帯びる			1/8	龍泉(?)
159		〃	〃	〃	315-2	陶器　古瀬戸	花瓶	中期様式	Ⅰ・Ⅱ期		6.4		灰釉、底部釉なし、糸切				
160		ⅢCA13	〃	5	84・96	須恵器　珠洲	壺		Ⅴ				綾杉タタキ　(内)タテヘラナデ				焼けひずみ
161	131	ⅢCB13	〃	6	203	〃	擂鉢		〃				ロクロナデ、卸し目9目	茶灰色	灰		炭化物付着
162		ⅢCB12	〃	〃	309	〃	壺		Ⅴ・Ⅵ				打圧密度8目、(内)タテヘラナデ		青灰		内面煤付着
163	1054	ⅡCA13	〃	5		須恵器	甕		古代				タタキ、(内)ハケ				
164		ⅡCA12	SH01	2	166	須恵器　珠洲	〃		Ⅱ				タタキ15目　当具痕		青灰		
165	1056	ⅢCB13	〃	〃		須恵器	〃		古代				タタキ2種類の青海波	断面チョコレート色	〃		北陸系タタキ目
166	90	ⅢCC13	〃	〃	6	〃	〃		〃	32.0			口縁タタキ＋ロクロナデ、表面ガラス質	〃	〃	1/10	
167	267	ⅢCB14	〃	5	192	土師器	埦B		〃		5.0		付け高台		黄褐		
168	111	ⅢBT11	SH06	〃	412	須恵器　珠洲	擂鉢		Ⅲ・Ⅳ				ロクロナデ、卸し目6目、磨耗、底部外面静止糸切、板目	白粒微	青灰	略存	
169	114	ⅢBT12	〃	〃	235	〃	〃		Ⅵ		15.0		卸し目11条、底部外面ナデ	白粒少やや軟質		1/8	
170	104	ⅢBT10	SH02	2	559	須恵器	鉢		中世		26.2		ロクロナデ①、体部下半タテケズリ②、ロクロ回転遅速、成形雑	中央白色	灰	〃	
171	1068	ⅢBS11	〃	〃		瓦質土器	内耳鍋						体部(外)上半ロクロナデ、下半オサエ、(内)ナデ、外面煤多量	石英少	青灰	1/10	断面中央白色
172	675	ⅢBI8	SE06	1a		陶器　瀬戸・美濃	端反Ⅲ	大窯Ⅰ								1/12	
173	681	〃	〃	〃		〃	〃	〃								〃	
174		〃	〃	〃	530	土師器	内耳鍋	底部			20.0		(内)ユビナデ	石英多雲母微	黒褐	1/10	
175		〃	〃	〃	531	陶器　瀬戸・美濃	端反Ⅲ	大窯Ⅰ		11.0						1/12	
176		〃	〃	〃	529	〃	丸Ⅲ	大窯Ⅱ						暗灰		1/20	
177		〃	〃	〃	516	中国磁器　青花	Ⅲ	底部	15末～16C前				唐草文、花文、二重圏線、畳付釉剥ぎ				
178		ⅢBI9	〃	〃	515	中国青磁　龍泉窯	鉢	〃	12前～13C後		6.4		底部回転ケズリ出し			1/6	青鉢ⅢBH2と接合
179		ⅢBI8	〃	〃	525	中国青磁	碗		15末～16C前				細線蓮弁文				
180		〃	〃	〃	524	〃	〃									1/18	
181	700	〃	〃	3e・6		土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA2		9.6			ロクロナデ、油煙付着(?)	A	黄灰	1/6	瀧明Ⅲ(?)
182	7	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡA3		8.2			ロクロナデ	〃	茶白	1/12	
183		〃	〃	〃		〃	〃	ⅡA2		9.4			〃	〃	橙白	1/6	
184	8	〃	〃	〃		〃	〃				6.0		ロクロナデ、体部下半～底部ケズリ(か)	〃		1/4	
185	696	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡA3		8.8	4.6	2.1	ロクロナデ	〃	橙白	1/8	
186	6	〃	〃	〃		〃	〃	〃		8.6	5.0	2.1	〃	〃	〃	1/10	
187	697	〃	〃	〃		〃	〃				5.0		ロクロナデ、砂微量	〃	明黄褐	1/5	
188	9	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡB4		6.4	4.6	1.7	ロクロナデ、体部下半手持ケズリ	〃	黄灰		
189	5	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡA4		5.4	3.2	1.7	ロクロナデ				
190		〃	〃	3c	555	中国青磁	Ⅲ		13C前	14.0			画花文				
191		ⅢBI9	〃	1b	560	中国磁器　青花	碗		15末～16C前				畳付釉剥ぎ				
192		ⅢBI8	〃	3a	557	陶器　瀬戸・美濃	天目	大窯Ⅰ		11.8			鉄釉				
193	702	〃	〃	1a		焼土片											
194	36	〃	〃	3e		陶器　古瀬戸	平碗	後期様式	Ⅳ期				(内)灰釉、ロクロナデ			1/12	
195	695	ⅢBI9	〃	〃		土師器	内耳鍋						口縁内面に沈線(1条)		黒灰		
196	693	ⅢBI8	〃	〃		〃	〃						ロクロナデ				
197	694	〃	〃	〃		〃	〃						〃	石英・雲母微	暗茶褐		
198		ⅢBI9	〃	1a	553	〃	〃	A2					口縁ロクロナデ②、体部(外)ユビナデ①、(内)ユビオサエ、ナナメハケ①	石英・褐粒多	黒褐	1/12	
199		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃					口縁ロクロナデ、端部手切シャープ	石英・雲母微			
200	161	ⅢBI8	〃	3d	569	〃	〃	A1		32.2			口縁ロクロナデ②、体部ナデ①、積上げ痕	高温石英多	暗褐	1/6	
201	161-2	〃	〃	3c	556	〃	〃	A2		29.4	23.0	16.0	口縁～底部ロクロナデ(コテ使用)、耳部貼付け、(内)口縁～体部中位にタール状炭化物付着、炭多量	石英・雲母多	黒褐	底部欠	
202	162	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		26.0	21.0	13.5	ロクロナデ②、体部ナデ①、体部下半(外)カキ目(内)ナナメナデ、耳部貼付け	〃	暗褐	〃	
203	163	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		22.4			口縁部ロクロナデ②、体部オサエ＋ユビナデ①	〃	〃	1/5	
204	1007	ⅢCF14	SE02	7		〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA2		9.2	5.0	2.7	ロクロナデ、糸切	B	明褐	1/4	ⅢCD13と接合
205	980	〃	〃	5		〃	〃	〃			4.6		ロクロナデ、糸切＋ケズリ	A	橙白	〃	
206	910	〃	〃	〃		中国青磁	輪花Ⅲ		15C後半				口縁内面に輪花文			1/10	
207	88	〃	〃	4		灰釉陶器	埦	大原2号窯			8.5		見込みに重ね焼き痕、底部外面に赤色顔料			1/6	転用硯
208		〃	〃	5	104	土師器	内耳鍋	A2					ロクロナデ、耳部貼付		茶褐		
209	217	ⅠVB16	SE04	4	543	〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡC3		8.8	4.4	5.2	ヨコナデ、見込みユビナデ、底部(外)巻上げ痕か?	C高温石英・雲母少	暗黄白	1/2	

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
210	175	I VB16	SE04			土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡC3		8.0			ヨコナデ、見込みナデ	C 砂少	淡茶褐		
211	689	I UT13	SE10	3		〃	〃	ⅡA2		10.2	5.6	2.3	ロクロナデ、糸切、焼成不足	C 細砂微	暗褐	1/4	磨滅 胎土異質
212	690	〃	〃	4		〃	〃	ⅡA1		11.0	6.4	3.0	ヨコナデ(?)、体部ケズリ(?)	A チャート少	黒褐	1/8	器面磨耗
213	137	〃	〃	1	598	〃	内耳鍋	A2		26.4	20.0	17.5	口縁部ロクロナデ②、体部(外)ナナメナデ①	石英・雲母多	〃	1/3	
214	787	ⅢBH6	P.36			〃	〃										
215	788	〃	〃	埋土		〃	〃	A2					ロクロナデ	石英・雲母少	明茶褐		
216	978	ⅢCD15	SK 1657	〃		陶器	擂鉢			26.0			内面沈線、鉄釉、硬質	石英少	黒～茶褐	1/10	胎土中央灰色
217	977	〃	〃	〃		須恵器 珠洲	〃		V				ロクロナデ、器面(内)ガラス質化、底部ヘラナデ		青灰	1/8	
218	790	ⅢBG7	SB01 掘方5	〃		土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA3		8.6			ロクロナデ、器面磨滅	A	明黄灰	〃	
219	979	ⅢCC15	SK 1660	〃		須恵器	甕						口縁再加工(砥石)、自然釉				
220	194	ⅢBJ10	SK 1661	〃		土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA2		10.6			ロクロナデ	A	明橙褐	1/5	
221	69	ⅢBR14	SF01	焼土	73	〃	内耳鍋				22.0			石英多 雲母微	茶褐	1/8	
222	164	ⅢBE4	P.58	埋土		〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡC3		8.0	4.6	2.2	ロクロナデ	B	〃	1/2	
223	786	〃	〃	〃		〃	〃	Ⅰ		8.4			ヨコナデ、体部ユビナデ		黄灰	1/8	SB06掘方4を切る
224	226	ⅢBD3	SF02	焼土	581	〃	〃	ⅡA1		11.0	6.6		ロクロナデ、糸切＋板目	A 高温石英少	橙褐	2/3	
225	791	ⅢBC1	P.151	埋土		〃	〃						ヨコナデ(?)	雲母微	黄褐	1/12	
226	〃	ⅢBQ14	P.51	〃		〃	〃				7.2		見込みタテヘラミガキ、磨滅	A	明橙褐		
227	186	ⅢBD3	SF04	焼土		〃	〃	ⅡA1		11.0			ロクロナデ	チャート少	明茶褐	1/5	SB06掘方2が切る
228	353	ⅢBH3	SF08	〃		〃	〃	ⅡD1		11.5			ロクロナデ、体部下半手持ヘラケズリ	A	黄白	〃	
229	751	〃	〃	〃		〃	〃	〃		12.2		2.8	ロクロナデ	〃	〃	〃	
230	331	ⅢBG3	〃	〃		〃	〃				5.0		ロクロナデ、糸切	〃	明黄褐	1/3	
231	351	ⅢBH2	〃	〃		〃	〃	ⅡA2		9.6			ロクロナデ	〃	明黄白	〃	
232	352	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡA4		6.2	4.0	1.8	ロクロナデ、糸切	〃	〃	1/4	
233	1	ⅢBH3	〃	〃		陶器 瀬戸・美濃	端反Ⅲ	大窯	Ⅰ	10.6			灰釉			1/8	
234	2	ⅢBH2	〃	〃		〃	天目	〃	〃	10.8			鉄釉			1/5	
235	785	ⅢBE4	P.58	埋土		土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡC3		7.2		2.3	ロクロナデ、糸切、体部下半不明	A	黄灰	1/5	
236		ⅢBD3	P.41	〃	549	須恵器 珠洲	甕		V						青灰		
237	1080	ⅢBQ14	P.29	〃		〃	〃		〃						〃		
238		ⅢBB1	P.198	〃		土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡB2		10.6		2.7	ロクロナデ、糸切＋ヘラ(?)			1/8	
239	791	ⅢBD1	P.119	〃		〃	〃						ロクロナデ、糸切、見込みオサエ	高温石英微		1/10	
240	772	ⅢBD4	P.121	〃		須恵器 珠洲	擂鉢		Ⅳ				卸し目8条まで確認・広い	白粒少	青白		SB06掘方7が切る
241	83	ⅢB	P.311	〃		陶器 肥前	丸皿	Ⅱ		11.0			灰釉、ロクロナデ、回転ケズリ			1/4	
242		ⅢBJ9	P.71	〃	510	陶器 古瀬戸	天目	後期様式	Ⅱ期	12.0			鉄釉		灰	1/12	
243	1079	ⅢBR14	P.56	焼土		土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA2		10.0			ヨコナデ、体部ユビオサエ(?)	B	赤褐	1/8	SF01関連
244		ⅢBO10	P.31	埋土	34	中国青磁	碗		12C				画花文				
245	234	ⅢBI6	SD29	〃		土師器	Ⅲ(カワラケ)						ロクロナデ	A	淡褐	1/12	
246	232	〃	〃	〃		〃	Ⅲ(壁明Ⅲ)	ⅡA2		9.0	6.0	2.3	ロクロナデ、糸切	B	黄灰	1/8	
247	180	〃	〃	〃		〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡC3		7.0	4.2	2.0	ロクロナデ、糸切＋板目	〃	褐		
248	233	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡC4		6.6	4.0	1.6	ロクロナデ、糸切	B 石英微	〃		
249	173	ⅢBR11	SD41	〃		〃	〃	ⅡA2		10.0			ロクロナデ	A	黄灰		
250	174	〃	〃	〃		〃	〃	〃		9.2			〃	〃	黄白	1/6	
251	171	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡA3		7.2	3.2	2.3	ロクロナデ、糸切	石英・流紋岩多	明褐	1/2	底部穿孔(焼成前)
252	172	ⅢBS11	〃	〃		〃	〃	ⅡC3		7.6	4.8	2.0	〃	B	黄灰	1/3	
253	925	ⅢBR11	〃	〃		〃	〃	ⅡD1			7.4		ロクロナデ、手持ケズリ	A	〃	1/2	
254	919	〃	〃	〃		瓦質土器	擂鉢						ロクロナデ			1/14	内面炭化物付着
255	918	〃	〃	〃		須恵器 珠洲	甕		V					白粒少			
256	456	ⅢBS11	〃	〃		灰釉陶器	手付瓶	光ヶ丘1号窯					暗い青緑釉			1/3	
257	184	ⅢBT12	SD44	〃		土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡB1		11.6			ロクロナデ、体部内面ナナメミガキ	B 石英微	暗黄褐	1/10	
258	181	ⅢBQ10	〃	〃		〃	〃	ⅡA3		7.0	1.9	1.8	ロクロナデ、糸切	A	黄灰	1/6	
259	29	ⅢBS12	〃	〃	194	陶器 古瀬戸	卸Ⅲ	前期様式	13C前半		6.8		灰釉(淡黄緑色)、糸切		暗白灰	1/4	
260	222	〃	〃	〃		土師器	内耳鍋(?)			22.2			口縁部ロクロナデ、体部外面ユビナデ、内面上半ロクロナデ、下半ナデ、端部平坦、焼成良 外面煤付着	白粒微	暗茶褐	1/10	
261		ⅢBQ10	〃	〃	224	須恵器	甕		古代				(外)平行タタキ灰かぶり(内)青海波タタキ、ナデ		中央青紫		
262	364	ⅢBS11	SD43	〃	190	須恵器 珠洲	甕(壺)		Ⅲ				綾杉状叩打(打圧密度14目)、左回り	白色粒	青灰		
263	225	ⅢBT11	〃	〃		〃	〃		Ⅰ・Ⅱ				装飾叩打文 D類格子文	白粒石英少	〃		
264	224	〃	〃	〃	195	須恵器	甕		古代				平行タタキ	白色粒微	灰		
265	183		SD46	〃		黒色土器	坏		〃	13.2			ロクロナデ、(内)ヨコヘラミガキ＋放射暗文	砂少		1/8	
266	940	ⅢBR10	SD47	〃		土師器	甕		〃				ロクロナデ	石英他多	暗赤褐		

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
267		ⅢBP11	SD47	埋土		須恵器　珠洲	擂鉢								灰白		擂鉢片利用の砥石
268	303	ⅢBS11	SE11	〃	281	須恵器	坏C		平安Ⅲ	12.4	6.0	3.1	ロクロナデ、糸切、酸化焔焼成硬質	石英微	暗褐	完	
269	304	〃	〃	〃	313	黒色土器	坏		〃	13.4	5.4	4.5	ヨコミガキ、タテヘラミガキ、ロクロナデ、糸切	〃	茶褐	1/2	
270	223	ⅢBT11	〃	〃	406	須恵器　珠洲	擂鉢		Ⅱ				ロクロナデ、巻上げ痕、叩目2～3条、硬質、気泡少量あり	白粒微	青黒		
271	365	ⅢCA12	SD47	〃		〃	壺		〃				綾杉状叩打文15目、タタキ幅2.4cm左回り全周打ち欠き、一部使用による磨耗	黒色粒	青灰		破片利用砥石
272	17	ⅢBT11	〃	〃	406	中国青磁　龍泉窯	碗		12C後半		6.4		ケズリ出し高台、高台内側無釉、画花文			1/4	
273		ⅢBR11	SD38	〃	157	中国青白磁	梅瓶		13C								
274	923	ⅢBT12	SD45	〃		土師器	塊B		平安Ⅶ		8.0		ロクロナデ、付け高台、(内)タテヘラミガキ		茶褐	1/5	
275	924	ⅢBS11	〃	〃		〃	〃		平安Ⅵ		4.0		〃		〃	略存	
276	191	ⅢBT12	〃	〃		須恵器	坏C		平安Ⅱ				ロクロナデ			1/14	
277	916	ⅢBS11	〃	〃		〃	〃		平安Ⅲ		6.4		ロクロナデ、糸切	瓦質	灰	略存	
278	915	〃	〃	〃		〃	〃		〃		5.3		〃	硬質	暗青灰	〃	
279	914	ⅢCA12	〃	〃		〃	蓋		奈良Ⅳ				ロクロナデ	〃	青灰	〃	
280	913	〃	〃	〃		〃	〃		〃				〃	〃	暗青灰	〃	
281	917	ⅢBS11	〃	〃		〃	甕		平安				〃	〃	青黒色		
282	92	〃	〃	〃		〃	〃		〃				ロクロナデ、巻上げ痕	〃	青灰		断面中央赤紫色
283	187	〃	〃	〃	246	土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡB1		14.0	10.0	4.0	ロクロナデ、外面下半ナデ、糸切、見込みナデ	A 石英微	淡茶褐	1/3	
284	939	ⅢBR11	〃	〃		〃	〃	〃			8.0		ロクロナデ、見込みナデ、糸切＋板目	B 硬質	暗黄褐	1/4	
285	929	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡA1		11.0			ロクロナデ(?)、体部下半オサエ		〃	1/12	
286	189	ⅢBT12	〃	〃		〃	〃	ⅡB2		10.8	7.6	3.1	ロクロナデ、体部下半、見込みナデ、糸切	B 硬質	暗黄灰	1/6	
287	928	ⅢBR11	〃	〃		〃	〃	ⅡA2		9.8	5.4	2.4	ロクロナデ、体部下半ユビオサエ、見込みに黒斑、(底)オサエ?	チャート微 軟質	橙灰	1/3	
288	193	ⅢBS11	〃	〃		〃	〃	ⅡB2		9.0			ロクロナデ、糸切＋板目	A 石英微	暗茶灰	1/8	
289	192	〃	〃	〃		〃	〃	ⅡB3		7.6	5.4	1.6	ロクロナデ、体部下半ケズリ、見込みナデ、糸切＋板目	A 白粒少	黄灰	1/4	
290	307	〃	〃	〃	246	〃	〃	ⅡB2			7.0		ロクロナデ、糸切、見込みナデ	B 白粒・チャート少	茶灰	1/2	
291	188	ⅢBT11	〃	〃		〃	〃	ⅡB1		12.4	8.4	2.4	ロクロナデ(コテ使用)、糸切、見込みナデ	A	黄灰	1/3	
292	190	ⅢBR11	〃	〃		〃	〃	〃		11.4	7.8	2.9	ロクロナデ、体部下半オサエ、糸切、(底)外周に沿って巻上げ痕	C 白粒少	〃	1/6	
293	302	ⅢBS11	〃	〃	254	〃	〃	ⅡB3		8.4	6.6	1.5	ロクロナデ、見込みナデ、糸切＋板目(同心円)	A 白粒微		1/4	
294	926	〃	〃	〃		〃	〃				5.1		ロクロナデ、見込みナデ、同心円状の巻上げ痕、糸切	A	〃	2/3	
295	32	〃	〃	〃	247	中国青磁	Ⅲ		12C後半	10.4			画花文、ロクロナデ			1/10	
296	32	〃	〃	〃	266	〃	碗		〃				画花文				
297	921	〃	〃	〃		須恵器　珠洲	甕(壺)		Ⅱ～Ⅲ				打圧密度15目、篦描文	白粒細砂少	青灰		
298	28	〃	〃	〃	248	陶器　古瀬戸	卸Ⅲ	前期様式	Ⅱ期		7.0		灰釉、糸切			1/4	
299	357	ⅢBR11	〃	〃		須恵器　珠洲	甕		Ⅲ				細密蔽打	白粒少	青灰		
300	922	〃	〃	〃		〃			Ⅱ～Ⅲ				細密蔽打、器外面ガラス質	〃	〃		
301	360	ⅢBT12	〃	〃	264	〃	壺		Ⅱ				細密蔽打(13目)器外面ガラス化、灰かぶり		〃		
302	93	ⅢBS11	〃	〃		〃	擂鉢		Ⅲ				口縁端部挽き出し、卸し目曲線、巻上げ痕、緻密硬質		〃		
303	89	ⅢBT12	〃	〃	242	〃	〃		〃				口縁端部挽き出し、卸し目7条、口縁部ロクロナデ、体部ユビナデ	白粒少	〃	1/10	
304		ⅢBR11	〃	〃	263	瓦質土器	〃						片口口端部方頭、ロクロナデ、体部(内外)ユビナデ、卸し目7条	石英少	灰	1/8	
305	91	〃	〃	〃		須恵器　珠洲	〃		Ⅱ				ロクロナデ、巻上げ痕、糸切、2条の沈線、(内)磨滅	白粒微	青灰	1/4	
306	920	ⅢBT11	〃	〃		〃	〃		Ⅲ				卸し目9条、横・縦方向	黒粒微	暗灰		
307	96	ⅢBS11	〃	〃		瓦質土器	〃						器面いぶし、卸し目粗い(間隔5mm)器面ロクロナデ	白粒少	黒灰		
308	95	ⅢBR11	〃	〃		〃	〃						口縁ロクロナデ、体部ユビナデ(オサエ)卸し目6条(4mm)		暗灰		
309		ⅠUT13	Ⅰ			土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA2		10.6	6.0	3.1	ロクロナデ、糸切	A	明茶白	1/2	
310	677	ⅠUS14	〃			陶器　瀬戸・美濃	Ⅲ	大窯	Ⅲ				灰釉、(外)褐色を帯びた灰色・(内)淡黄緑			1/8	
311	40	ⅠVA12	〃			中国青磁	鉢		15C中				玉縁、蓮弁文－丸ノミケズリ 釉厚い(0.5～0.8mm)				
312	60	ⅠUT12	〃		587	土師器	内耳鍋	A2		30.0			耳部貼付け、ユビナデ、ロクロナデ②体部ユビナデ①	雲母少	明茶褐	1/4	
313	63	〃	〃		589	〃	〃	〃		29.0			ロクロナデ②、体部(内)ハケ(外)ユビナデ①	高温石英多 雲母少	暗褐	1/5	
314	65	ⅠUS13	〃			〃	〃						ロクロナデ、外面ナデ	石英多	黒褐	1/12	
315		ⅠVA12	〃			〃	〃	A2					ロクロナデ、体部外面タテヘラナデ	石英多 雲母微	褐	1/10	
316	62	ⅠUT12	〃			〃	〃	〃		27.0			ロクロナデ②、体部ユビナデ①	石英多	暗褐	1/4	
317	67	ⅠUS14	〃			〃	〃	〃		24.2			ロクロナデ②、頸部ロクロナデ③、体部外面ユビナデ①	雲母少 石英多	黄褐	1/7	
318	61	ⅠUT12	〃			〃	〃	〃			20.2		ロクロナデ、体部外面ユビナデ、内面ロクロナデ＋ハケ	雲母少	暗黄褐	1/8	谷地
319	9	〃	〃		588	中国青磁	盤		15C中(?)				蓮弁文		明淡緑	1/12	〃
320	210	ⅠVD15	〃			土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA2		10.8	7.4	3.1	ロクロナデ(丁寧)、糸切	B	暗褐	1/8	

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
321	211	I VD17	I			土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA2		10.6	6.8	2.8	ロクロナデ(丁寧)、糸切	B	暗茶褐	1/6	谷地
322	214	I VD20	〃		540	〃	〃	ⅡA1		11.4	7.4	3.0	ロクロナデ(丁寧)、糸切＋ナデ	A	明橙褐	4/5	
323	215	I VD17	〃			〃	〃	〃		11.8	7.8	3.3	ロクロナデ(丁寧)、糸切	B	明黄褐	1/5	谷地
324	199	I VC16	〃			〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	〃		10.6	5.6	3.0	ロクロナデ、油煙(内外)	〃	明茶褐	1/7	〃
325	200	I VC15	〃			〃	Ⅲ(カワラケ)			11.4			ロクロナデ(丁寧)	A	淡橙褐	1/8	〃
326	205	I VD16	〃			〃	〃	ⅡA3		8.8			〃	〃	暗黄灰	1/12	〃
327	206	I VD17	〃			〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	〃		8.6	5.0	2.8	ロクロナデ(丁寧)、(底)ケズリ、(内)油煙	〃	暗黄褐	1/5	
328	207	〃	〃			〃	Ⅲ(カワラケ)	〃		8.4			ロクロナデ(丁寧)	〃	黒褐	1/6	谷地
329	201	I VC15	〃		600	〃	〃	ⅡA4		6.2	3.4	1.7	ロクロナデ(丁寧)、(内)ナデ、糸切	B	暗褐	2/3	
330	198	〃	〃			〃	〃	ⅡD1		11.4	7.4	2.5	ロクロナデ、(内)ナナメユビナデ、(底)糸切＋板目		淡灰褐	1/8	谷地
331	203	I VC16	〃			〃	〃	ⅡC3		7.2	5.0	1.9	ロクロナデ、糸切＋板目	A	淡黄褐	1/4	
332	204	I VE17	〃			〃	〃	ⅡA4		6.0	3.8	1.8	ロクロナデ、糸切	〃	明橙褐	1/5	
333	202	I VC15	〃			〃	〃	ⅡB3		8.4	5.2	1.7	手づくね(?)全体に磨滅	A 高温石英微	明黄褐	1/6	
334	209	I VD16	〃			〃	〃	〃		7.6	5.0	1.7	ロクロナデ	〃	〃	1/5	谷地
335	208	I VD17	〃			〃	〃	ⅢC3		7.4	4.4	1.7	ロクロナデ、糸切	石英微 軟質	暗黄灰	1/4	〃
336	680	I VD15	〃			中国青磁	碗		15C中				玉縁		灰	1/12	
337	679	I VC15	〃			陶器 古瀬戸	天目	後期様式	Ⅰ期	14.0			鉄釉			1/8	(天目C類)
338	101	I VB14	〃		582	瓦質土器	擂鉢			27.2			卸し目9目、ロクロナデ	石英少	黄灰	1/6	
339	333	ⅢBG1	〃			土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA1		11.8	6.6	3.4	ロクロナデ(丁寧)、糸切、見込みオサエ	C 雲母・褐粒少	黄褐	1/4	
340	220	I VE17	〃			〃	〃	〃		11.2	6.4	3.1	ロクロナデ、糸切＋横、見込みナデ	C	黄灰	1/5	
341	242	ⅢBC3	〃			〃	〃	〃		11.0			ロクロナデ	C 石英少	暗茶褐	1/10	
342	78	〃	〃			〃	〃				5.0		ロクロナデ、(底)手切＋板目	B 石英微	〃	1/4	
343	227	ⅢBD3	〃			〃	〃	ⅡA1		11.0			ロクロナデ	B	明茶褐	1/6	
344	221	I VE17	〃			〃	〃	ⅡA2		10.0			ロクロナデ、外面のみに油煙多	A	明褐	1/12	
345	347	ⅢBE1	〃			〃	〃	ⅡC3		8.2	4.6	2.2	ロクロナデ、糸切、見込みナデ	C	黄灰	1/4	2次火熱
346	238	ⅢBC2	〃			〃	〃	ⅡA3		7.2	3.8	1.9	ロクロナデ、糸切	A	黄白	1/8	
347	216	I VC20	〃			〃	〃	ⅡC3		8.6	5.0	2.5	ロクロナデ、糸切＋板目、見込みナデ	C	暗黄灰	1/3	
348	319	ⅢBF2	〃			〃	〃	〃		8.2	5.2	2.3	ロクロナデ、糸切	〃	黄白	1/5	
349	314	ⅢBF1	〃			〃	〃	〃		8.6			ロクロナデ、見込みユビナデ	〃	〃	1/3	
350		ⅢBF2	〃			〃	〃	〃		6.6	4.8	2.0	ロクロナデ、糸切	A	〃	1/5	
351	300	ⅢBI2	Ⅱ			〃	〃	〃		6.4	4.0	2.1	〃	B		1/6	
352	189	ⅢBC3	Ⅰ			〃	〃	ⅡA4		6.8			ロクロナデ、体部オサエ、磨滅のため不鮮明	A		〃	
353	320	ⅢBF2	〃			〃	〃			6.8			磨滅、整形不明	〃	橙白	1/8	
354	243	ⅢBC3	〃			〃	〃						糸切＋板目、見込みナデ	〃	黄灰	1/3	
355	218	I VE20	〃			〃	〃	ⅡC3		8.2	5.2	1.9	ロクロナデ、糸切、見込みナデ(?)	〃	橙白	1/4	
356	349	ⅢBE2	〃			〃	〃			8.0	5.0	2.2	ロクロナデ(?)体部外面オサエ、内面ユビナデ、糸切(?)	C	明褐	1/6	
357	348	ⅢBE1	〃			〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡD2		9.4	6.0	2.0	ロクロナデ(ナデ不十分)、糸切＋板目、見込みナデ	〃	茶褐	1/3	
358	277	〃	〃			〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡC2		9.2			磨滅、整形不明、軟質	〃	黄灰	1/5	
359	720	ⅢBF4	〃			〃	〃	〃		9.2			体部内面ハケ、外面不明	〃	茶褐	〃	
360	315	ⅢBF1	〃			〃	〃	ⅡD			6.4		ロクロナデ、糸切(細かい)	〃	明褐	1/3	
361	219	I VE20	〃			〃	〃	ⅡC1		12.0			ロクロナデ、体部内面ナデ	〃	暗黄褐	1/10	
362	241	ⅢBC3	〃			〃	〃	ⅡC2		9.4			ロクロナデ(?)磨滅、体部下半黒斑	〃	橙褐	1/6	2次火熱
363	237	ⅢBC2	〃			〃	Ⅲ(有孔)				5.0		底部穿孔1・穿孔途中1、底部に巻上げ痕、手づくね(?)	〃	明茶灰	1/4	
364	236	〃	〃			〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡD1		15.0			ロクロナデ、油煙(内外面)	A	〃	1/7	
365	339	ⅢBM12	Ⅱ			〃	Ⅲ(カワラケ)	〃		14.6	7.6	3.1	ロクロナデ(丁寧)、黒斑砂粒少、体部(内)ミガキ、体部(下半～底)手持ケズリ	C	暗黄褐	1/8	
366	332	ⅢBG3	Ⅰ			〃	〃	〃		14.0			ロクロナデ	A	明橙褐	1/10	
367	231	ⅢBI8	Ⅱ			〃	〃	〃		13.2	7.2	2.9	ロクロナデ(丁寧)、手持ケズリ(丁寧)	〃	黄灰	2/3	
368	321	ⅢBF2	Ⅰ			〃	〃	〃		13.0			ロクロナデ、体部内面ユビオサエ	〃	明橙褐	1/12	
369	705	I VD18	〃			〃	〃	〃		12.2			ロクロナデ	C		1/5	
370	235	ⅢBC2	〃			〃					7.5		ロクロナデ、体部下半カキ目、糸切、見込みオサエ、器面にヨゴレ	〃	暗黄灰	2/3	口縁欠損
371	228	ⅢBD3	〃			〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡA2		10.0			ロクロナデ(丁寧)、油煙	B	茶褐	1/8	
372	317	ⅢBF1	〃	2		〃	〃	〃		9.0			整形痕不明、体部内面ミガキ?	A	灰	1/5	
373	240	ⅢBC3	〃	〃		〃	〃	ⅡA3		8.0	4.2	2.5	ロクロナデ(丁寧)、糸切	〃	黄灰	3/4	
374	318	ⅢBF2	〃	〃		〃	〃				4.0		糸切	C	〃	1/5	
375	672	ⅢBG1	〃			瓦質土器	風呂						体部片、脚台部の2条の凸帯間に唐草文、胎土精選		黒灰		
376	37	ⅢBD4	〃			中国青磁 龍泉窯	碗		13C				鏑蓮弁文				
377	30	I VF20	〃			〃	鉢		12前～13C後半				高台内無釉				
378		ⅢBG1	〃		518	陶器 古瀬戸	天目	後期	Ⅰ期	14.6			鉄釉			1/8	
379	84	ⅢBG3	〃		513	陶器 肥前	小皿	丸形	Ⅱ	12.2			灰釉、体部下半無釉、回転ケズリ			1/4	
380	373	I VE20	〃			須恵器 珠洲	擂鉢		Ⅳ～Ⅴ				卸し目10条、密接				
381	771	ⅢBR14	Ⅲ			〃	甕		Ⅲ				叩目細密14条				
382	125	ⅢBD2	Ⅰ			土師器	擂鉢						口縁片、端部平坦、卸し目8条、硬質				

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
383	355	ⅢBE5	Ⅰ			土師器	Ⅲ(カワラケ)	ⅡB1		11.6	9.0	2.7	ロクロナデ、体部内外面不明、(底)糸切(?)＋板目	C	暗橙褐	1/5	
384	229	ⅢBH6	Ⅱ			〃	〃	ⅡA2		10.8	7.0	2.7	ロクロナデ、体部不明(底)糸切(?)＋板目	〃	黄褐	1/6	
385	730	ⅢBG1	Ⅰ			〃	〃	ⅡA1		11.0			ロクロナデ、(内面)タテヘラミガキ	〃	黄褐	1/8	
386	354	ⅢBH4	Ⅱ			〃	〃	〃		11.2			ロクロナデ(丁寧)	A	明褐	〃	
387	732	ⅢBF1	Ⅰ			〃	〃	ⅡA3		8.8	6.4	2.1	ロクロナデ、体部ナデ、(底)糸切	C	黄灰	〃	
388	341	ⅢBJ7	Ⅱ			〃	〃	ⅡB3		8.8	6.8	1.7	ロクロナデ、(底)糸切	A	明黄褐	1/5	
389	733	ⅢBF1	Ⅰ			〃	〃	ⅡA3		8.0	4.6	2.0	ロクロナデ、体部(外)タテヘラナデ(ラフ)、(内)ヘラナデ(?)	C	黄褐	1/8	
390	340	ⅢBM12	Ⅱ			〃	〃	ⅡA2		10.0			ロクロナデ	A	明橙白	1/12	
391	344	ⅢBK7	〃			〃	〃	ⅡA1		11.0	6.8	3.3	ロクロナデ、(底)糸切、磨滅	〃	〃	1/10	
392	729	ⅢBG1	Ⅰ			〃	〃	ⅡA3		9.0	5.0	3.6	ロクロナデ、内面タテヘラミガキ	C	暗茶褐	1/6	
393	329	ⅢBG5	Ⅱ			〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡA2		9.2			ロクロナデ、磨滅、油煙	A	黄灰	1/8	
394	770	ⅢBG4	〃			〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA3		8.6			ロクロナデ	C	〃	〃	
395	327	ⅢBF4	Ⅰ			〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡC3		7.8	4.0	2.2	ロクロナデ、油煙	〃	〃	1/5	
396	328	ⅢBG7	Ⅱ			〃	Ⅲ(カワラケ)	〃		7.0			ロクロナデ	〃	明茶褐	〃	
397	230	ⅢBI4	〃			〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡA4		6.8			ロクロナデ、油煙	A	黒灰	1/6	
398	284	ⅢBO9	Ⅲ			〃	Ⅲ(カワラケ)	〃		6.4	3.6	1.9	ロクロナデ、体部内外面タテヘラミガキ(ラフ)、糸切	B	明橙褐	1/3	
399	325	ⅢBF4	Ⅰ			〃	〃	〃		6.2	3.6	1.7	ロクロナデ、外部下半オサエ(?)、糸切	C	黄褐	〃	
400	326	〃	〃			〃	〃	〃		6.8	4.0	2.1	ロクロナデ、体部下半オサエ	〃	〃	1/6	
401	768	ⅢBI6	Ⅱ			〃	〃				4.0		ロクロナデ(底)糸切＋板目、見込み同心円文	〃	茶褐	略存	
402	782	ⅢBI4	〃			〃	〃				5.0		ロクロナデ、板目(細密)、新しいキズ(棒状)	A	明黄白	1/5	
403	334	ⅢBG1	Ⅰ			〃	長頸瓶		古代か	8.8			ロクロナデ		白色	1/8	須恵器のコピーか
404	330	ⅢBG6	Ⅱ			〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡD1		14.4	6.8	3.7	ロクロナデ(丁寧)、手持ケズリ(丁寧)	A	黄白	1/3	
405	283	ⅢBP9	Ⅲ			〃	〃	〃		14.0			ロクロナデ、体部下半外面ナデ(?)	〃	黄灰	1/8	
406	731	ⅢBG2	Ⅰ				〃	〃		12.4			ロクロナデ	〃	〃	〃	
407	342	ⅢBJ7	Ⅱ			〃	〃				7.2		糸切＋オサエ	C	暗黄灰	1/5	
408	356	ⅢBE5	〃			〃	〃				6.2		糸切＋オサエ、見込み中央オサエ	〃	〃	4/5	
409	343	ⅢBJ7	〃			〃	底部穿孔土器						糸切、焼成後穿孔(中途)	A		1/6	
410		ⅢBE2	Ⅰ		547	中国青白磁	水注		13C				梅花文、体部片				
411		ⅢBH4	Ⅱ		511	中国青磁	輪花Ⅲ		15C後	12.4			圏線2条			1/6	
412	676	ⅢBF5	〃			〃	碗		15C中				玉縁			1/16	
413		ⅢBO9	Ⅲ		155	〃	〃		15末～16C前				細蓮弁文、体部片		帯褐灰	1/8	
414	33	ⅢBH8	Ⅱ		522	〃	〃		〃	12.2			細蓮弁文		暗灰	〃	
415	615	ⅢBG1	Ⅰ			中国青磁　同安窯	〃	Ⅰ類	12C後半				体部下半、猫描文、見込みに黄緑釉		帯黄灰		
416	20	ⅢBD2	〃			中国青磁　龍泉窯	〃		13C前半				端反		灰		
417	673	ⅢBI4	Ⅱ			中国磁器　青花	〃		15末～16C前				端反、柳文				
418	678	ⅢBF3	Ⅰ			〃	〃		〃				端反、圏線・草花文				
419		ⅢBD1	〃		539	陶器　古瀬戸	平碗	後期様式	Ⅰ期	15.4	4.2	6.5	ロクロナデ、体部下半回転ケズリ、トチン跡4ヶ所、糸切、付け高台、灰釉			1/3	
420		ⅢBI5	Ⅱ		583	〃	〃	〃	Ⅳ期新				ロクロナデ、灰釉		帯黄灰		
421		ⅢBI4	〃		567	陶器　瀬戸・美濃	菊Ⅲ	大窯	Ⅲ				菊Ⅲ、志野焼(?)、白色釉		黄灰		
422	674	ⅢBJ5	〃			〃	端反Ⅲ	〃	Ⅰ				灰釉(厚い)		暗灰	1/6	
423	669	ⅢBG1	Ⅰ			陶器　肥前(?)	蓋						灰釉(黄緑釉)				
424	38	ⅢBE2	〃			陶器　瀬戸・美濃	天目	大窯					鉄釉				
425		ⅢBG4	Ⅱ		552	〃	〃	〃	Ⅱ				〃			1/10	
426	671	ⅢBG1	Ⅰ			陶器　古瀬戸	〃	後期様式	Ⅳ期				〃		帯黄灰		
427	3	ⅢBF6	Ⅱ			陶器　瀬戸・美濃	〃	大窯	Ⅰ		4.6		鉄釉、ケズリ出し高台、露胎		黄灰	1/4	
428	668	ⅢBF5	〃			陶器　肥前	丸Ⅲ		Ⅱ	12.0			灰釉			1/12	
429	903	ⅢBP8	Ⅲ			〃	小Ⅲ		Ⅲ		4.4		ケズリ出し高台、露胎、見込み釉剥ぎ砂付着、灰釉(黄緑釉)		暗灰	1/4	
430	42	ⅢBI5	Ⅱ			土師器	内耳鍋	A1		32.2			口縁部～顎部ロクロナデ②、体部ユビナデ①、端部ヘラ・平坦③	雲母・石英微	明黄褐		煤付着なし
431	41	〃	〃			〃	〃				22.2		体部内面ロクロナデか、底部との接合部に糸跡あり、底部砂	〃	〃	1/6	〃
432	47	〃	〃			〃	〃	A2			28.2		口縁部ロクロナデ②、外面①端部ヘラ平坦	〃	暗褐	1/8	
433	1026	ⅢBO9	Ⅲ			〃	〃	〃			26.6		口縁部ロクロナデ②、体部ユビナデ①、口縁外面にヘラ描き沈線2条(中途)	雲母・石英多硬質	暗灰	1/10	瓦質化、煤少量付着
434	126	ⅢBP10	〃			須恵器　珠洲	擂鉢				11.6		ロクロナデ、底部板目				
435		ⅠVD20	Ⅰ		533	〃	〃	Ⅵ					卸し目深く幅広、ロクロナデ、底部内面磨滅著しい				
436	372	ⅠVC15	〃			〃	〃	〃					卸し目10目、幅広		暗灰		
437	758	ⅢBJ7	Ⅱ			〃	甕										
438	773	ⅢBH5	〃			須恵器	〃		古代				タタキ				
439	756	ⅢBJ5	〃			土師器	鉢(?)						ロクロナデ、口縁端部平坦ヘラナデ	石英・雲母少	茶褐		器壁中央灰色
440	286	ⅢBT13	Ⅲ	2	51	〃	Ⅲ(カワラケ)				7.6		ロクロナデ、糸切＋板目	C		1/4	
441	305	ⅢBS11	〃	〃		〃	〃				5.2			A		1/3	

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
442	301	ⅢBS12	Ⅲ	2		土師器	Ⅲ(澄明Ⅲ)	ⅡA4		6.0	3.2	1.7	ロクロナデ、糸切+ケズリ(?)	A(白色粒少)	黄白～橙褐	4/5	
443	296	ⅢBQ11	〃	〃		〃	Ⅲ(カワラケ)			11.0			ロクロナデ(丁寧)	B	茶褐	1/8	
444	311	ⅢBR11	〃	漆黒		〃	〃	ⅡC2		9.6	5.4	3.0	ロクロナデ、体部下半ユビナデ、見込みオサエ、(底)糸切	C	黄灰	1/4	
445	313	〃	〃	2	222	〃	Ⅲ(澄明Ⅲ)	ⅡA3		7.2	4.4	1.7	ロクロナデ、糸切+板目、見込みオサエ	〃	茶褐	1/2	
446	291	ⅢBP12	〃	〃		〃	Ⅲ(カワラケ)			8.8			ロクロナデ、体部穿孔(?)	C(砂質)	橙褐	1/6	焼成後穿孔か
447	1001	ⅢBR12	〃	〃		〃	〃	ⅡC3		8.4			ロクロナデ、体部下半ナデ	C	茶灰	〃	
448	287	ⅢBT12	〃	黒混青灰	56	〃	〃	ⅡB3		7.8	5.0	1.5	ロクロナデ、糸切+板目、見込みオサエ	B	黄灰	1/2	
449	306	ⅢBS11	〃	2		〃	〃				5.4		ロクロナデ、糸切+板目、見込みオサエ	A	橙白	〃	
450	288	ⅢBT11	〃	4	278	〃	〃			7.4			ロクロナデ、糸切+板目、見込みオサエ(?)	〃	黄灰	1/3	
451	1000	ⅢBT12	〃	2		〃	〃				4.8		器面磨滅	〃	黄橙色	1/2	
452	345	ⅢBL10	Ⅱ	〃		〃					3.4		付け高台、器面磨滅	〃	黄灰	〃	
453	294	ⅢBQ11	Ⅲ	〃		〃	長頸瓶				7.8		ロクロナデ、内面白土化粧土(?)	C細砂少	明橙白	1/3	403に類例須恵器コピー?
454	39	ⅢBP10	〃	〃	182	中国青磁	端反碗		15C中	12.4						1/8	
455		ⅢBQ10	〃	〃	35	〃	玉縁碗		〃							1/10	
456	912	ⅢBP10	〃	〃		〃	輪花Ⅲ		15C後							1/12	
457	907	ⅢBT13	〃	〃		〃	端反Ⅲ									1/10	
458		ⅢBT12	〃	〃	7	〃	鉢		15C中				直口縁、雷文				
459	118	ⅢBR12	〃	〃		須恵器 珠洲	擂鉢				11.2		体部下半ケズリ、板目、(内)卸し目、磨耗、底部外面～体部下半炭化物			1/4	砥石に転用
460	1036	ⅢBR13	〃	〃		〃	〃				9.6		糸切+板目、体部下部外面に巻上げ痕			〃	
461	113	ⅢBR11	〃	3	230	〃	〃		V		12.2		卸し目8～9目、(底)板目(静止糸切)			〃	
462	117	ⅢBQ12	〃	2		〃	〃				10.0		内外面磨耗	やや瓦質白粒少	灰	〃	
463	102	ⅢBR11	〃	3		瓦質土器	〃			26.0			ロクロナデ、端部丸まる、口縁内弯ぎみに立ち上がる、卸し目6条以上、器内外面黒色処理	褐粒少	地は黄灰	1/10	
464	72	ⅢBS11	〃	2		土師器	〃			27.0			ロクロナデ、端部方頭、口縁立ち上がりは内弯、卸し目8目、体部外面オサエ	流紋岩片褐粒など多	暗褐	1/8	胎土中央赤紫色
465	129	ⅢBR12	〃	3		瓦質土器	〃						ロクロナデ、口縁立ち上がりは内弯	石英多	黄灰		
466	995	ⅢBR11	〃	〃		須恵器 珠洲	〃		Ⅲ				ロクロナデ、口縁端部爪状、巻上げ痕		青灰		
467	1044	ⅢBS11	〃	4		〃	〃		Ⅱ				ロクロナデ、端部爪状、卸し目曲線、巻上げ痕、片口	白色粒少硬質	暗青灰	1/4	
468	105	ⅢBQ12	〃	2		〃	〃		〃	29.6			ロクロナデ、端部爪状、卸し目、横位曲線(?)、巻上げ痕	石英少	青灰	1/12	
469	1064	〃	〃	〃		〃	〃		Ⅲ～Ⅳ	21.0			口縁端爪状、シャープ、ロクロナデ	硬質	暗黄褐		
470	106	ⅢBS12	〃	3		〃	〃		〃	17.6			口縁端部方頭、ロクロナデ		青灰		
471	1066	ⅢBR13	〃	〃		土師器	内耳鍋	A1			25.2		体部中位(外)ユビナデ・(内)ロクロナデ、下半(外)ヘラナデ・(内)ナナメハケ	石英多雲母微	暗褐	1/10	
472	130	ⅢBR12	〃	2		須恵器 珠洲	甕		Ⅳ				ロクロナデ、「く」の字口縁で外反強い、端部丸まる		青灰		
473	110	ⅢBT12	〃	4	236	〃	〃			10.0			ロクロナデ、内面使用による磨滅		〃		
474	138	〃	〃	2		土師器	内耳鍋	A1		34.0	24.0	20.0	口縁部ロクロナデ、体部(外)ロクロナデ(ケズリ)、(内)ナナメナデ、砂底	石英・白粒多、雲母微	褐	1/3	試掘時出土
475	1028	ⅢBQ14	〃	〃		〃	〃	〃		33.8			口縁部ロクロナデ、体部ユビオサエ・ナデ	石英・雲母少	暗褐	1/12	
476	68	ⅢBR11	〃	〃		〃	〃						ロクロナデ、体部外面ヘラナデ・オサエ				
477	295	ⅢBQ12	〃	〃		〃	Ⅲ(澄明Ⅲ)				5.2		ロクロナデ(丁寧)、糸切、油煙	A	暗褐	1/2	
478	289	ⅢBP11	〃	〃		〃	〃				6.2		ロクロナデ、糸切+調整(不鮮明)、油煙		暗茶灰	1/4	
479	266	ⅢCA14	〃	〃		〃	〃	ⅡD			5.2		ロクロナデ、体部下半手持ケズリ、糸切+板目、油煙	石英褐鉄鉱少		底部完存	
480	73	ⅢBS12	〃	〃		〃	内耳鍋						体部下半ユビナデ、底部との境ヨコヘラナデ	石英多雲母微	暗褐	1/12	
481	71	ⅢBS11	〃	〃		〃	〃				18.4		体部ロクロナデ、体部～底部内面ロクロナデ	雲母少	〃	1/8	
482	359	ⅢBQ10	〃	3	260	須恵器 珠洲	〃		Ⅲ				打圧密度14目	白粒少硬質	青灰		
483	361	ⅢBT12	〃	4	50	〃	大型甕		〃				打圧密度14目反時計まわり		〃		
484	358	ⅢBS12	〃	〃		〃	甕		Ⅱ				打圧密度14目	白粒徴	〃		
485	1041	ⅢBS15	〃	3		〃	〃		Ⅲ				打圧密度13目反時計まわり、器面ガラス化	〃	〃		
486	363	ⅢBT12	〃	〃		〃	壺(甕)		〃				打圧密度13目綾杉文時計まわり	硬質	〃		
487	1040	ⅢBP11	〃	〃		〃	甕		Ⅰ～Ⅱ				打圧密度14目、外面灰かぶり	〃	〃		
488		ⅢBQ11	〃	2	40	〃	壺		Ⅲ				打圧密度14目	〃	黒灰		
489	1039	〃	〃	3		須恵器	甕		古代					硬質 気泡	黒褐		
490	367	ⅢBS12	〃	〃		須恵器 珠洲	〃		V				打圧密度8目、体部内面タテケズリ	硬質 白粒徴	黒灰		
491	1043	ⅢBS11	〃	2		〃	擂鉢		Ⅳ				端部方頭、卸し目		青灰		
492	1038	ⅢBN11	〃	〃		〃	〃		〃				卸し目		〃		
493	1029	ⅢBR12	〃	3		〃	〃		〃				〃		〃		
494	1037	ⅢBQ11	〃	2		須恵器	甕		〃				タタキ+ユビナデ	硬質 気泡	暗灰		
495	1100	ⅢBQ10	SH04	埋土		須恵器 珠洲	壺		V～Ⅵ				体部上半、上段ナデ+タタキ(右)・下段右下り、打圧密度9目	白粒少	暗灰		
496	1021	ⅢCD13	Ⅲ	3		土師器	Ⅲ(カワラケ)			11.8			ロクロナデ(丁寧)、体部下半外面ロクロナデ+タテヘラミガキ	A	橙白	1/8	SH01トレンチ

図番号	整理番号	出土地点			取上番号	類別・産地など	器種	(型式)形態など	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
		グリッド	遺構名	層位						口径	底径	器高					
497	258	ⅢCD13	Ⅲ	2		土師器	Ⅲ(燈明Ⅲ)	ⅡD1		11.4			口縁部ロクロナデ、体部不明	A	黄褐	1/10	
498	1008	ⅢCB15	〃	3		〃	Ⅲ(カワラケ)	ⅡA2		10.0	5.0	3.0	ロクロナデ、体部下半ユビナデ、糸切+板目	〃	明茶褐	1/4	
499	260	ⅢCD13	〃	〃		〃	〃	ⅡA3		7.2	4.4	2.1	ロクロナデ(丁寧)、糸切	〃	橙白	1/5	
500	259	〃	〃	〃		〃	Ⅲ(燈明Ⅲ)	〃		8.2			ロクロナデ(丁寧)	C	黒褐	〃	
501	59	ⅢCB14	〃	2	37	〃	内耳鍋	A1		26.6			ロクロナデ②、体部タテユビナデ①、口縁に黒斑、口縁内面に2条の凹線	石英多	茶褐	1/8	
502		ⅢCC15	〃	3		須恵器　珠洲	擂鉢		V				卸し目、櫛、集合化、細密	硬質	青灰		
503	946	ⅢCA13	〃			須恵器	甕		古代				(外)平行タタキ、(内)青海波				砥石転用
504	947	〃	〃			須恵器　珠洲	擂鉢										〃
505	108	ⅢBG6	Ⅱ			〃	〃						片口、卸し目、目数不明		青灰		〃
506		ⅢCB12	Ⅲ			土師器	ミニチュア			2.0		2.3	手づくね				
507	670	ⅠVB18	Ⅰ			陶器　瀬戸・美濃	Ⅲ				5.6		鉄釉、高台ケズリ出し、刻印・見込みにトチン跡(3)		暗灰	3/4	
508	103	ⅢCA13	SH01	3	61	須恵器	擂鉢			30.5			ロクロナデ、巻上げ痕	石英少	青灰	1/10	

(註)・遺構名ローマ数字は居住域を示す。
・胎土　A：灰白色で軟質・念入に精製され砂粒をほとんど含まない
土師器Ⅲ　B：砂粒を含み硬質
C：ABに属さないもの

表5　表町遺跡出土石製品一覧表（小型石製坏は石鉢に含め加工痕不明品は除く）

遺構等	粉挽臼			茶臼			石鉢	凹石			叩石	砥石				五輪塔					板碑	小計
	上臼	下臼	小計	上臼	下臼	小計		A	B	小計		A	B	C	小計	空風輪	火輪	水輪	地輪	小計		
SH01	9	4	13	2	4	6	5	8	4	12	1	3	1	1	5	2	3		2	7	3	52
SE07																	2	1		3		3
SE08	7	3	10	1		1	1		1	1						7	3	4	1	15	3	31
SG01	1		1									1			1							2
SX01					1	1																1
小計	17	7	24	3	5	8	6	8	5	13	1	4	1	1	6	9	8	5	3	25	6	89
SE02	5	3	8																			8
SE03		1	1																			1
SE06	2		2		1	1																3
SE10	2		2																			2
SD45								2		2				1	1							3
小計	9	4	13		1	1		2		2				1	1							17
居住域Ⅰ					1	1			1	1	1											3
居住域Ⅱ					1	1			1	1		1	1		2				1	1		5
居住域Ⅲ					(Z)1	(Z)1	(Z)1				1	11		1	12							15
小計					3	3	1		2	2	2	12	1	1	14				1	1		23
計	26	11	37	3	9	12	7	10	7	17	3	16	2	3	21	9	8	5	4	26	6	129

表6　表町遺跡（MOM）出土石製品観察表　1．粉挽き臼・茶臼・石鉢・凹石・砥石・叩石・円礫

図番号	遺物番号	出土状況			遺物名	型式	残存率	石材	法量(cm、kg)				成形・属性など	備考(cm)
		グリッド	遺構名	層位					長径	短径	器高	重量		
1	77	ⅢCB12	SH01	2	上臼		1/2	And.3	32.0				上縁(口縁)・底部立ち上がり部欠、6分画、副溝9～10目、供給口孔ラッパ状、芯棒受円形(径2.5)　挽き木孔一部欠、方形深さ5cm、すり面底部ハツリ、側面タテハツリ　被熱　煤	
2	337	〃	〃	〃	〃		1/4	〃	34.0		8.3		6分画、副溝14目前後、目立直し、挽き木孔(深さ5.5cm)端部丸まる、芯棒受孔(深さ5cm)下部径2cmで上部は4.5cmと広がる、つめ木で固定、側面ハツリC	くぼみ高　2.5 ふくみ高　3.8
3	199		〃	3	下臼		〃	〃	31.0		(9.2)	2.4	分画不明、すり目幅広い、側面ハツリ	
4	106	ⅢCC12	〃	2	上臼		〃	〃	31.0				上縁一部欠、手ずれ、6分画、副溝12目、側面ハツリC　くぼみ部と立ち上がりハツリ	
5	291	ⅢCB13	〃	3	〃		〃	And.1	32.0		13.8	2.6	供給孔ハツリ、物くばり左回転　分画、副溝磨滅によりほとんど消滅し不明、挽き木孔長方形(長径2.5、深さ5.2cm)	くぼみ高　2.0 ふくみ高　5.4
6	198	〃	〃	2	〃		1/8	And.3	34.0		11.0		分画不明、副溝細く整然18目まで確認、上縁一部欠損、側面ハツリC、くぼみ部ハツリ、芯棒受け	くぼみ高　2.5
7	113 ・197	ⅢCC14	〃	2 (下部)	〃		1/2	〃	32.0			6.2	上縁・側面下端欠、6分画、副溝6目以上間隔広く(1.5～4.5cm)不ぞろいで放射状、くぼみ部丁寧なハツリ、芯棒受け(三角形)、供給口あり、再目立てか	2点接合
8	339	ⅢCB12	〃	4	〃		1/4	〃	33.2		10.2	2.6	6分画か、副溝10目前後、側面ハツリC、供給孔5cm、ラッパ状、芯棒受	くぼみ高　2.8 ふくみ高　3.0
9	159	ⅢCC14	〃	3 (下部)	〃		〃	And.1	－	－	－	－	上端破損、すり面磨耗著しく溝など不明、供給孔あり、側面ハツリC	
10	107	ⅢCD13	〃	2	〃		1/8	And.3	－	－	－	－	破損多く細部不明、副溝8目、側面細かいハツリC	
11	292	ⅢCB13	〃	3	下臼		1/2	〃	30.5		9.6		6分画、副溝9目左回り、側面ハツリC、芯棒孔ラッパ状ハツリ・敲打、すり面周縁と側面下部煤付着	ふくみ高　2.6
12	297 109	ⅢCB12 ⅢCA12	〃	2	茶臼 (上臼)		略完	And.2 (郷路石)	21.0		19.8	7.9	上縁・側面下端・挽き木孔の一部欠、側面細かいハツリC、くぼみ部ハツリ・敲打ともに丁寧、6分画、副溝は6・7・9目で各2区画ずつ、目並びに併行を欠くものや直交で重複するなど再目立てでいずれも丁寧　挽き木孔方形2cm、奥行き3cmで弧状重四角形文・3段、芯棒孔上部方形、下部円形タテハツリで上部は磨滅、すり面外周磨滅　底部煤被熱。	くぼみ高　2.1 ふくみ高　1.2
13	109		〃	2 (下部)	茶臼 (下臼)		1/2	And.3	20.0(すり面) 36.0(受け皿)	33.0 (底径)	15.9	8.5	受け皿部欠、6分画、副溝7～8目直線細かく企画性左まわり、周縁手ずれ、芯棒孔ハツリC、上部4.5cm磨滅(円筒形)、皿部・側面丁寧なタテハツリのち研磨、底部あらいハツリ	すり面高　5.8 ふくみ高　0.7
14	200	ⅢCB13	〃	3	下臼		5/6	〃	33.2		9.2		6分画、副溝9～14目時計回り、周縁と芯棒孔のまわり磨滅、芯棒孔ラッパ状上部円筒形で磨滅、側面ハツリC　底部あらいハツリ。	ふくみ高　2.1
15	78	ⅢCC13	〃		茶臼 (下臼)		1/4	And.1	20.0(すり面) 30.0(受け皿)	28.3 (底径)	13.0	3.2	側面はハツリ技法で内弯ぎみに立ち上げのち大きく外反、受け皿口縁端は山形、敲打、再調整で元は平坦、8分画、副溝9目で細かい。　周縁部磨耗、芯棒孔上半は磨滅、下半は末広がり、すり面底部に煤付着	すり面高　3.0 ふくみ高　1.2
16	356	ⅢCB13	SE08	4	茶臼 (上臼)		1/2	And.3	20.0		14.0	3.4	くぼみ上縁、挽き木孔の2段重四角形の一部欠、8分画、副溝細かく間隔広く不ぞろい再目立て、4～5目(0.8～1.5cm)で磨耗、芯棒孔周辺とくに著しい、くぼみ部・側面ナナメハツリ(丁寧)黒うるし塗布、挽き木孔平面方形で奥行き4cm	くぼみ高　1.9 ふくみ高　0.6
17	354	ⅢCC11	〃	〃	上臼		1/4	〃	31.0			4.0	6分画、副溝13目、側面細かいナナメハツリ(右下がり)、挽き木孔方形で奥行き4.5cm、磨滅、芯棒受孔深さ2.2cm、くぼみ部、側面一部煤あり	ふくみ高　2.8
18	343	ⅢCC12	〃	〃	〃		1/2	〃	33.2		(14.2)	9.4	上縁・底部立ち上がり一部欠、6分画、副溝13目再目立て、ものくばり左回転、側面ハツリC　くぼみ部ハツリ+敲打、立ち上がりナナメハツリ、手ずれ、供給孔(ラフなタテハツリ)・芯棒受口孔、挽き木孔一部欠損	ふくみ高　(2.5)
19	321	ⅢCB13	〃	4 (上部)	〃		1/6	〃	32.8		12.5	2.4	分画不明、副溝17目まで確認細かく企画性、くぼみ部中心にむけ帯単位で放射状ハツリ、側面細かいハツリ(3段・丁寧)、上縁研磨・手ずれ、上・下端煤	くぼみ高　3.6 ふくみ高　3.4
20	165	ⅢCC13	〃	4	〃		1/5	〃	32.5				分画不明、副溝14目確認、側面タテ、供給孔ナナメハツリ、くぼみ部ハツリ+敲打、くぼみ・供給孔煤付着、くぼみ部上縁手ずれ、すり面磨滅	
21	305	ⅢCB13	〃	西井壁 崩落石	〃		1/3	〃	32.0				6分画、副溝12目、ものくばり左回り、くぼみ、側面ハツリ、供給孔、くぼみ煤付着	くぼみ高　2.0
22	345	ⅢCC12	〃	北壁 捺積	〃		1/4	〃	34.0			3.4	分画不明、副溝放射状で間隔広く、溝幅広い(2.0～3.5cm)、ものくばり、くぼみ丁寧なハツリ	
23	323 SE02 -4	ⅢCC13 ⅢCE14	SE08 SE02	南井壁 崩落石	下臼			〃	33.0		12.8	16.2	6分画、副溝5区画11目、1区画10目左回り、企画性強い、側面ナナメハツリ、底部あらいハツリ、芯棒受孔ハツリ・磨滅、下部被熱、煤付着	SE08・SE02-2接合 ふくみ高　3.2
24	341	ⅢCC13	SE08	4	〃		1/3	〃	35.0		17.6	8.2	6分画、副溝16目、一部に重複、左回り、側面タテハツリ、底部あらいハツリ、芯棒受磨滅、底部立ち上がり　煤、被熱	ふくみ高　1.6
25	399	〃	〃	東井壁 崩落石	上臼		1/5	And.1	32.4		9.5	2.2	分画・副溝使用により磨滅不明、側面タテハツリ、くぼみ部単位(帯)ごとに放射状、くぼみ部立ち上りハツリCで接線沈線化、上縁部手ずれ、被熱煤付着。	
26	295	ⅢCB13	〃	3～4	凹石 (下臼再利用)		完	〃	30.5	30.0	14.2	20.5	下臼再利用　底部とすり面を大きく円形に凹める、側面打ち欠き、すり面には6分画のすり目と芯棒孔、凹面は敲打痕上部凹み径19.0深さ5.5　底部凹み径12.0深さ3.0cm、上面・側辺の一部に煤	芯棒孔深さ5(未貫通)
27			(SG01)	3	上臼		1/4	And.3	30.0		10.2	2.0	分画・副溝数不明。放射状幅広(1.5～2.5)磨滅、ものくばりくぼみ部、立ち上がりナナメハツリ、上縁敲打、側面ナナメハツリ一部敲打、挽き木孔長方形(4×2.5)で深さ5cm	くぼみ高　2.6 ふくみ高　1.4 (SH01南、SG01か)
28	108	ⅢCC12	SH01	〃	凹石	A	完	And.1	10.5	8.6	3.0	0.3	板状円礫、浅い凹み	
29	47	ⅢCB13	〃	2	〃	〃	〃	〃	10.5	3.8	4.8	0.43	断面台形の自然礫、底部打ち欠き平坦	
30	112	ⅢCC14	〃	3	〃	〃	〃	And.3	12.5	11.0	13.0	0.88	側辺部分的にハツリ、凹み上下2面	
31	111	〃	〃	〃	〃	〃	〃	And.1	18.0	12.3	7.2	1.83	断面三角形の自然礫、平坦部に平面円形の敲打による凹み	
32	116	〃	〃	〃	〃	〃	〃	And.3	20.0	13.2	10.2	2.6	平面楕円形の自然円礫使用、正面2裏面1の浅い凹み	
33	120	ⅢCB13	〃	〃	石鉢			〃		22.6			台部ナナメハツリ、内面ハツリ・磨滅	
34	79	ⅢCC13	〃	〃	〃			〃		18.0			体部～台部ナナメハツリ、内面丁寧なハツリ　台部内面煤付着(破損ののち被熱)	
35	164	〃	SE08	4	〃			〃	17.3	16.7	15.3	5.5	口縁～台部ナナメハツリ、内面ハツリ・敲打	
36		ⅢCA12	SH01	3	砥石	A		GT	10.2	4.2	1.0	0.132	先端オレ、4面使用、断面方形、被熱、使用痕	
37	176	ⅢCA13	SG01	4	〃	〃		〃	5.7	2.0	1.6	0.07	先端オレ、4面使用、断面方形、使用痕	
38	249		SD45		凹石	〃	2/3	And.1	7.0	6.5	4.0	0.13	凹凸著しい自然礫利用	
39		ⅢBS11	〃		砥石	C		And.3	11.6	8.0	3.7		板状自然石にするどい刃先痕	
40	239	〃	〃		凹石	A	完	And.1	13.5	13.0	6.1	0.8	側面敲打で成形、深いくぼみ、裏面なし	
41	338	ⅢCB12	SH01		〃	B	〃	〃	33.0	27.8	14.2	15.0	自然玉石、底部敲打し平坦とする、底部～側辺にかけ煤付着	

図番号	遺物番号	出土状況			遺物名	型式	残存率	石材	法量(cm、kg)				成形・属性など	備考(cm)
		グリッド	遺構名	層位					長径	短径	器高	重量		
42	75	ⅢCC12	SH01		凹石	B	完	And.3	17.0	14.8	7.5	2.1	底部平坦の自然礫利用	
43	80	ⅢCB13	〃		〃	〃	〃	〃	17.0	14.3	7.5	2.3	円礫利用、側面ハツリ、側面一部煤、底部煤多量付着	
44	217	ⅢCA12	〃		〃	A	1/2	And.1	15.2		8.3	1.2	上下2面に深いくぼみ、自然礫利用	
45	285		〃		〃	〃	完	〃	14.0	10.0	5.7	0.9	不整形な自然円礫利用	
46	286		〃		〃	〃	〃	〃	13.8	12.2	5.8	1.88	自然円礫利用、正・裏面各1、全面煤付着	
47	334	ⅢCC12	〃		〃	B		And.2(磐山石)	17.5	14.4	10.6	3.5	底部平坦、深い凹部と注ぎ部からなる、注ぎ部側面と対面・口縁部・注部・凹部、ハツリ・敲打整形	
80	SE02-6・8		SE02	1～4	上臼		3/4	And.3	34.0		10.2	7.0	6分画、副溝10目、左まわりに線刻(再目立て)、供給孔、ものくぼり、芯棒受孔(2cm)挽き木孔、側面ハツリC、くぼみ部中心から縁にかけ2方向のハツリ、立ち上がりナナメハツリ、ともに丁寧、端部手ずれ、破損後一部煤付着	くぼみ高 2.0 ふくみ高 3.2
81	SE02-17		〃	8～15	〃		1/2	And.1	30.6		10.2		6分画、副溝8～10目、ものくぼり左回り、供給孔ラフ、挽き木孔ハツリ(深さ5.3cm)、芯棒受孔ハツリ成形(深さ2.2cm)側面ハツリC、くぼみ部ハツリ	くぼみ高 3.1 ふくみ高 2.6
82	SE02		〃	1～4	〃		1/5	And.3	29.2		11.8		分画不明、副溝間広い(1～2cm)、側面・くぼみ面と供給孔黒色・塗彩(?)、ともにハツリ成形	くぼみ高 3.2 ふくみ高 3.1
83	SE02-7		〃	〃	〃		1/3	〃	(30.0)		11.8	1.9	5分画か、副溝11目、幅広、長方形の挽き木孔(径4cm 深さ6cm)側辺ハツリC	くぼみ高 3.3 ふくみ高 4.5
84	SE02-2		〃	〃	〃		1/2	〃	32.0		12.1	4.7	6分画、副溝6～7目間隔広い1.5～2cm、目立直し、端部欠損、側面タテハツリ(2段)、くぼみ面ハツリ、芯棒受再調整、挽き木孔深さ5cm、別に60度転回した所に作りかけ	ふくみ高 3.2
85	SE02-1・15		〃	〃	下臼		1/3	And.2(郷路石)	31.0				6分画、副溝10～12目左まわり、使用による磨滅、再目立て、くぼみ部ハツリ、側面タテハツリ、芯棒受孔再調整、挽き木孔深さ5cm、別に成形途中のものあり	くぼみ高 2.9 ふくみ高 中心部欠損のために不明
86	SE02		〃	〃	〃		〃	And.3	(31.0)		(8.3)		6分画、副溝8目左回り、幅広い(1～1.5cm)、側面タテハツリ底同心円状にあらいハツリ、芯棒孔ラッパ状	ふくみ高 1.2
87	SE02-3・9		〃	〃	〃		1/2	〃	(29.0)		(9.0)	5.4	6分画、副溝8目、別に目と異なる短い溝が数条あり、副溝中央部敲打により消去、側面タテハツリ、底面平坦あらいハツリ、芯棒孔ラッパ状ハツリ、芯棒部分磨滅	
88			SE03		〃		1/4	〃	−	−	−	−	6分画、副溝11目、丸溝で左回り、すり面中央磨耗	
89	576		SE06	6	上臼		〃	〃	−	−	−	−	分画不明、副溝間広くかつ不規則、くぼみ・すり面ハツリ・敲打、側面ナナメハツリ、側面上半受け皿細かい敲打・ハツリ、下部ナナメハツリともに丁寧	
90	566		〃	3c	茶臼(下臼)		〃	And.3	(28.2)(受けⅢ)	18.0(すり面)	7.2		受皿端部欠、側面上半・受け皿細かいハツリのち研磨(丁寧)、下半・底面ナナメハツリ、再目立て、すり面底部煤多	台径 23.5
91	602	1UT13	SE10	4	上臼		1/3	And.1	29.0		12.0		5分画、副溝6目、幅広(1.5～2.0cm)、芯棒受孔あり、挽き木孔径2.5cmで奥に向かい狭まる	くぼみ高 2.8
92	604		〃	5	〃		1/6	〃	28.4		8.2		分画不明、副溝幅広(2cm)ものおくり、膨らみ小さくすり面ほぼ平坦で端部磨滅 くぼみ面ハツリ 上縁磨滅	くぼみ高 2.2
93	612		SB03掘方2(P.302)		凹石	B	完	〃	21.8	18.2	8.0	12.8	板状自然石の左上端のみ打ち欠く 中央に浅いくぼみ部、平面円形、側辺下部から底部煤付着、裏自然面に刃先端の痕跡	
95	611	ⅢBD2	SB06掘方1(P.301)		〃	〃	〃	〃	21.2	19.3	8.0	3.2	安定感のある平坦部を底部とする山形の自然石頂部に大型の凹部(旧)と隣接した小型の凹部(新)からなる、被熱、煤付着	
96		ⅢBE4	P.58		磨石		〃	And.1	8.2	8.0	1.3	42	板状自然石、刃先痕	
97	517	ⅢBH6			石製环		1/3	And.3	(5.8)	4.0	(4.5)	90	多孔質軟質の安山岩をケズリ(ハツリ)成形、ラフ	
98	110	ⅢCA12	SH01		砥石	A	下端欠	GT	(13.5)	(2.1)	(1.5)	85	断面長方形、4面に使用痕(斜・横位)斜位に使用痕、上端スリ	
99	95	ⅢCA13	〃		〃	〃	両端欠	〃	(11.2)	(3.5)	(2.1)		断面長方形、4面に使用痕、上端にスリ痕	
100		ⅢCA12	〃		〃	B	〃	〃	(6.7)	(3.2)	(0.7)	28	断面板状、正面・裏面ともにノミ痕と使用痕	
101	29	ⅢBT12	Ⅲ	2	〃	A	〃	〃	(6.0)	(3.0)	(2.5)	70	断面長方形、4面に使用痕(斜位)、上端に煤付着	
102		ⅢCA14	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(5.0)	(1.4)	(2.0)	26	断面長方形、4面に使用痕(斜位)	
103	46	ⅢBT13	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(3.2)	(1.8)	(1.5)	15	断面方形、3面に使用痕(斜位)	
104	189	ⅢBS11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(5.8)	(4.2)	(2.0)	70	断面板状、4面に使用痕	
105	507	ⅢBM12	〃	〃	〃	〃	下端欠	〃	(8.2)	(2.2)	(2.0)	90	断面方形、4面に使用痕、上端敲打とスリ、中央下煤付着	
106		ⅢCA14	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(7.5)	(4.0)	(1.6)	98	断面方形、4面に使用痕(横位)、上端キリ、その下部スリ	
107	184	ⅢBS12	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(5.0)	(3.1)	(1.9)	70	断面長方形、3面に使用痕・刃先痕(斜位)、上端キリ	
108	185	ⅢBT12	〃	〃	〃	〃	両端欠	〃	(5.1)	(2.5)	(1.6)	34	断面変形台形、4面に使用痕	
109	126	ⅢCC14	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(5.3)	(2.5)	(1.8)	40	断面カマボコ形、3面に使用痕、山形部分未使用	
110		ⅢCA12	〃	〃	〃	〃	両・下端欠	〃	(5.2)	(2.8)	(2.0)		断面四角形か、3面以上に使用痕、全面に刃先痕	
111		ⅢCA14	〃	〃	〃	〃	欠損多	〃	−	−	−		先端・1辺スリ、断面「U」字状の工具痕	
112		ⅢBG2	Ⅱ	〃	〃	B	両端欠	〃	(3.3)	(3.1)	(1.6)	10	断面板状、側辺研磨、表裏2面に使用痕	
113		ⅢBH8	〃	〃	〃	A	〃	〃	(3.3)	(2.0)	(1.6)	19	断面長方形、4面に使用痕、丸ノミ状工具痕	
114	289	ⅢCA12	SG01		円礫		欠損	And.1		3.0		380	欠損部を除き全面磨耗(ローリング)、煤多量に付着、被熱を受けたのち破損	
115		ⅢCC13	SH01		叩石		完	Hf	15.5	5.2	4.0	450	自然転石	
116		ⅢBT12	Ⅲ	2	〃		〃	And.1	15.1	7.3	6.4	98	自然円礫、上端剥離、先端敲打痕	
117	13	ⅢCC15	〃	〃	砥石	C	上端欠	Sa	11.2	6.5	4.0	600	4面砥石痕(使用痕)、先端に磨耗痕あり	
118	613	ⅢBF3	Ⅰ		叩石		完	Qt-Dio	12.0	7.0	5.0	68	自然円礫、上端側辺に直行して割り、先端に敲打痕・磨り痕	
119	71	ⅢBE2	〃		(小円礫)		〃	Tu(粗粒)	2.0	1.6	0.7	4	器面磨滅(研磨か)	
120	87	〃	〃		〃		〃	チャート	2.2	1.9	0.7	4	〃	
121	88	〃	〃		〃		〃	Sa	1.5	0.6	0.3	3	〃	
122	89	ⅢCA13	Ⅲ		〃			Hf	6.4	2.0	1.1	27	〃	
123	201	ⅢCB13	SE08	4(上)	下臼		1/2	And.3	33.0		15.0	11.4	5分画、副溝16目、左回り、すり面ラフな成形、側面タテハツリ(3段)、底部あらい剥離、芯棒孔上・下段で中心線ズレ、上段磨滅、下段部分的にタテ方向に磨滅、底部煤	
124	82	ⅢCC13	SH01	2	〃		1/4	〃	33.5		14.5	5.2	6分画、副溝11目以上左回り、すり面外縁磨耗、側辺3段ハツリ(上・中タテ、下ナナメ)、芯棒孔両側から穿孔、上段ハツリC磨耗、下段ナナメハツリ 底部あらいハツリ 磨耗	
125	585	ⅠVA13	Ⅰ	〃	茶臼(下臼)		1/12	〃	(32.0)				受皿部くぼみハツリC、立ち上がり、口縁端部ナナメハツリ手ずれ 側面ナナメハツリ、丁寧	
126		ⅢCB12	SH01	〃	〃		1/4	And.1	33.0				くぼみ部立ち上がり、端部ナナメハツリ(細かい)、側面ハツリ(左右下り交互)、端部手ズレ	
127		ⅢCA13	〃	3	〃		1/12	And.3	(38.0)				くぼみ部ナナメハツリ、端部手ずれ、側面ナナメハツリ、下部ヨコハツリ丁寧、破損のち煤付着(全面)	
128	287	ⅢCB12	〃	〃	石鉢(片口)		1/5	〃	(32.0)	22.5	18.2	1.4	体部ナナメケズリ、内部器面凹凸あるが本来丁寧なハツリ、片口大きく破損	

(注) 重量の単位：図番号96～122はｇであらわす。

図番号	遺物番号	出土状況			遺物名	型式	残存率	石材	法量(cm、kg)				成形・属性など	備考(cm)
		グリッド	遺構名	層位					長径	短径	器高	重量		
129	86	ⅢCB13	SH01	2	石鉢		1/6	And.3	27.0				内外面ともナナメハツリ、口縁端部手ずれ、煤付着	
130		Z			〃		〃	And.2(郷路石)	28.0				内外面ともナナメハツリ、端部丁寧なハツリ・手ずれ	
131	97	ⅢCC13	SH01	2	石鉢(片口)			And.3					長方形片口、口縁より外へ突出させて造り出し(ケズリ)、外面ハツリ、内面ナナメハツリ、作りラフ、破損のち煤付着	
	105	ⅢCB13	〃	〃	茶白(上白)			〃					芯棒孔を含む中央部分残、すり面細かいすり目磨耗、くぼみ部丁寧に成形	
			SX01	(床下40)	茶白(下白)			〃					受皿部小片、丁寧な成形	
	614	ⅢBH3	Ⅱ		〃			〃					〃	
		ⅢBI7		2	上白			〃					小片	
			SE06	青灰色土	〃			〃					被熱、煤付着、小片	
		Z			茶白(下白)			〃					受皿成形丁寧、被熱著しく煤全面	

2. 五輪塔　(註) ハツリA；右下り、ハツリB；左下り、ハツリC；タテハツリ

図番号	遺物番号	グリッド	遺構	層位	遺物名	型式	残存	石材	法量 縦(cm) a	b	c	横(cm) d	e	f	重量(kg)	成形・属性	備考
48	331	ⅢCC12	SH01	2	空風輪	A	完	And.3	14.3	9.0	23.3	20.0	17.9		7.9	空風輪とも側面ハツリC(丁寧)、頭頂部尖、底面楕円形で平坦ハツリ	
49	302	ⅢCB12	〃	〃	〃	〃	〃	〃	11.0	7.8	18.8	15.1	14.7		3.7	空部頭部ハツリB、他はハツリA、底部は僅かに凹む　器面一部風化	
50	332	〃	〃	大型平石群	火輪	B	〃(一部欠)	〃	17.4	8.0		11.4	23.8	21.5	12.2	屋根部ヨコハツリ、軒側面ハツリB、頂部ナナメ+ヨコハツリ、底部ヨコハツリ	№52と共伴
51	335	ⅢCC13	〃	〃	〃	〃	完	〃	16.0	7.2		10.0	21.3	17.7	8.4	底部中央くぼみ(深さ2cm)、周辺左まわりにハツリ、頂部中央に空風輪差込用柄穴2段に整形(深さ4cm)、屋根・軒(側面)細かいハツリA+B、屋根下部～軒上半研磨、屋根裾部は外反	
52	333	ⅢCB12	〃	〃	〃	〃	〃	〃	18.0	10.2		11.5	22.6	20.7	14.1	屋根頂部ミガキ、屋根ハツリA+研磨(屋根下部)、側面ハツリB、研磨2面、底部中央円形にくぼみ周辺ハツリ+研磨	
53	284	ⅢCB13	〃	4(上部)	地輪		〃	And.1	16.5			33.6			32.0	底部あらいハツリ　中央くぼむ、上面・側面縦方向の細かい丁寧なハツリ	
54	283	〃	〃	3	〃		〃	And.3	17.0			28.5			25.7	底部のみあらい剥離で中央くぼむ、上辺及び側面は細かい丁寧なハツリC+B	
55	386	ⅢCB 11・12	SE07	北井壁控積	火輪	A	〃	〃	15.7	5.2		8.7	29.7	26.5	12.75	屋根中央に正方形の柄穴(深さ3cm)、上辺・斜面ともにハツリC、軒は3面ハツリA、1面のみB+研磨、底面は中央ハツリA円形にくぼませ周辺ハツリB、4隅研磨、直交したハツリ、軒高小さく外傾	
56	293	ⅢCB13	〃	西井壁石組	〃	〃	〃	〃	14.5	4.2		11.0	25.4	26.4	11.2	屋根下端部僅かに反り軒高小さく屋根との接線は風化のため不鮮明、屋根ハツリA、研磨痕部分的にあり、底面中央円形にハツリA+Bで凹ませ4隅研磨	
57	384	ⅢCB12	SE08	北井壁控積	水輪		〃	〃	14.8			16.2	23.0	17.0	6.8	上下両面ハツリ　側面2～3段のタテハツリ	
58	385	ⅢCB 11・12	SE07	北井壁石組	〃		〃	And.1	19.5			18.2	26.5	17.2	16.8	上下両面ともにハツリ・敲打、側面ハツリC	
59	360	ⅢCB12	SE08	西井壁際	空風輪	A	〃	And.3	12.6	11.0	23.6	18.3	16.1		5.45	頭頂部僅かに尖るも欠損、空輪ハツリB、　風輪ハツリA、一部破損・磨耗、くびれ部ハツリでえぐる、底部僅かに平面形楕円、全面に煤付着	
60	376	〃	〃		〃	〃	〃	〃	14.2	8.0	22.2	17.0	15.2		5.5	空風輪ともに丁寧なハツリC、底部は平坦楕円形	
61	375		〃	北井壁控積	〃	〃	〃	〃	13.0	9.1	22.1	16.6	14.8		4.7	空輪頭部はハツリBで一部分研磨、下部から風輪はAでいずれも丁寧、底部ハツリで平坦とするが凹凸あり、頭頂部僅かに欠損	
62	353	ⅢCC12	〃	〃	〃	C	〃	〃	10.7	7.5	18.2	17.0	15.8		5.3	空輪部はハツリCで小さな凹凸あり、風輪一部研磨、底部ヨコハツリ、球状で最大径は下位	
63	368	ⅢCB12	〃	西井壁崩落	〃	B	〃	〃	11.0	11.6	22.6	15.1	13.7		3.95	風空輪ハツリA、　風輪くびれ部はヨコハツリでえぐる、底部に方形の柄を削り出し(高さ3cm)、頭頂部小さく欠損	
64	377	ⅢCC13	〃	東井壁崩落	〃	〃	〃	〃	23.1	14.6	8.5	18.9	16.7		7.95	空輪頂部と側辺に6ヶ所の円形敲打痕、頭部ヨコ同下部と風輪ハツリB側辺縦方向に帯状に研磨、頭頂部小さく欠損、風輪は細かいハツリ、底部に円錐状の掻り込み(径7.5　深さ3.5cm)	
65	349	〃	〃	東井壁崩落	〃	〃	〃	〃	11.4	9.4	20.8	17.1	15.0		6.05	丁寧なハツリ成形、くびれ部ヨコハツリ、他はハツリC、底部には円錐形のくぼみ研磨(幅8.0　深さ4.5cm)、頭頂部に円形の敲打痕、№64と同様頭頂部も含め凹石として転用か風輪軽く研磨	
66	378	ⅢCC12	〃	〃	火輪	A	〃	〃	15.2	4.5		12.9	31.0	29.0	13.9	上部はナナメ、屋根はハツリC、軒ハツリA+研磨、底面ヨコハツリ、屋根僅かに反る	
67	366	ⅢCB12	〃	西井壁石組	〃	〃	〃	And.3	14.0	4.1		11.5	27.5	26.1	10.35	上部はハツリで中央凹む、屋根斜面は軒部分で僅かに反る、全面に丁寧なハツリC、6ヶ所にわたり円形状の研磨痕、軒ハツリA+研磨、底部ナナメ+ヨコハツリに2条の深いノミ痕	
68	382		〃	北井壁控積	〃	〃	〃	And.3(多孔質)	14.1	6.0		10.2	24.5	22.8	11.3	屋根ヨコハツリ裾部は研磨、軒ハツリB+研磨、上面、底部ハツリ	
69	367	〃	〃	西井壁崩落	水輪		〃	And.3	19.2			14.2	25.5	15.6	15.4	中央部最大径　上下面とも平坦、上面に丸ノミによるハツリ痕、側面風化による剥がれ落ちが多くあり、側面ハツリC	
70	344	ⅢCC12	〃	北井壁控積	〃		〃	〃	17.0			16.9	25.5	17.7	10.4	上面ハツリ小さくくぼむ、側面ハツリC、底部ラフなヨコハツリ	
71	383	〃	〃	〃	〃		〃	And.1	15.0			14.0	21.0	13.6	9.9	上・下面ハツリ+敲打　側面ハツリC、上端部僅かにえぐりを入れる、大径やや下位　上下面とも僅かにくぼみ平面形はともに楕円形	
72	81	ⅢCC13	SH01	2	砥石	C	〃	〃	24.0			17.5			5.3	断面三角形転石の頂点を下に、広い面を正面として使用、平行する10条と直交する刃先痕。	
73	381	ⅢCB13	SE08	南井壁	地輪		〃	And.3	17.5			24.0			16.3	上面ややラフなナナメハツリ一部分小さく破損、底面細かいヨコハツリ、側面ハツリC、断面台形	
94		ⅢBK9	SD29		〃			〃	31.0			30.0				側面及び上面ハツリ　底部あらいハツリ　断面形僅かに台形状　器高19.2cm	

3. 板碑（ハツリA～Cは五輪塔と同じ）

図番号	取上げ番号	器種・型式名	出土地点・遺構名	出土状態（層位）	全長	法量(cm、kg) 長さ 頭部	長さ 塔身	長さ 基台	幅 塔身	幅 基台	厚さ	長方形区画 長	長方形区画 幅	重量	残存状態	銘の有無	石材	成形・器形などの属性	備考
74	348	板碑 B2	SE08 ⅢCD12	東井壁崩落4層	37.7	2.4	26.5	8.8	17.2	18.2	9.7	24.2	14.8	9.6	完	不明	And.3	切り妻状頭頂部　棟を軸に仕上げハツリA+B、左軒部C、屋根返り、正面頭部・基台部A、塔身部B、側面B、左側面下部A右側面上部の一部A、背面あらいハツリのち上部右端A、他は辺にそってB、底部は裏面側のみA、荒割のまま凹状	正面区画内中央仕上げハツリののち軽く研磨以下79まで共通
75	342	〃	SH01 ⅢCB12	集石群中央3層	39.4	2.6	28.4	8.4	17.1	17.4	8.2	25.7	14.1	9.7	〃	〃	〃	頭頂部ハツリA+B、正面は頭部A、塔身部はB,基台部はA、側面は左側面下部、右側面上部はA、他の大部分はB、背面は縁片にそってA+B、左下部にB、底辺は左側A+B、右側B+A、背部底部は荒割りにより生じた高稜部を荒くハツリ底部湾状にくぼませる	
76	300	〃	〃	集石群中央2層	38.2	3.5	25.4	9.3	17.5	18.2	7.5	23.1	(14.5)	8.2	〃	〃	〃	頭頂部ハツリB+B、正面頭部区画内B+C、額A、左区画外B、右区画外、基台A、背面上半A+B、下半B+A、底部中央凹み周辺をB+A	
77	307	〃	〃	集石群3層	–	–	–	8.1	17.0	18.2	7.6	–	14.6	5.6	塔身上部欠	〃	〃	正面区画部ハツリB　区画外から基台部A、正面中央部分と基台部煤付着(?)両側面B、背面Bほぼ全面で平坦とする。底部Cほぼ全面で中央掘くぼめる（ラフ）	
78	350	〃	SE08 ⅢCC13	6c層	–	–	–	8.6	17.4	17.9	9.0	–	14.2	5.4	塔身上部欠 基台正面中央敲打によるくぼみ 基台右側辺欠	〃	〃	正面塔身部・基台部ハツリB、側面B、下部A、背面辺にそい左B、右Aラフ、底面上側A、下左側C、右B、右端欠損で不明、底面ほぼ全面に成形僅かにくぼませる　正面塔身から基台にかけ煤付着、ただし基台中央のくぼみは煤付着後	
79	361	〃	〃	東井壁崩落6d層	38.5	2.1	27.7	8.7	17.0	18.0	8.3	25.2	14.3	8.6	完	不明	〃	頭頂部両側ともハツリA、正面頭部破損不明、正面塔身B基台部左B右A・両側面ともB、背面上半のみ縁辺りにそい左A、右B、下半は荒割りのみ、底部、荒割りのみでくぼませ仕上げハツリなし	

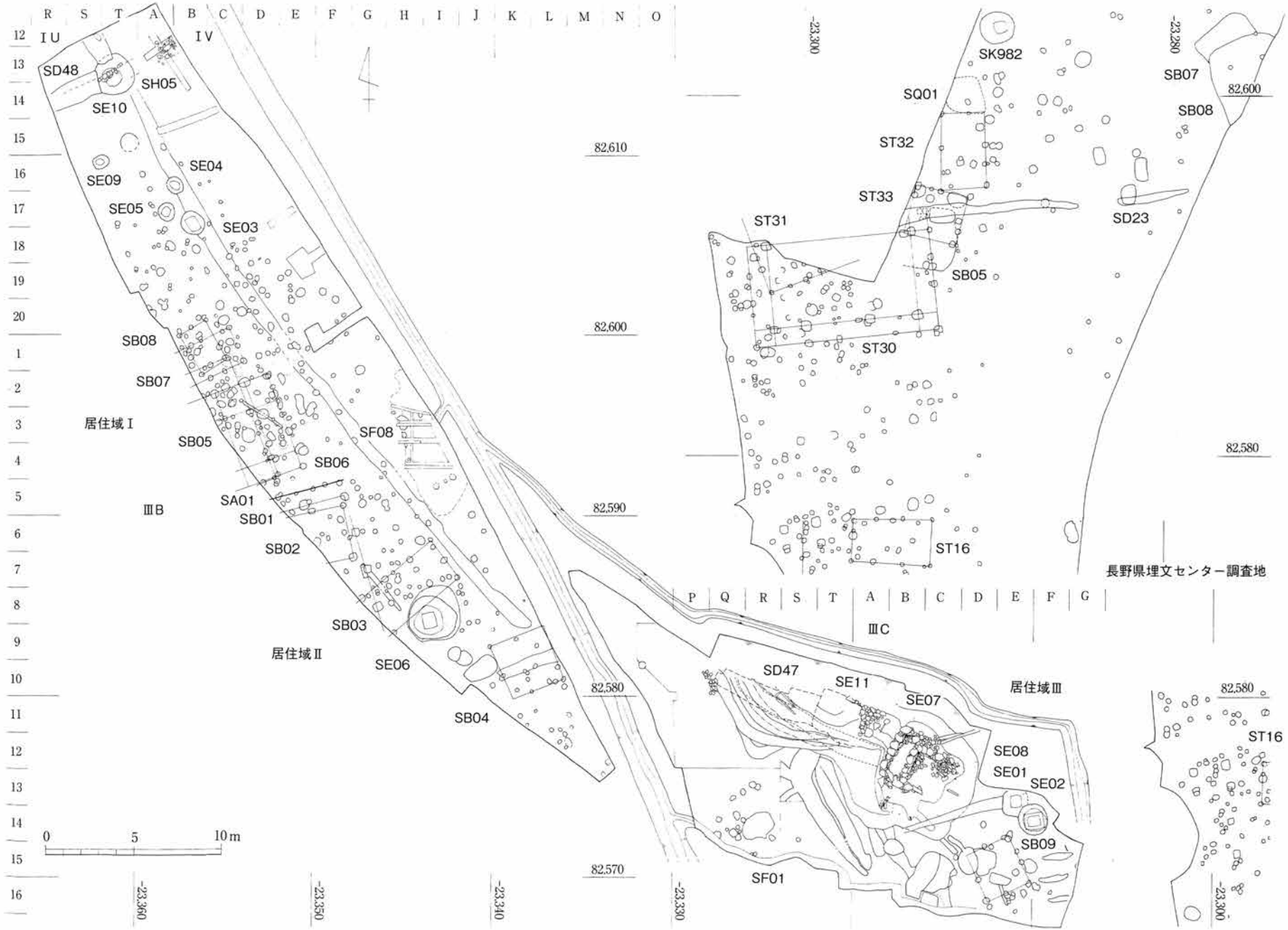
表7　表町遺跡出土銭貨観察表

図No.	遺物No.	遺物名	出土地区	遺構	法量(mm) 縦	法量(mm) 横	重量(g)（破損）	初鋳年	出土土層
1	143	嘉祐元宝	ⅢCB13	SH01	23.2	23.2	3.6	北宋・嘉祐元年(1056年)	黒色粘質土
2	69	元豊通宝	ⅢCC14	〃	24.3	24.3	2.6		黒色粘質土
3	64	元祐通宝	ⅢCA13	〃			2.3		黒色粘質土
4	308	永楽通宝	ⅢCB13	〃	25.0	25.0	4.0		
5	359	開元通宝	ⅢCB12	SE08	23.0	22.4	3.2		有機混黒色砂質土
6		不明	〃	〃			1.1		
7	317	〃	〃	〃	21.8	21.7	1.9		黒色土
8	172	元祐通宝	ⅢCA12	SG01	25.0	24.9	3.3		有機多量混黒色土
9	161	皇宋通宝(?)	ⅢCB14	〃	23.4		(2.1)	一部欠損	〃
10	265	天禧通宝	ⅢBS11	SD45	24.0	24.0	2.9	北宋・天禧年間(1017年～)	SD45埋土
11	273-1	皇宋通宝	ⅢBS12	〃	24.2	24.3	3.5	北宋・宝元2年(1039年)	SD45床
12	273-2	熙寧元宝	〃	〃	24.2	24.2	3.2	北宋・熙寧元年(1068年)	〃
13	270	宣和通宝	ⅢBR10	〃	24.1	24.1	3.0	北宋・宣和元年	
14	267	嘉泰通宝	ⅢBS11	〃	24.9	24.7	4.2	南宋・嘉泰元年(1201年～)	SD45埋土
15	520	天禧通宝	ⅢBL10	居住域Ⅱ			(1.0)	一部欠損　複数小片接合	褐粒混黒色土
16	162	皇宋通宝	ⅢBQ11	居住域Ⅲ			(1.1)	1／2弱欠損	褐粒少量混黒色土
17	514	元祐通宝	ⅢBG3	居住域Ⅱ	24.7	24.5	2.5	北宋・元祐元年(1086年)一部欠損全面腐食	褐粒混黒色土(帯黄色土)
18	605-2	元豊通宝	ⅢBC3	居住域Ⅰ			(1.1)	北宋・元豊元年(1078年)	焼土混黒色土
19	610	不明	ⅢBC1	〃			(0.8)		
20	523	熙寧元宝	ⅢBH5	居住域Ⅱ	24.0	24.1	2.0	北宋・熙寧元年(1068年)	褐粒混黒色土
21	584	元祐通宝	ⅠUT13	居住域Ⅰ	24.6	24.6	2.2	北宋・元祐元年(1086年)	黄色混黒色土　（地山直上）
22	532	〃	ⅠVF19	〃	24.5	23.6	2.1	一部欠損	褐粒混黒色土

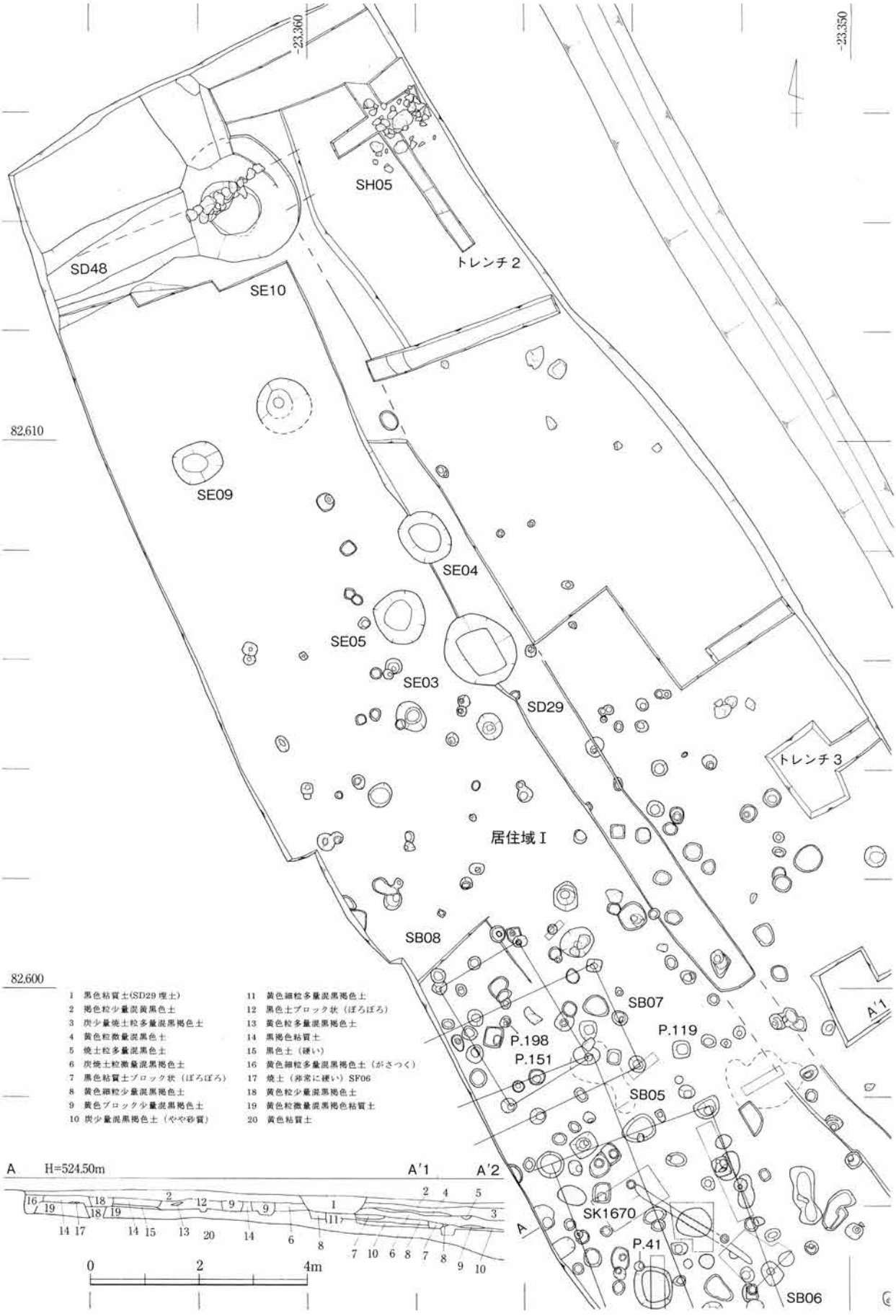
表８　表町遺跡出土木・竹製品観察表　　（註）○番号は樹種同定済　　口径には曲物底板径も含む

図番号	整理番号	取上番号	器種	遺構等	層位	木取・木目	樹種	法量(cm)			属性	残存率	備考
								口径	底径	器高			
1	91	167	漆器 椀	SE08	6b			(15.0)	6.0	(7.0)	体部上半変形　外黒内赤、外面赤塗文様(不明)、高台は「く」の字状に外反	4/5	
2	90		〃	SG01	3	板目	広葉樹		4.4		口縁部は欠損、高台はロクロケズリだし,外黒内赤、高台不明　残存状態不良	1/4	
3	93	227	漆器片	SD44	埋土	〃	〃	14.0			外黒内赤	1/5	
4	96	269	〃	SD45	〃	〃	〃				破片2点、内外黒、接合をしないが木取りから外面に円文を中心に歯車文(赤塗)、器種不明		
5	95	241	漆器椀	〃	〃	〃	〃		6.0		器形の全体様相は不明、高台は欠損、内外面とも黒漆　器肉は3mmと薄い	1/4	7点の破片(内3点接合)
6	105	409	木地　椀	SE11			〃	15.3	5.2	8.0	内外面とも黒色を呈す　外面体部の中央にケズリによる横位の円文列、ケズリだし高台　体部は底部から口縁部にかけて内弯して立ち上がる　漆塗りの痕跡不明	1/2	11点の破片(内4点接合)
⑦	294-4	580-(4)	甑板(曲物底板)	SE06	8a	柾目	アスナロ属	23.5			厚さ0.5～0.9cmの扁平な側面は粗いケズリで二ヶ所に目釘孔、孔21個が不規則に配置　底板面ヤリガンナによるケズリ		
⑧	251	590	曲物底板	〃	9b	〃	〃	21.7			厚さ1.0～1.4cm、目釘孔三ヶ所、側面ケズリ、内外面ヤリガンナによるケズリ(半切、目釘で接合)		
9	131	574	曲物側板	〃	6	〃	ヒノキ				幅6.4cm、厚さ3～5mm　曲物板部分か		
10	257-2		〃	〃	〃	〃	〃				厚さ2mm		
⑪	294-3	580-(3)	〃	〃	8a	〃	アスナロ属				幅6.7cm、厚さ5mmで2枚重ね　二ヶ所に樺止めあり、内面に不均等な斜刻線、曲物側板の合わせ部位		
⑫	294-1	580-(1)	曲物	〃	〃	〃	アスナロ属(側板)ヒノキ属(底板)	(21.2)		18.0	側板はヘギ板の2枚重ねで合わせ部で3枚とし桜皮の0.7～0.9cm幅で1.5～5.0cmの長さで四ヶ所で綴じ合わせる、底板と側板は木釘五ヶ所で結合、口縁端部は一部破損	完存	
13	257-1		曲物側板	〃	6	〃	ヒノキ				幅3.7cm厚さ2～3mm　内面斜行刻線がある　重ね合わせ面を1mmほど薄くケズリ、側板合わせ面の部位		
⑭	263	258	曲物底板	ⅢBQ11		〃	ヒノキ属	17.5			厚さ1.0～1.3cmで扁平、内外面とも腐食が激しく木目繊維に沿って凹凸が著しい　目釘孔は確認できない	1/2	
⑮	155	355	曲物板	ⅢCB11		〃	〃	18.0			縦木取りで厚さ0.2cm、内外面ともにケズリ痕不明	1/3	
⑯	45		〃	SH01			〃				残存長23.5cm・幅2.4cm厚さ0.3cm　薄い板、両端折れ欠損		
⑰	127	327	柄杓底板	SE08 ⅢCC13	6d	柾目	〃	7.5			厚さ0.7cm、横木取り、目釘孔はない、内面側面とも丁寧なケズリ、裏面はやや粗いケズリ		
⑱	253	296	曲物底板	SE08 ⅢBB13	3c	〃	アスナロ属	23.6			厚さ1.0cm　縦木取りの杉板材柾目　目釘孔は十六ヶ所観られるが、その内数ヶ所は打ち損じ又は補修時のヶ所と思われる　側面はケズリ内外面ヤリガンナ痕		
19	129		柄杓底板	SE08 ⅢCC13	〃	〃	ヒノキ	7.5			厚さ0.5cm、横木取り、目釘孔はない、裏面は焼けによる炭化、使用頻度が高い著しい擦りによる使用痕がある　風化が著しい		
⑳	128	330	〃	〃	6d	〃	ヒノキ属	7.5			厚さ0.5cm、横木取り、目釘孔はない、内面側面及び裏面とも丁寧なケズリで裏面の対面する部分に擦りによる磨滅痕がある		
21	100	288	〃	SH01 ⅢCB13	2	〃	ヒノキ	7.5			厚さ0.5cm、横木取り、目釘孔はない、内面側面及び裏面とも丁寧なケズリで表面に僅かなヤリガンナケズリ痕が観られる　裏面の一部に擦りによる磨滅痕がある		
22	126-2		曲物側板	SH01 ⅢCC13	3	〃	〃				幅2cm、厚さ0.4cm、一面にヤリガンナケズリ痕と不規則な浅い斜行刻線がある		
23	150		〃	SE08 ⅢCB13		〃	〃				厚さ4mm　表面に4条の斜行刻線、内面に垂直刻線をともなう		
㉔	152	401	〃	SG01	底	〃	ヒノキ属				幅6cm、厚さ2mm、目釘孔2ヶ所あり、重ね板の一部位		
25	141	152	〃	SH01 (下層) ⅢCB13	3	〃	ヒノキ				厚さ3mm、垂直刻線		破片多数
26	248	SE02 (41)	曲物	SE02	13	〃	〃	18.0		10	側板の身の残存は2/3弱で2重、底板は縦木取りの柾目　底板内外面はヤリガンナのケズリ痕が著しい　表面に油脂付着による黒色を呈す　側面を丁寧なケズリに仕上げている　目釘孔は十四ヶ所確認されるが不均等なものもあり補修時の物も含まれるものと思われる　二ヶ所に木釘が残る		
27	264		曲物側板	〃	8	〃	〃				幅4cm、厚さ2mm、サクラの樺止め孔跡がある		他小破片1点
28	138		曲物側板	〃	15	〃	〃				幅4cm、厚さ2mm、一ヶ所にサクラの樺止めがある　柄杓の側板部位の一部か		他小破片5点
29	146		〃	〃	13	〃	〃				幅3cm、厚さ2mm、表面に格子状の刻線、裏面には垂直な刻線		他小破片20点
30	254		〃	〃	〃	〃	〃				厚さ2mm		他小破片20点
31	249		〃	〃	〃	〃	〃				幅4cm、厚さ2mm		
32	255		〃	〃	〃	〃	〃				厚さ3mm　目釘孔があり底部位の側板		他小破片3点
㉝	266	251	柄杓底板	SD45	埋土	〃	スギ属スギ	11.2			厚さ0.3cm、表面は丁寧な仕上げで外側に相対した並行刻線がある　裏面は粗いケズリ仕上げ	1/5	
㉞	270	272-(2)	棒状加工品	〃	〃	〃	ヒノキ属				残存長12.8cm、幅1.6cm、厚さ1.0cm、断面は楕円形、先端を楕円状にケズリ出し、残存部中央に目釘上端折れ		
㉟	132		小判形木札	SD45 ⅢBS11	黒色土	板目	アスナロ属				長さ7.0cm、幅3.8cm、厚さ0.4cm、正方形で角を隅丸状にケズリ落とし、上からやや1/4に目釘がある、用途不明		
36	94	233	桜樺	SD44	埋土								
37	〃	〃	〃	〃	〃								
38	41		〃	SD44 ⅢCB13	3	桜皮					二重に残存　曲物合わせ止め用の樺材の残滓か		
39	126-1		棒状加工品	SH01 ⅢCC13	〃	柾目	杉				長さ16cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm、断面ほぼ四辺形、炭化された部分がある、用途不明、先端ケズリ		
40	125	324	木栓	SE08 ⅢCC13	6c	枝材	不明				長さ6cm、円形幅2.5cm　差込部をやや細くし先端部より2/3にに逆さカマボコ状に握り切り込みを持ち反対の端部に5mmほどの突き出しケズリされる		
㊶	130	352	木製匙	SE08 ⅢCC12	5		マツ属				全長19.7・匙部長さ5.7、幅2.5・柄長さ14.0・幅1.2cmを計る　匙部は基で0.7cm先端部で0.2cmと徐々に小刀で薄くケズリ丸く仕上げ、表面は平坦　裏面はやや丸みを帯びている　柄部は基から先端部にかけ僅かに細くケズリだし角は各面を面取り仕上げし断面は楕円状、先端部幅0.7cmを計る		

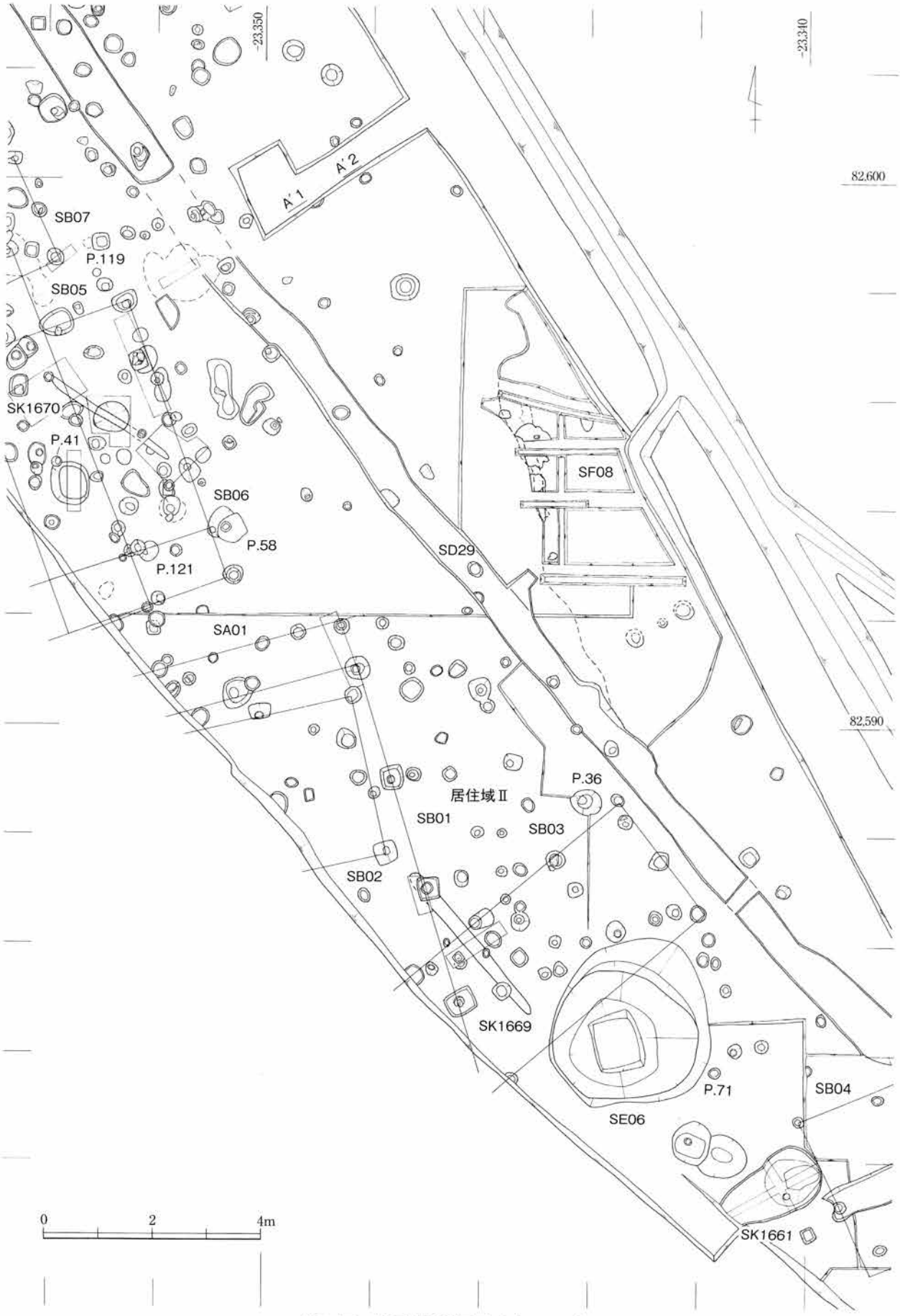
図番号	整理番号	取上番号	器種	遺構等	層位	木取・木目	樹種	法量(cm)			属性	残存率	備考
								口径	底径	器高			
42	250	408-(2)	漆器(お盆)	SE11	埋土	柾目	ヒノキ	38.5			器厚は中心芯部1.5cm・口縁部の基で1.0cm口縁端部で0.5cmである　表面はロクロ痕跡を顕著に残し模様を意識したものか。縁の立ち上がりは器厚が0.3～0.4cmと不均衡で僅かに外反、縁幅は0.7cm、表面を黒漆塗り、裏面は底面ヤリガンナで中央から縁に向かいケズル。　不規則方向の刻線が数条観られ、凹凸が多い。端部は底部の平台よりロクロケズリだしで僅かに黒漆塗りされている　底部に三ヶ所1cm位の穿孔があり2ヶ所は表面まで貫通し木栓で穴埋めしその上から漆をぬる	1/3	
㊸	19	390-(2)	柝SX03部材	SD47	〃	〃	コナラ節				長さ40cm・幅14.5cm・厚さ4.0cm　端部の一端は弧状に加工反対の端部は折れで45と同一固体であるが接合は出来ない。遺存状態が悪く加工痕不明、SD47に係わる柝SX03の側板		
㊹	5	402-(2)	割り板材	〃	〃	縦取板目	トネリコ属				表面は平滑な仕上げであるがケズリ具痕跡見られず多くの線刻がある、裏面は凹凸が著しく端面の一端は丸みを帯びたケズリ加工、反対側は折れによる欠損		
㊺	19	390-(1)	柝SX03部材	〃	〃	縦取柾目	コナラ節	75.4			幅12.4cm厚さ2.8cm、遺存状態が悪く加工痕不明　広面端部に数条の線刻あり　3片のうちの2片		
㊻	21	391	杭	〃	〃	芯持丸太	クリ	43.5			断面円形で径6.5cm、先端部は二面に僅かなケズリ痕があるが他は腐食により確認が出来ない、形状から三面ケズリと窺がえ残りの一面にはケズリない		
㊼	31		不明加工材	SD45 ⅢBT12			クヌギ節	19.0			断面はほぼ長方形の板材、端部を丸く面取りし側面に僅かにケズリ痕が残る。用途不明		
㊽	30	209	〃	SG01 ⅢCA14		割り材	ミズキ属	15.0			幅6.0cm、断面台形の板状加工品　表面をケズリ加工　端部を段切りで斜めに切り落とす		
㊾	74	563	〃	SE06	3d	〃	マツ属	31.0			角割り材で表面全面に焼け焦げ、建築材か		
㊿	71	554	刳物 (木製桶)	SE06 ⅢBI9			〃				残存長側部16.8cm、底部18.7cm、長さ26.8cm　丸太からコの字状に刳り出し内外面ともケズリ痕が残る　側部の端は材の切り面を7.0cmの厚さで端部の側面としていることからかけ流しの先端部分と思われる、端部の側面側は鋸状である、風化腐食のため群細は不明		
51			肥溜桶	SX02					85.0		底径85.0現在高45cmの桶、幅20cm前後の側板(52)20枚を使用して竹のタガで結い止める、底板(53)は6枚		SX01は底板のみ
52	319		〃	〃		縦取柾目	マツ属				残存長34cm・幅12cm・厚さ1.6cm　表面上下2ヶ所に間隔約10cmのタガ締め痕跡残る　裏面に底部より上約5cmに底板のあたり痕あり、上部は欠損　側板の一部		
㊸	317		〃	〃		〃	〃				残存長63cm・幅16cm・厚さ2cm　内外面とも遺存悪く加工痕は観られない　底板の一部		
54	252	32-(1)	板	SE02		柾目					長さ30cm、幅3.0cm、厚さ1.5cm、4本組の板、用途不明、側面に目釘穴		
㊺	28		杭	SD45 ⅢBS11	トレンチ内		モモ亜属 orスモモ亜属				残存長14.6cm　最大径ほぼ円形で径3.5cm　先端部は四面ケズリ		
㊻	73	562	板	SE06	3c		マツ属				残存長58cm、幅12cm・厚さ8cm　炭化した建築材か		
57	294-2	580-(2)	細工加工材	〃	〃	板目	杉				用途不明		
㊽	75	571	杭	〃	〃	芯持丸太	クリ				残存長55.5cm　断面径4cm　先端部折れ欠損、断面円形		
㊾	50	290-(4)	〃	SE11 (東堤)		〃	ブナ属				残存長39.4cm断面ほぼ円形径5.8cm、先端部一面のみ斜めにケズリ、側面に僅かに樹皮が残る、上端折れ		
㊿	316	290-(1)	〃	〃		〃	ヤナギ属				残存長68.4cm・径8.4cm　先端部は4面ケズリ錐状　部分的に樹皮が残る　上端部は折れ欠損　断面円形		
㊶	1 2	410-(1) 410-(2)	木製品	SE11	SD47横	縦取板目	(1)トネリコ属 (2)クリ				主要面は側・上辺に縁を残してケズリを入れて長方形に窪ませ、下端は中軸の棒状の把手部にむけ側辺を収約させる(羽子板形)　窪も高まらせた結果縁を失う　背面は平坦で側辺の収束にあわせたて折れ把手部で再び背面と併行する、縁取りされた窪部があることから容器の一種であろう　尚、両面に無数の細いキズが不定形にあり、まな板として再利用　折半されて出土、それぞれ材質が異なるところから、接合されて使用されたもの　接合方法不明		
㊷	77	212	四乳ソリ	SG01 ⅢCA14		芯持丸太	ハリギリ				四乳ソリの先端部分残存長72cm、幅10cm、高さ9.2cm、乳は先端から55cmにありケズリ出し滑走面平坦で断面形は四角～三角形状、先端細ほそりで上方へ反る　県道地点出土の四乳ソリに似る		中野(2009) 122-308
㊸	56	290-(3)	割板材	SE11 (東堤)		縦取柾目	〃				長さ48cm・幅11.5cm・厚さ4cm　広面表面四ヶ所に不整形なケズリ痕　側面の一部に僅かにケズリ痕がある　両端面は切痕らしき痕跡が認められるが明確ではない　№69と同一用材であるが接合は出来ない　端部一端は欠損		
㊹	61・62 63・79	415 (1～4)	加工材	SE11			ニレ属				残存長89cm、加工痕不明、四ケ所の折れの接合図		
㊺	24	207	杭	SG01 ⅢCA14		芯持丸太	ブナ属				残存長26.7cm断面はほぼ円形で5.5cm、先端部は側面一部を残し他をオノによるケズリで鋭角に落とし扇状の先端としている　側面に大きな割れがあるが自然のものである　側面の一部に樹皮が残る		
㊻	72	138	〃	SG01 ⅢCC13		〃	ヤナギ属				残存長54cm　断面径6cm　先端を三面ケズリ一面は元材頭部欠損　断面楕円形		
㊼	60	137	〃	SG01 ⅢCC14		芯持丸太	〃				残存長40.8cm　断面はほぼ円形で5.0cm計る　先端部二面にケズリ痕　他腐食により不明　頭部は樹皮残存		
㊽	15	402-(1)	割板材	SD47		縦取板目	トネリコ属				残存長52cm、正面は平滑なハツリ仕上げ、多数の線刻　裏面は凹凸が著しく割り材のまま　端面は片方がケズリ、反対側折れ		
㊾	55	290-(2)	〃	SE11 (東堤)		〃	ハリギリ				残存長49cm・幅16.5cm・厚さ5cm　正面平滑なケズリ　裏面はワリ加工左側面斜めケズリその上部に切り込み加工　右端部は折れ		
㊿	311	395	柝SX03 側板	SD47			コナラ節				残存長140.5cm、幅21.8cm・厚さ2.4cm、長方形正面にチョウナハツリ痕　側面に板幅残存　両端に一ヶ所の切り込みがある		
(71)	313	419	石組枕木	SE08 西壁	石積中段	半割材	カツラ				長さ158.5cm　最大幅17.0cm　厚さ8.5cm　上面と両側面オノケズリで成形、断面は扁平なカマボコ状、ヒビ・割れ筋が多い遺存が悪い		
(72)	312	380	〃	SE08 南壁	南石積	〃	〃				長さ180cm、最大幅23cm、厚さ10cm、上面と両側面ハツリ、断面は扁平なカマボコ状、側面の一面やや厚め、石当たり痕の凹み八ヶ所		
132 ～ 134	102		鋸歯状 竹製品5点	SE06							径1.8～2.0cmのハチクを3分割または半截した一辺に鋸歯を刻んだもので刻目数は34(132)、26(134)である　長さ14、幅1.4(132)、長さ10、幅2.5cm(134)であるが折れているため真長は不明、尚、134は下端の節部分は左右からケズリを入れ中央で折り、上端の鋸歯の反対側にもケズリがある、133表面には黒色の付着物がある、用途不明		



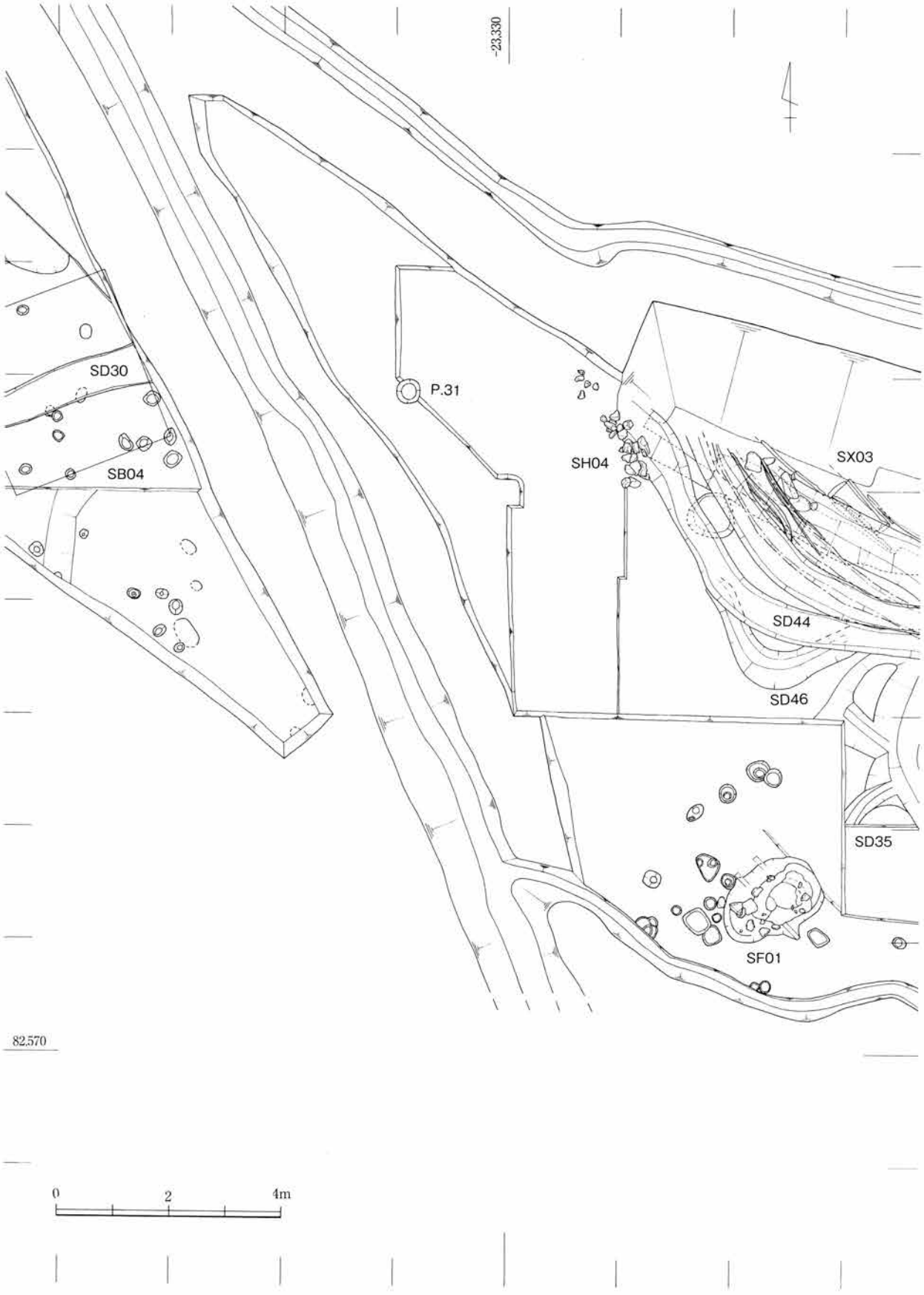
第12図　表町遺跡発掘全体図（1：300）



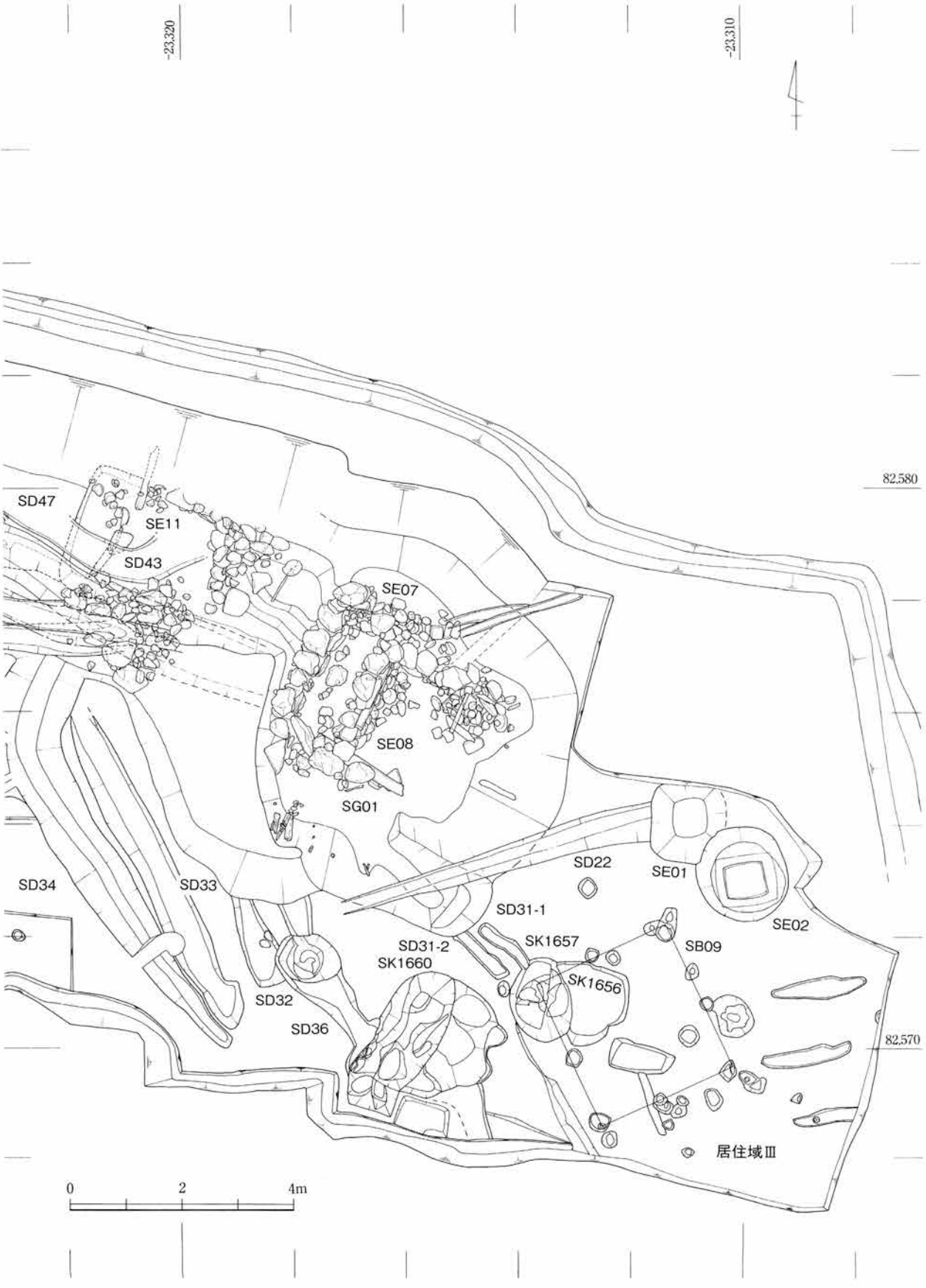
第13図　表町遺跡発掘図(1)（1：100）（破線囲みは粘土ブロック）



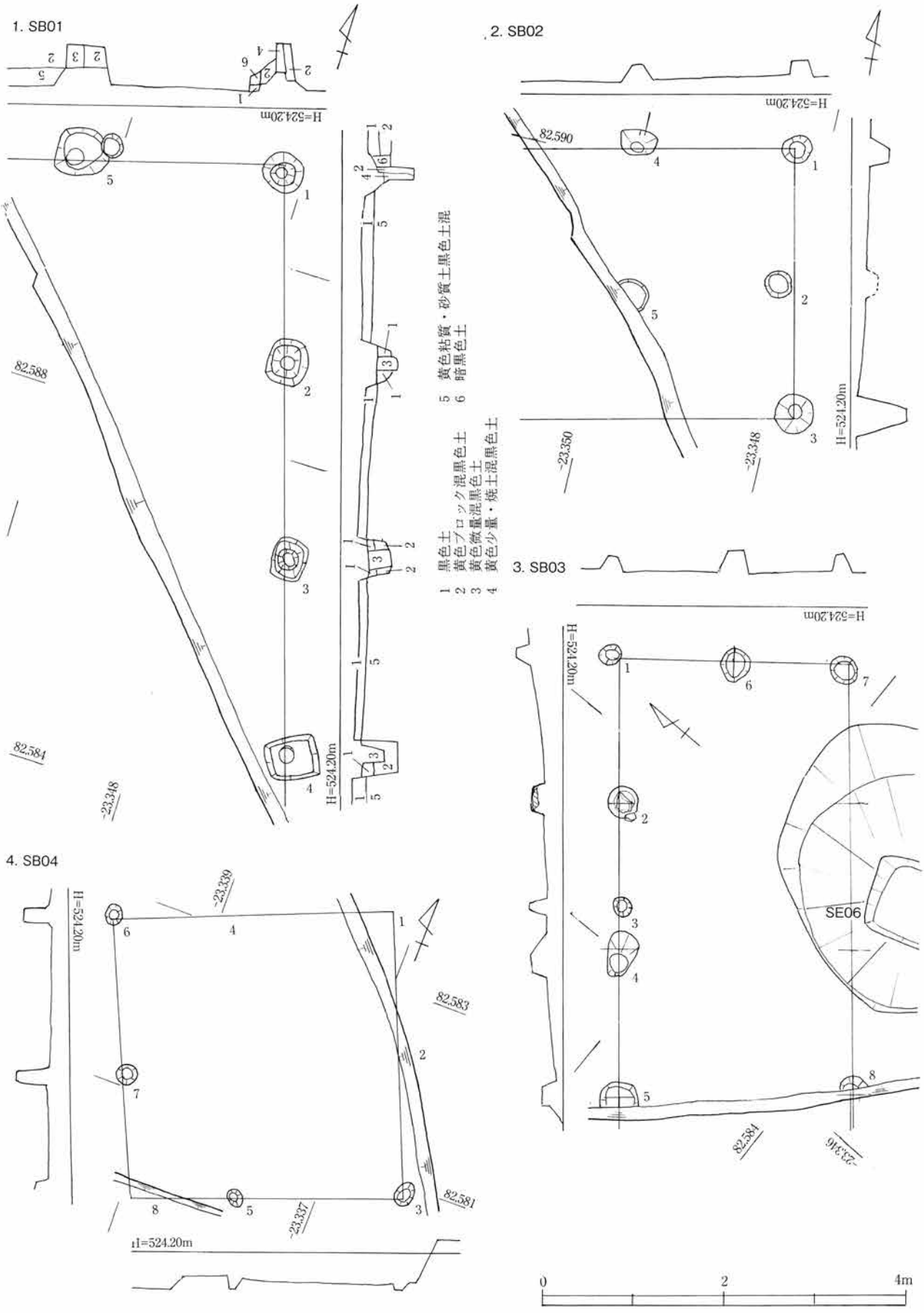
第14図　表町遺跡発掘図(2)（1：100）



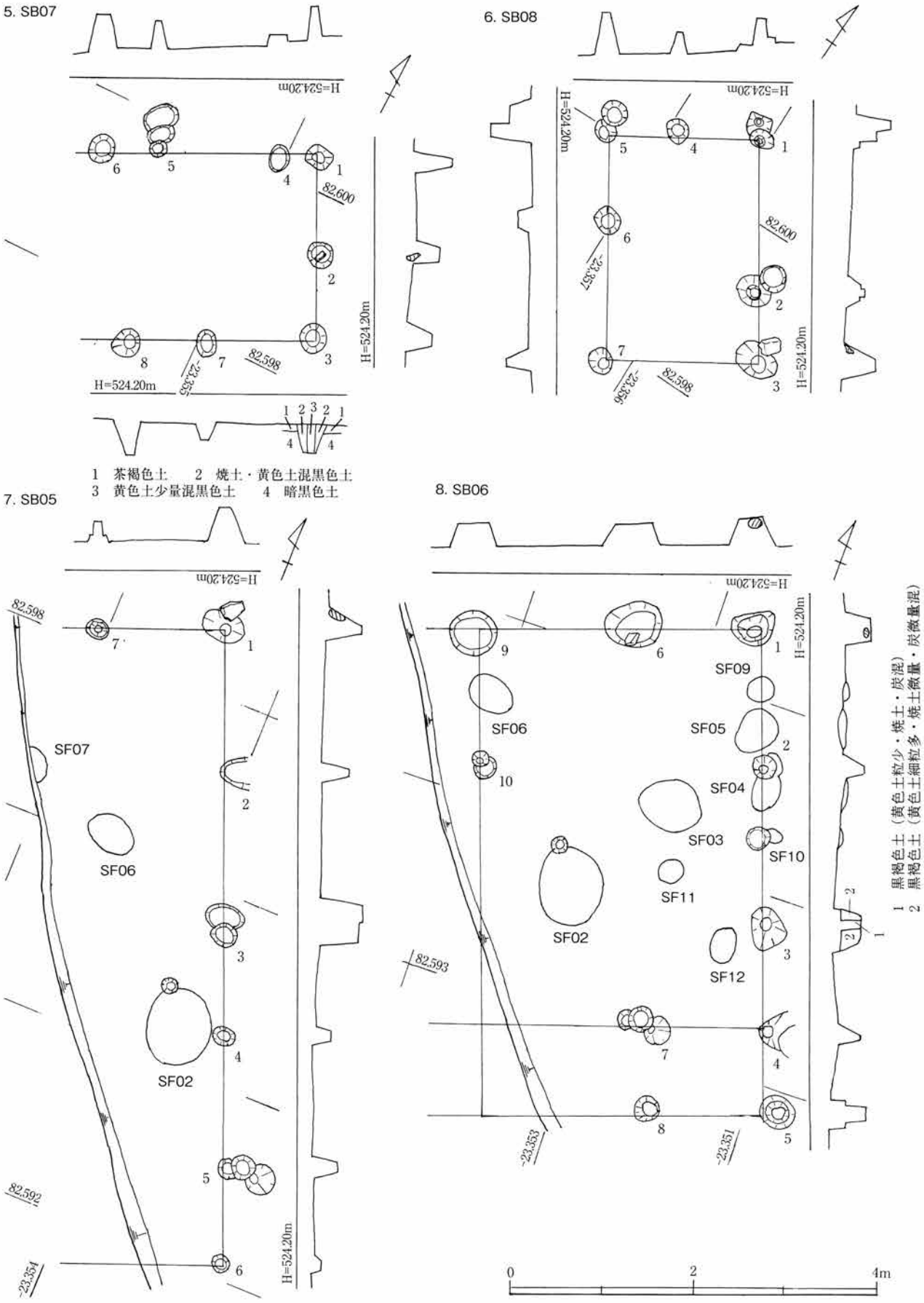
第15図　表町遺跡発掘図(3)（1：100）



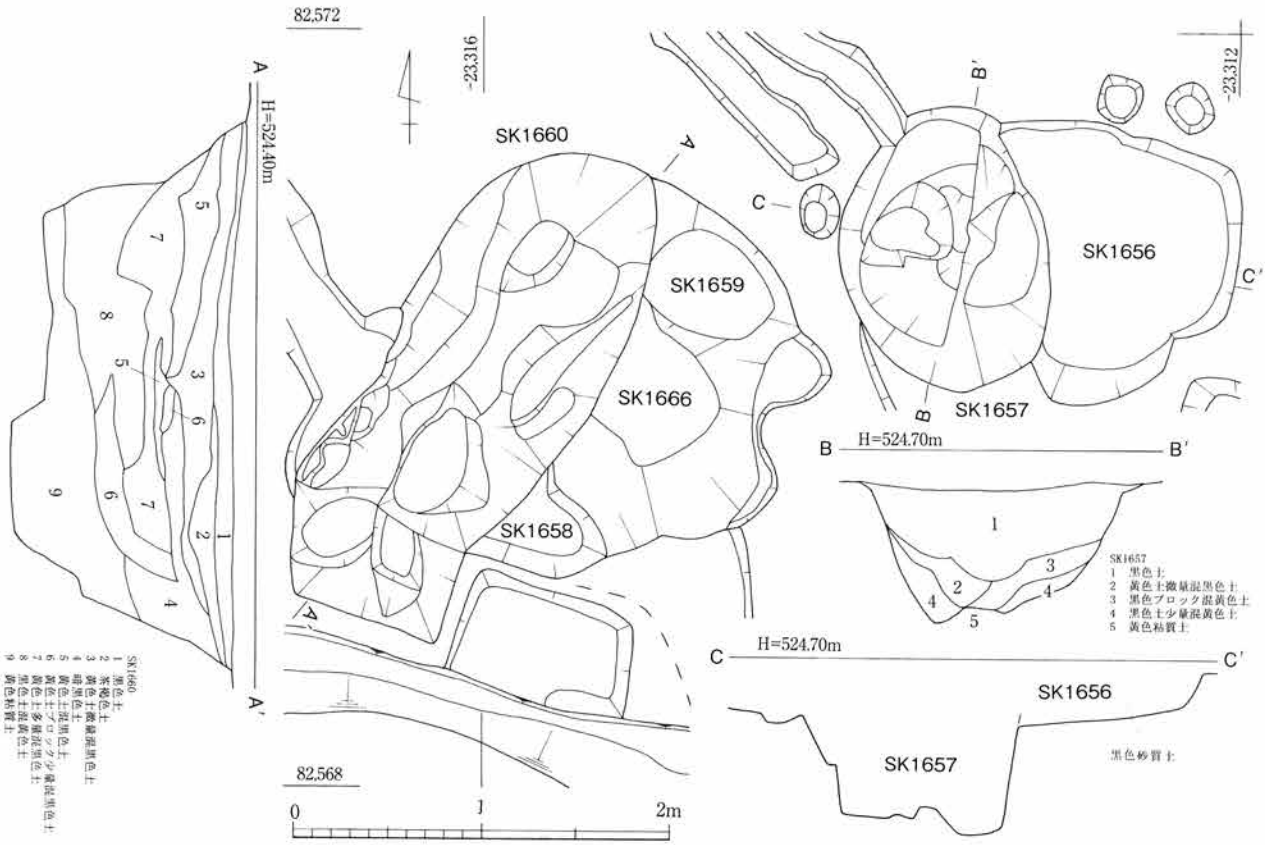
第16図　表町遺跡発掘図(4)（1：100）



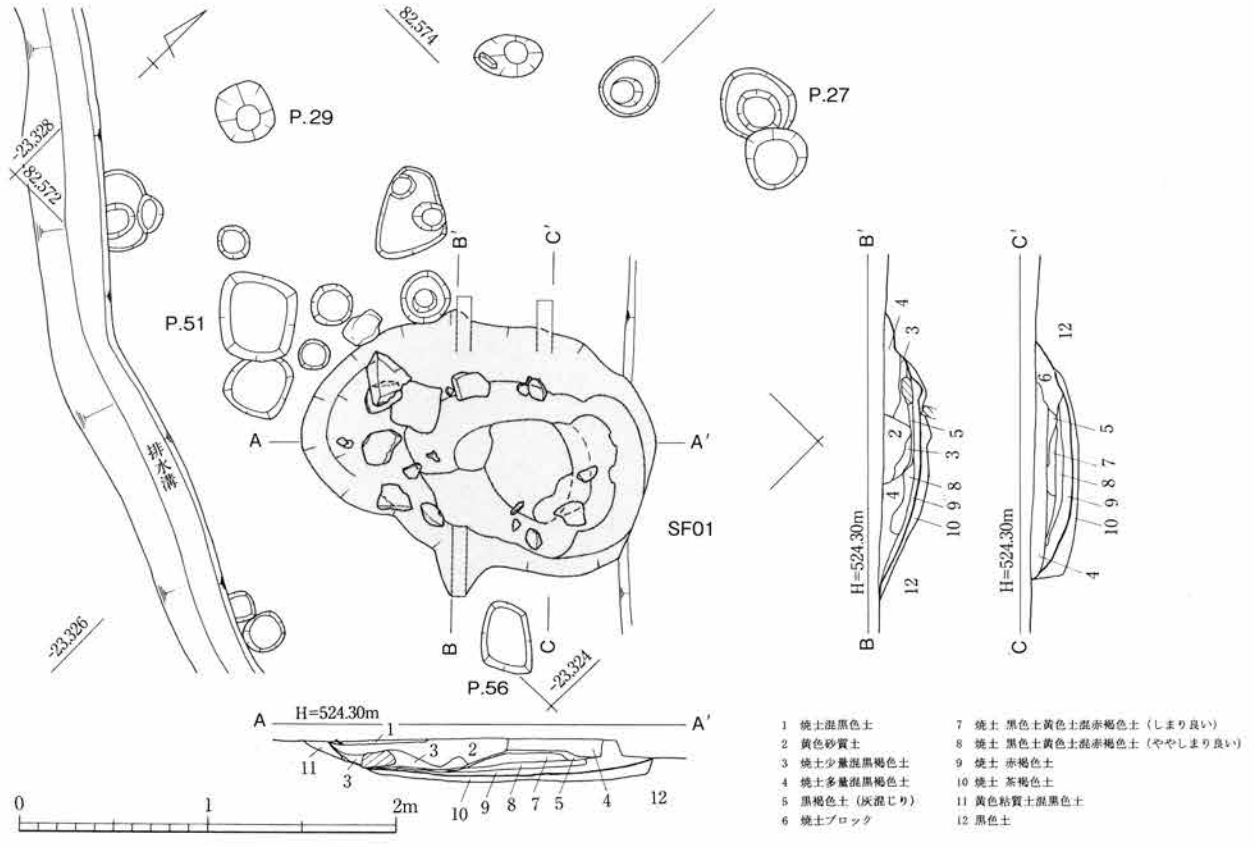
第17図　掘立柱建物(1)　SB01・SB02・SB03・SB04（1：60）



第18図　掘立柱建物(2)　SB07・SB08・SB05・SB06（1：60）

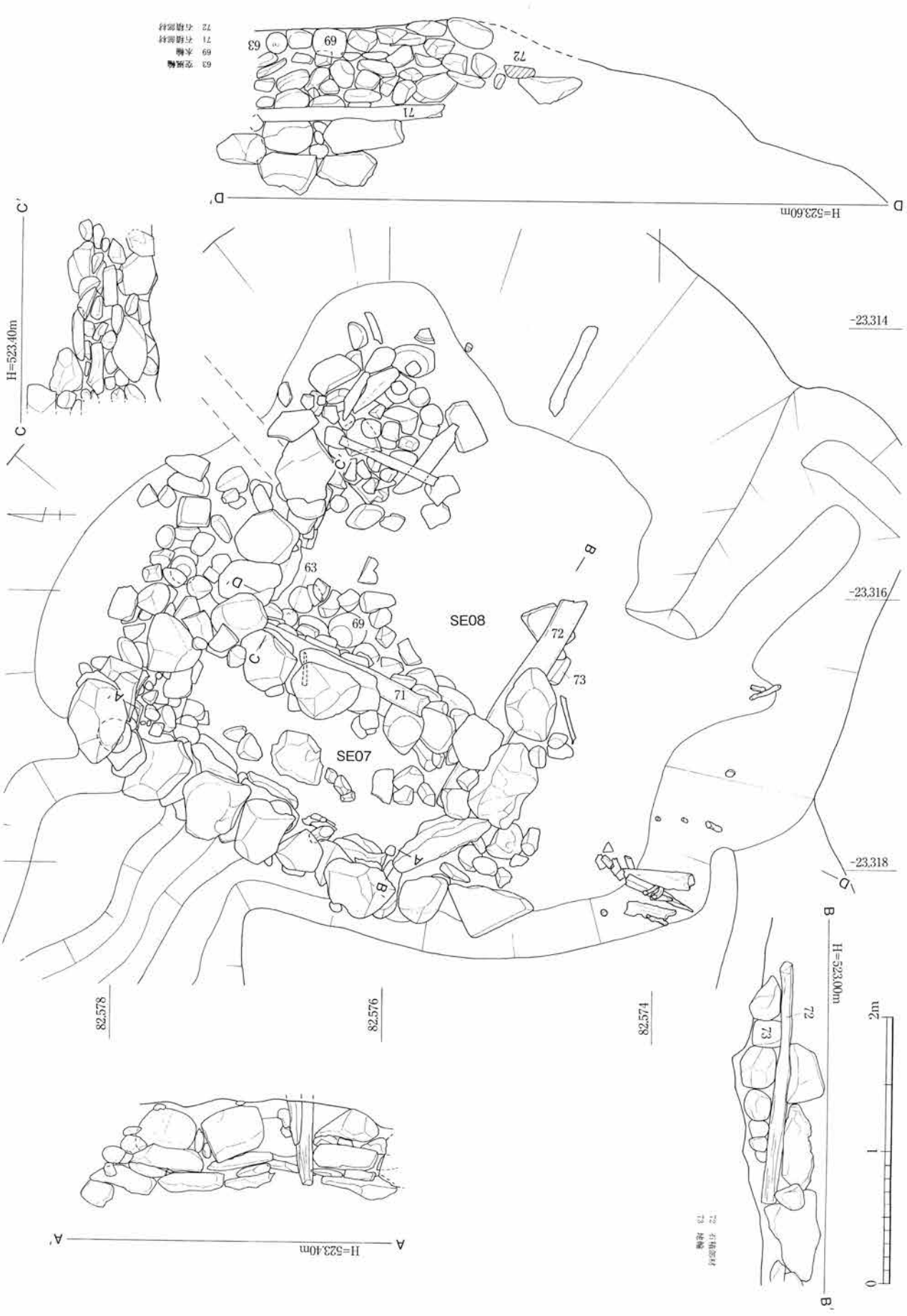


第19図　土坑 SK1656～1660・1666（1：40）

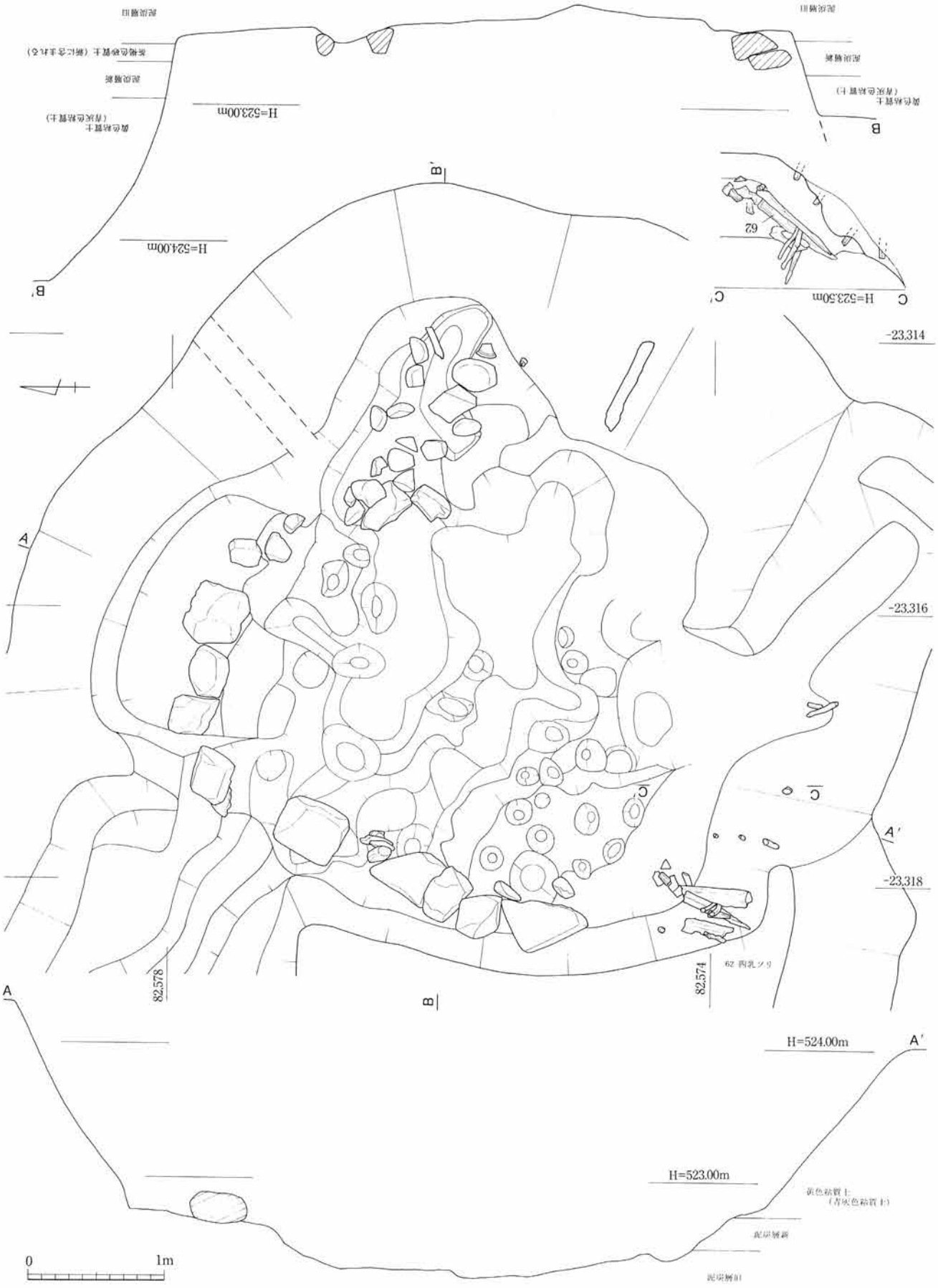


第20図　炉床 SF01（1：40）

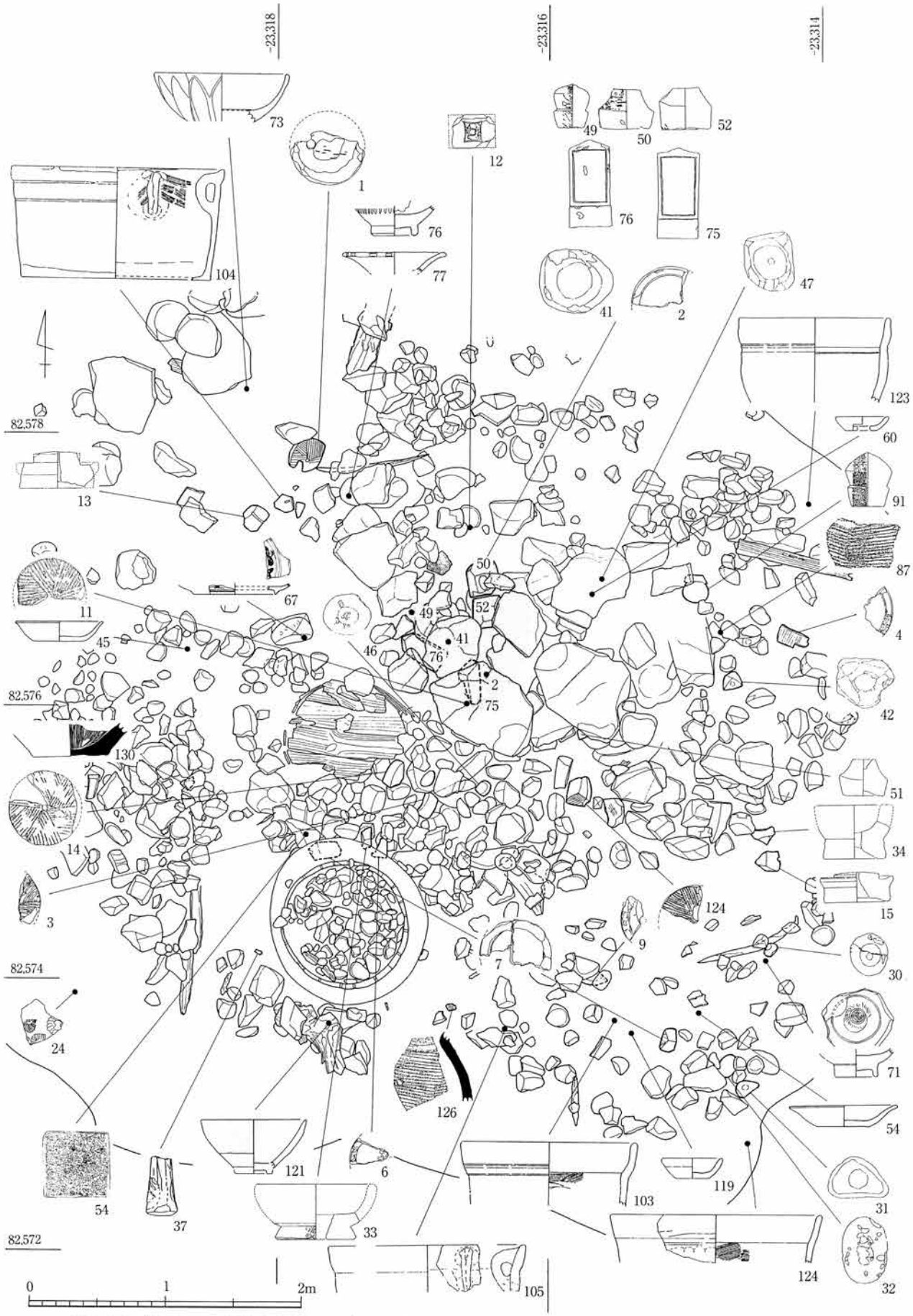
第21図　集石 SH01、肥溜 SX01・02（1：40）



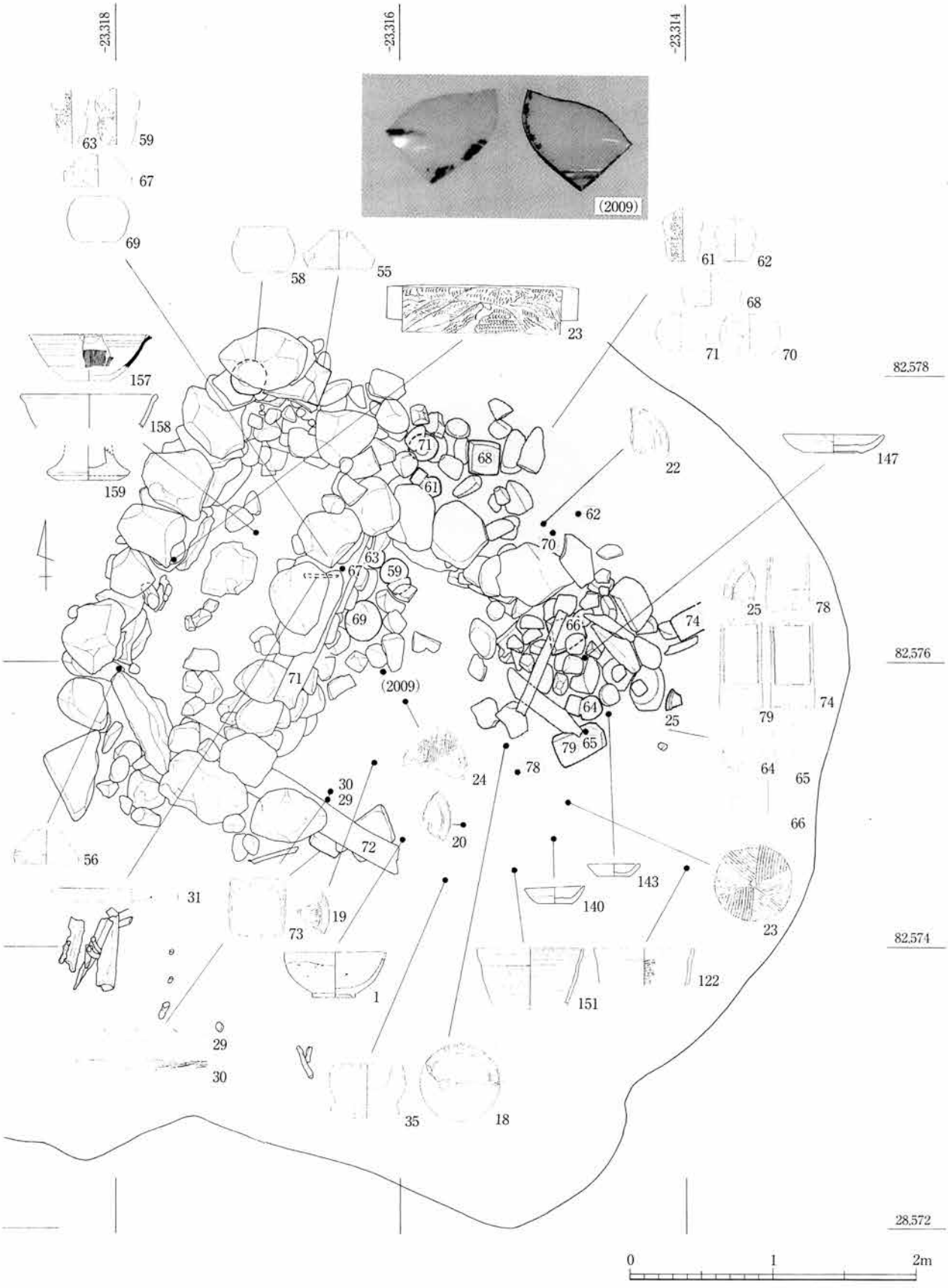
第22図　石組井戸 SE07・08（1：40）



第23図　貯水池 SG01（1：40）

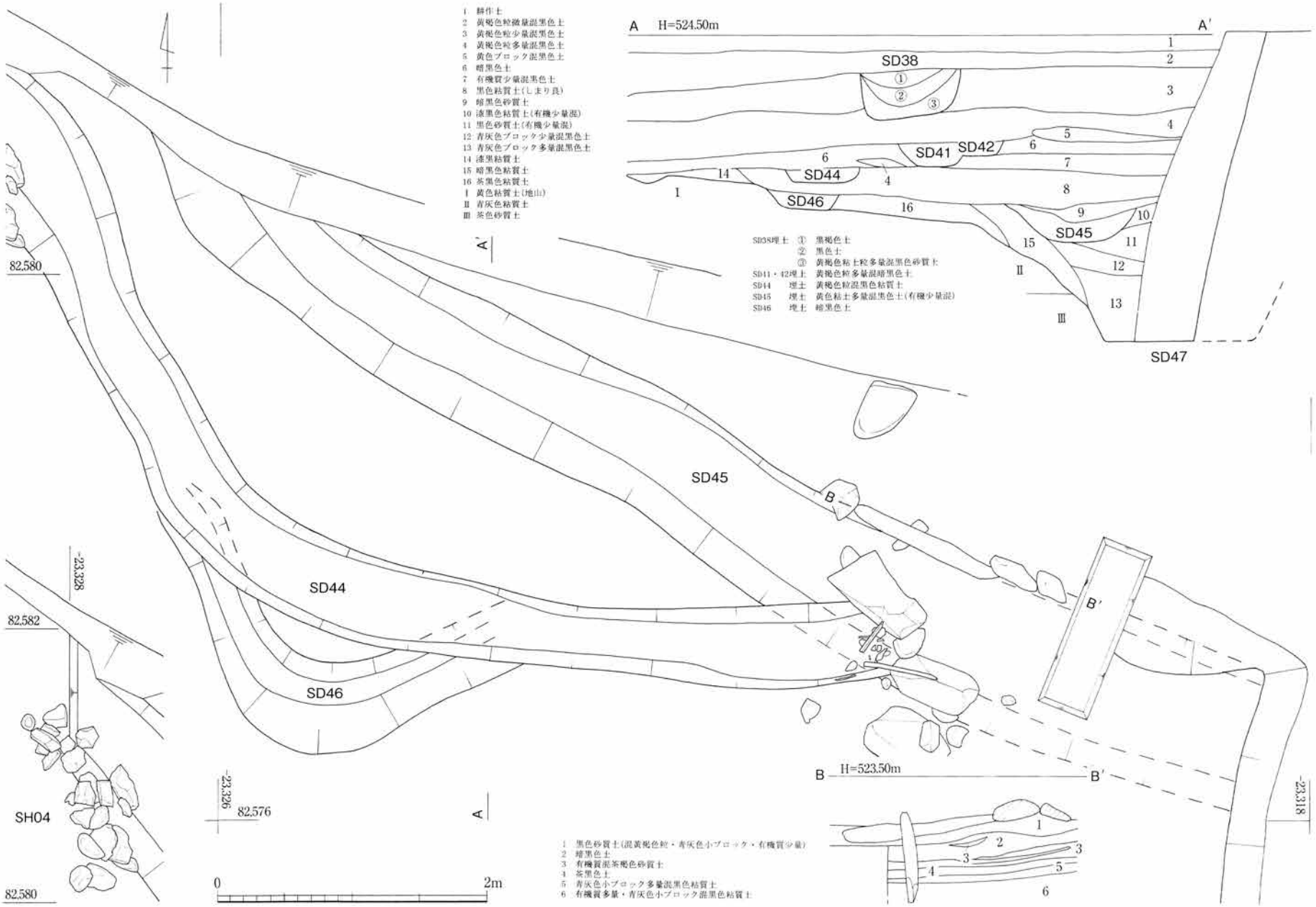


第24図　集石 SH01遺物出土状況図（1：40）　土器・陶磁器1：8、1：6　石製品1：24、1：16、1：6　金属製品1：4



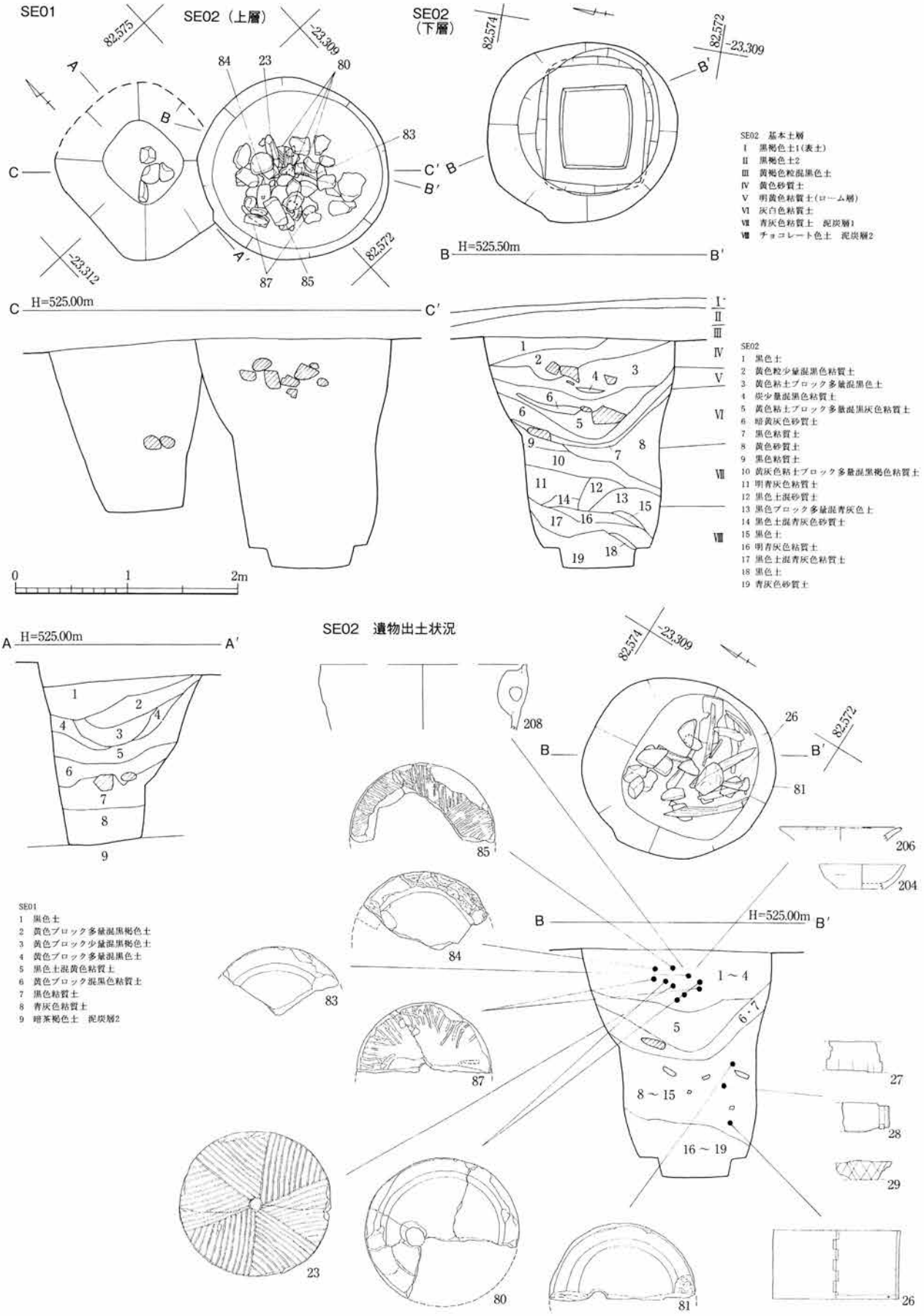
第25図　石組井戸 SE07・08遺物出土状況図（1：40）　土器・陶磁器1：16、1：6　石製品1：24、1：16
金属製品1：12、1：2　木製品1：8　（2009）2：3

第26図　溝 SD38・41・42・43 (1：40)

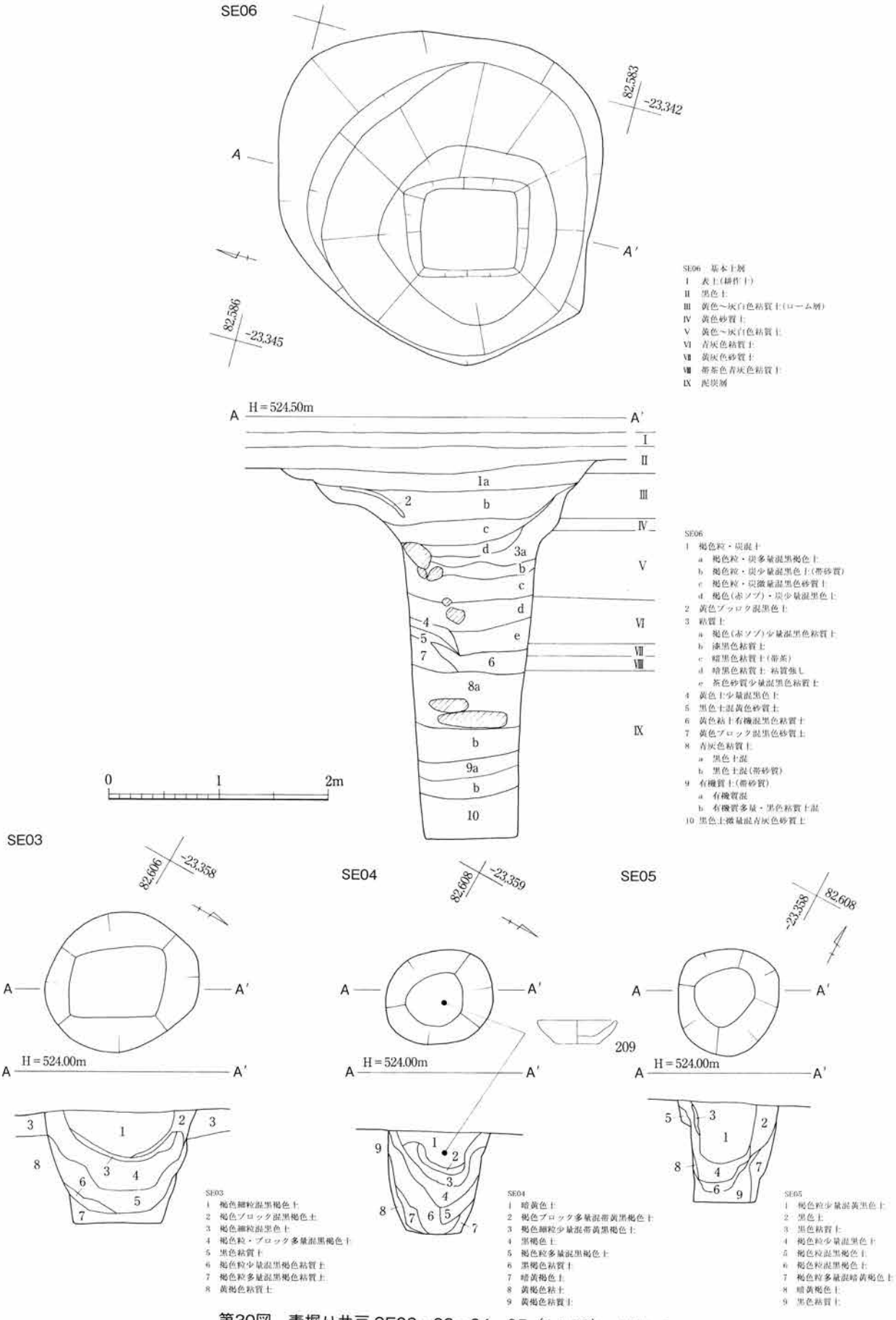


第27図　溝 SD44・45・46（1：40）

第28図　溝 SD47、貯水施設 SE11、木製桝 SX03（1：40）



第29図　素掘り井戸 SE01・02、SE02遺物出土状況（1：50）　土器・陶磁器1：8、1：6　石製品1：12　木製品1：8



SE06 基本土層
- I 表土(耕作土)
- II 黒色土
- III 黄色～灰白色粘質土(ローム層)
- IV 黄色砂質土
- V 黄色～灰白色粘質土
- VI 青灰色粘質土
- VII 黄灰色砂質土
- VIII 帯茶色青灰色粘質土
- IX 泥炭層

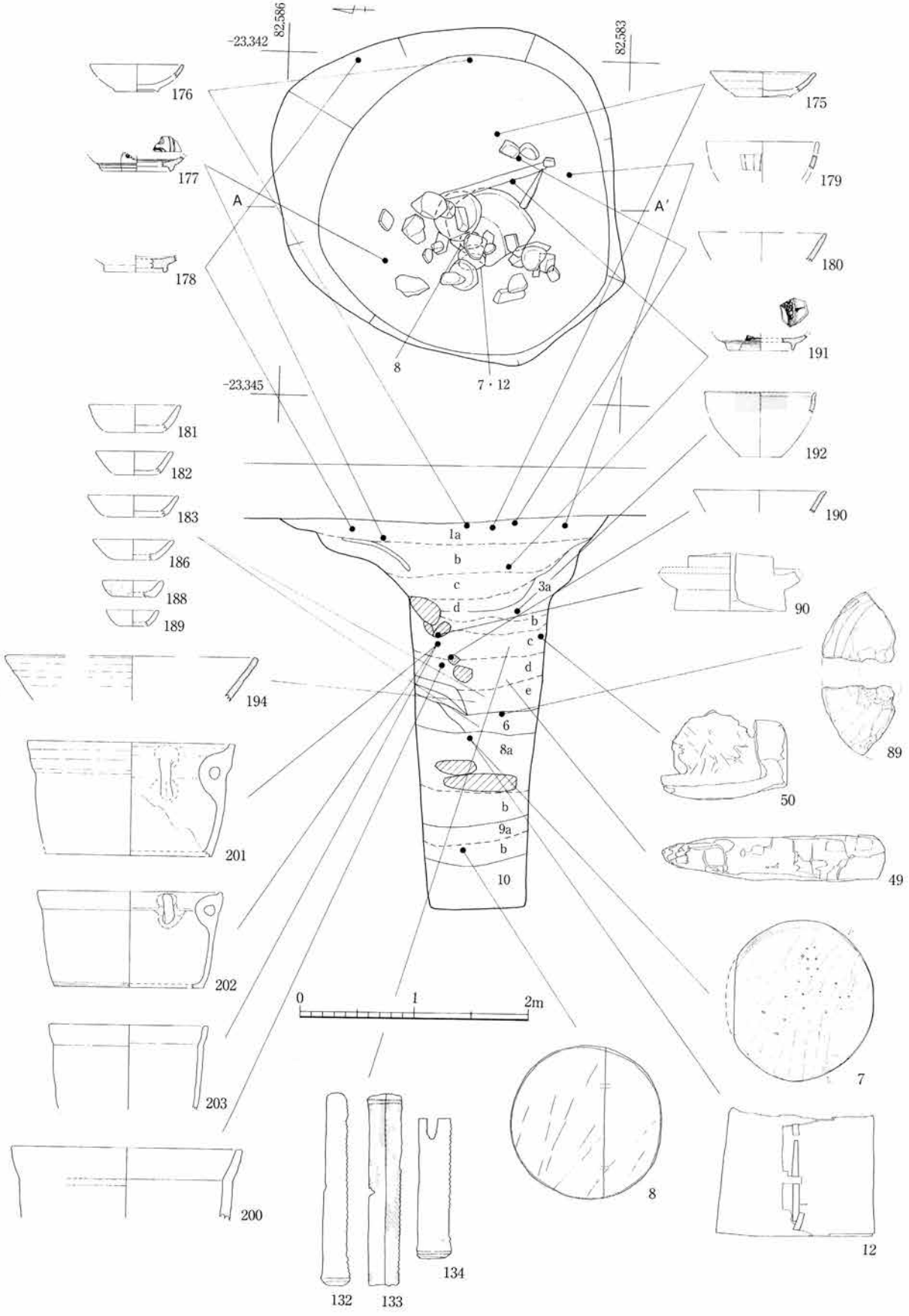
SE06
- 1 褐色粒・炭混土
  - a 褐色粒・炭多量混黒褐色土
  - b 褐色粒・炭少量混黒色土(帯砂質)
  - c 褐色粒・炭微量混黒色砂質土
  - d 褐色(赤ソブ)・炭少量混黒色土
- 2 黄色ブロック混黒色土
- 3 粘質土
  - a 褐色(赤ソブ)少量混黒色粘質土
  - b 漆黒色粘質土
  - c 暗黒色粘質土(帯茶)
  - d 暗黒色粘質土 粘質強し
  - e 茶色砂質少量混黒色粘質土
- 4 黄色土少量混黒色土
- 5 黒色土混黄色砂質土
- 6 黄色粘土有機混黒色粘質土
- 7 黄色ブロック混黒色砂質土
- 8 青灰色粘質土
  - a 黒色土混
  - b 黒色土混(帯砂質)
- 9 有機質土(帯砂質)
  - a 有機質混
  - b 有機質多量・黒色粘質土混
- 10 黒色土微量混青灰色砂質土

SE03
- 1 褐色細粒混黒褐色土
- 2 褐色ブロック混黒褐色土
- 3 褐色細粒混黒色土
- 4 褐色粒・ブロック多量混黒褐色土
- 5 黒色粘質土
- 6 褐色粒少量混黒褐色粘質土
- 7 褐色粒多量混黒褐色粘質土
- 8 黄褐色粘質土

SE04
- 1 暗黄色土
- 2 褐色ブロック多量混帯黄黒褐色土
- 3 褐色細粒少量混帯黄黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 褐色粒多量混黒褐色土
- 6 黒褐色粘質土
- 7 暗黄褐色土
- 8 黄褐色粘土
- 9 黄褐色粘質土

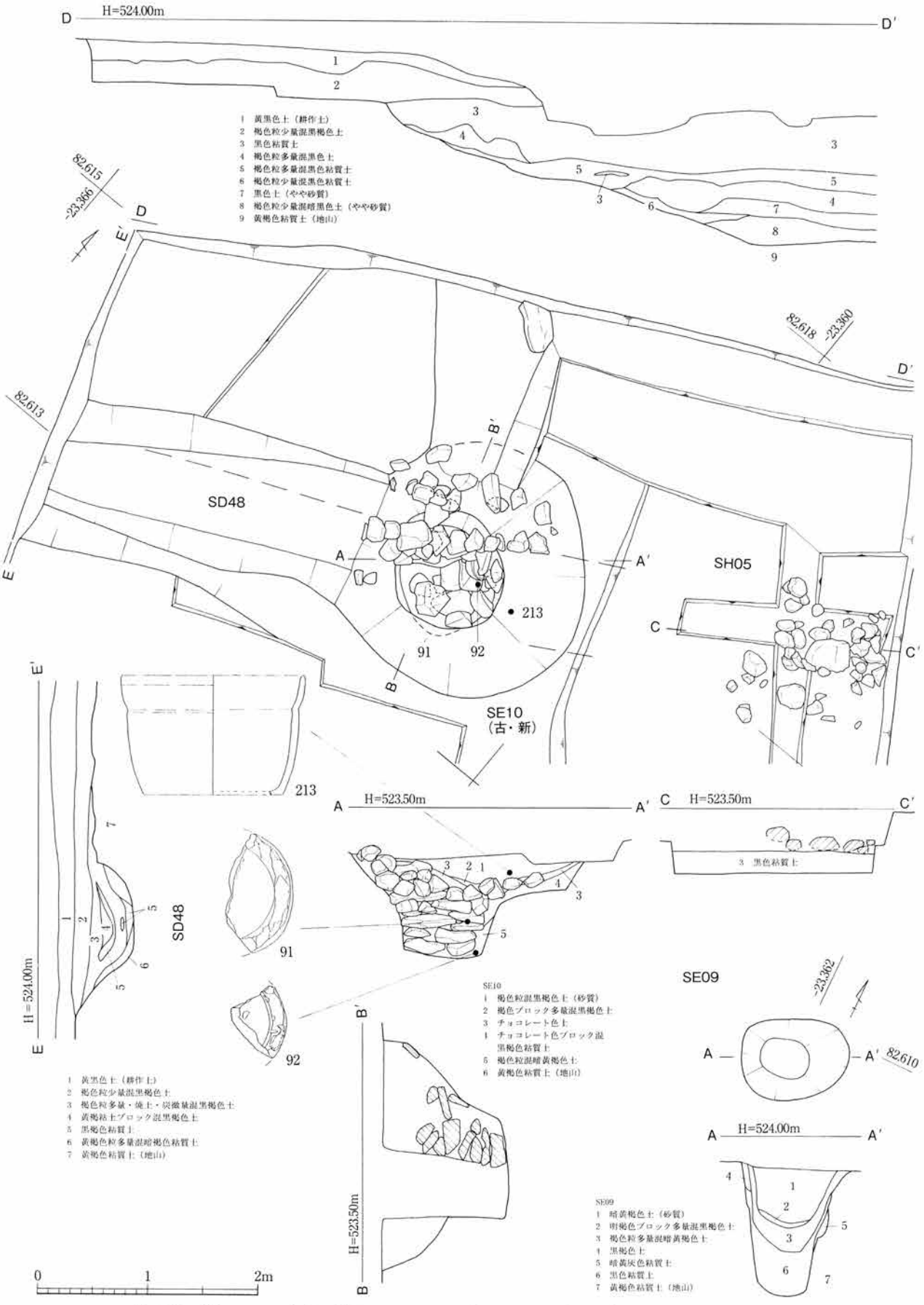
SE05
- 1 褐色粒少量混黄黒色土
- 2 黒色土
- 3 黒色粘質土
- 4 褐色粒少量混黒色土
- 5 褐色粒混黒褐色土
- 6 褐色粒混黒褐色土
- 7 褐色粒多量混暗黄褐色土
- 8 暗黄褐色土
- 9 黒色粘質土

第30図　素掘り井戸 SE06・03・04・05（1：50）　土器1：6

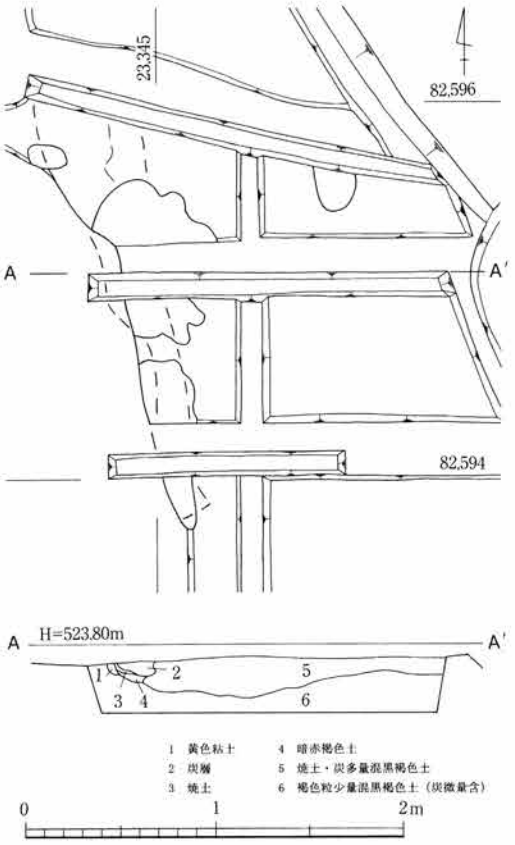


第31図　素掘り井戸 SE06遺物出土状況（1：50）　土器・陶磁器1：8、1：6　石製品1：12　木製品1：12、1：8、1：4

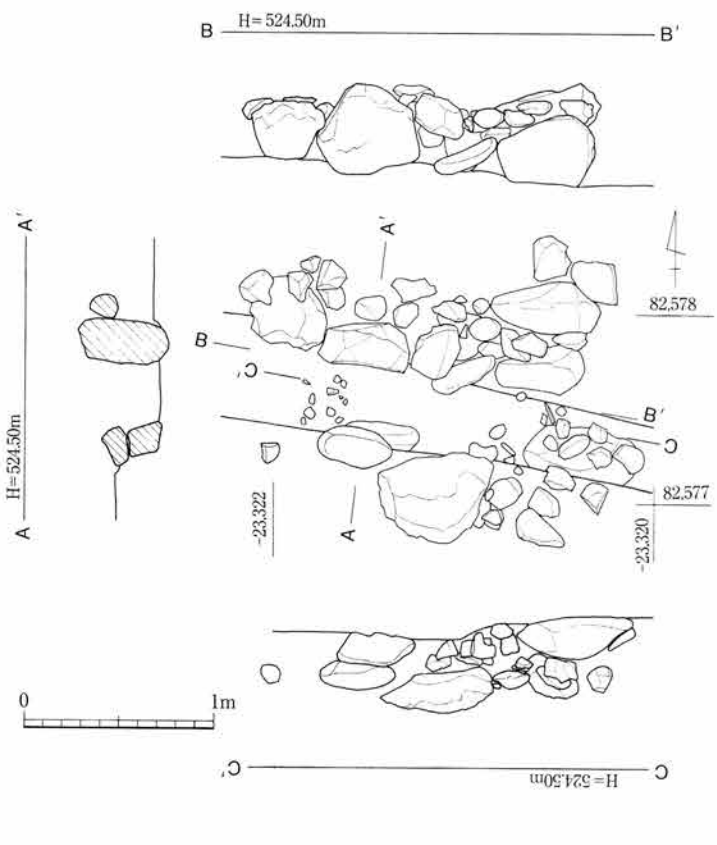
SD48、SE10（古・新）、SH05



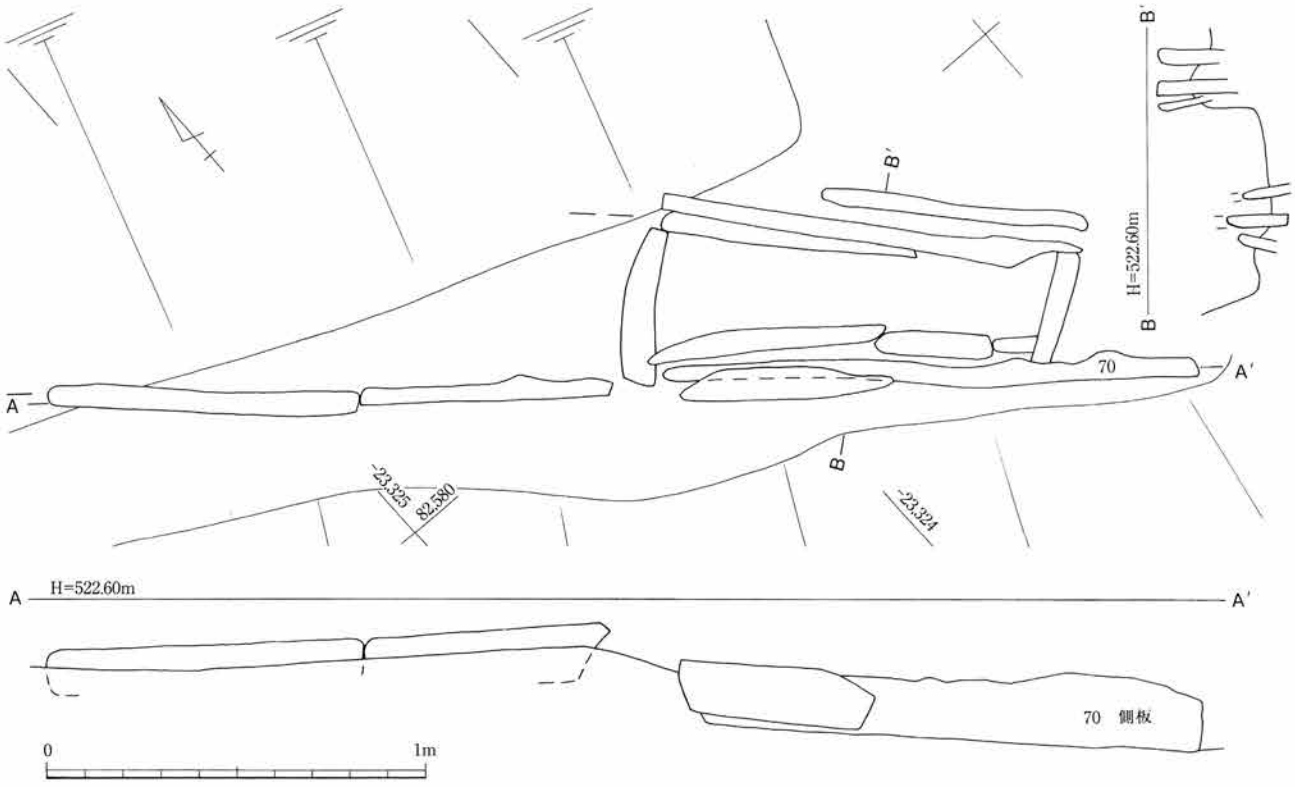
第32図　溝 SD48、素掘り井戸 SE10・09、集石 SH05（1：50）　土器1：8　石製品1：12



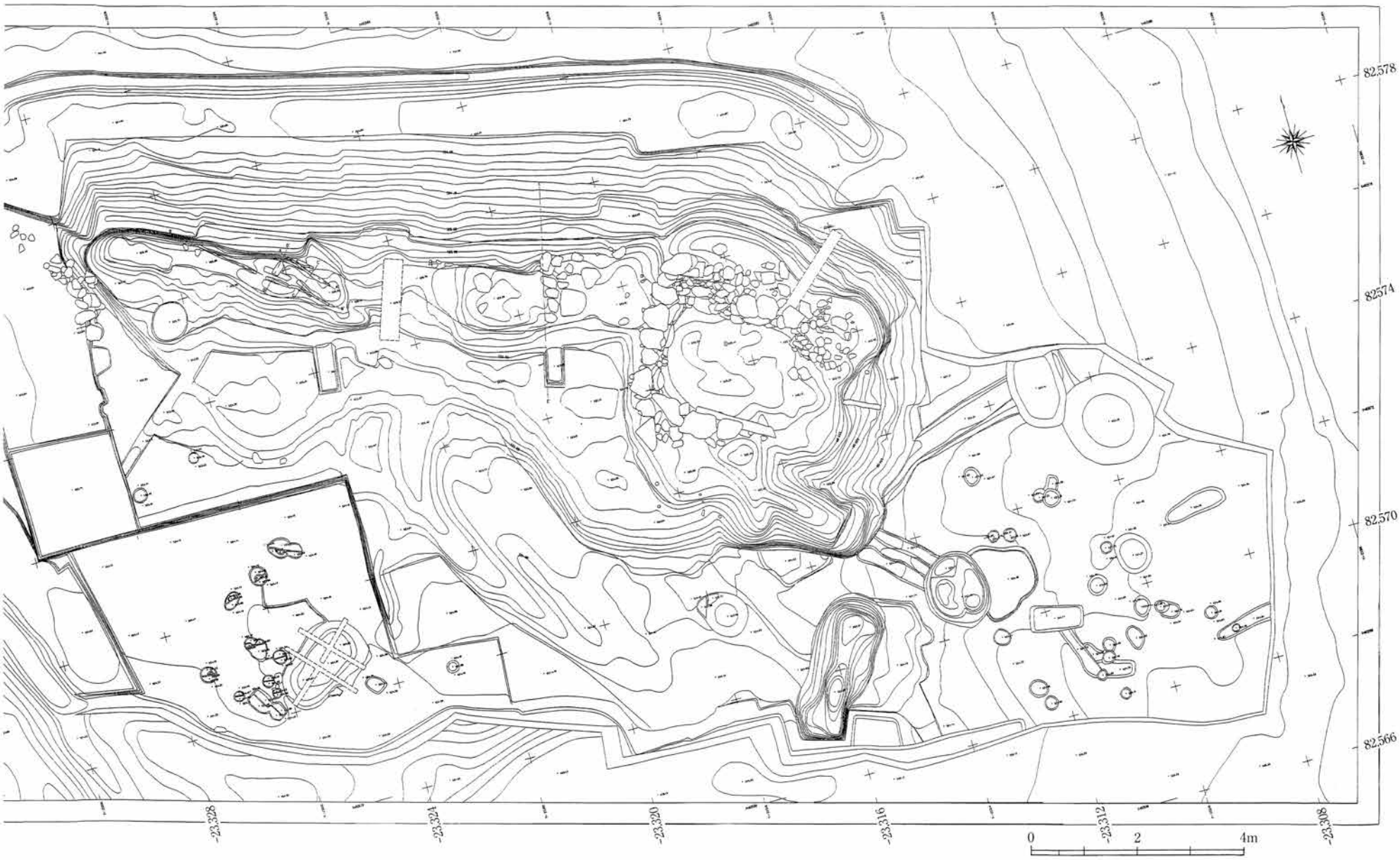
第33図　火焚跡 SF08（1：40）



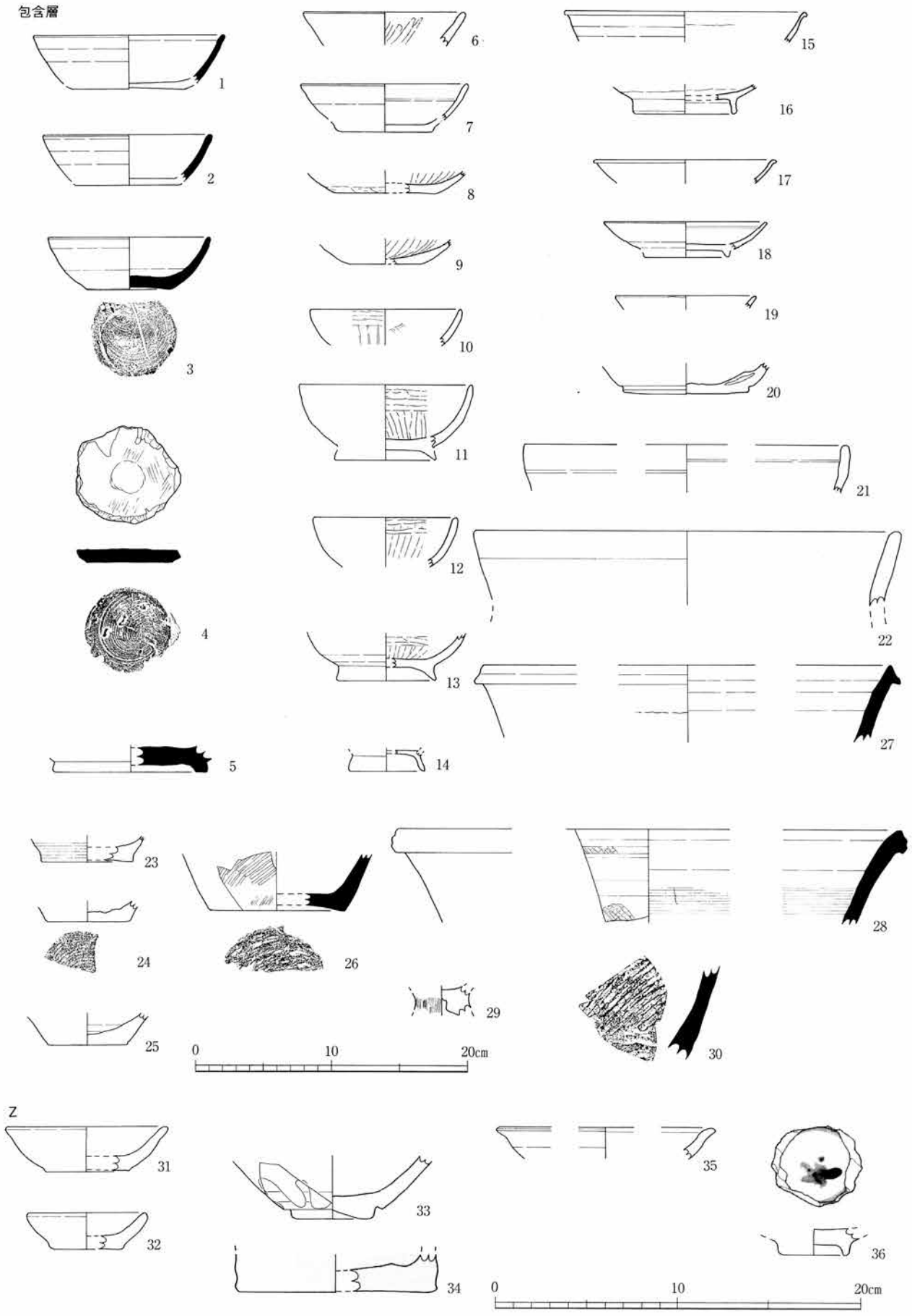
第34図　溝 SD38石組（1：40）



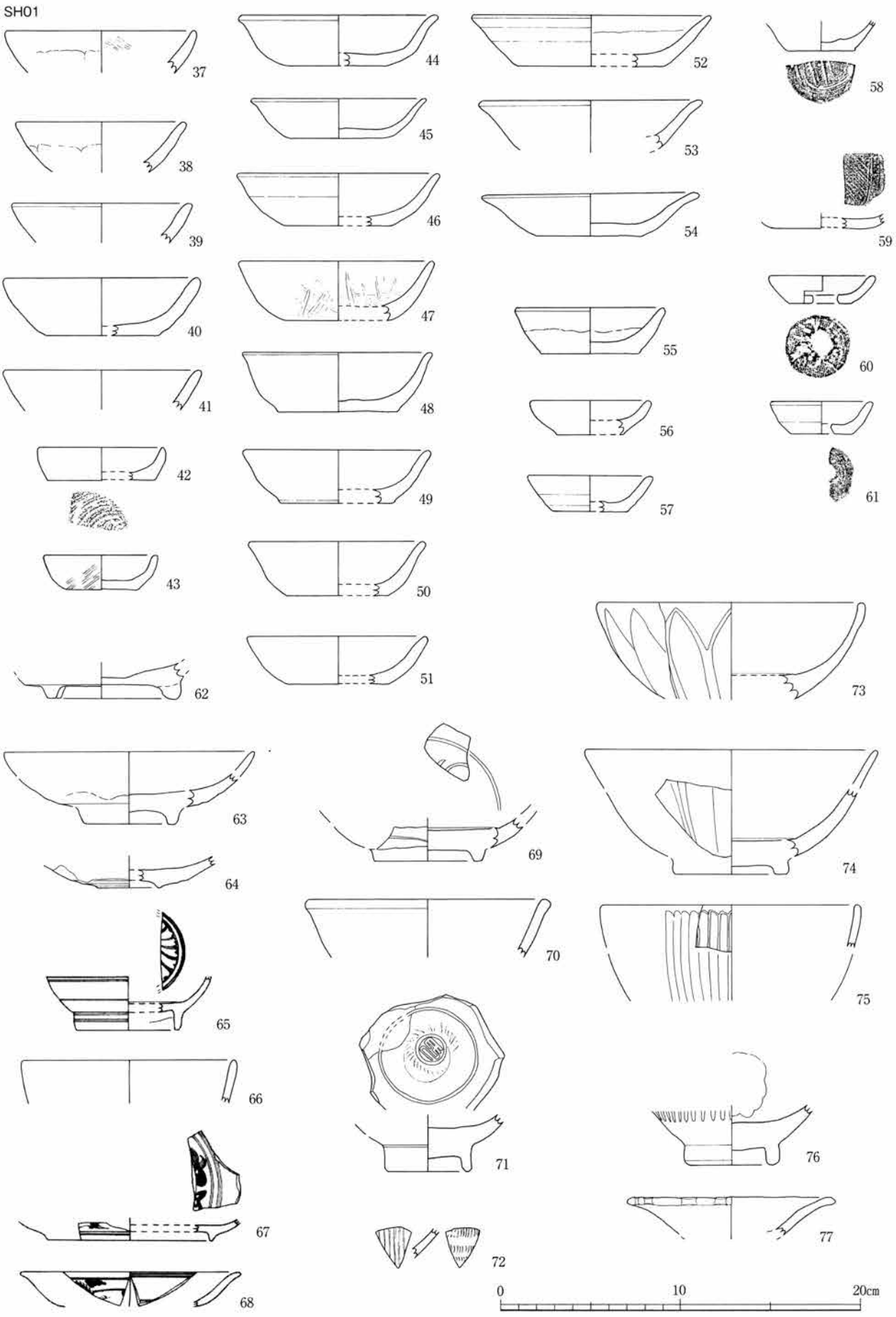
第35図　木製桝 SX03（1：20）



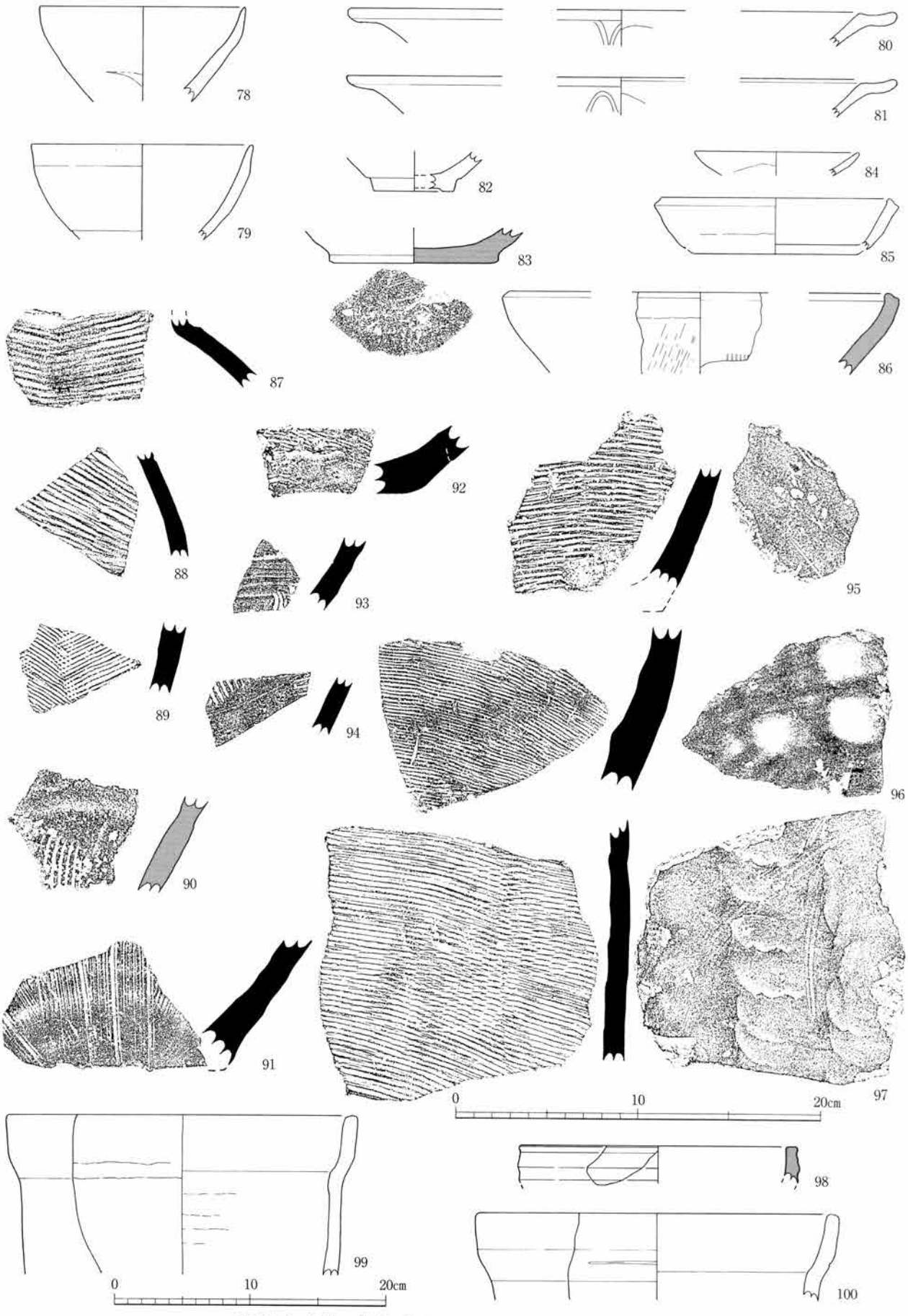
第36図　空中写真測量図（ⅢＢ・ⅢＣ区）（1：100）



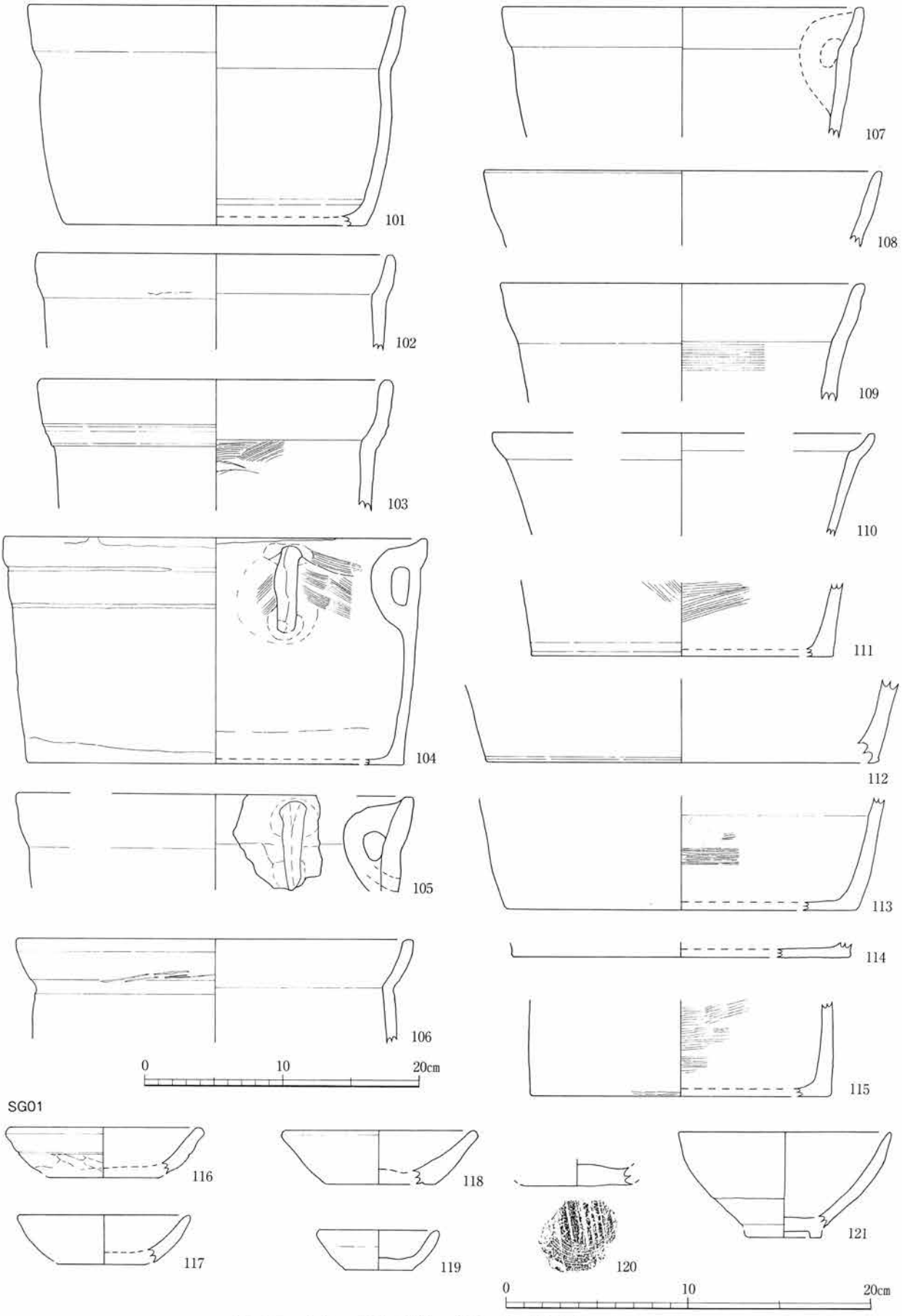
第37図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(1)（1：3、1：4）



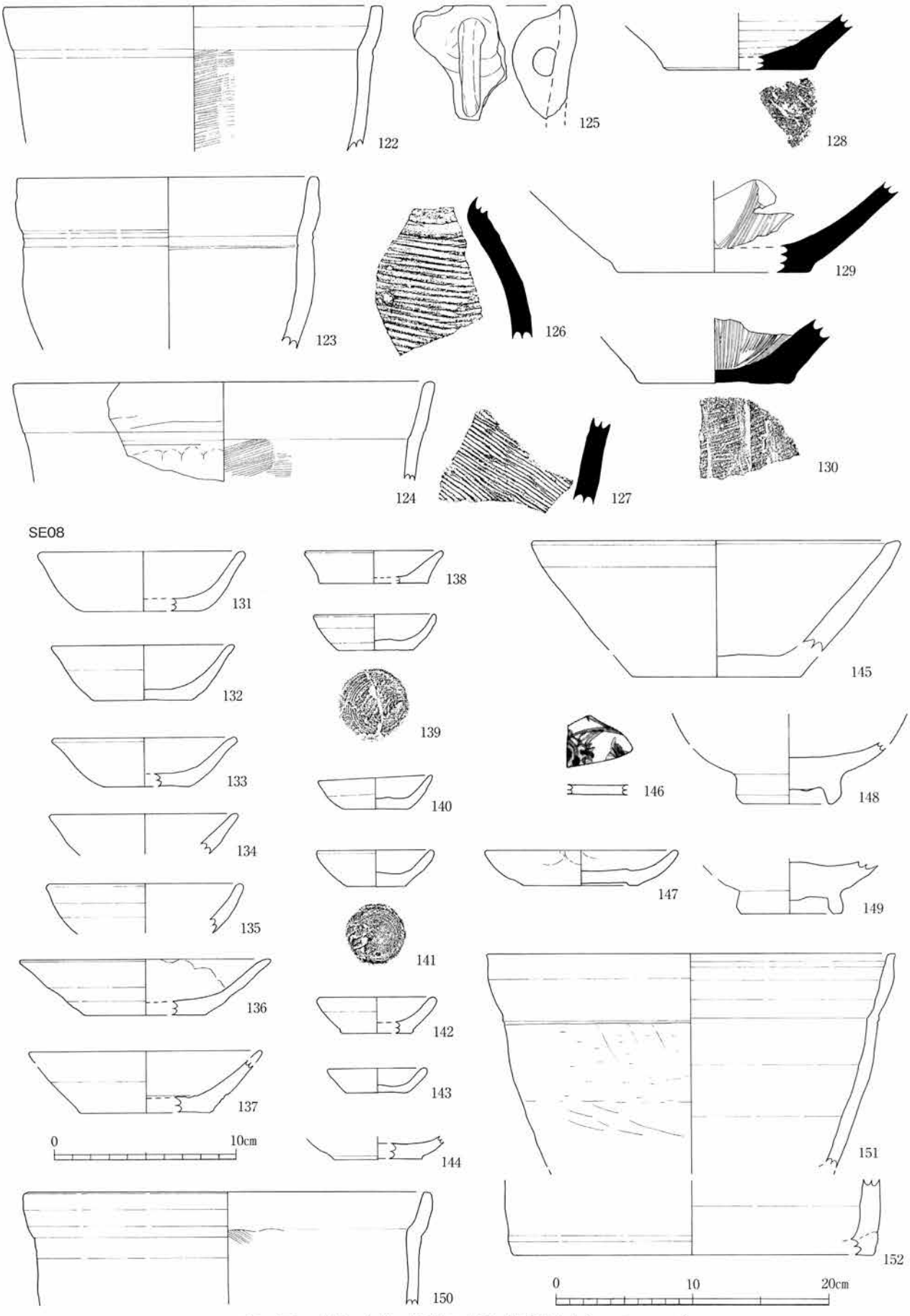
第38図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(2)（1：3）



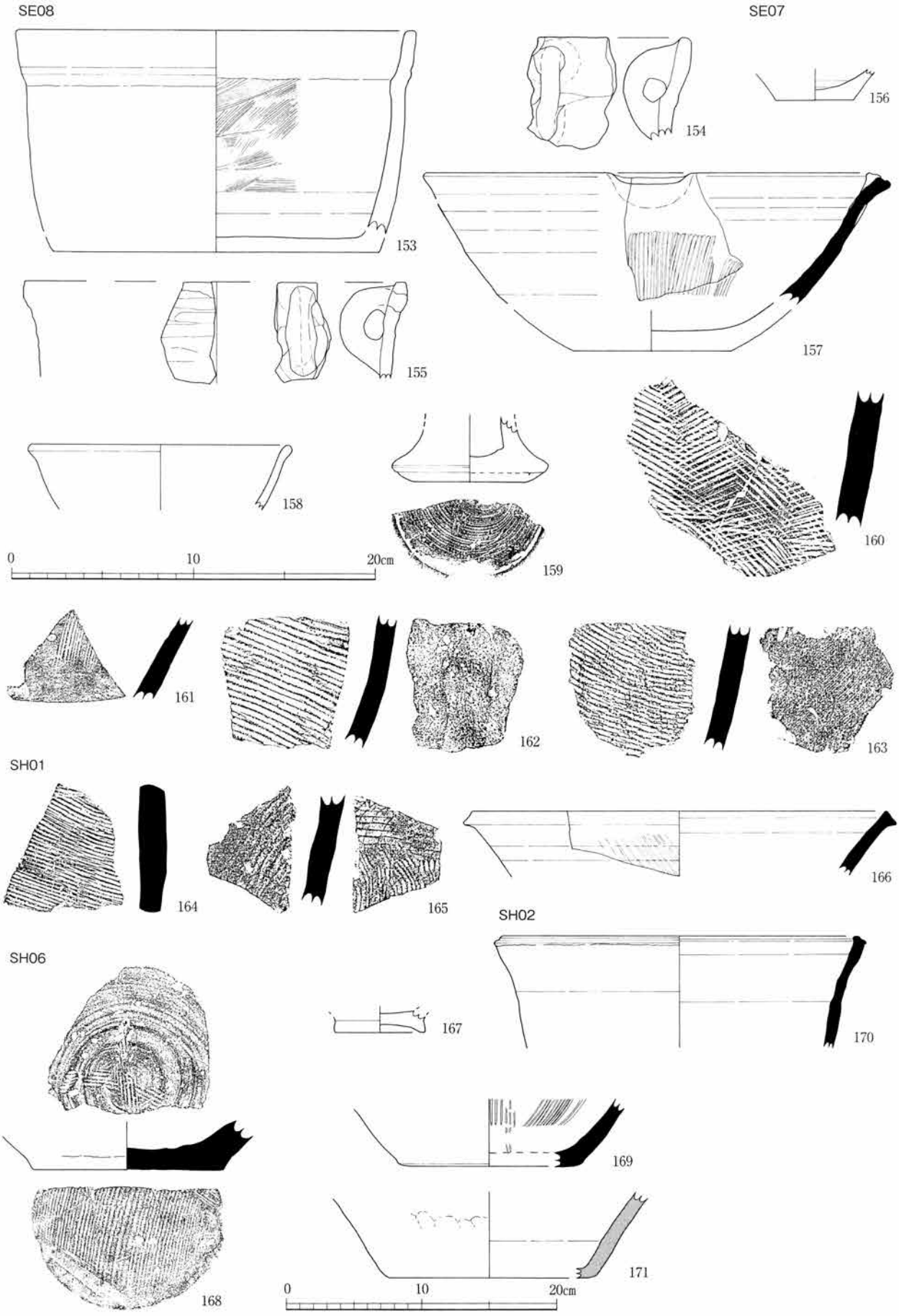
第39図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(3)（1：3、1：4）



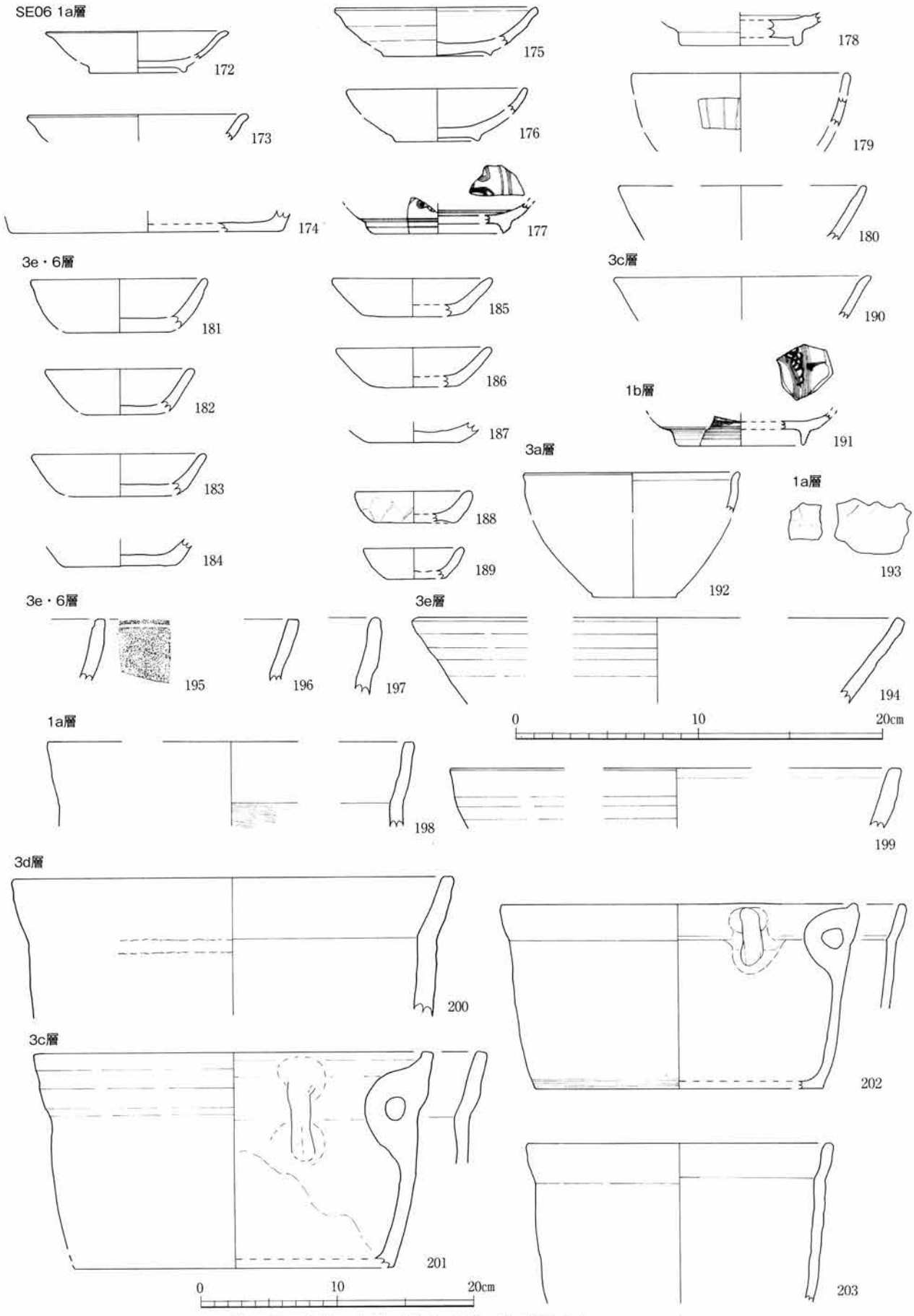
第40図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(4)（1：3、1：4）



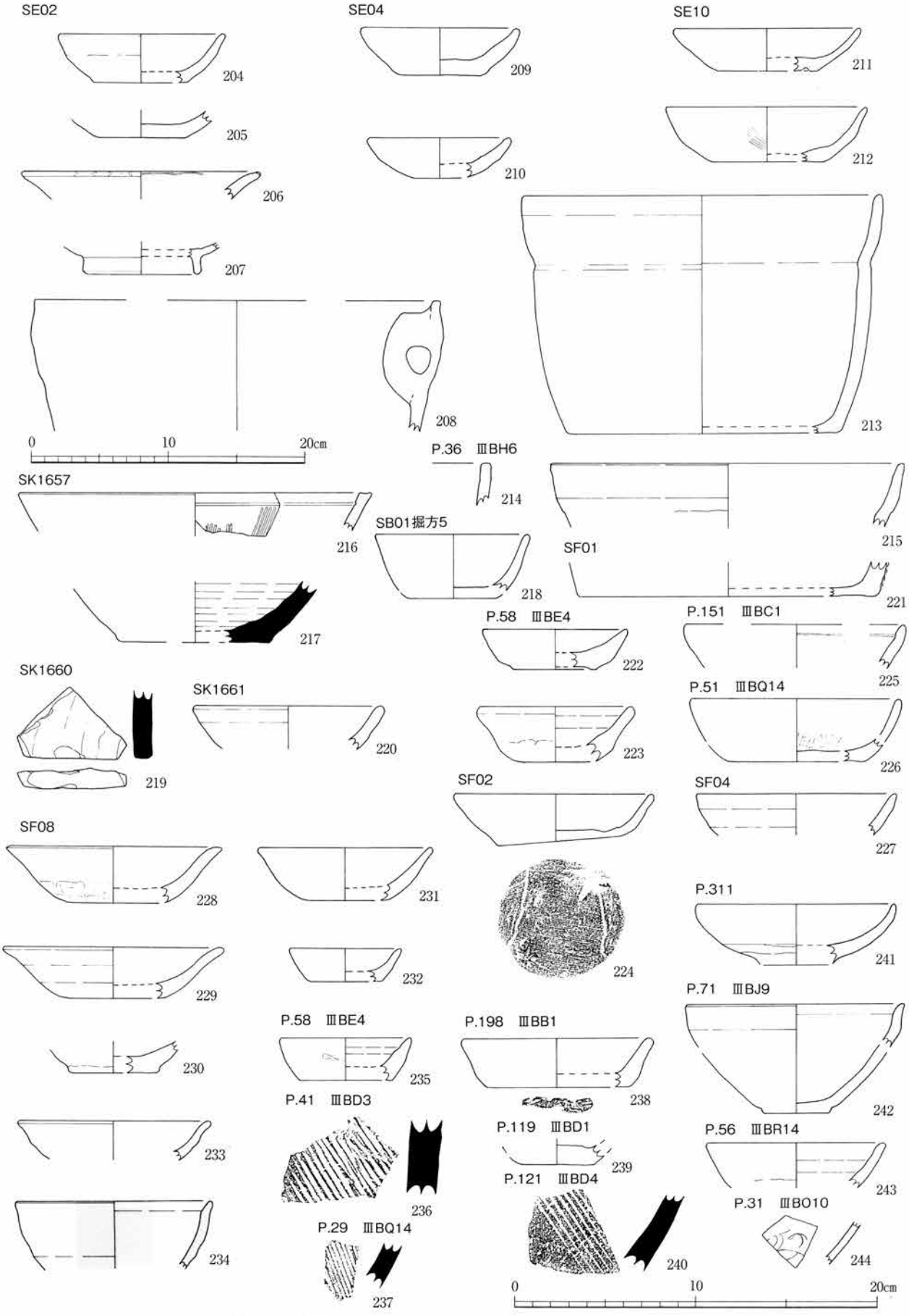
第41図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(5)（1：3、1：4）



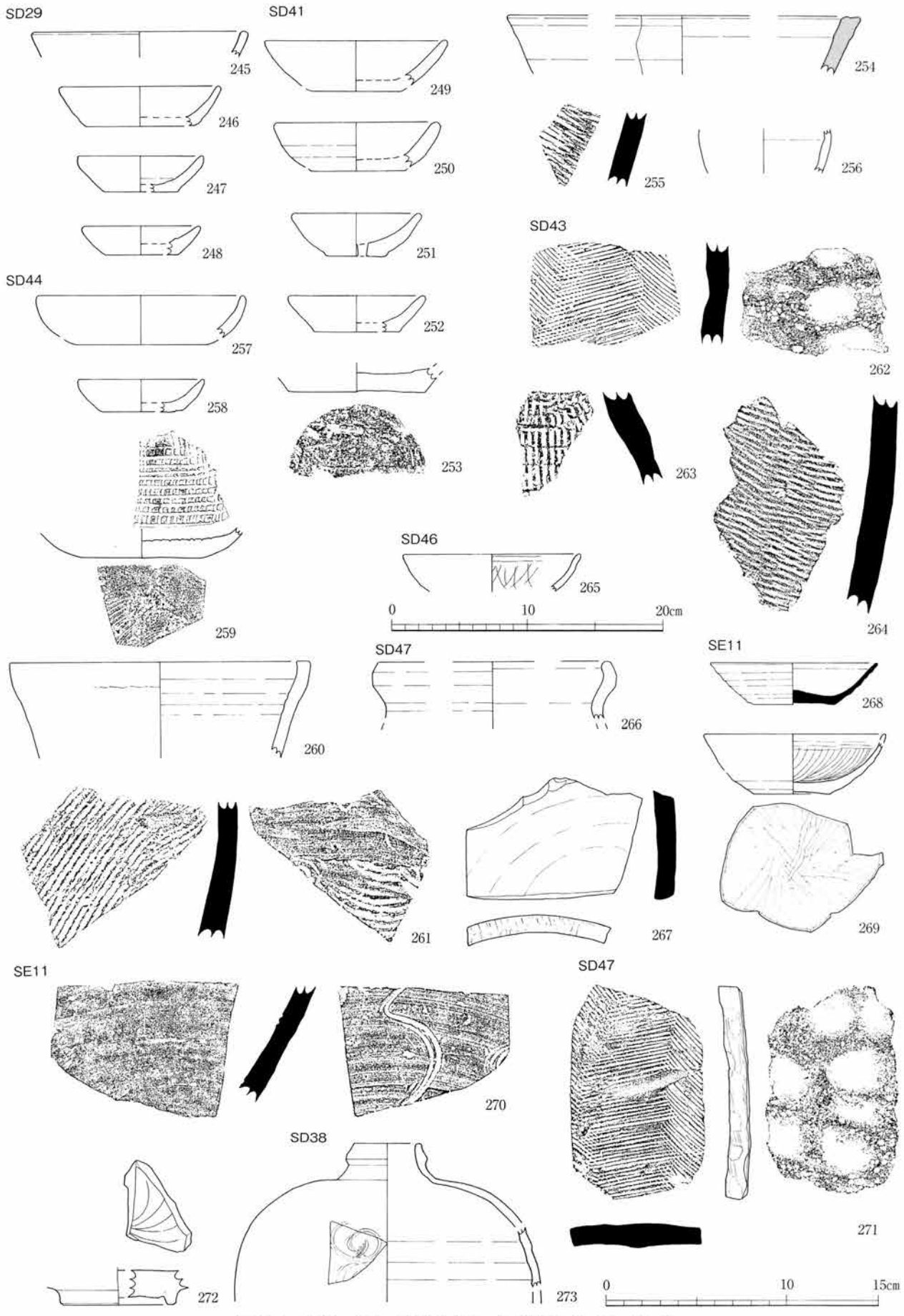
第42図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(6)（1：3、1：4）



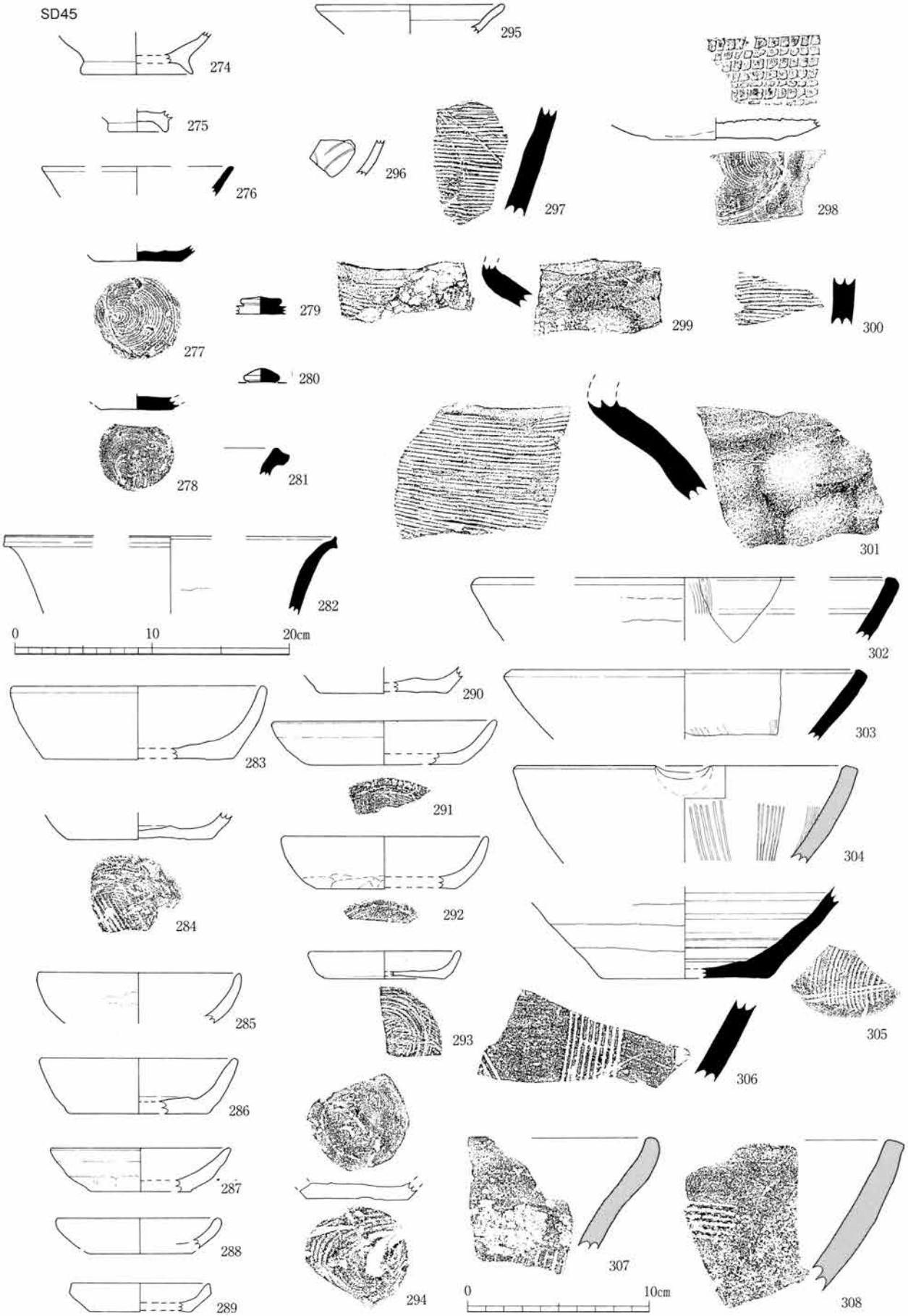
第43図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(7)（1：3、1：4）



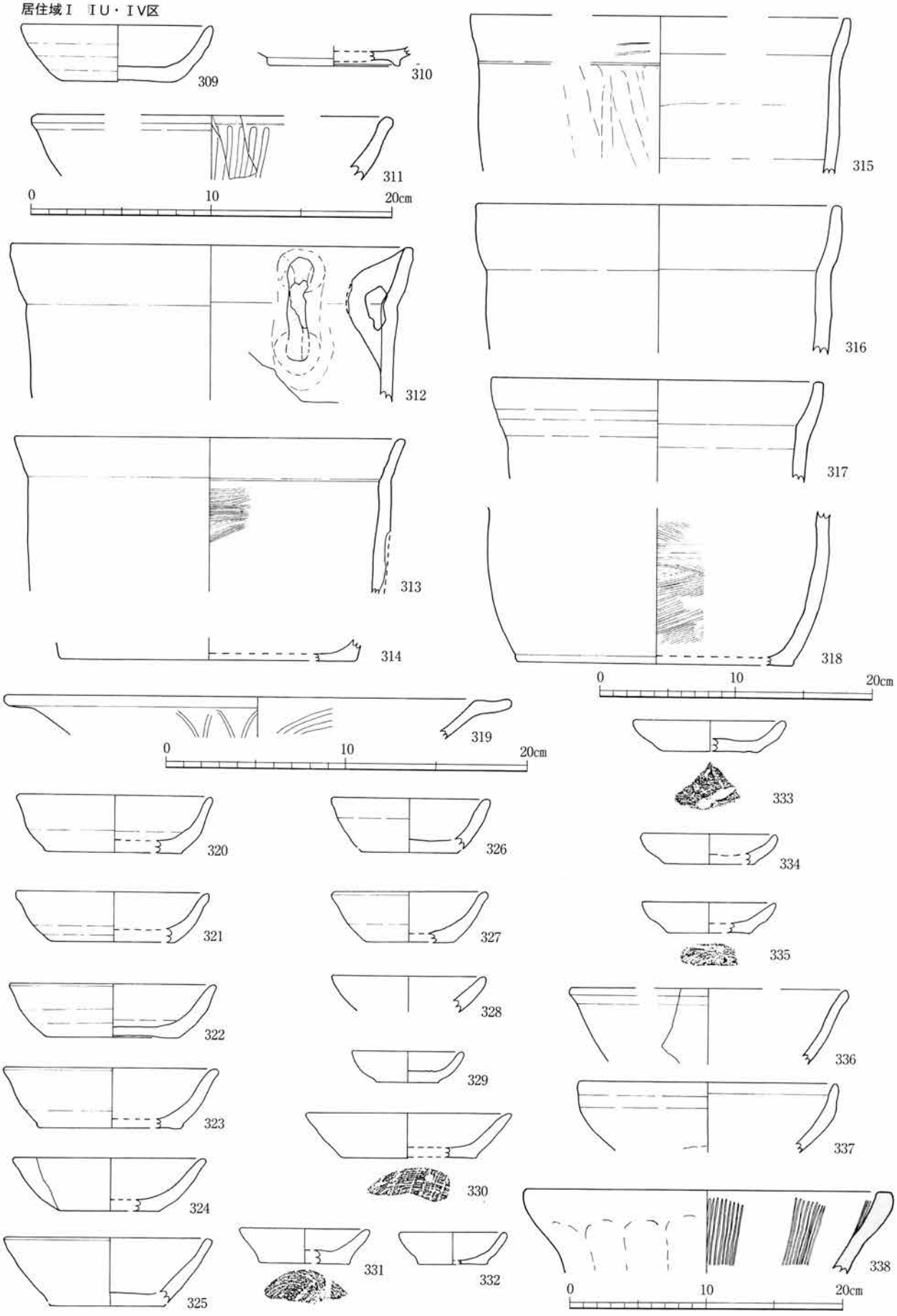
第44図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(8)（1：3、1：4）



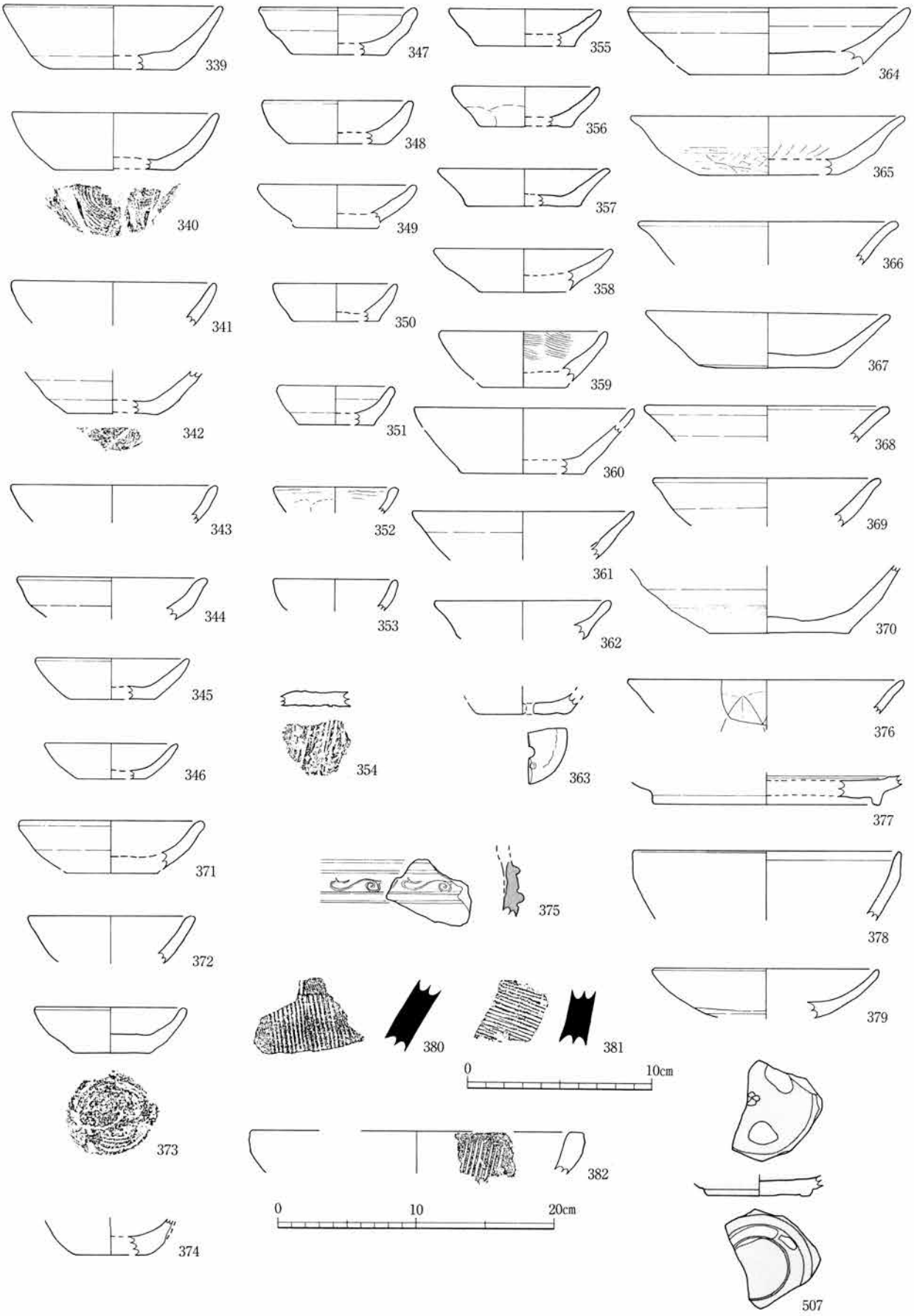
第45図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(9)（1：3、1：4）



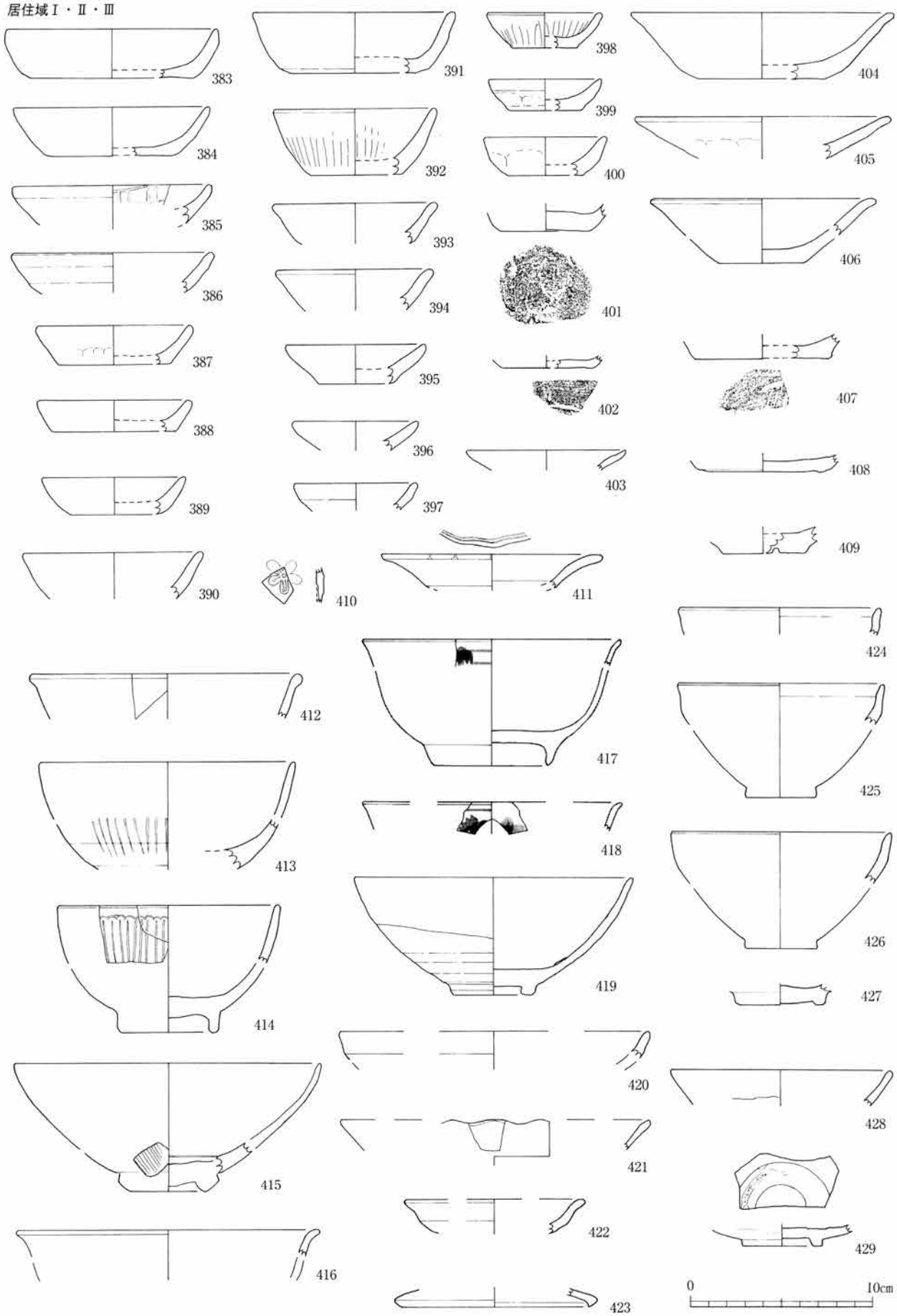
第46図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(10)（1：3、1：4）



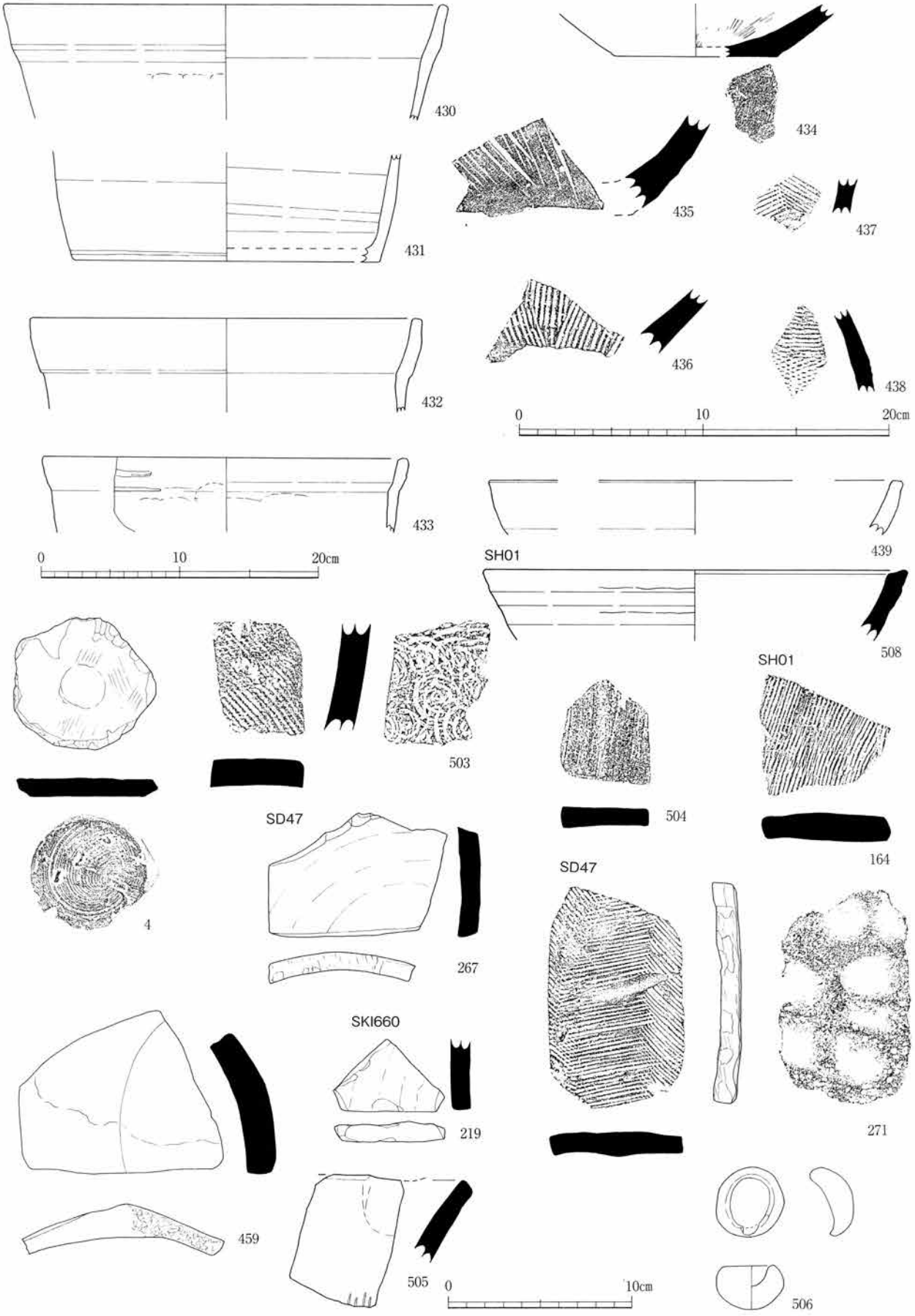
第47図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(11)（1：3、1：4）



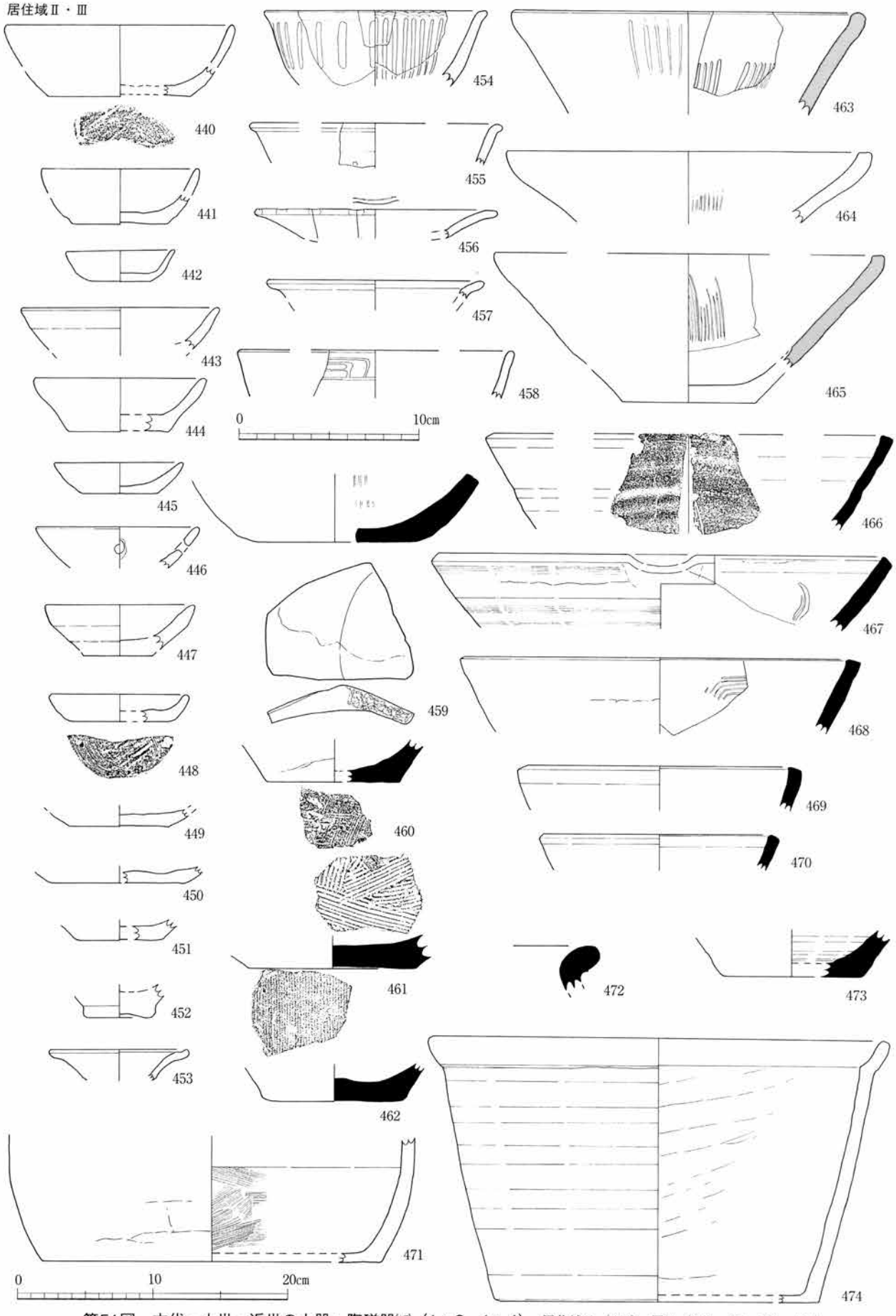
第48図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(12)（1：3、1：4）　居住域Ⅰ（339～350・352～364・366・368～380・382・507）同Ⅱ（351・365・367）同Ⅲ（381）



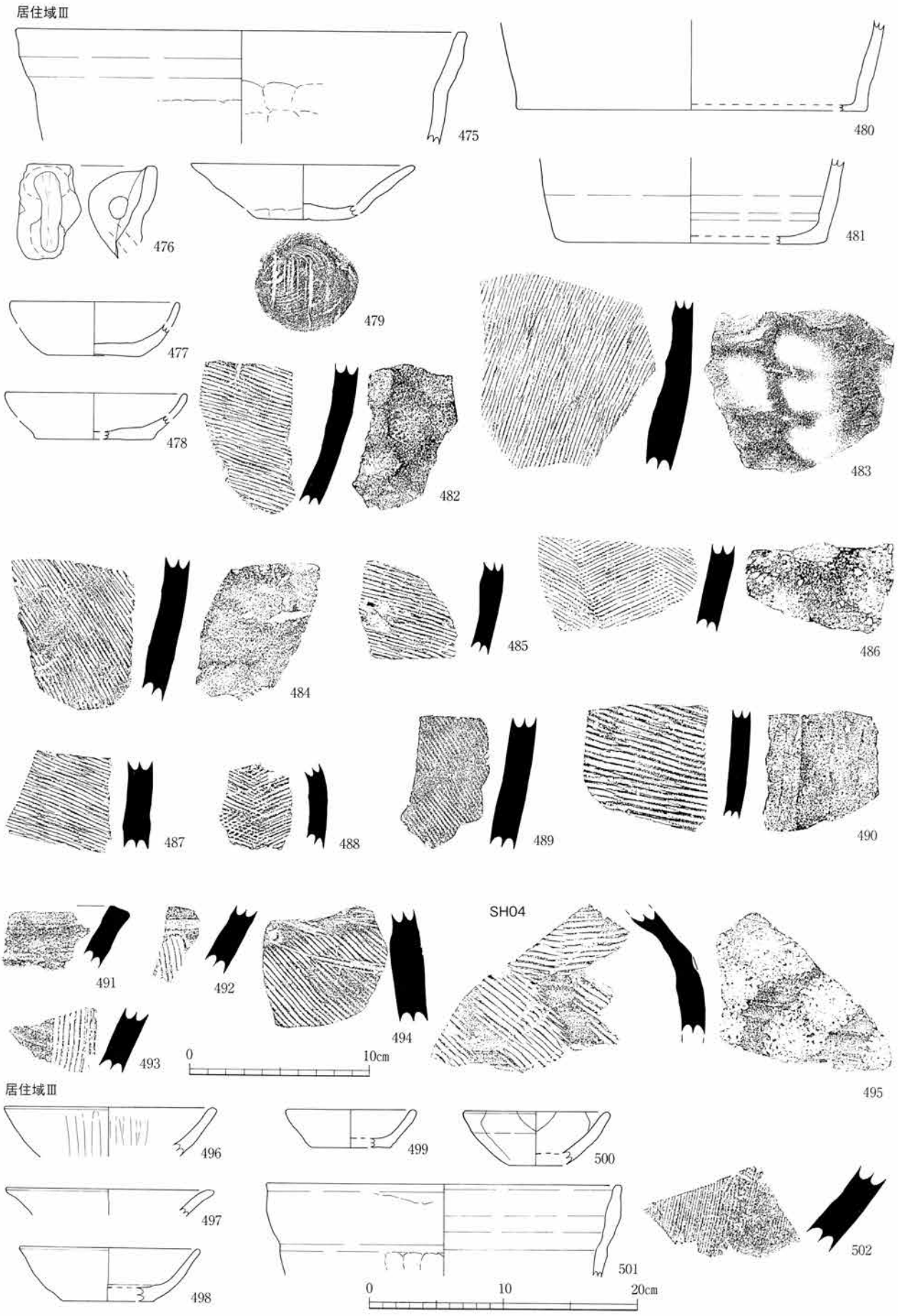
第49図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(13)（1：3）　居住域Ⅰ（383・385・387・389・392・395・399・400・403・406・410・415・416・418・419・423・424・426）同Ⅲ（398・405・413・429）　同Ⅱ（Ⅰ・Ⅲ以外）



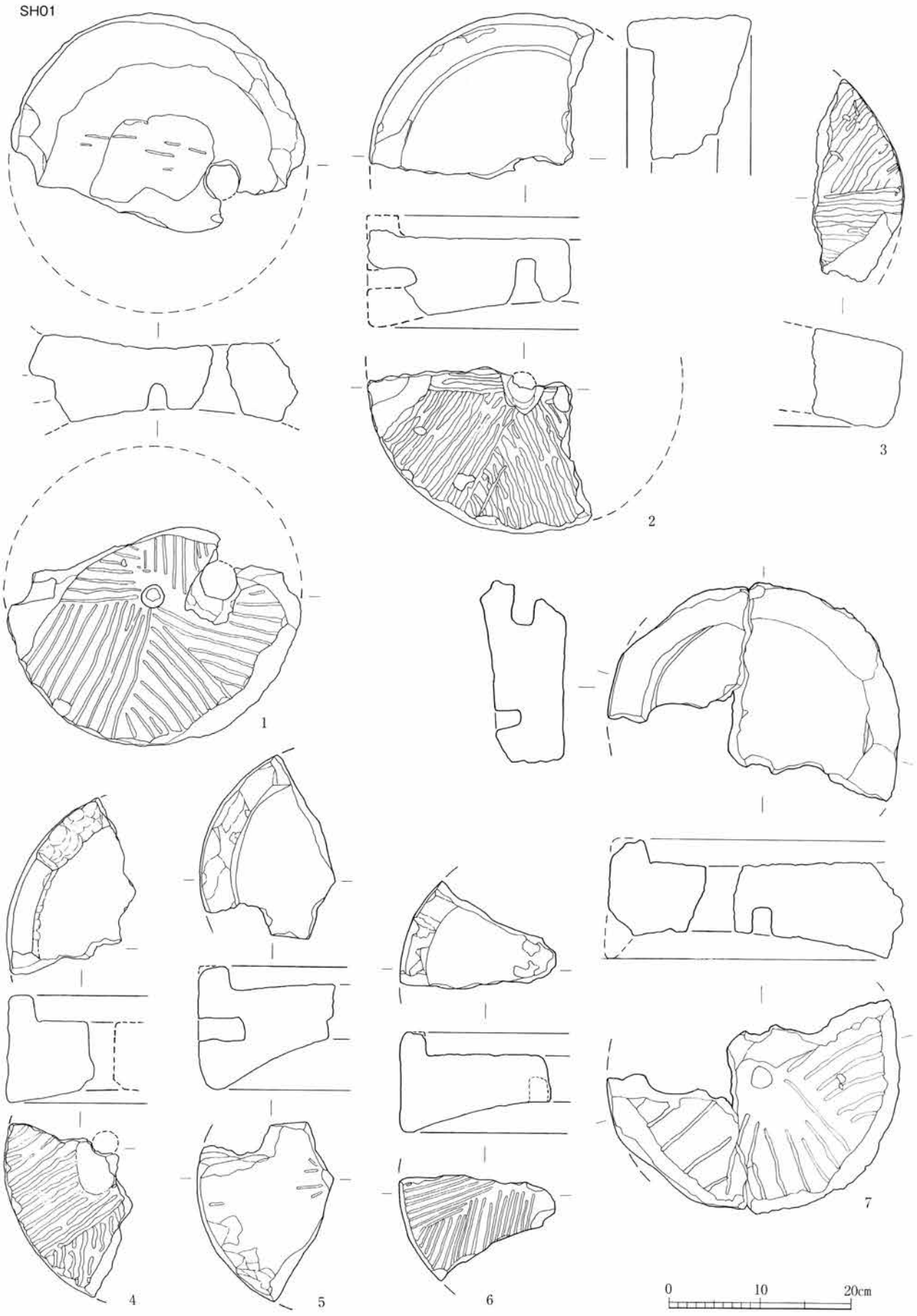
第50図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(14)（1：3、1：4）　居住域Ⅰ（435・436）　同Ⅱ（430～432・437～439・505）　同Ⅲ（433・434・459・503・504・506）



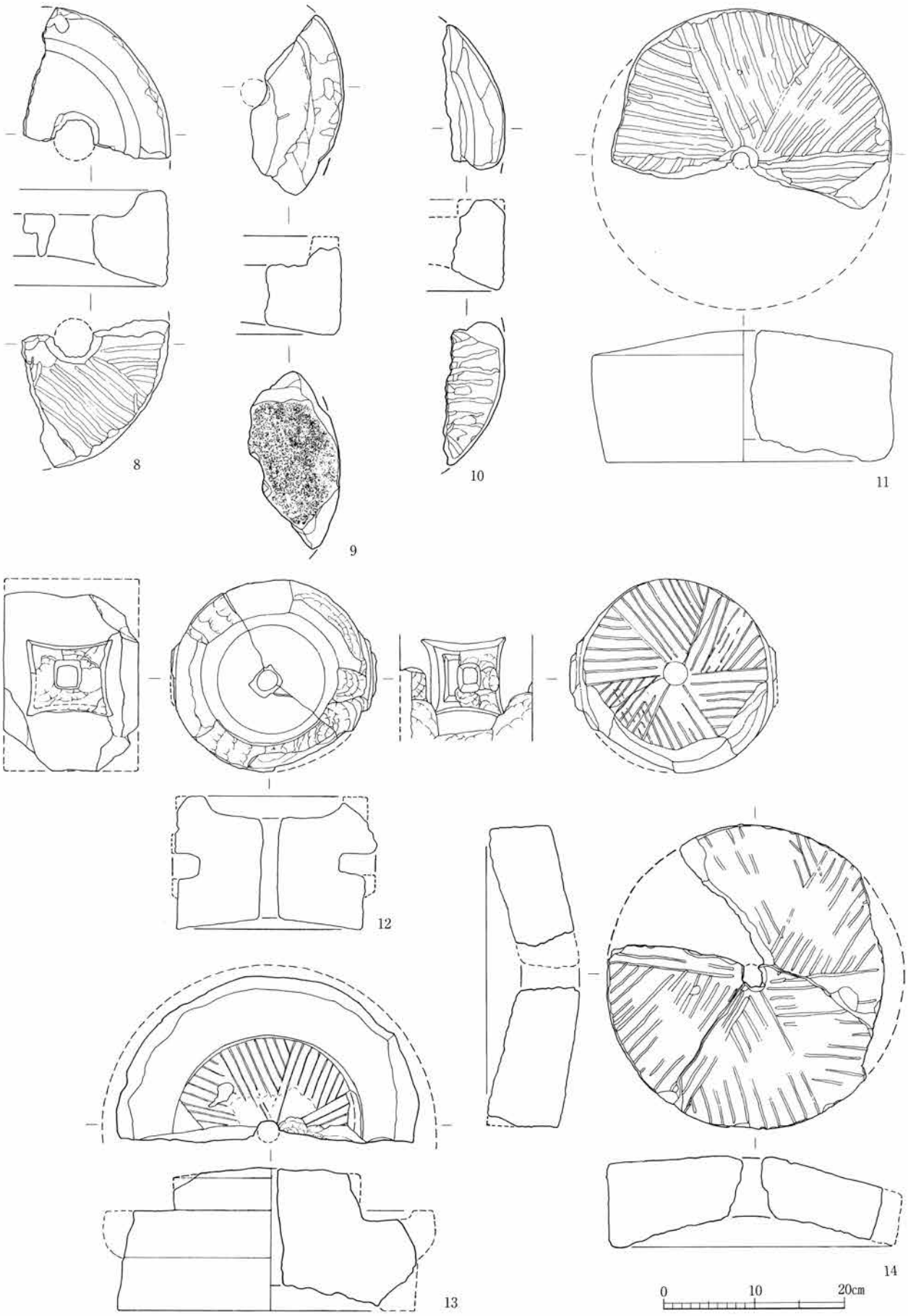
第51図　古代・中世・近世の土器・陶磁器(15)（1：3、1：4）　居住域Ⅱ（452）　同Ⅲ（440～451・453～474）



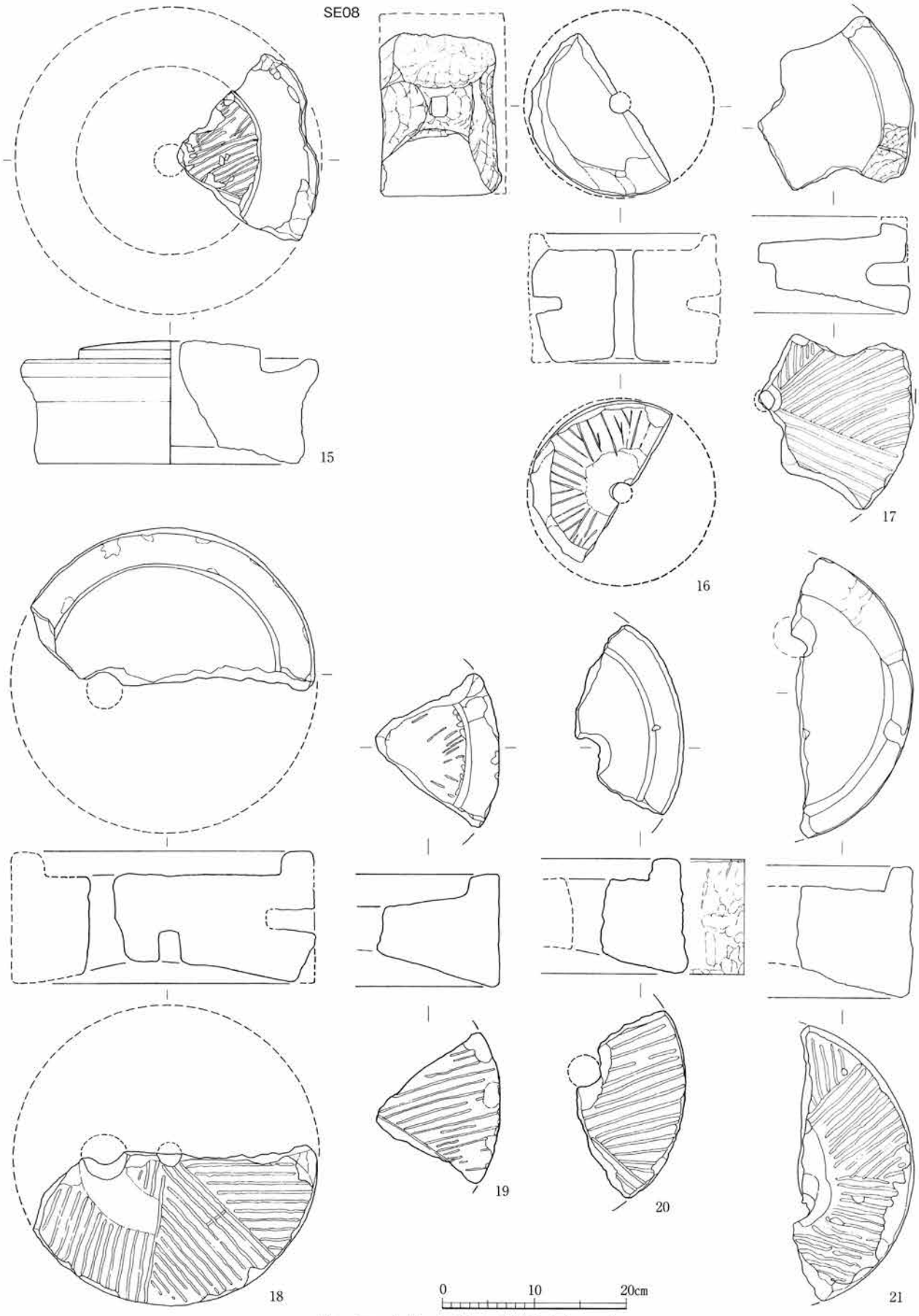
第52図　古代・中世・近世の土器・陶磁器⑯（1：3、1：4）



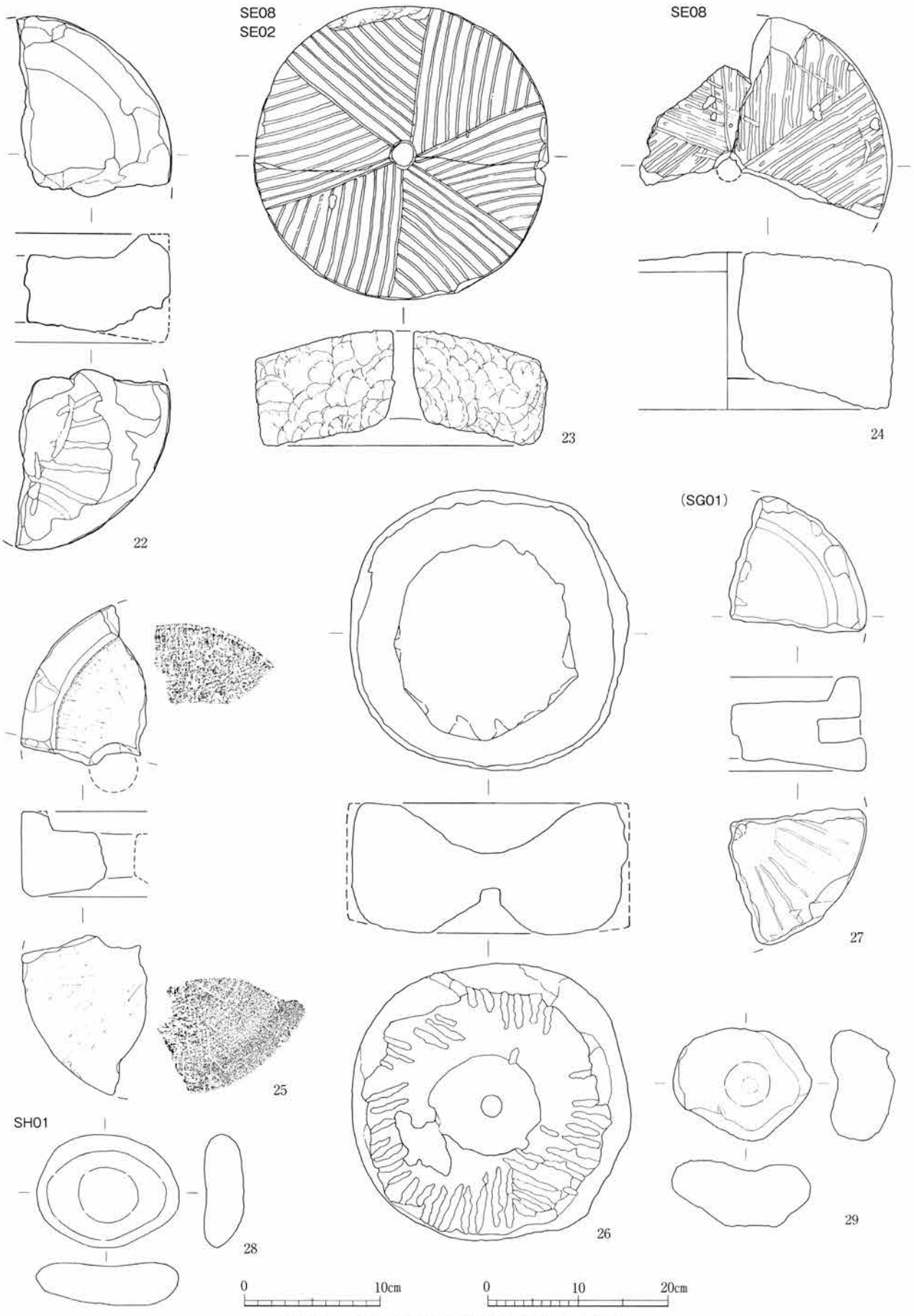
第53図　中世・近世の石製品(1)（1：6）



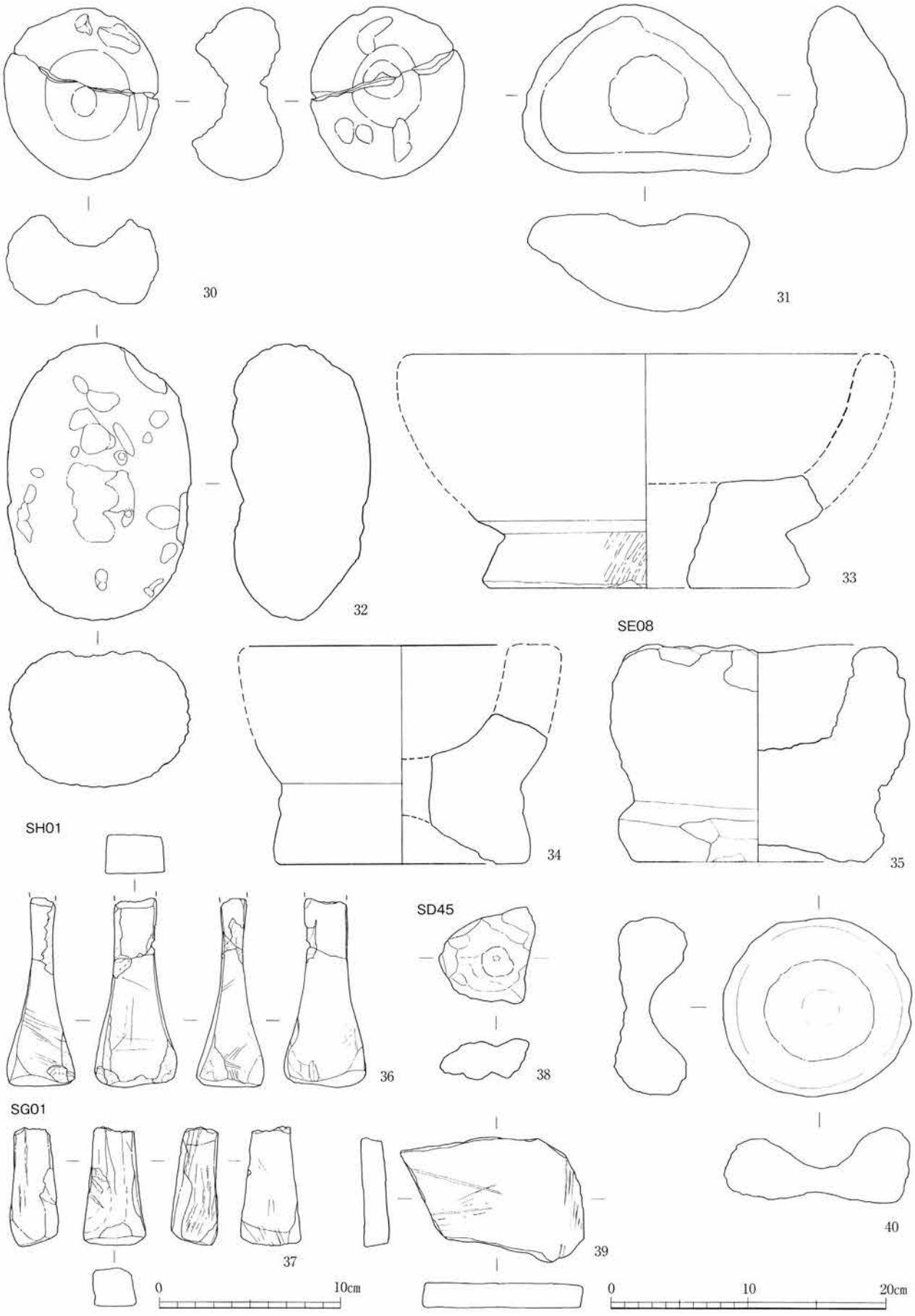
第54図　中世・近世の石製品(2)（1：6）



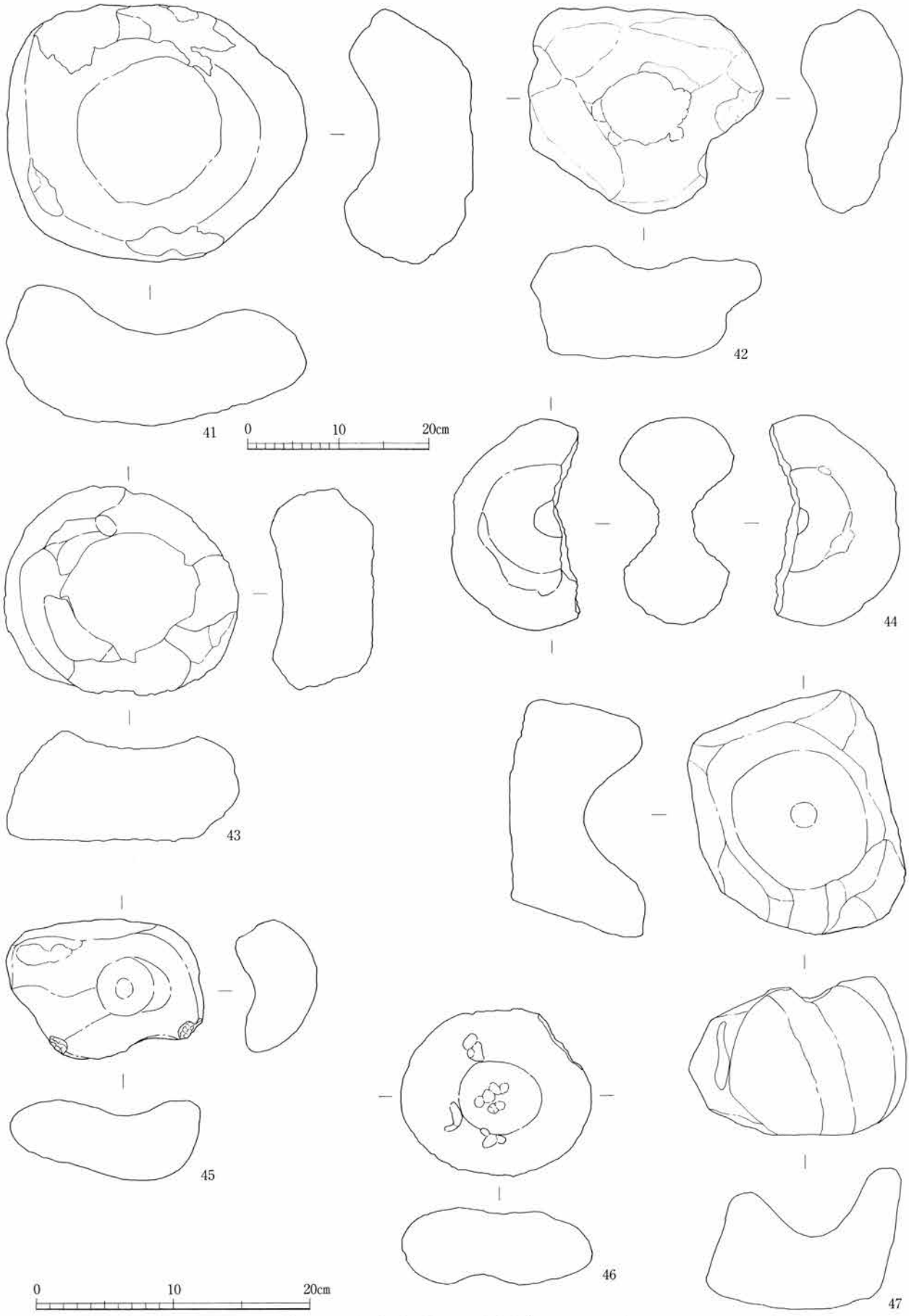
第55図　中世・近世の石製品(3)（1：6）



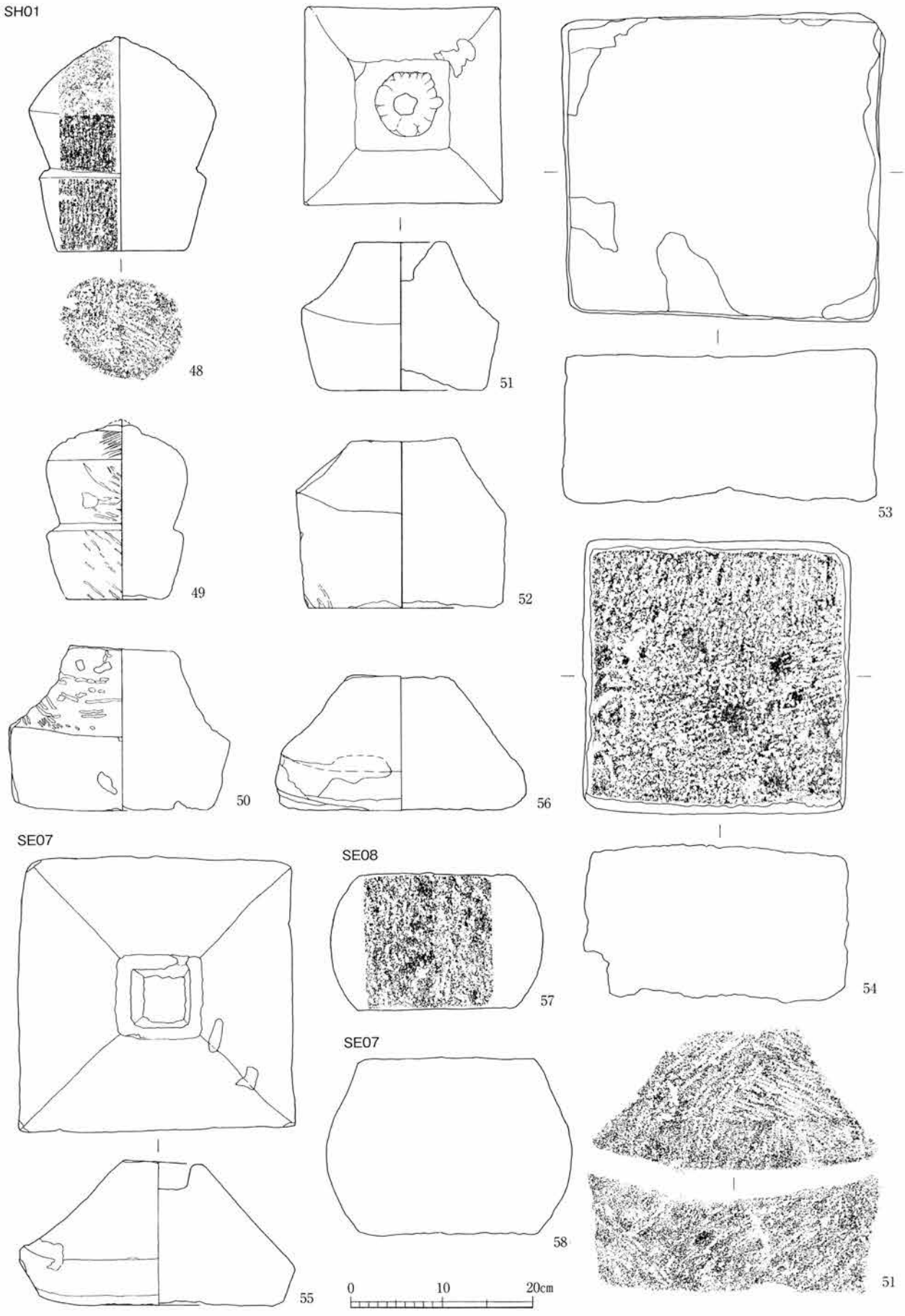
第56図　中世・近世の石製品(4)（1：4、1：6）



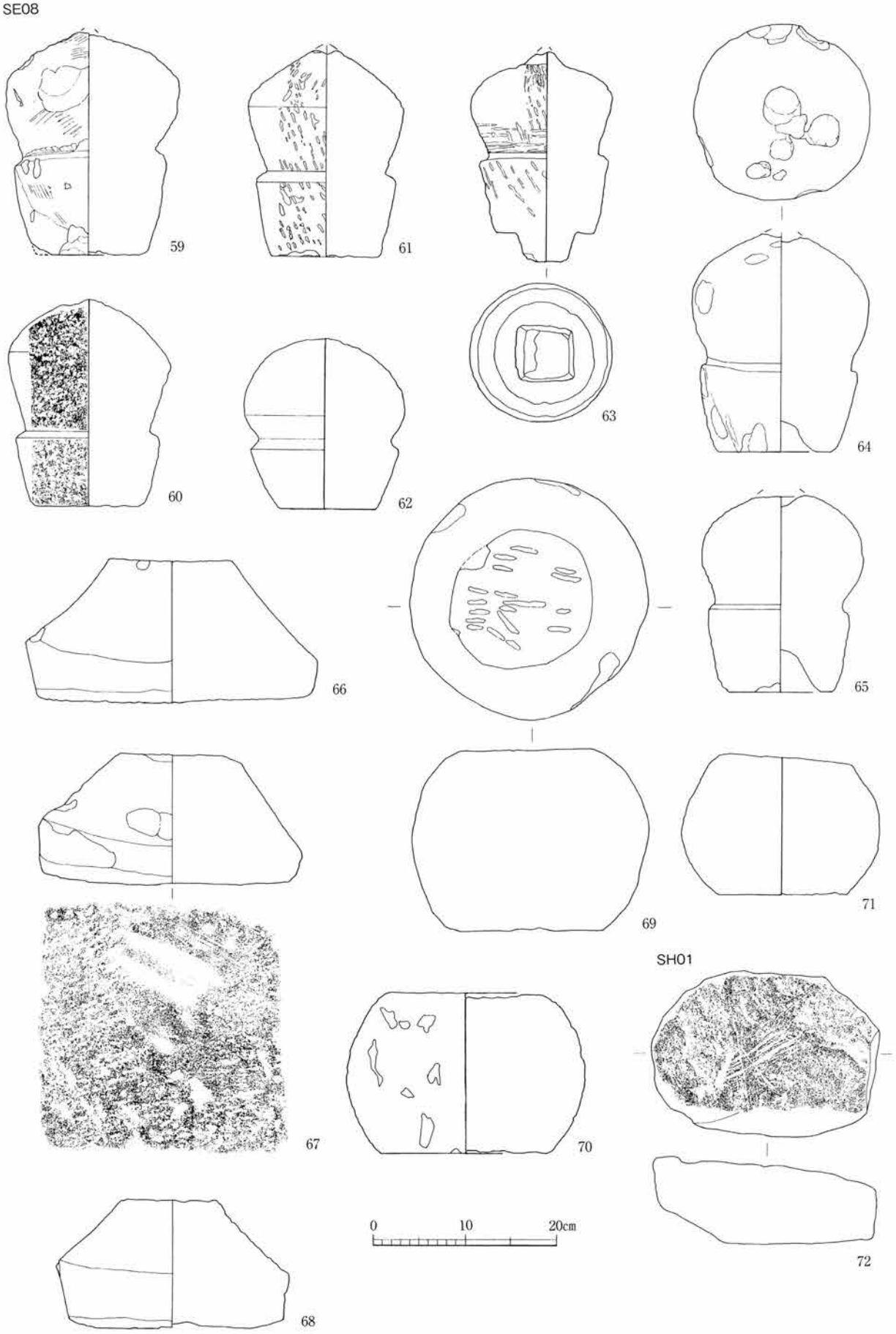
第57図　中世・近世の石製品(5)（1：3、1：4）



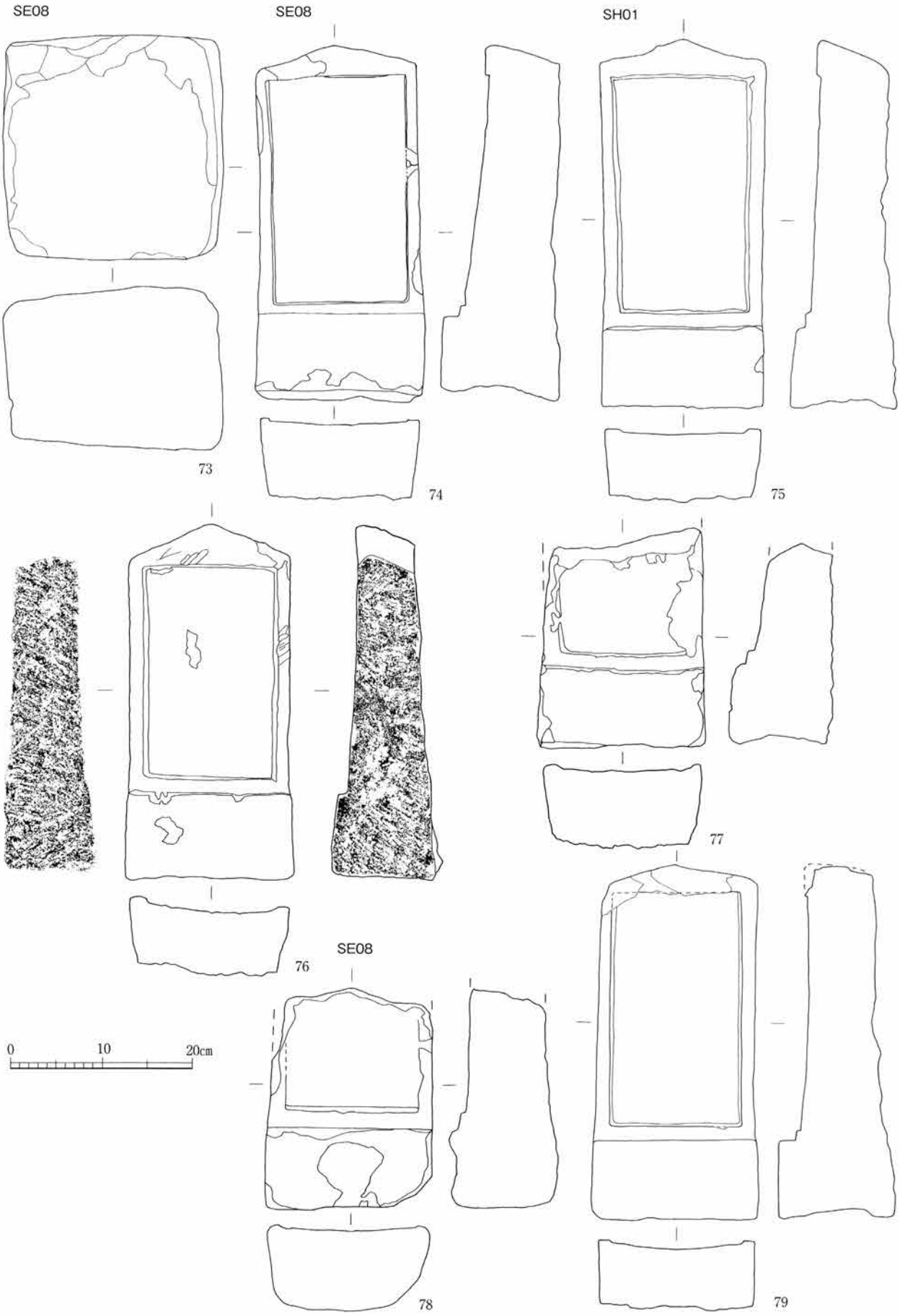
第58図　中世・近世の石製品(6)（1：4、1：6）



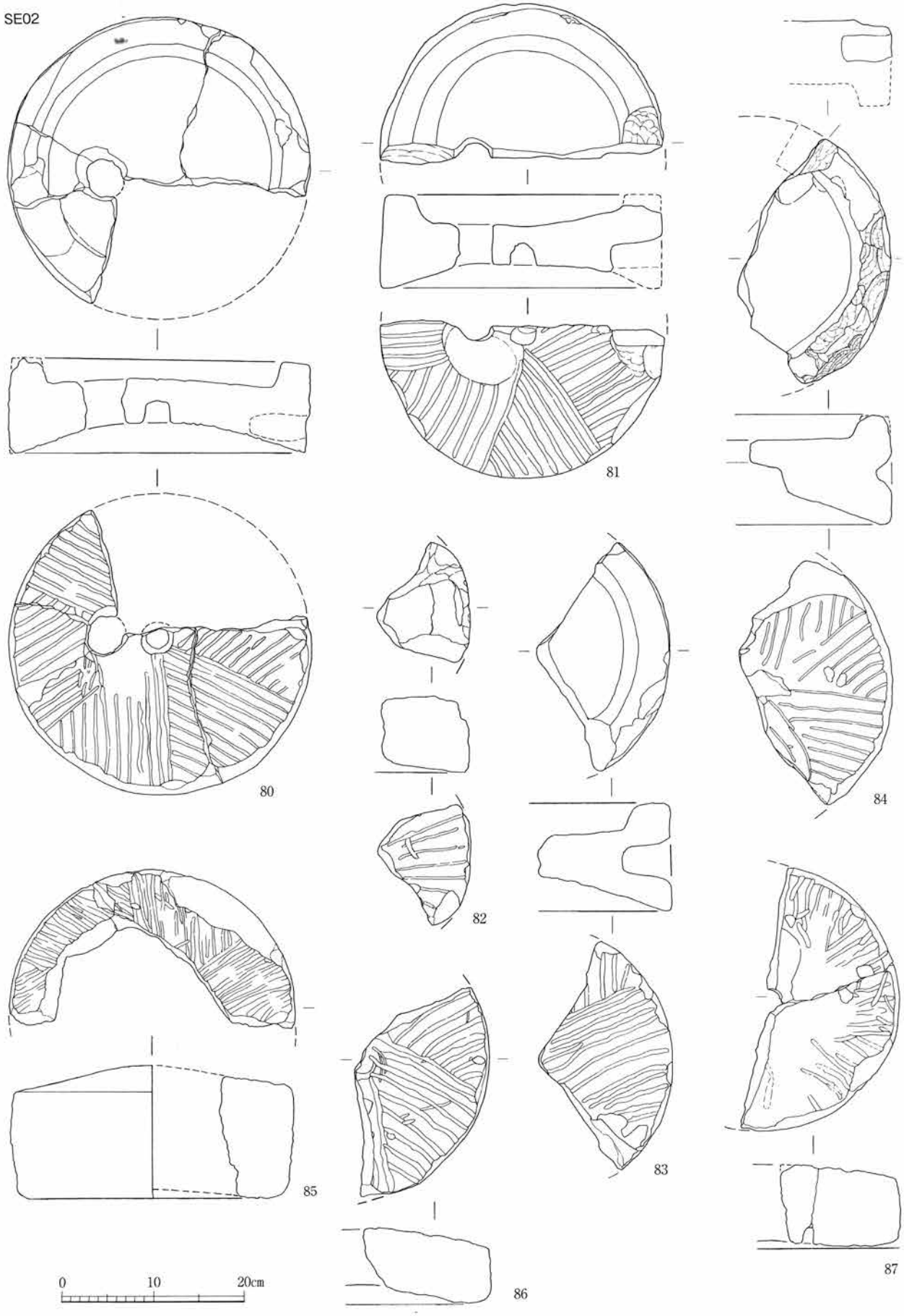
第59図　中世・近世の石製品(7)（1：6）



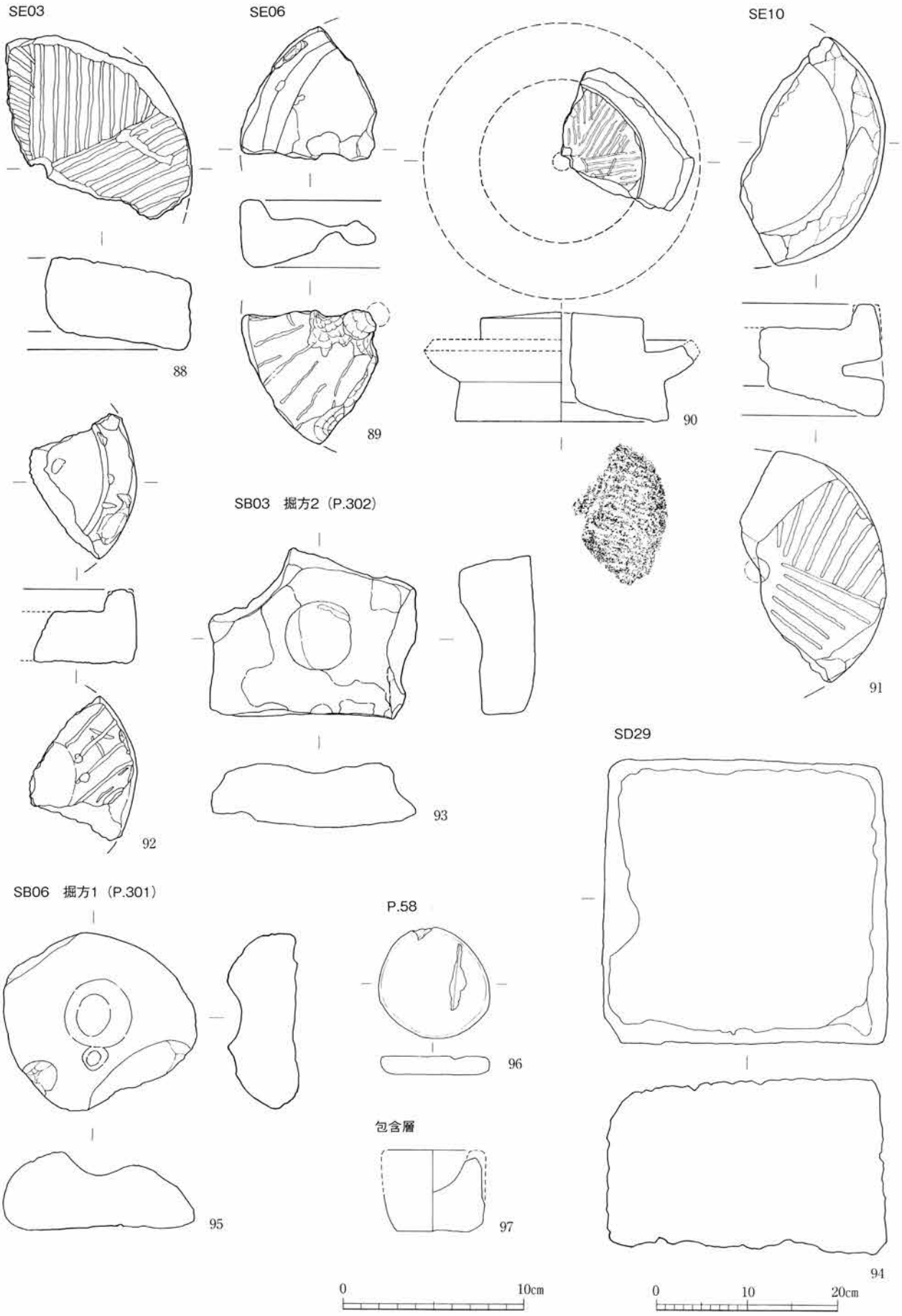
第60図　中世・近世の石製品(8)（1：6）



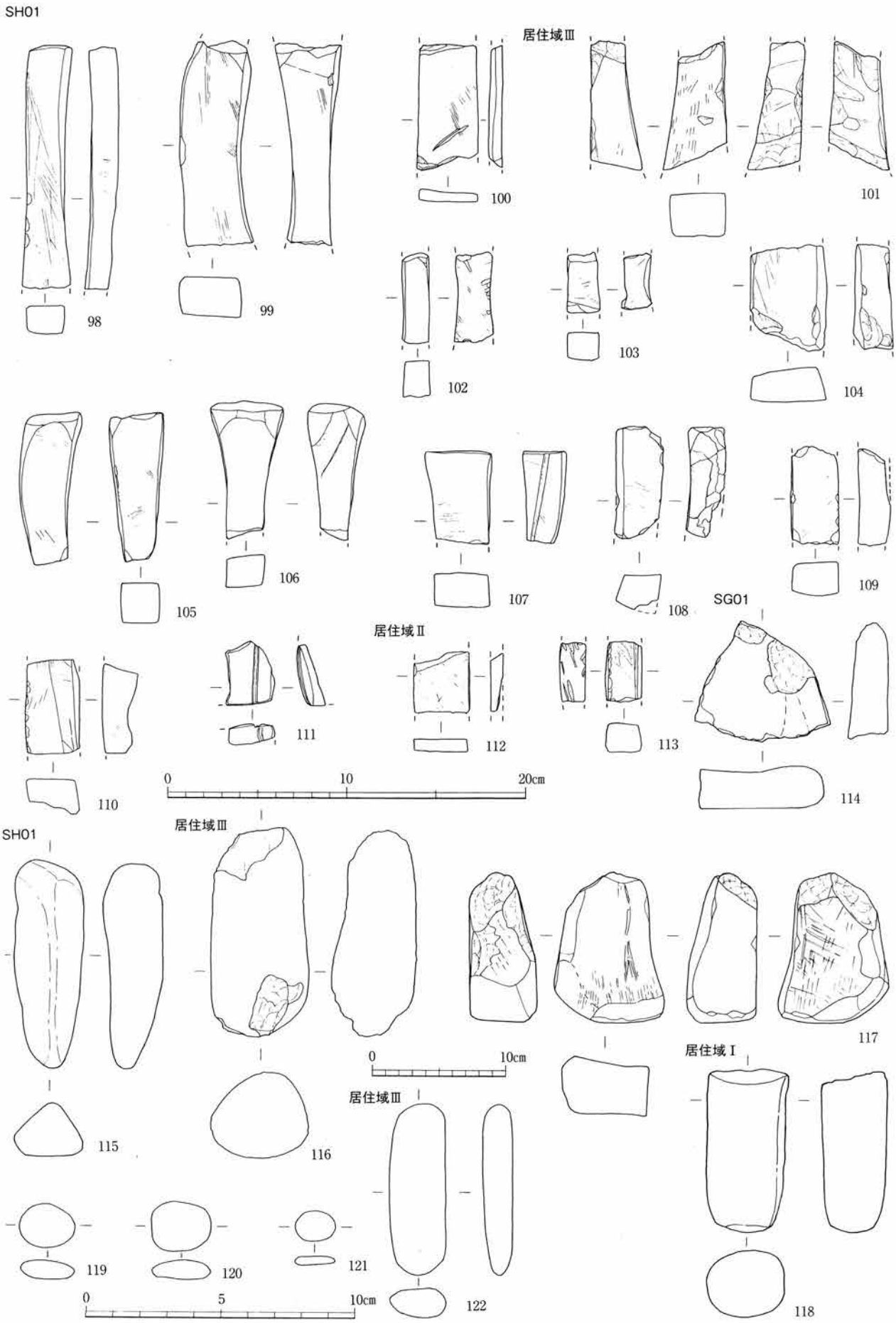
第61図　中世・近世の石製品(9)（1：6）



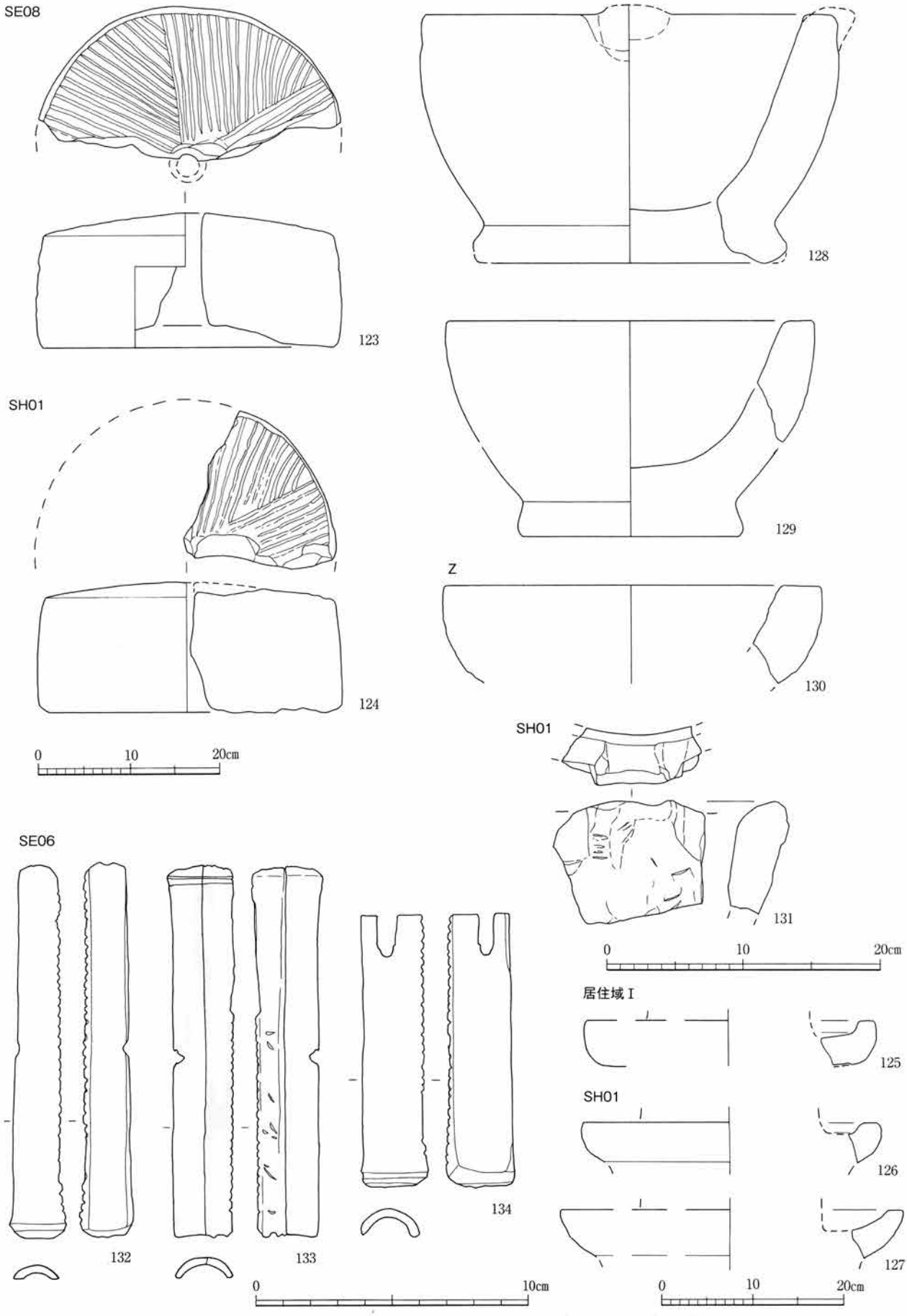
第62図　中世・近世の石製品(10)（1：6）



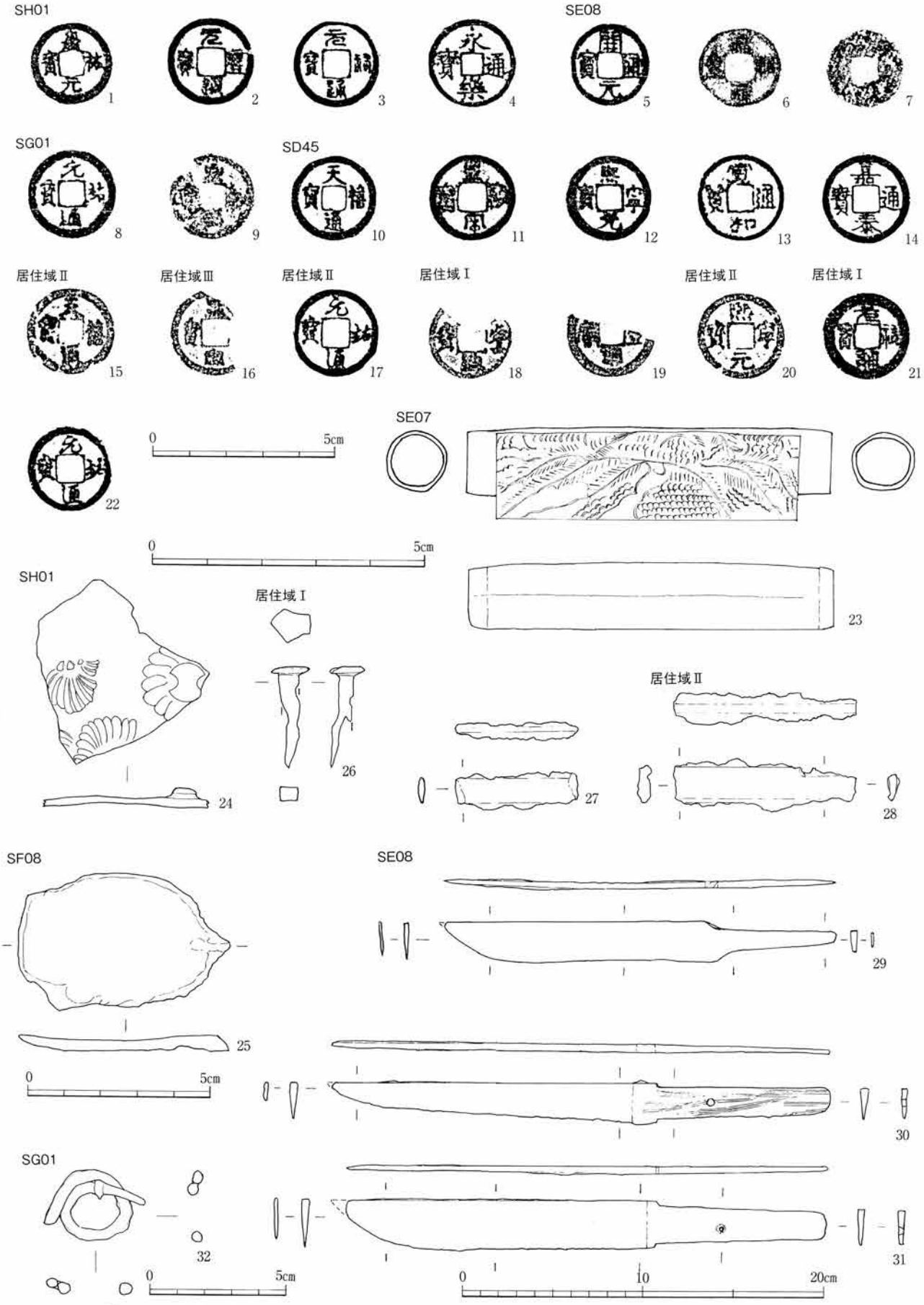
第63図　中世・近世の石製品(11)（1：3、1：6）



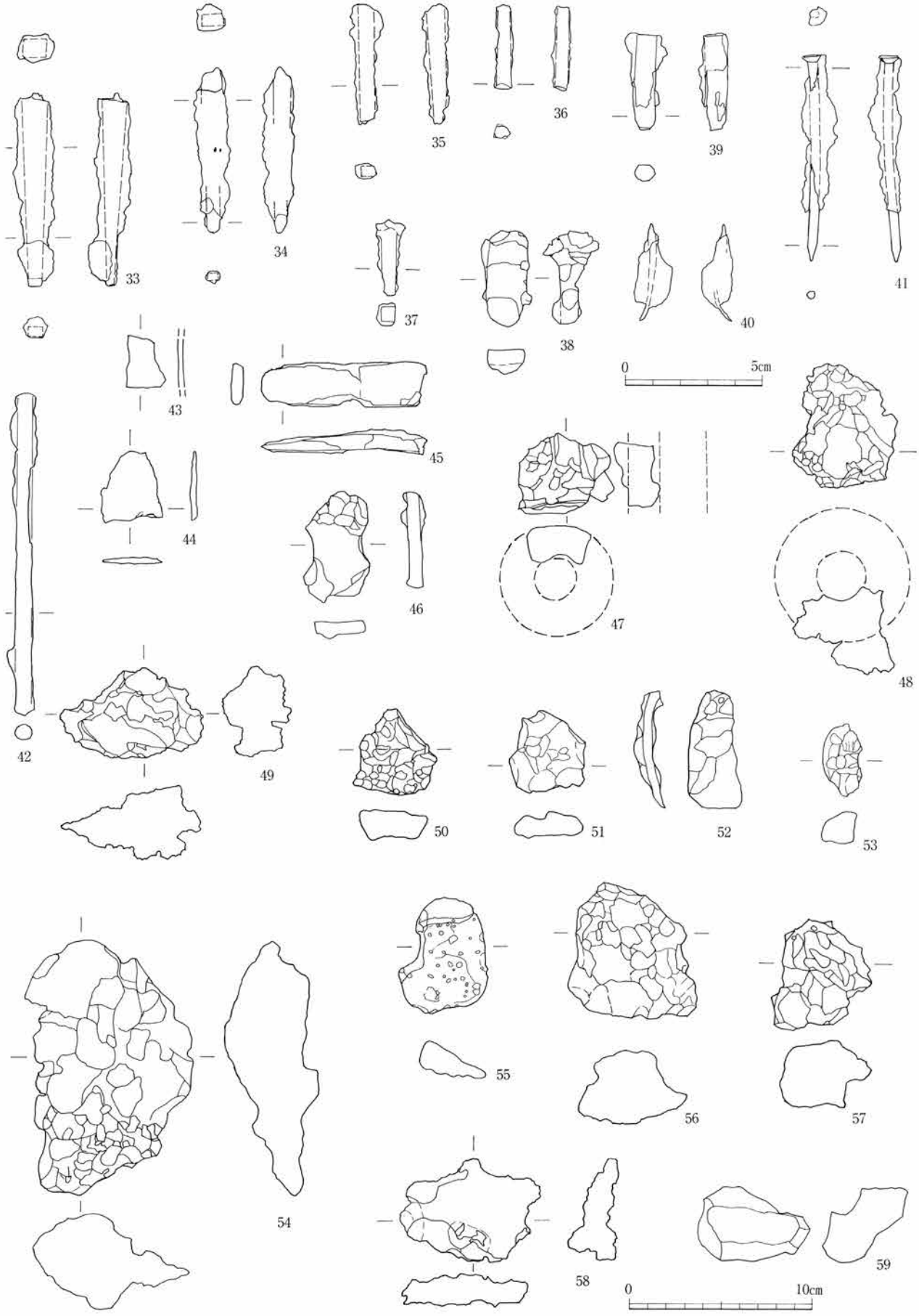
第64図　中世・近世の石製品(12)（1：2、1：3、1：4）



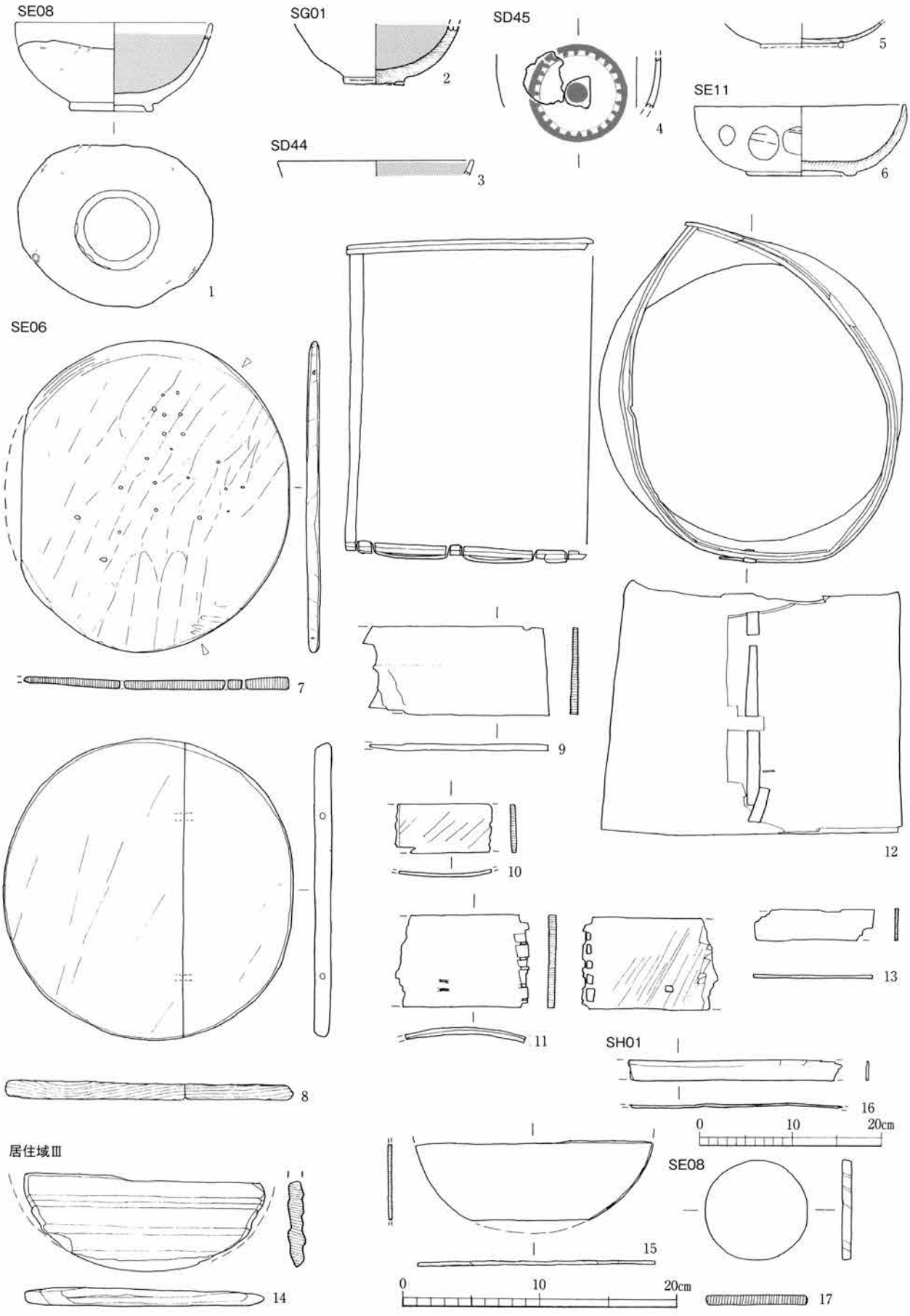
第65図　中世・近世の石製品(13)（1：4、1：6）・竹製品（1：2）



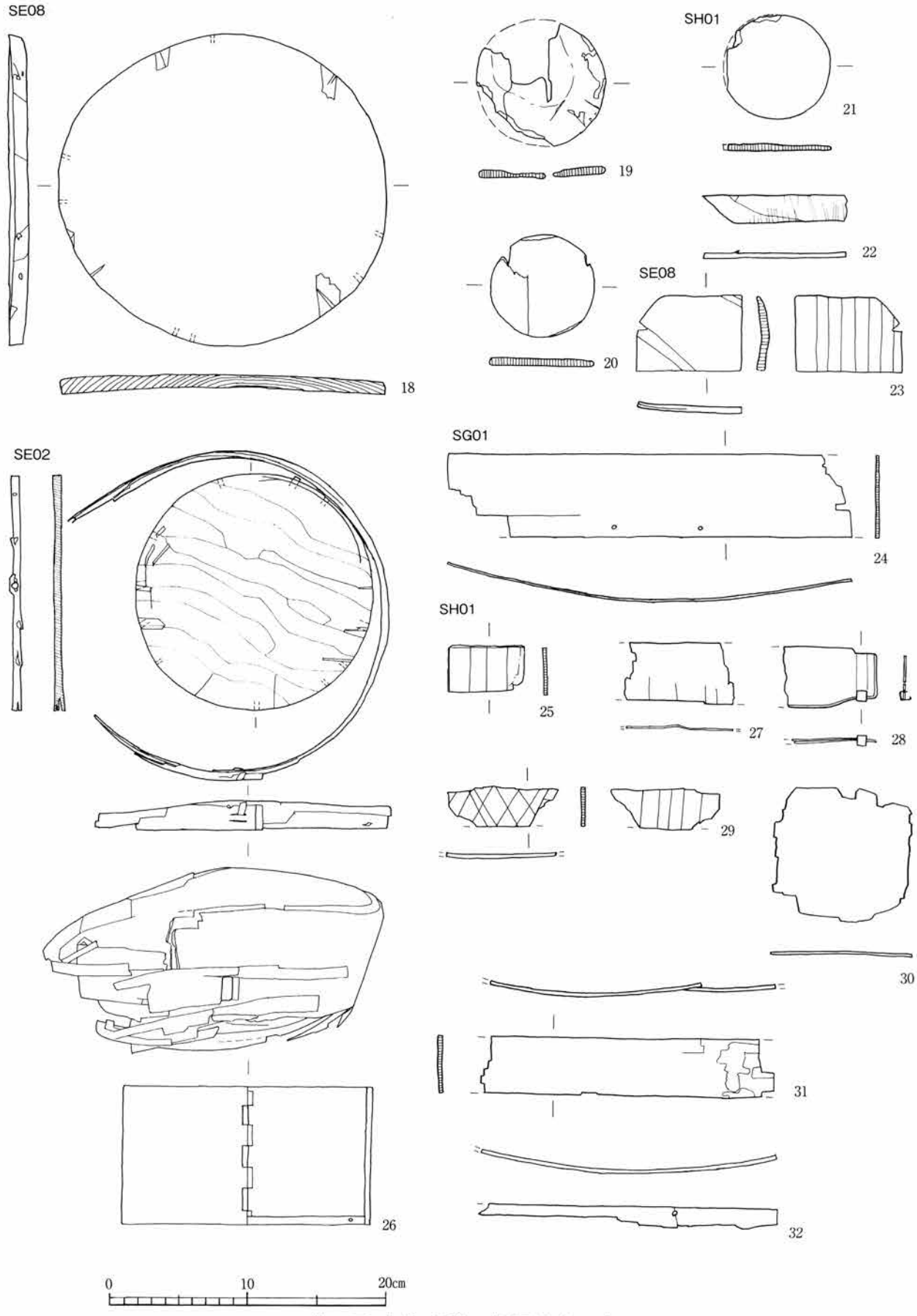
第66図　中世・近世の金属製品(1) 1：1 (23・24・26)、2：3 (1～22・25)、1：2 (32)、1：3 (27～31)



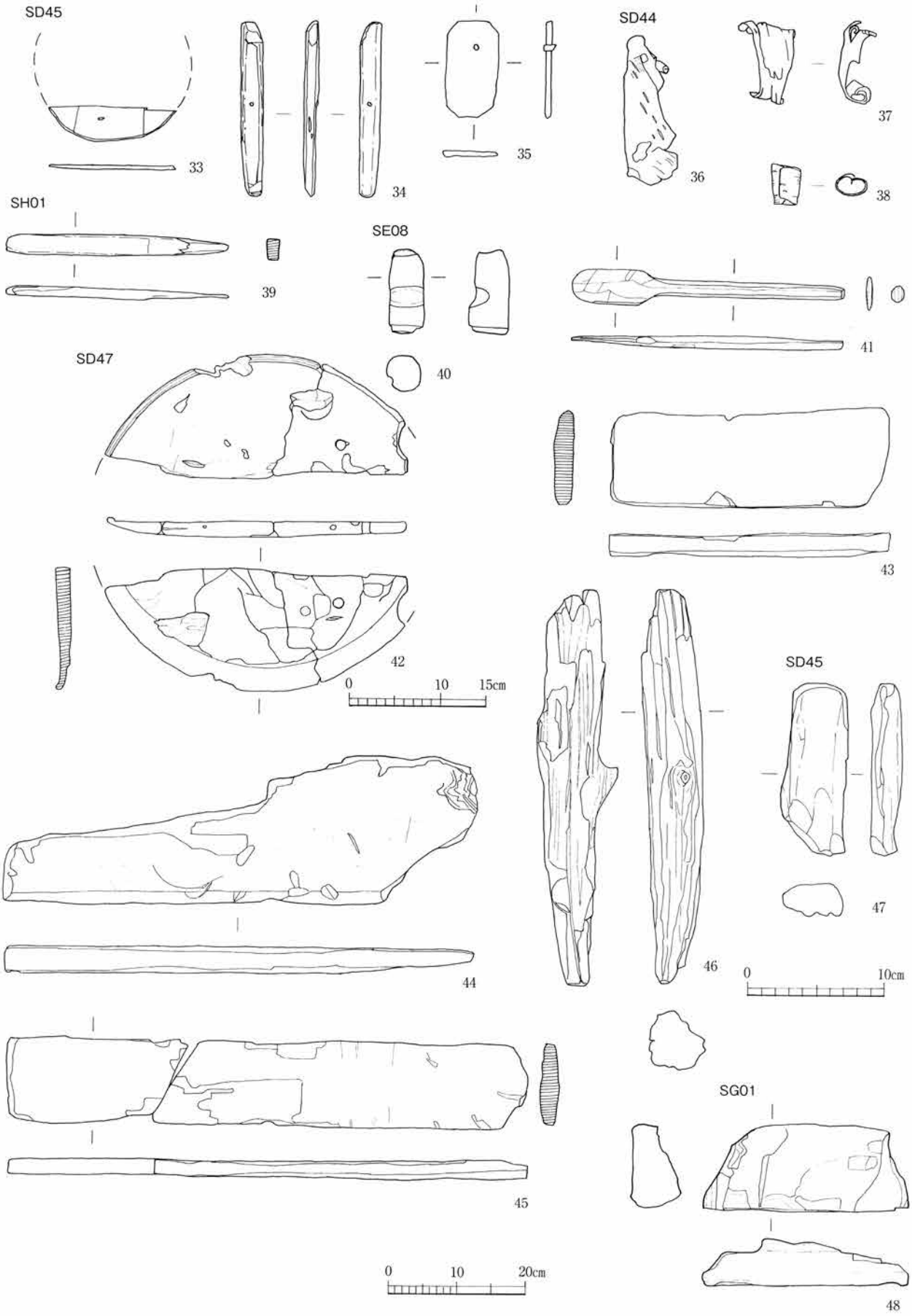
第67図　中世・近世の金属製品(2)・鍛冶関連遺物（1：2、1：3）　居住域Ⅰ（33～38・44・46・48・50～54）
同Ⅱ（43・49）　同Ⅲ（42・45・47・55～57）
SH01（39～41）　SG01（58）　SF01（59）



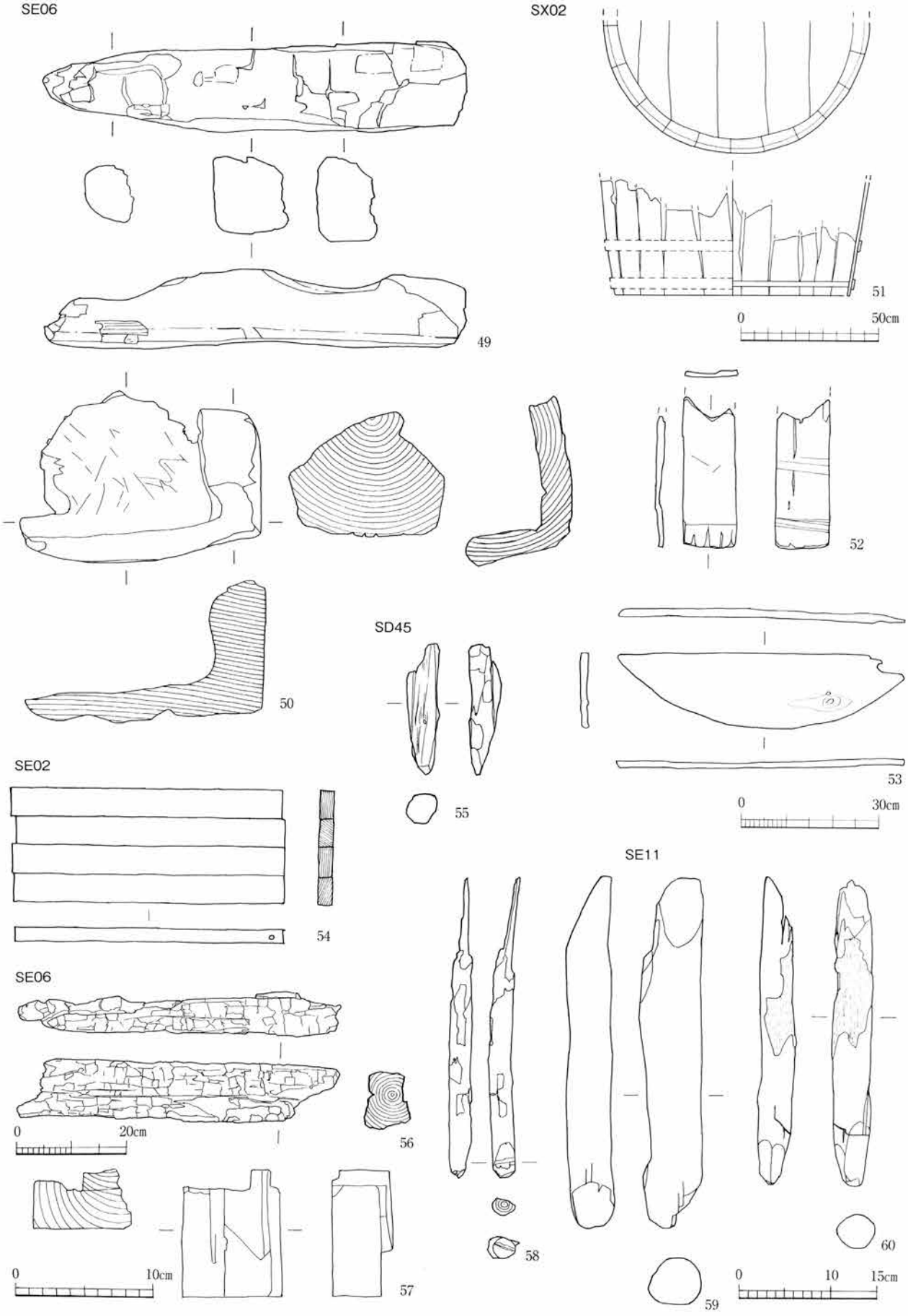
第68図　中世・近世の木製品(1)（1：4、1：6）



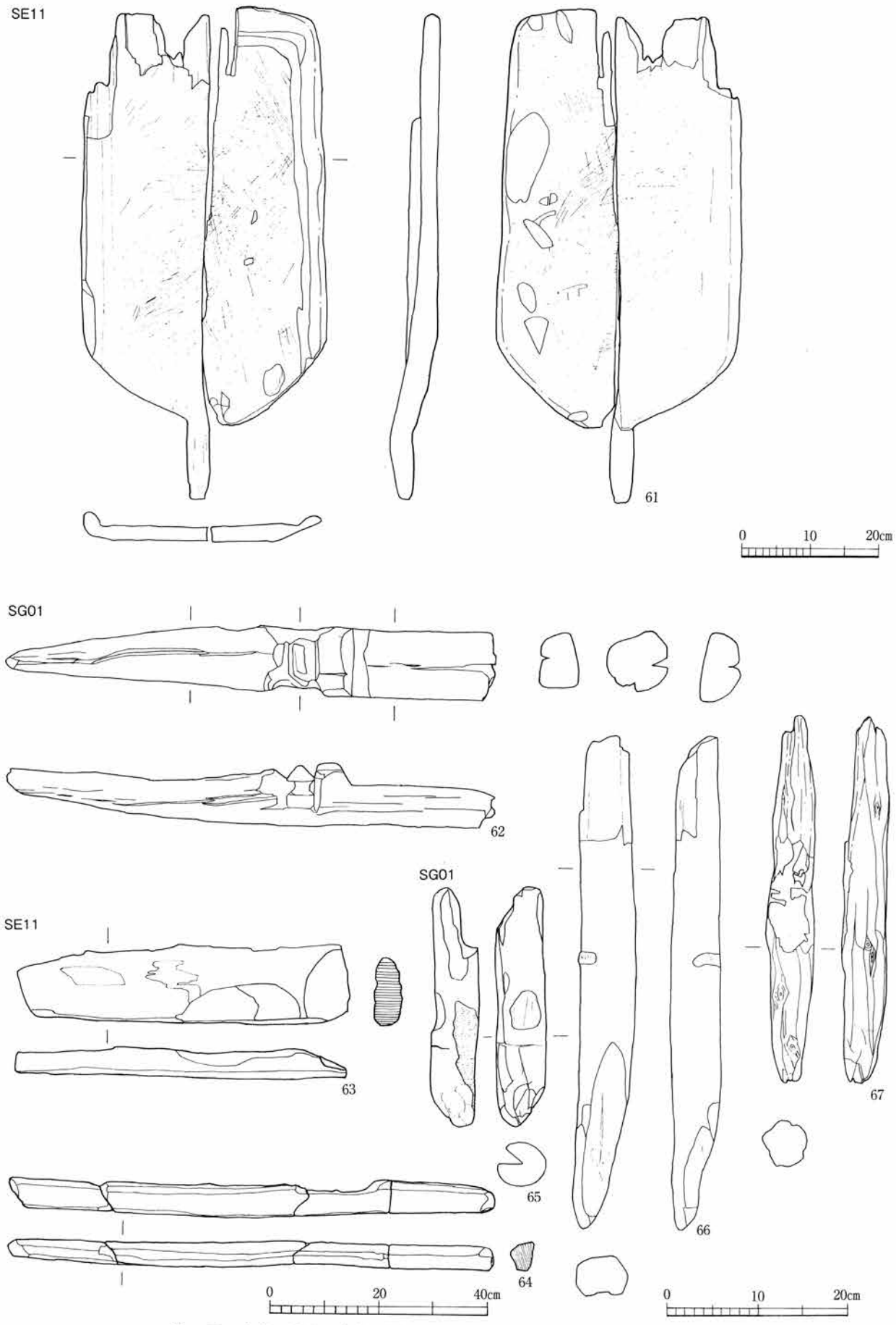
第69図　中世・近世の木製品(2)（1：4）



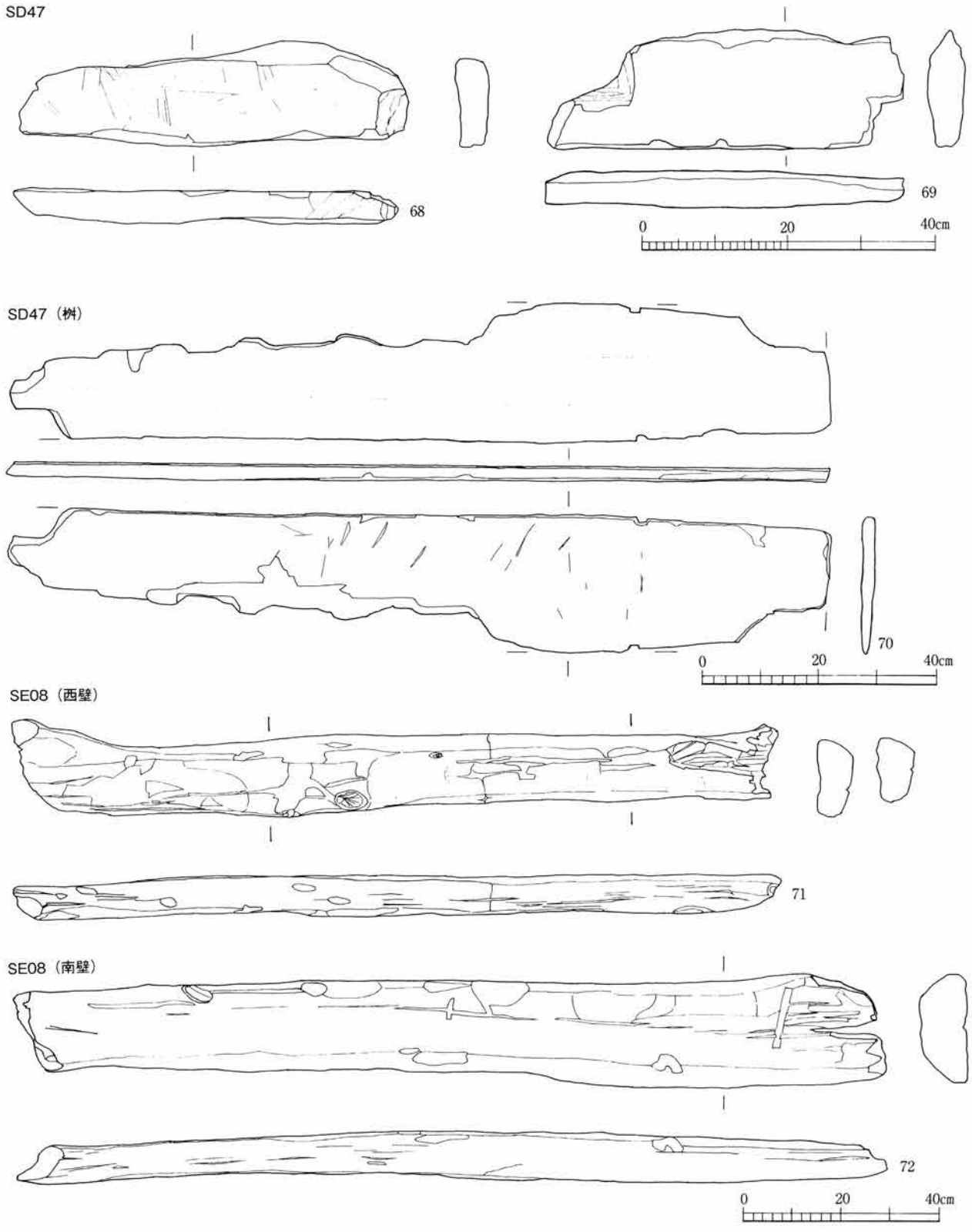
第70図　中世・近世の木製品(3) 1：4 (33～41・48)、1：6 (42・46・47)、1：8 (43～45)



第71図　中世・近世の木製品(4)　1：4（49・57）、1：6（50・54・55・59）、1：10（56・58）、
1：12（52・53・60）、1：20（51）



第72図　中世・近世の木製品(5) 1：6 (65～67)、1：8 (61～63)、1：10 (64)



第73図　中世・近世の木製品(6)（1：8、1：10、1：12）

写真図版

1.SH01（上部）、SX01・SX02、SD38（東より）

2.SH01、SG01（東より）

1. 居住域Ⅲ・上水施設

2. 上水施設（SE08 西井壁取りはずし後）

1. 居住域Ⅱ（SE06 と掘立柱建物群）

2. 居住域Ⅰ（区画溝・井戸群と掘立柱建物群）

1.SX01・02 と白色粘土

2.SX02　タガ出土状況

3.SH01　板碑（76）、火輪（52・50）出土状況

4.SH01 断面

5.SH01・SE07・08 出土の五輪塔・板碑（南より）

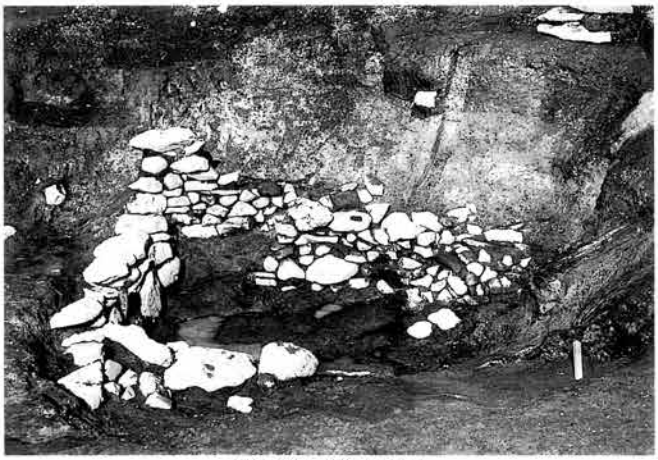
6.SH01 断面、SG01 護岸施設（南より）

7.SH01 と下層の石群、SD43・44（東より）

8.SH04、SD41・42（西より）

1.SE07・08（南より）

2.SD47、SX03、SE11（西より）



3.SE07・08 北井壁

4.SE07・08（北より）

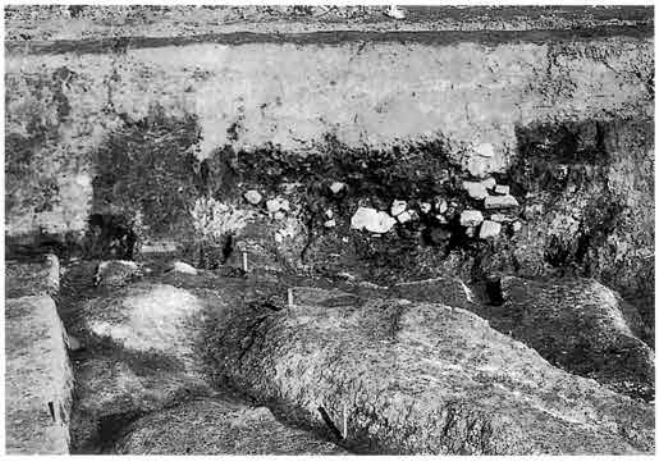
5.SE08 西井壁（東より）

6.SE08 石組と控積（東より）

7.SE08 床面の短刀（31）出土状況（南より）

8.SG01 南壁護岸施設

1.SG01 完掘（東より）



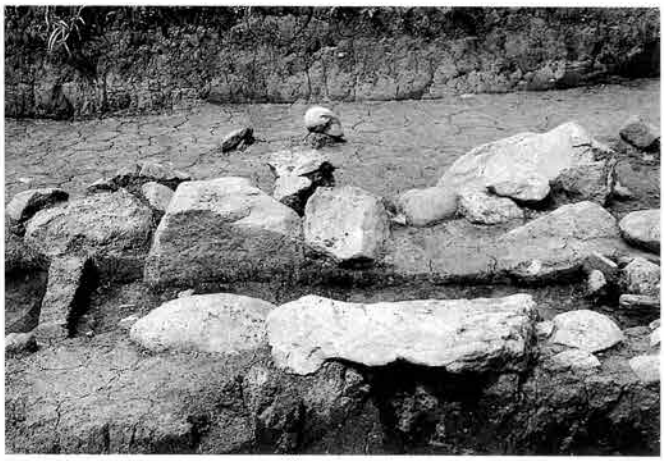
2.SE11 北壁石組遠景

3.SE11 北壁石組

4.SB01・02・03（南より）

5.SB01・02（北より）

1.SD38（東より）



2. 溝 SD38 石組

3.SD41（東より）

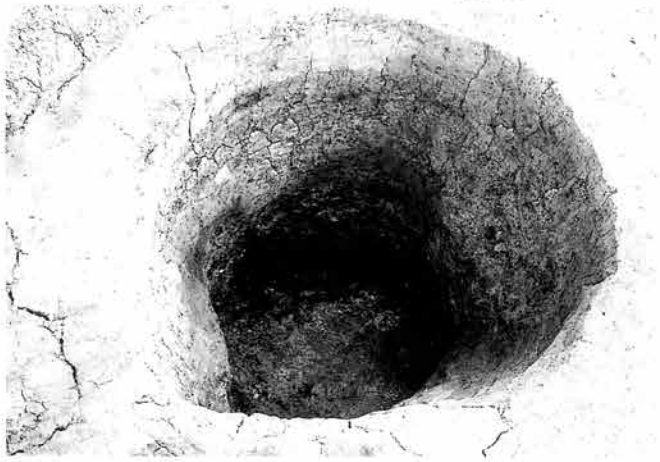
4.SD45（東より）

5.SF08 の焼土・炭化物堆積状況

6.SD47、SX03、SE11（西より）

1. 居住域Ⅲ　SE01・02、SB09（東より）

2. 居住域Ⅲ　土坑群（西より）



3.SE02

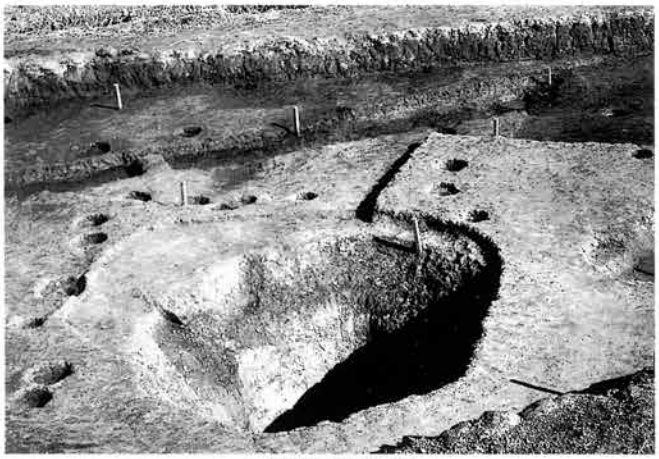
4.SE02　水溜

5.SE02　上層

6.SE02　曲物（26）出土状況

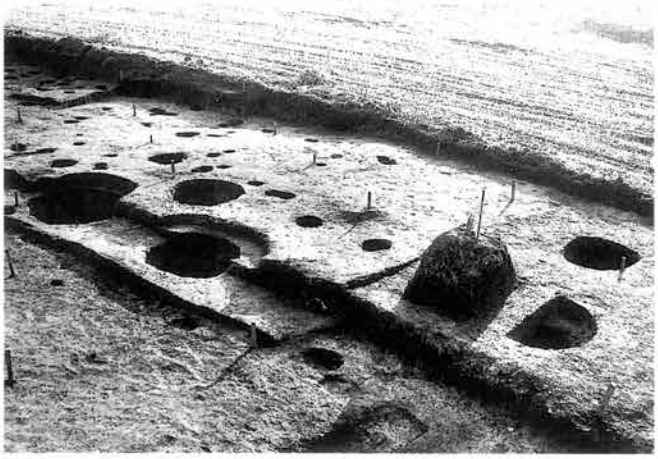
7.SE02　中層

8.SE06と柱穴群（北より）



1.SE06（西より）

2.SE06　下層

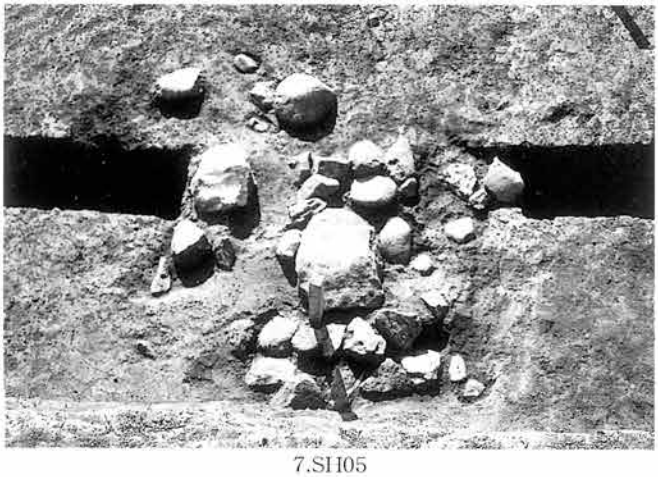


3.SE03・04・05・09（北より）

4.SD48、SE10、SH05

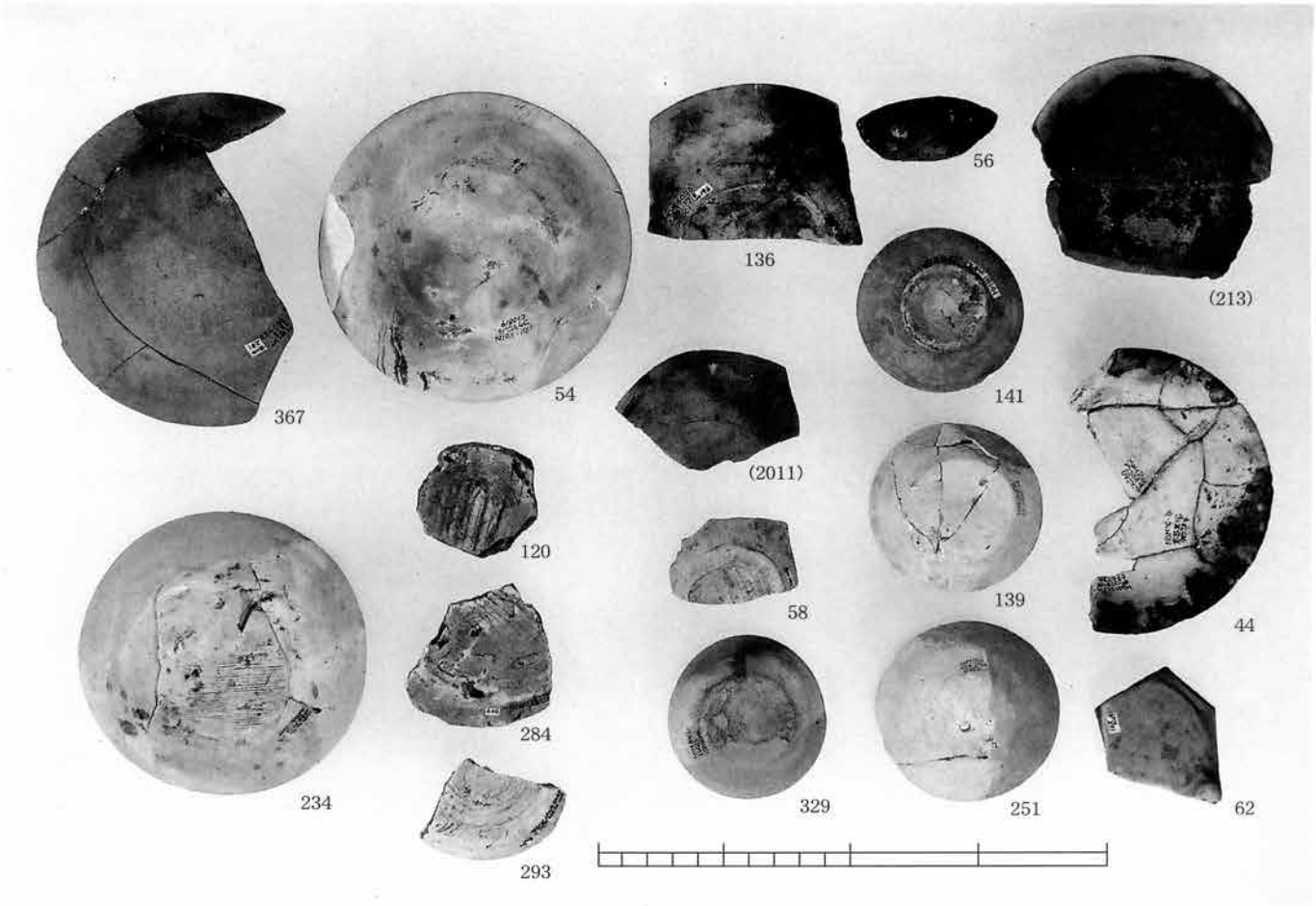
5.SE10、SD48 北壁（南より）

6.SD48 北壁控積

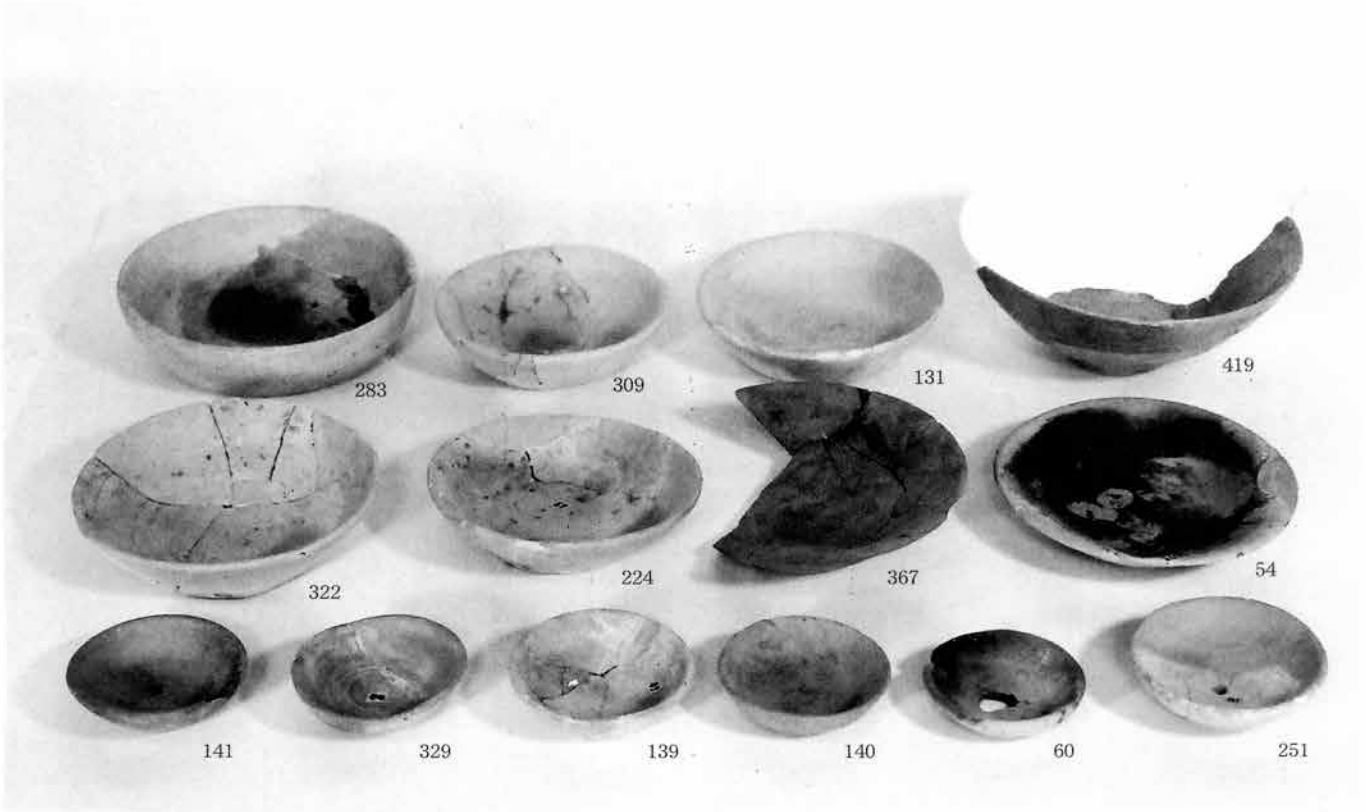


7.SH05

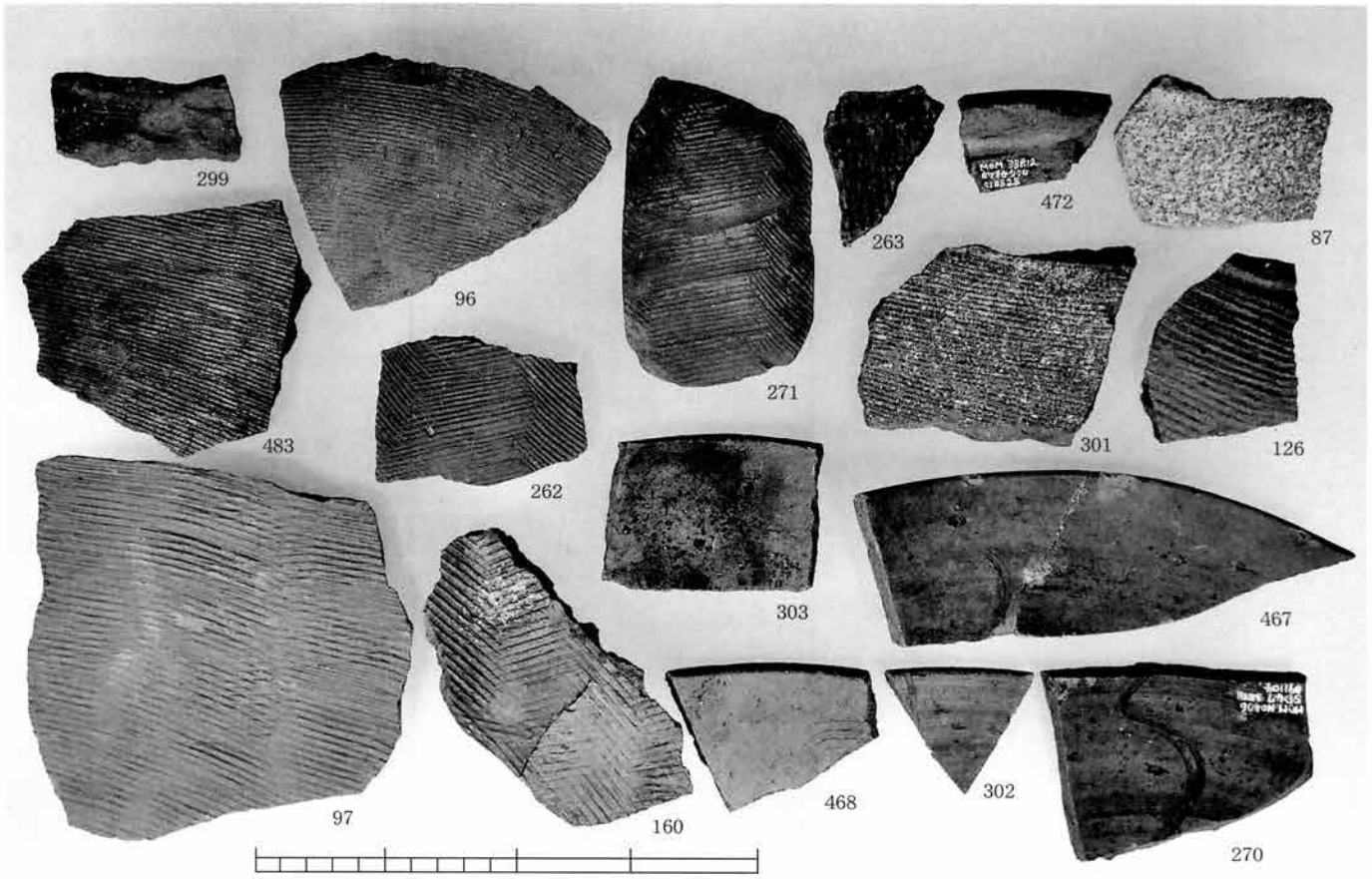
8.SB05・06（北より）



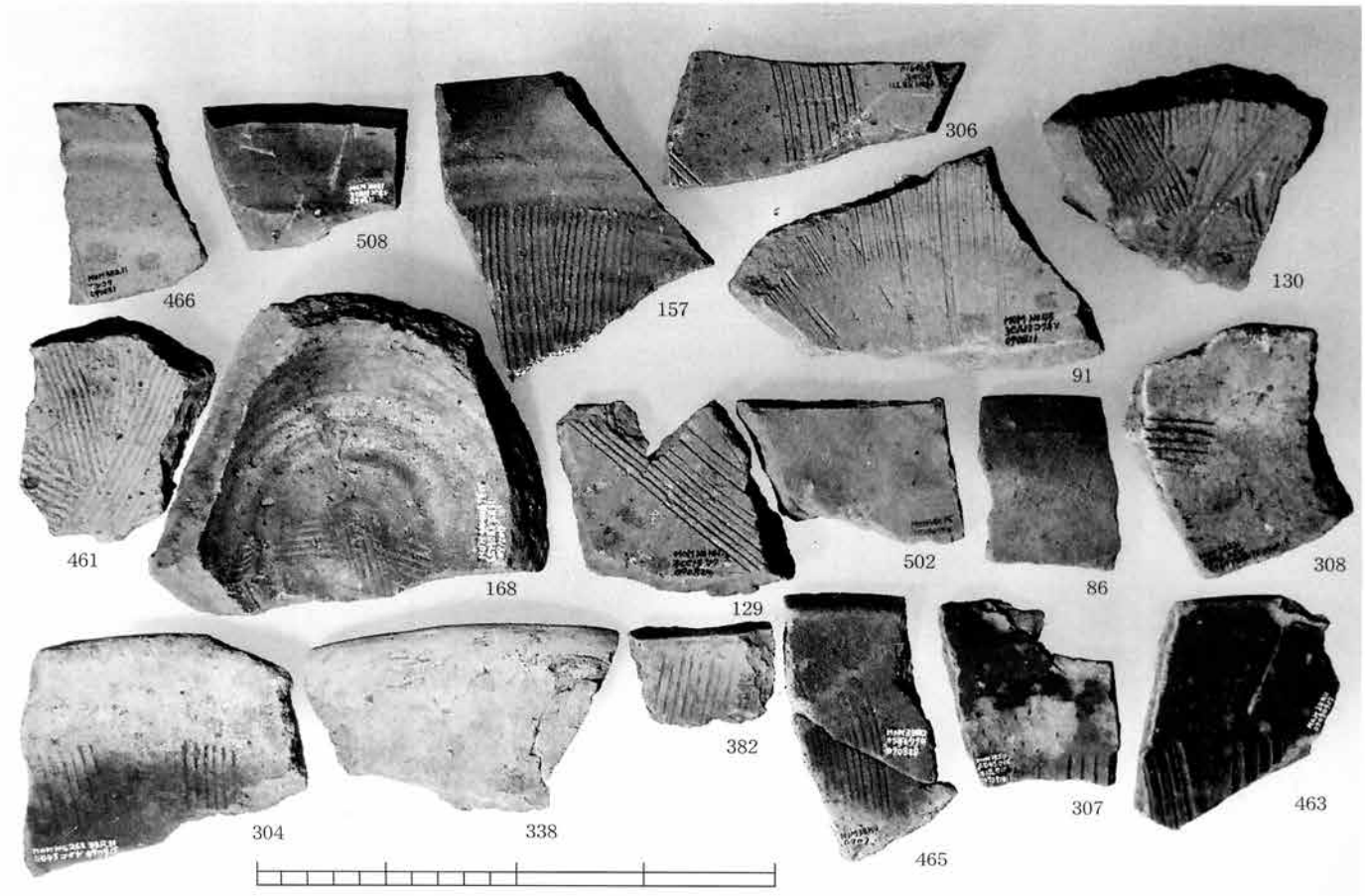
1. 土師器皿



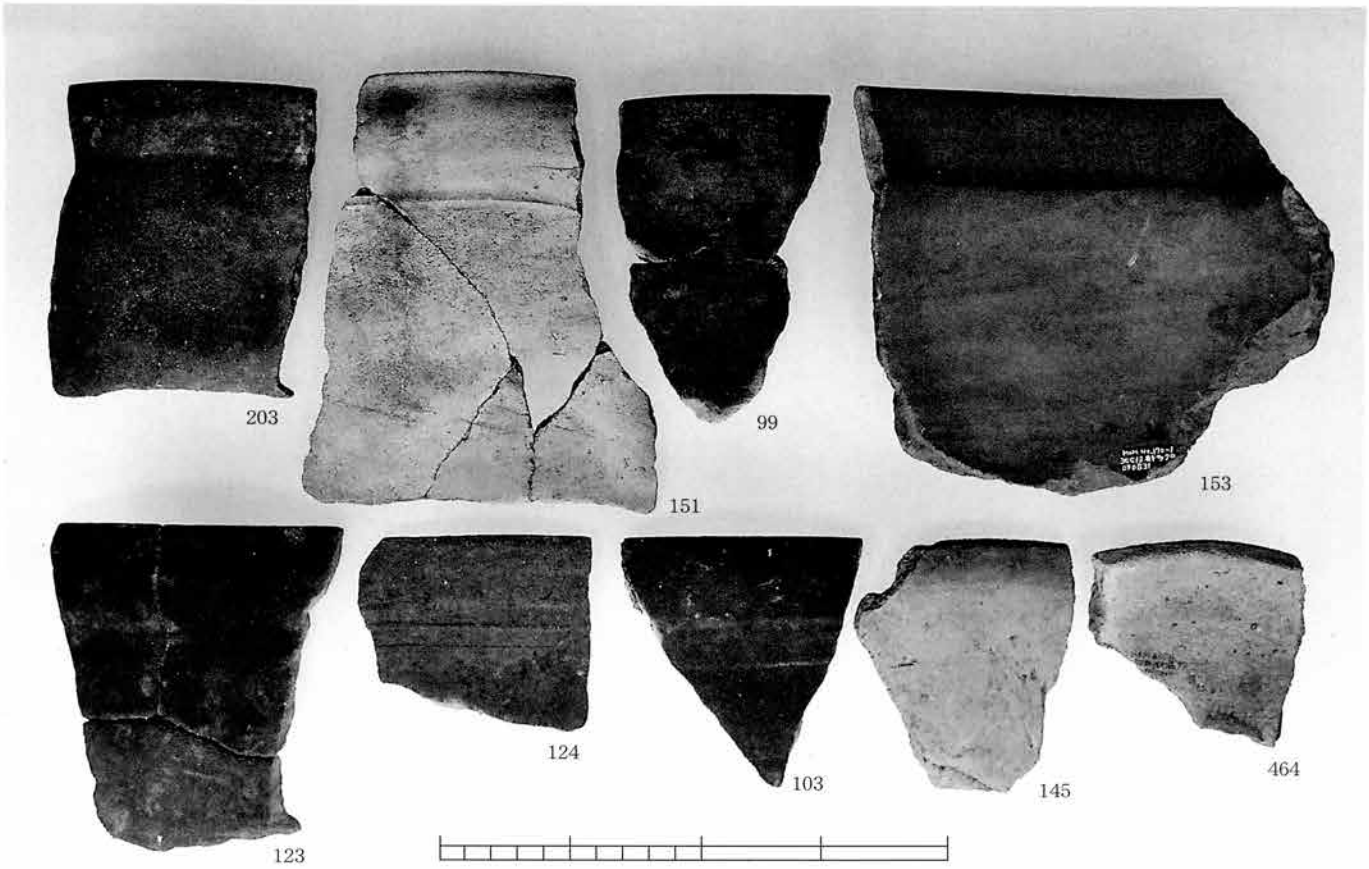
2. 土師器皿・古瀬戸平碗



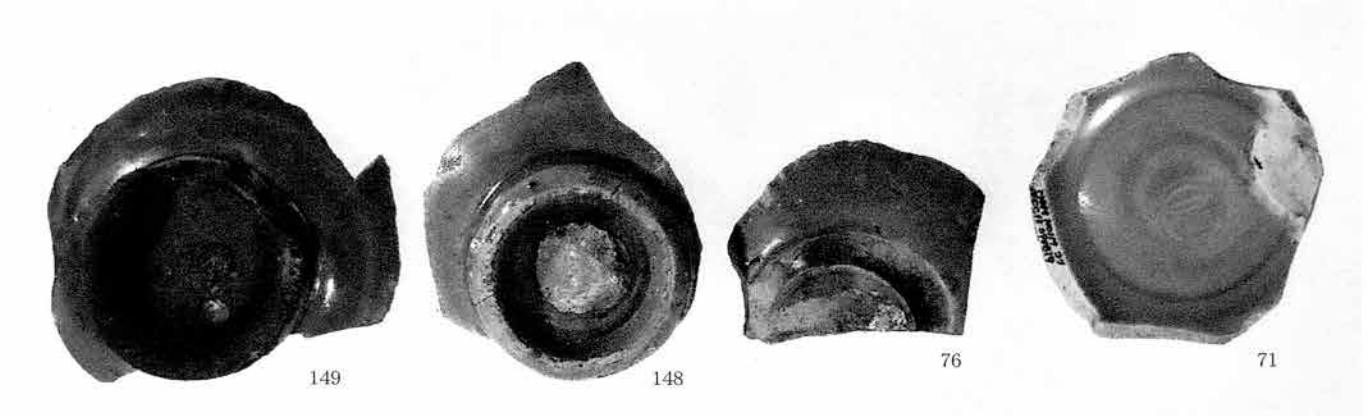
1. 珠洲　壷・甕・擂鉢



2. 珠洲・瓦質土器・土師器　擂鉢・鉢



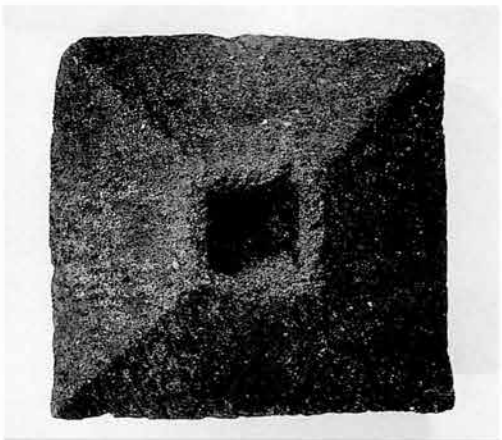
1. 内耳鍋



2. 中国産青磁

48

64



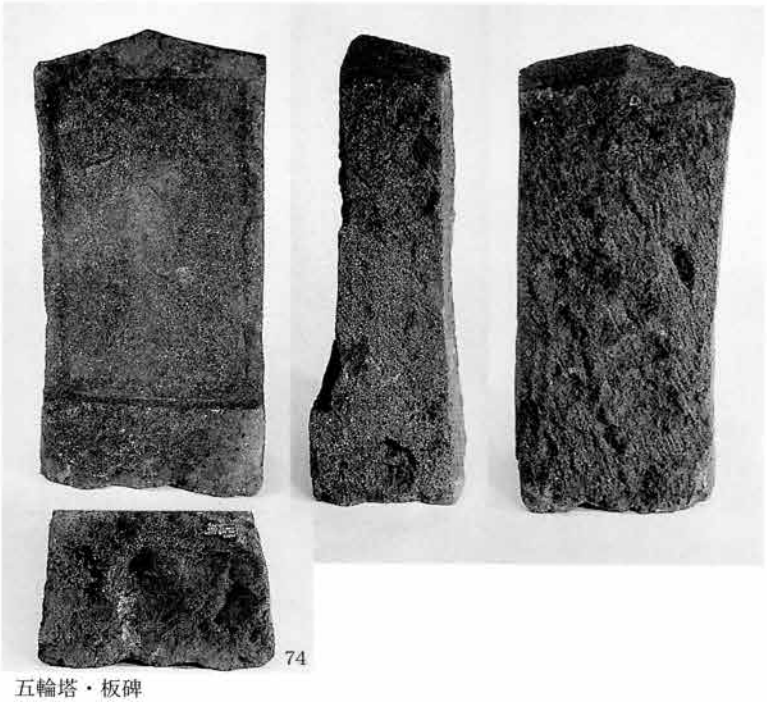
63

63
55

55

65

79


74

五輪塔・板碑

12

13

41

23

19

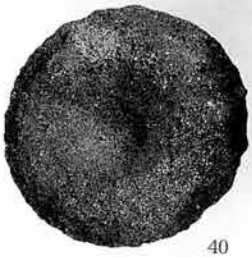
46

30

44

45

49



40

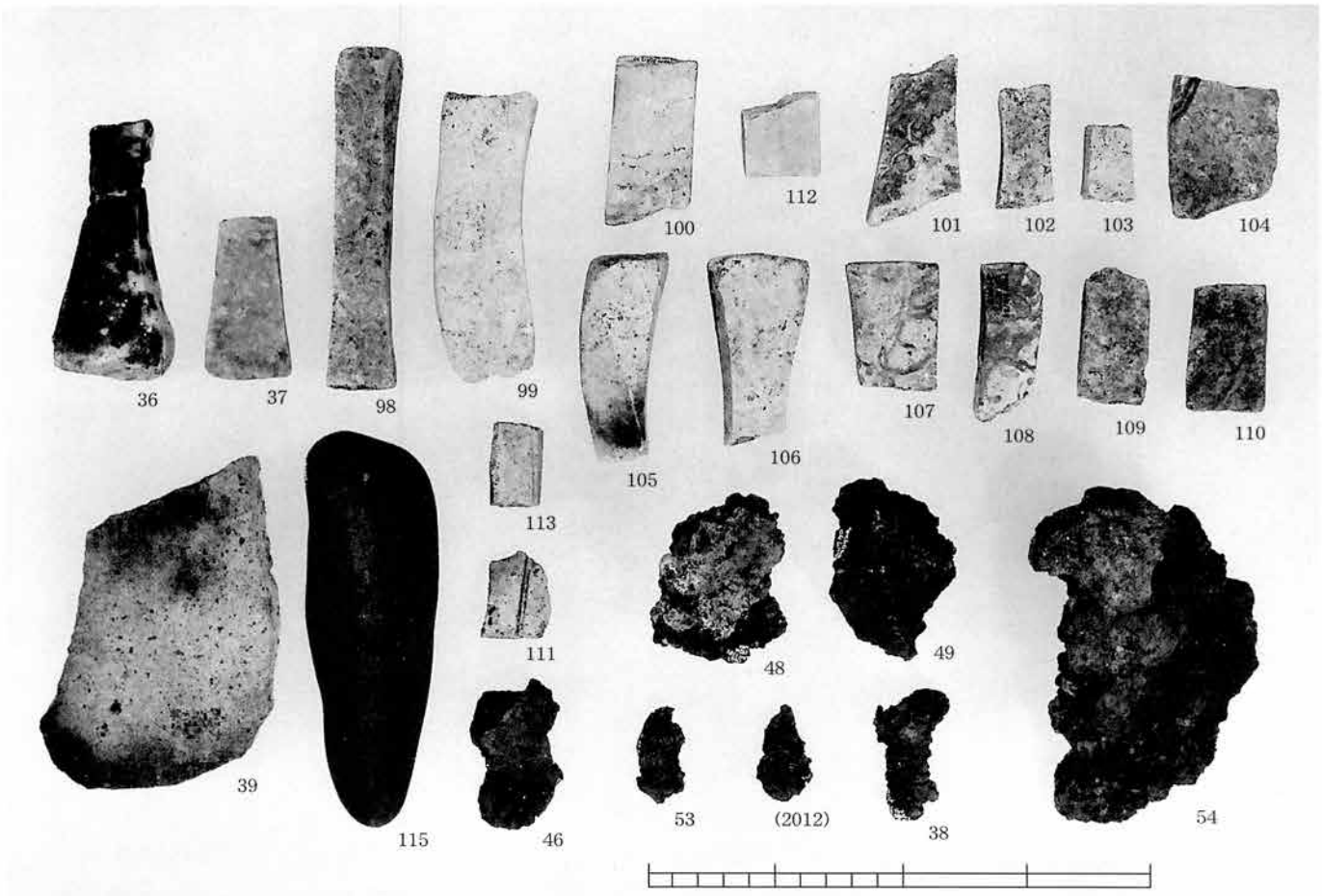
32

29

38

28

茶臼・粉挽臼・凹石・五輪塔



1. 砥石・叩石・羽口・鉄滓

2. 曲物・竹製品・匙・甑板

報告書抄録

書名	表町遺跡						
副書名	平成21年主要地方道（県道）長野荒瀬原線町道表町取付け道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名							
編著者名	笹澤　浩　　原田勝美　　小柳義男						
編集機関	飯綱町教育委員会						
所在地	〒389-1293　長野県上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1　℡026-253-2511						
発行年月日	2014(平成26)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 （日本測地系）	東経 	調査期間	調査面積	調査原因
おもてまち 表町遺跡	ながのけんかみみのちぐん 長野県上水内郡 いいづなまちおおあざむれ 飯綱町大字牟礼 あざおもてまち 字表町	78		36° 44′ 50″	138° 14′ 7″	20090713 ～20091116	900㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
表町遺跡	狩猟場	縄文時代		陥し穴		縄文土器（中期後半） 石斧・石鏃		
	集落	古代～近世		掘立柱建物、炉床 素掘り井戸 上水道施設 貯水池・石組井戸 溝・木製桝・貯水施設 集石 肥溜		須恵器・土師器・灰釉陶器 輸入陶磁器 青磁 白磁 青白磁（梅瓶・水注） 青花・天目 国産陶磁器（13～19世紀） 古瀬戸 瀬戸美濃 肥前 越中瀬戸 珠洲・瓦質土器（擂鉢） 土師器皿（カワラケ・燈明皿他） 香炉 風呂 粉挽臼 茶臼 石鉢 凹石 砥石 卯石 五輪塔 板碑（善光寺平型） 銭貨 和鏡 鞍緒通し管 短刀 刀子 羽口 鉄滓 漆器 曲物 甑板 四乳ソリ 建築材など		上水施設と居住域 各種井戸跡 工房跡 威信財と類似品 梅瓶 水注 和鏡 鞍緒通し管 天目(中国産)・青花 茶臼 香炉 風呂など 貯水池祭祀 三振の短刀
要約	矢筒城（山城）の南側台地に城下「表町」があり、甲越の戦いと用水の悪さから、近世初めに今の牟礼の地に移住して牟礼宿が成立したという伝承が、発掘調査の成果とその分析で現実味を帯びて来た。「表町」廃町の事由のひとつに飲料水の確保問題があるが、検出された上水施設とその変遷はそれを示している。「町」の構成は鍛冶工房などごく一部を明らかになしえた。また、山城と一体となる以前の先行する居館が調査地周辺にあり、14世紀後半代に存在していた可能性など新たな課題も生まれて来た。							

表町遺跡

発行日　　平成26年３月31日

発　行　飯綱町教育委員会
上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1

印　刷　信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野市西和田1-30-3